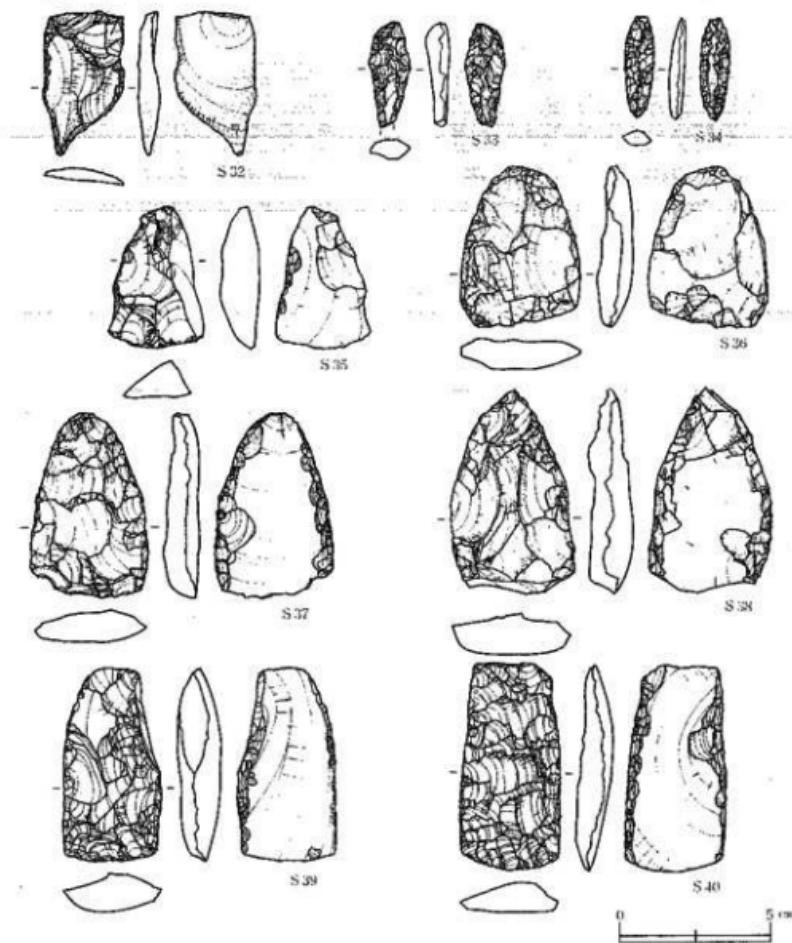


番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	圓 版
S22	MF 81	IV	尖頭器—I	62	34	12	22	頁岩	15
23	MJ 84	表土	〃	61	35	12	20	〃	〃
24	MJ 91	〃	II	43	35	9	10	〃	〃
25	ML 83	〃	〃	52	30	11	15	〃	〃
26	MK 87	III	〃	42	19	8	5	〃	〃
27	MK 83	IV	〃	29	27	10	5	〃	〃
28	MJ 85	〃	〃	35	35	9	9	〃	〃
29	ME 72	I	〃	44	34	10	16	〃	〃
30	MK 90	III	〃	43	71	15	42	〃	〃
31	MI 84	〃	〃	25	25	7	4	〃	〃

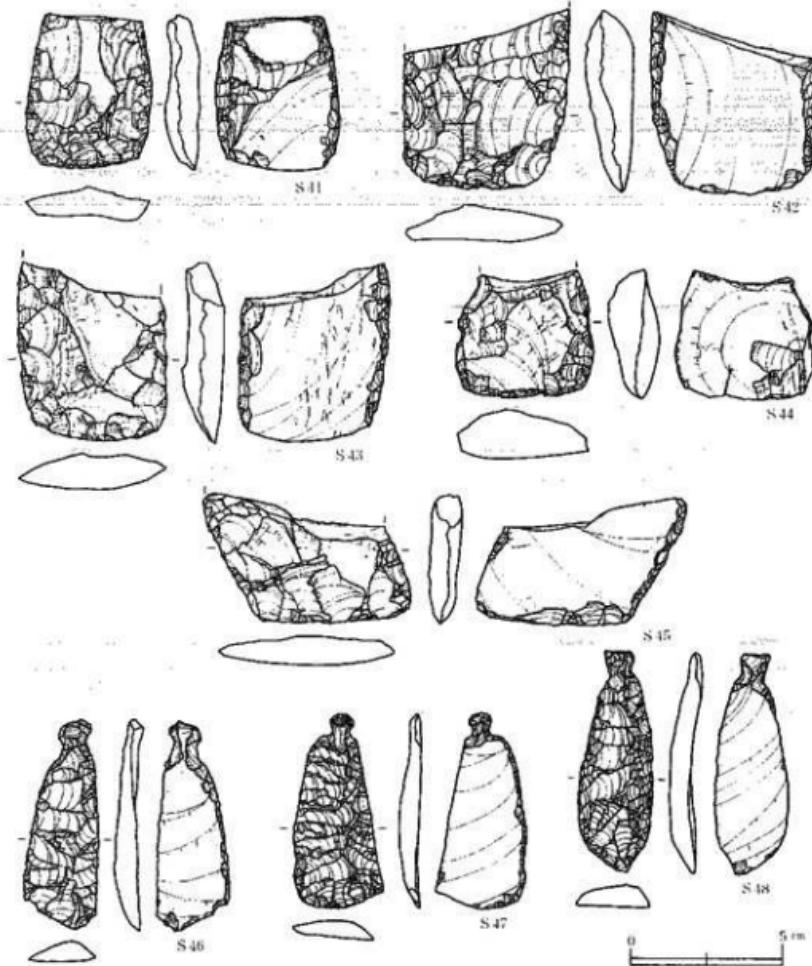
第19図 造構外出土石器(2)

小出日遺跡



番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図版
S32	MT 85	IV	石劍	48	27	8	6	真 岩	16
33	SK 07		*	34	14	8	3	〃	〃
34	M1 84		*	34	10	5	2	〃	〃
35	MH 71	II	石劍——I	48	32	14	16	〃	〃
36	MD 76	II	*	54	39	13	26	〃	〃
37	ML 86	盛土	*	61	39	12	31	〃	〃
38	MG 73	II	*	68	40	15	41	〃	〃
39	MJ 92		* --- II	64	32	15	33	〃	〃
40	MJ 91		*	68	32	12	27	〃	〃

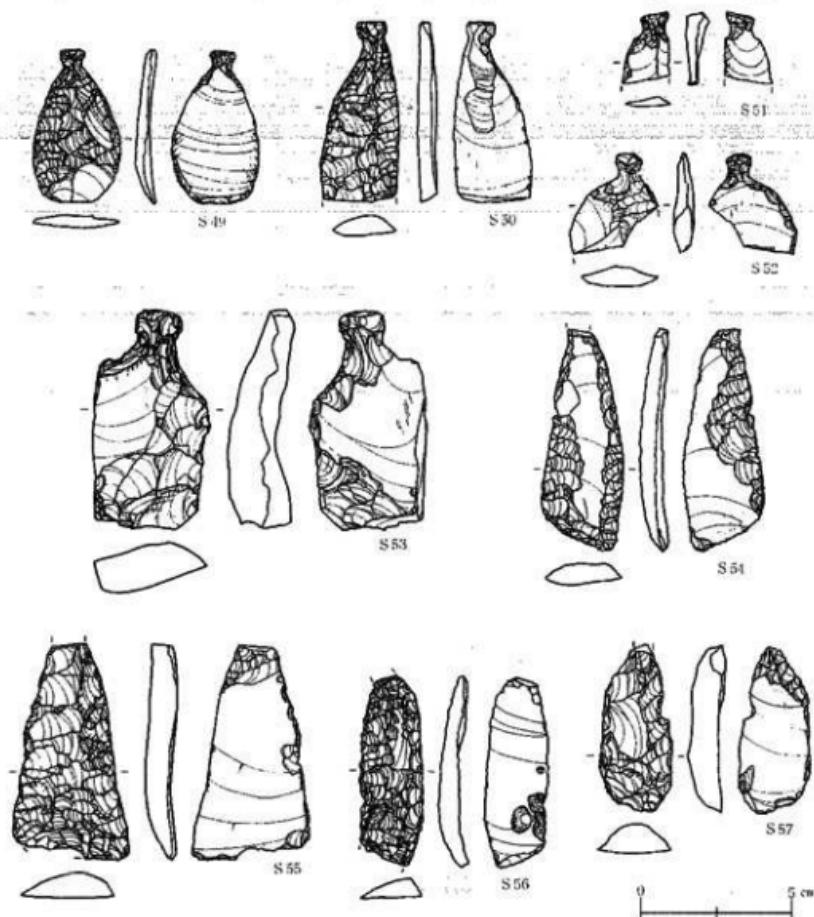
第20図 遺構外出土石器(3)



番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	國版
S41	MJ 91	IV	石器——II	51	46	11	28	真	16
42	MK 83		"	60	53	16	49	"	"
43	ML 86	IV	"	59	48	14	43	"	"
44	MI 91	III	" —— I	42	43	17	37	"	"
45	MK 85	IV	" —— II	43	69	11	27	"	"
46	MG 80	II	石器—— Ia	69	24	9	12	"	"
47	MB 69	I	"	64	30	7	7	"	"
48	MJ 83		"	73	25	11	16	"	"

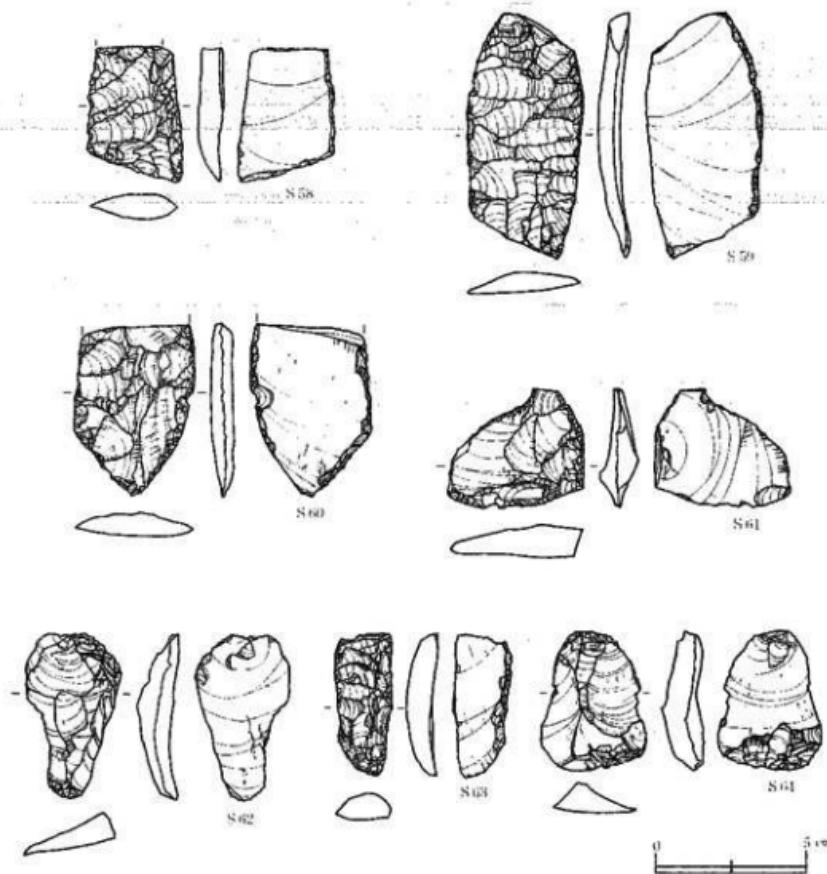
第21図 遺構外出土石器(4)

小出II遺跡



番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S49	MJ 82	IV	石器—Ia	50	29	7	7	頁岩	16
S50	MJ 85	#		60	27	7	10	#	#
S51	SK 62	#		23	16	8	4	#	#
S52	MJ 84	IV	#	33	29	6	4	#	#
S53	MC 76	II	#	72	39	22	54	#	17
S54	MJ 74	#		74	27	11	7	#	#
S55	MH 80	II	#	71	39	11	25	#	#
S56	MH 80	II	#	63	21	10	11	#	#
S57	ME 75	II	#	55	24	12	15	#	#

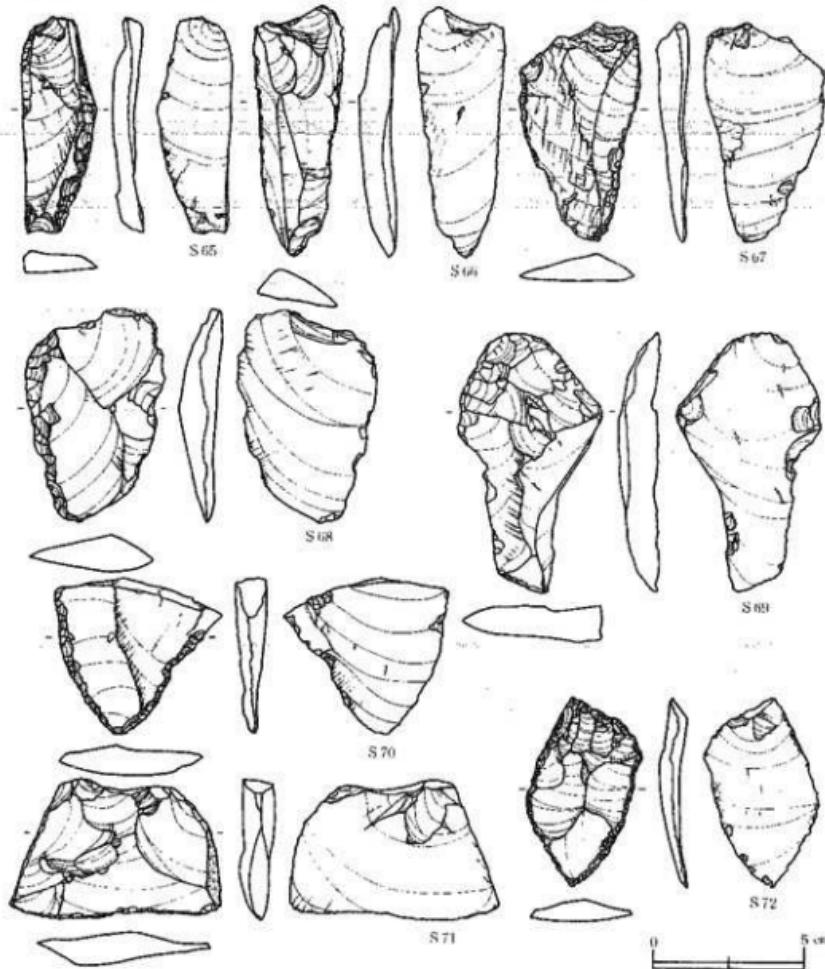
第22図 遺構外出土石器(5)



番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	國版
S58	MK 83	IV	石匙——I a	44	32	8	14	真 磨	17
59	NJ 74	"	"	82	38	11	26	"	"
60	MD 81	盛土	" —— I b	58	39	8	17	"	"
61	MJ 85	"	" —— II	45	40	11	15	"	"
62	MJ 92		刮器	55	32	14	10	"	"
63	MH 80	II	"	42	19	10	9	"	"
64	LP 63	I	"	46	35	14	15	黑 磨 石	"

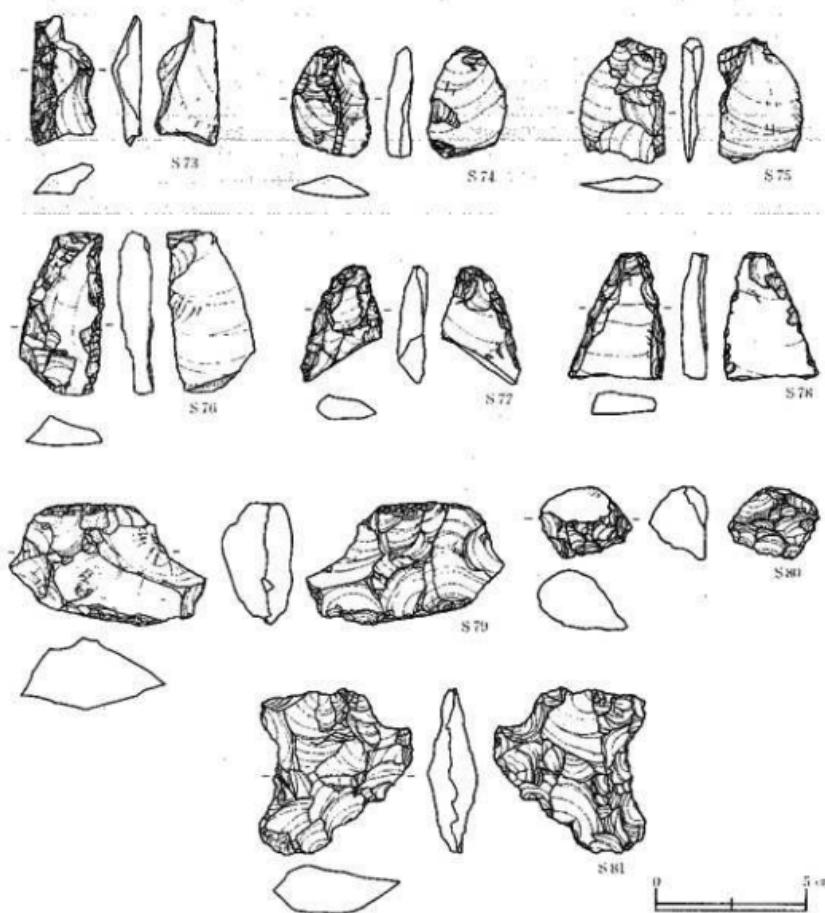
第23図 遺構外出土石器(6)

小出II遺跡



番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石種	図版
S65	MG 80	II	削器	72	25	11	15	真	17
66	MK 85	IV	#	83	30	14	21	#	#
67	MJ 83	IV	#	73	40	11	23	#	#
68	MK 87	IV	#	71	46	15	33	#	#
69	MO 75	II	#	9	48	14	37	#	#
70	MJ 85	盛土	#	52	55	11	22	#	#
71	MJ 83	表土	#	47	70	13	35	#	18
72	MG 80	II	#	63	38	10	14	#	#

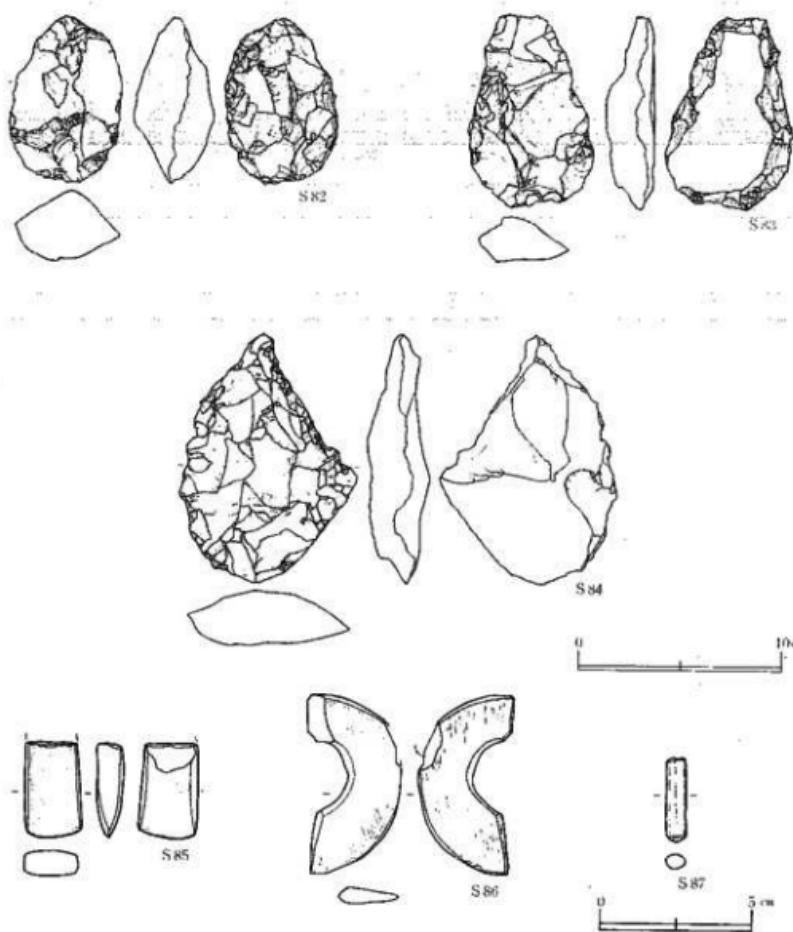
第24図 遺構外出土石器(7)



番号	出土地点	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図版
S73	MG 82		削器	43	22	10	6	真 岩	18
74	表 採		"	37	27	9	7	"	"
75	MG 80	II	"	42	29	8	8	"	"
76	MK 91		断面調整石器	54	29	11	14	"	"
77	MK 84	IV	"	39	27	9	8	"	"
78	MK 83	出土	"	42	32	7	11	"	"
79	MJ 91		石核	41	65	23	49	"	"
80	MJ 90		"	24	31	20	11	風 磨 石	"
81	MK 83	IV	"	55	50	17	32	"	"

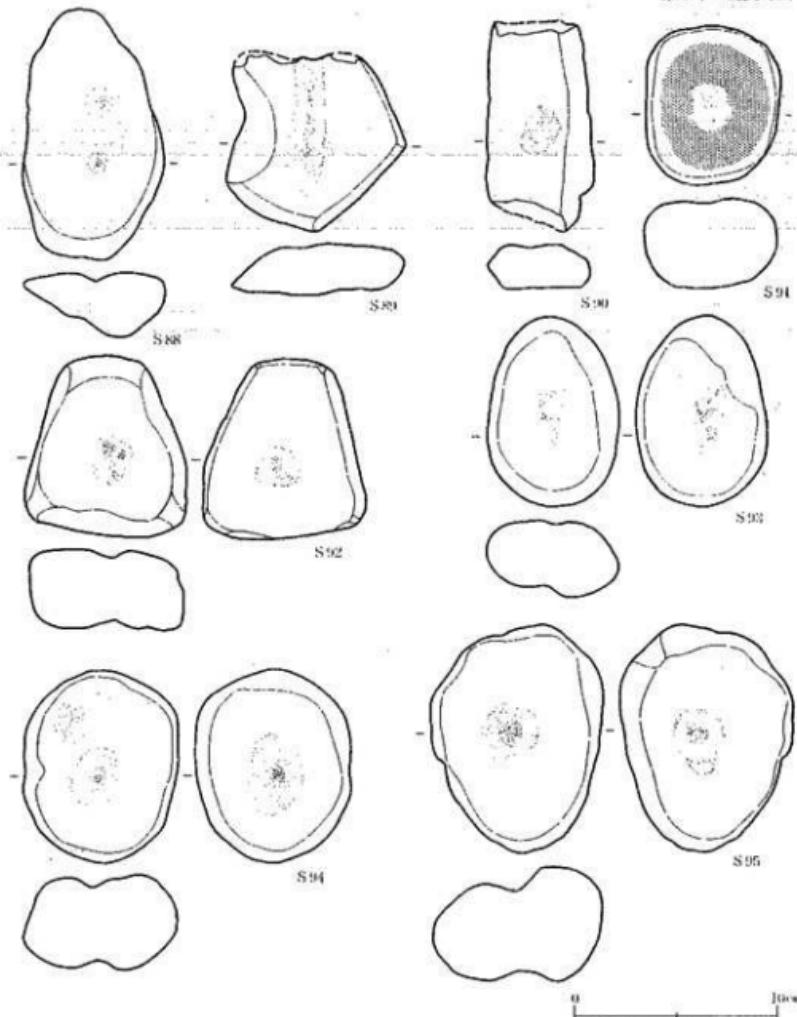
第25図 遺構外出土石器(3)

小出II遺跡



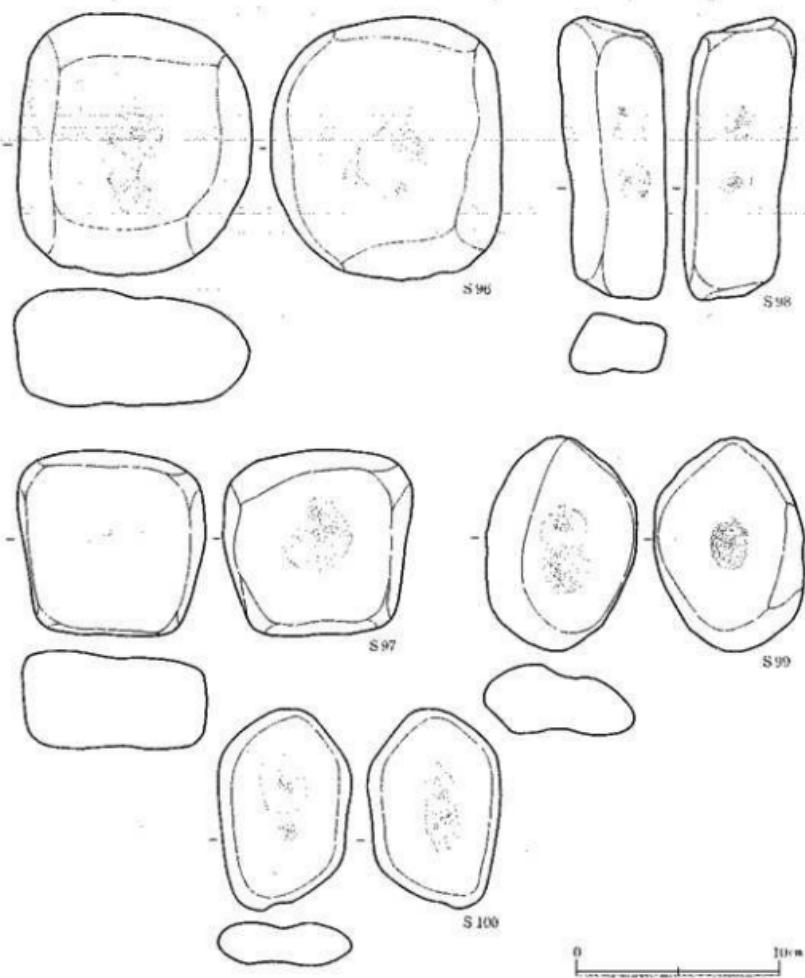
番号	出土地区	層位	器種・分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図版
S82	MD 73		打製石斧	83	56	40	150	頁 岩	18
83	LK 83	II	石	96	63	24	125	石	石
84	MC 73	II	石	124	88	31	224	石	石
85	SX 22		磨製石斧	32	20	9	10	頁 岩	石
86	黄 棚		片状石器	60	32	6	14	石	石
87	MC 76	II	擦状石製品	38	7	5	2	滑 石	石

第26図 遺構外出土石器(9)・石製品



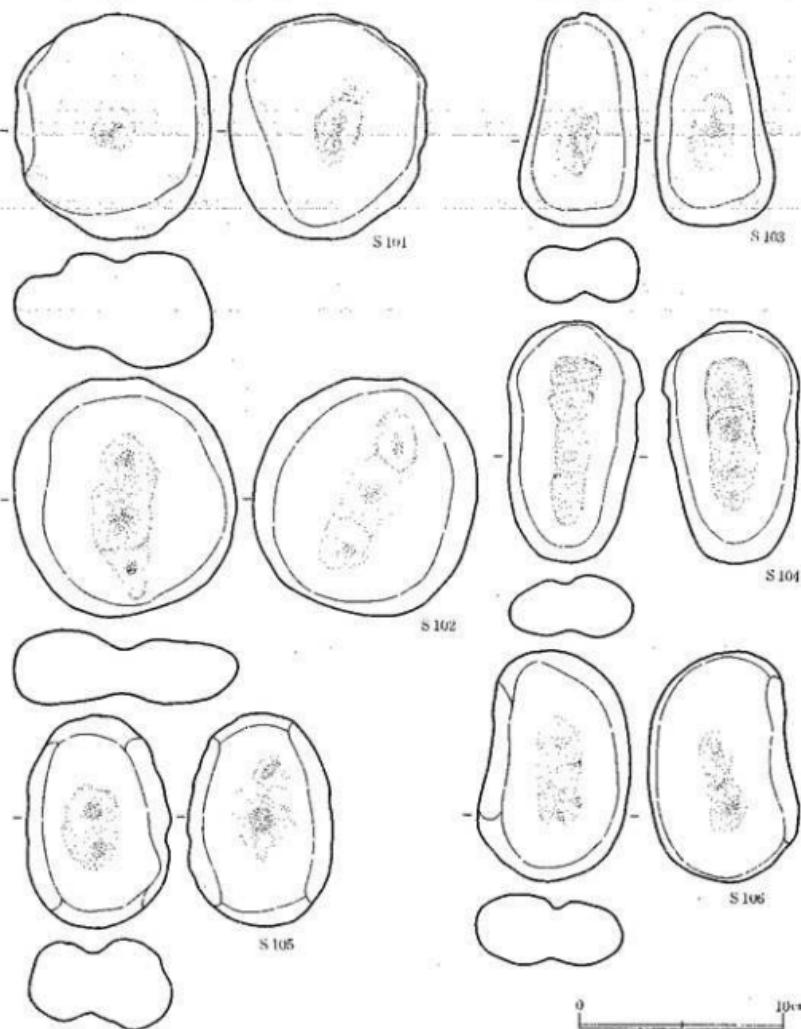
番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	圖版
S88	LK 84	II	くぼみ石——I	123	70	30	303	安山岩	19
89	MK 87	II	〃	88	87	21	249	〃	〃
90	MK 84	II	〃	104	53	20	186	〃	〃
91	MG 80	II	〃	80	67	41	352	〃	〃
92	MJ 91	II	〃 — II	90	80	39	359	〃	〃
93	MJ 91	II	〃	95	65	31	238	〃	〃
94	ML 87	夷津	〃	95	77	41	394	〃	〃
95	MJ 90	I	〃	113	86	51	548	〃	〃

第27図 造構外出土石器[10]



番号	出土地区	層位	器種・分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S96	LL 91	IV	くぼみ石—II	129	115	51	1160	安山岩	—
97	M I 91	盛土	〃	92	93	49	694	〃	—
98	M J 91	IV	〃	139	84	39	326	〃	—
99		表様	〃	110	58	40	249	〃	—
100	MK 90	IV	〃	99	65	22	175	〃	—

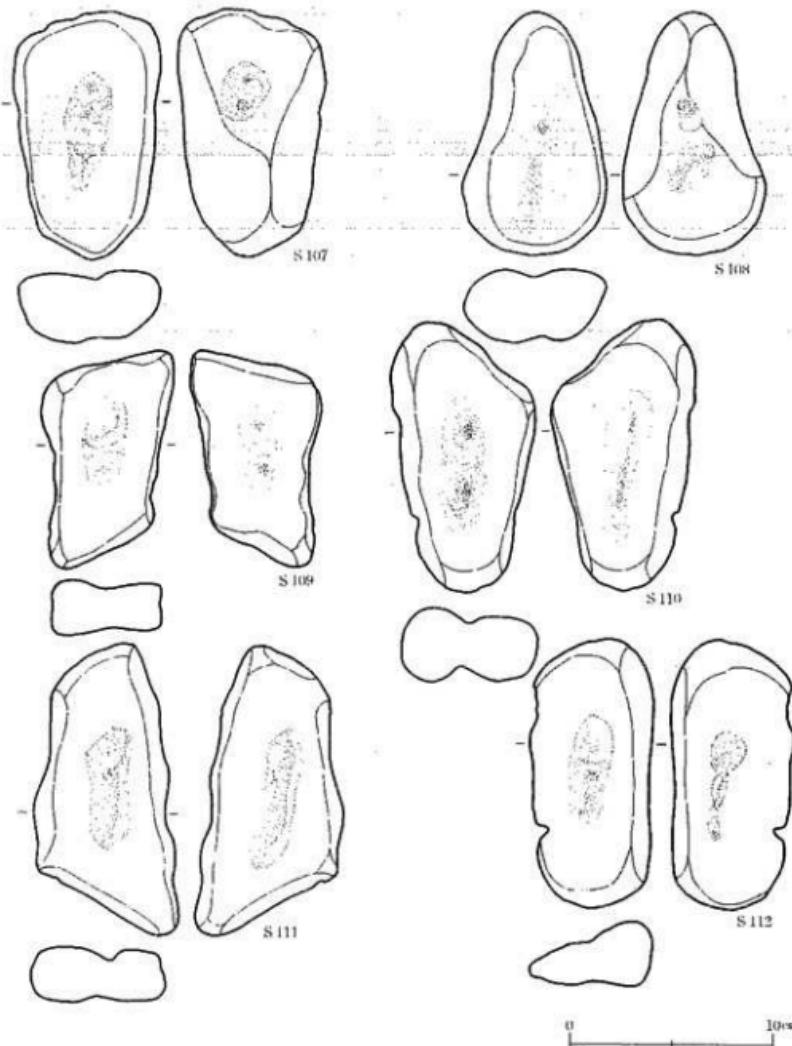
第28図 造構外出土石器(II)



番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S101	MK 90	II	くぼみ石——II	112	91	51	634	安山岩	20
102	LJ 87	II	#	118	110	37	558	#	#
103	LM 91	II	#	105	59	32	242	#	#
104	MK 87	II	#	119	68	30	286	#	#
105	ML 89	II	#	105	71	45	369	#	#
106	MJ 84	II	#	114	75	40	410	#	#

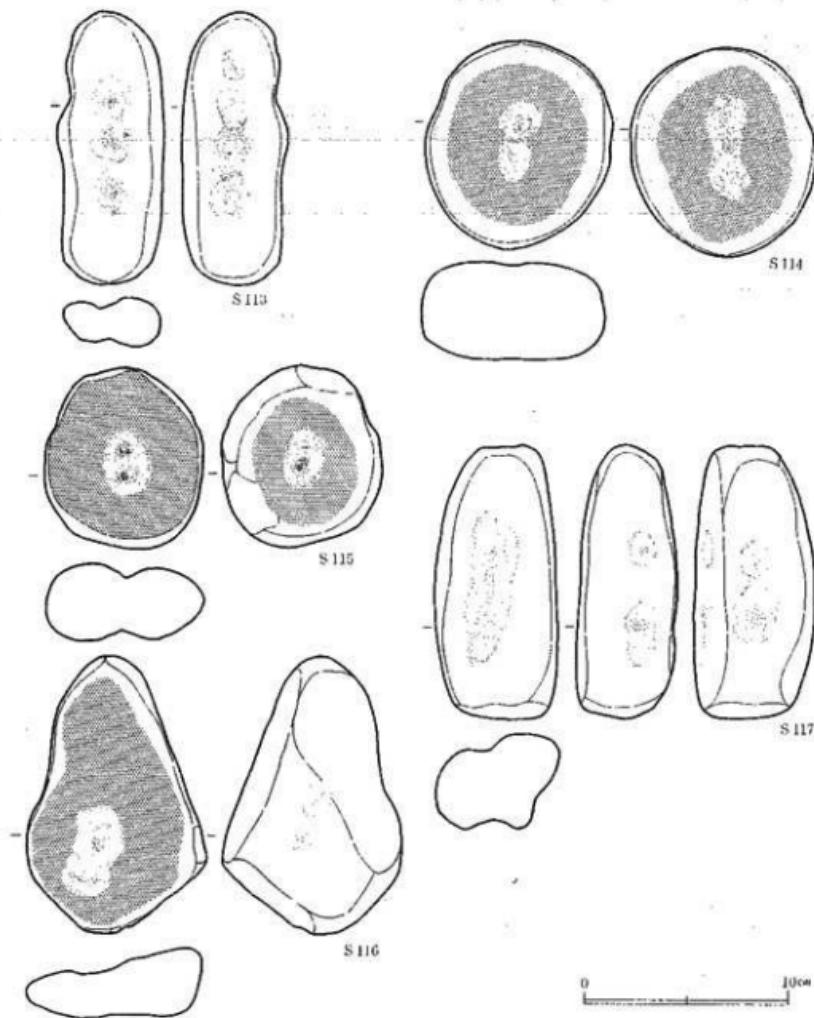
第29図 造構出土石器[12]

小出耳遺跡



番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	質版
S107	MK 91	盛土	くぼみ石——II	122	73	36	355	安山岩	20
108	MK 93	IV	#	120	70	35	281	#	#
109	LK 90	盛土	#	107	65	26	222	#	21
110	MK 86	盛土	#	134	71	38	379	#	#
111	LL 84	盛土	#	143	73	27	315	#	#
112	ML 88	IV	#	134	61	30	289	#	#

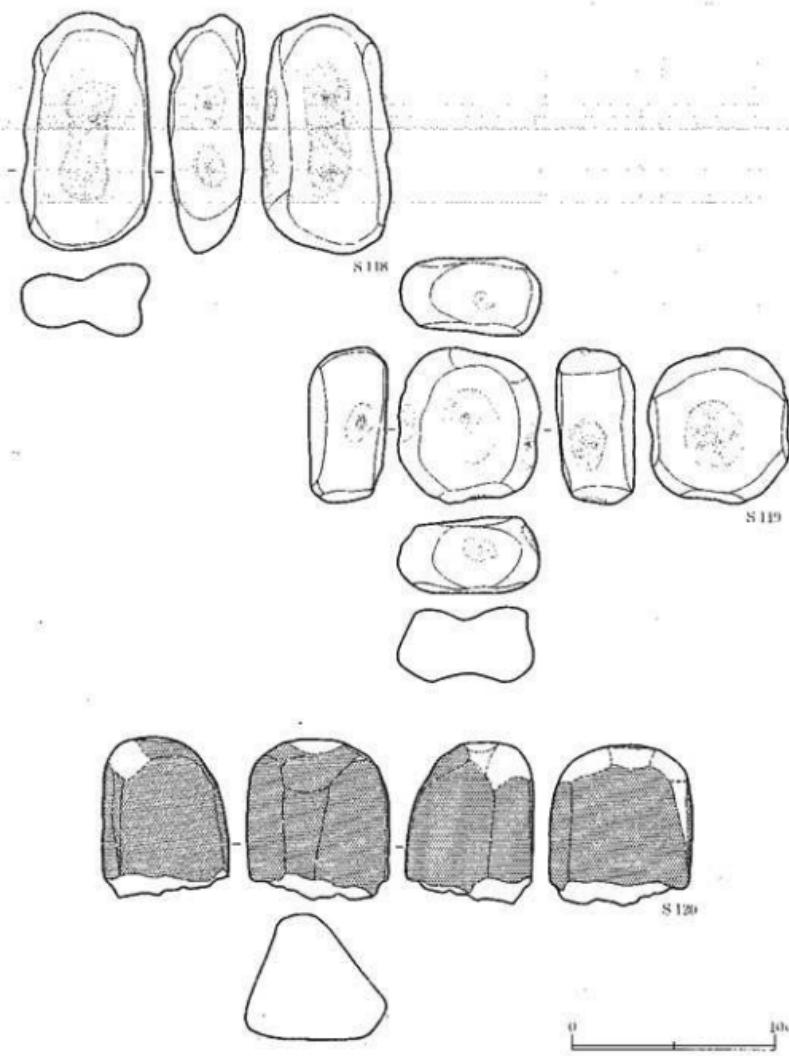
第30図 遺構外出土石器(13)



番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図版
S113	MK 87	表土	くぼみ石——Ⅱ	135	53	25	201	安山岩	21
114	MJ 91	IV	"	103	92	49	666		#
115	MK 85	表土	"	79	90	38	343		#
116	MK 84	IV	"	138	89	36	403		#
117	LK 83	IV	——Ⅲ	135	61	50	505		#

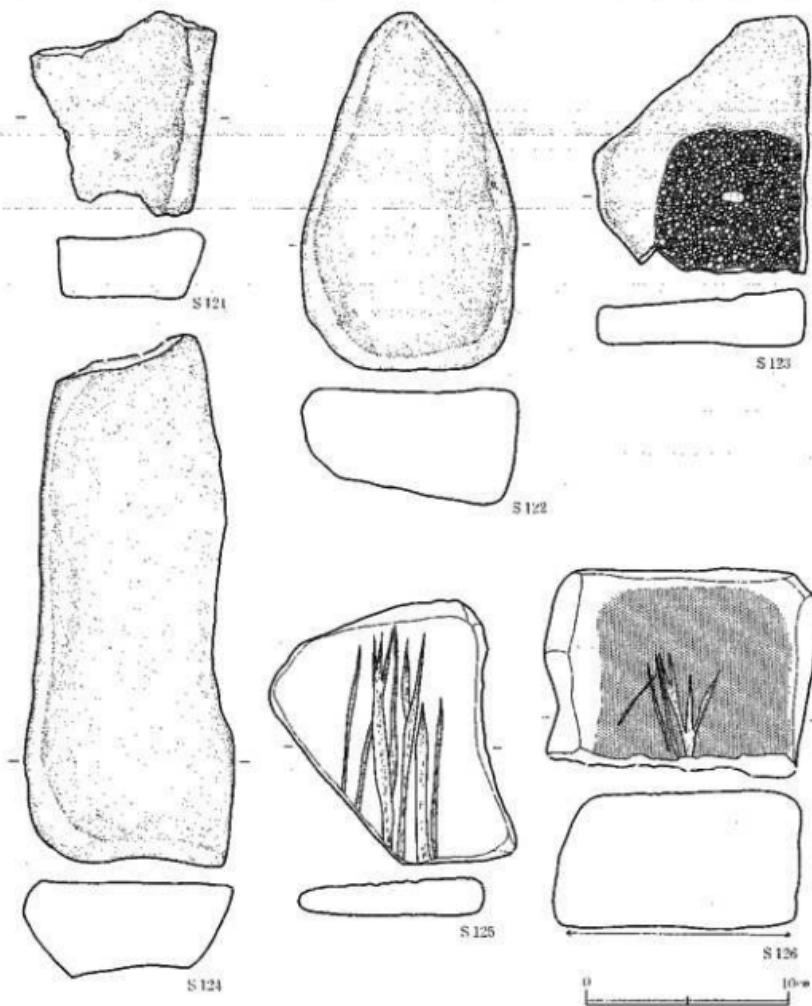
第31図 造構外出土石器⑩

小出日遺跡



番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	圓版
S118	MK 91	盛土	くぼみ石	117	64	38	321	安山岩	22
119	LL 83	盛土	*	77	69	39	223	ク	*
120	LL 84	N	磨石	80	70	62	441	花崗岩	*

第32図 造構外出土石器(1)



番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図版
S121	MO 91	盛土	石刀	102	91	35	428	安山岩	-
122	MG 81	N	"	262	105	48	1722	"	-
123	MJ 91	盛土	"	176	105	60	1464	讃岐灰岩	-
124	ME 77	日	"	107	128	28	524	安山岩	-
125	LL 84	N	燧石	131	123	19	354	讃岐灰岩	-
126	夷孫	"	"	103	134	68	1774	"	-

第33図 遺構外出土石器(10)

第3章 平安時代

第1節 遺構と出土遺物

平安時代の遺構では、堅穴住居跡1軒、柱列1条、階段状遺構1基が検出されている。また昭和62年度調査においてS R01とした遺構は、盛土中で検出された土師器であるが、これと併せて炭と骨片が確認されており、本遺構が小出I遺跡の火葬墓と同じ性格のものであると考えられる。

1. 堅穴住居跡

S I 20(第34図、図版4)

調査区の南側で、小出I遺跡とを画する沢筋に当たる標高56mほどの緩斜面に位置し、グリッドではMF・MG73・74グリッドにわたっている。

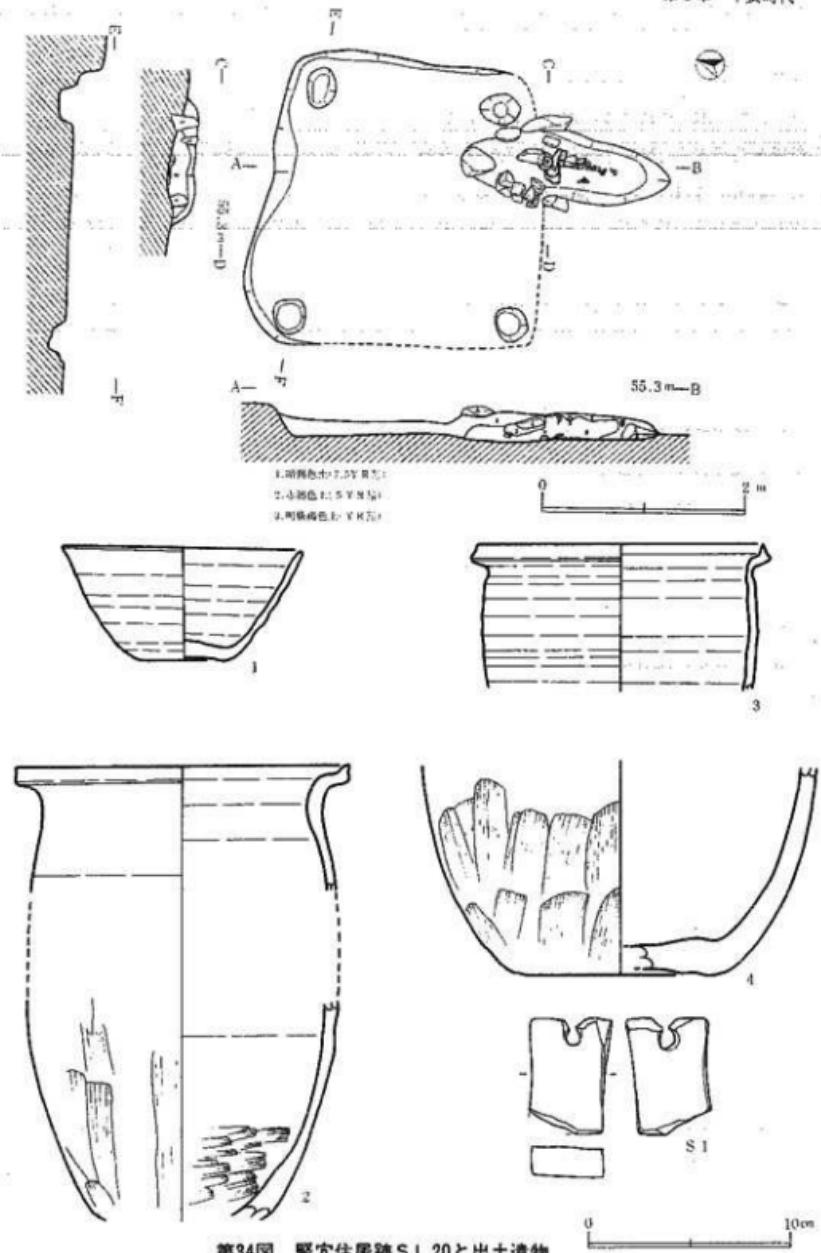
確認当初は、カマド部分の焼土のみ検出していたため、焼土遺構と考えていたが、精査の結果堅穴住居跡と判明したものである。位置的に東から西に傾斜する斜面であることと沢筋に当たるため、南側と西側の壁は確認できなかった。

住居の規模は、検出された北と東壁、それにコーナーのピット間の距離から、一辺が約3mの方形を呈すると考えられる。壁高は北側では30cmほどで、やや外傾しながら立ち上がり、床面は、礫層の小礫が一部露頭しているが、全体的に堅く締まっている。

柱穴は、住居の各コーナーにあり、北西コーナーの柱穴は40cm×30cmで、床面からの深さは20cm、接する壁からは40cm内側に位置する。

カマドは、南壁の東側に付設されており、煙道部は南壁から1.2m南へ張り出している。カマドは角礫を芯材として利用し、その上を粘土で固めたもので、中央部には、土師器の坏を支脚として据えている。

出土土器(1～4)は、全て土師器で、1の坏は支脚に利用されていたもので、口径11.8cm、底径4.1cm、器高5.5cmで上げ底の底部からほぼ直線的に外傾する器形である。底部は、切り離しの後にナデついている。胎土は肌目が細かく、焼成も良く、色調は黄橙色(10Y R 8/6)を呈する。2は口径16.4cm、器高・底径は推測で各々23cmと8cmほどにならうか。底部から細長い卵形の体部、鋭く屈曲する頸部に至り、口縁部は直立する。口唇部はつまみ出しそうに突出し、口縁内面にはフラットな部分がある。体部下半にはヘラケズリの痕跡を留める。胎土は1～3mmの砂粒を含み、焼成もろく色調は浅黄橙(10Y R 8/3)を呈している。3は器形的



第34図 穫穴住居跡 S1-20と出土遺物

小出町遺跡

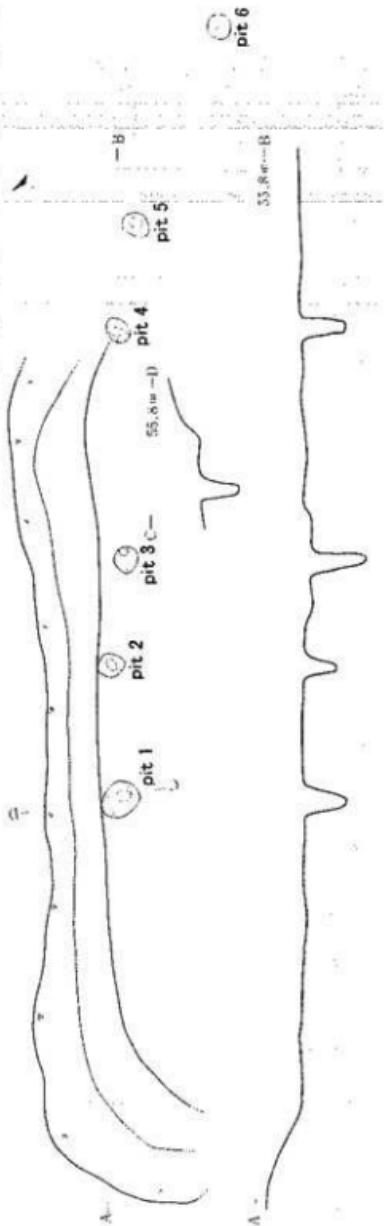
には2とはほぼ同じ形態の臺で、鋭く屈曲する頸部から、やや内傾する口縁部に至り口唇部は2よりも鋭く突出する。胎土は砂粒を含み、焼成もろく色調は浅黄橙(10Y R 8/3)を呈している。4は、厚手の甕の底部破片で、上げ底で径9cmの底部から円いカーブを描きながら体部にいたるものである。体部下半には粗いヘラケズリが行われ、底部はヘラケズリで調整されているが、外周に沿っては指頭による調整痕が残っている。内面の体部下半には、縦方向にナデが行われる。胎土には多量の砂粒を含み、器面はザラついている。色調はにぶい黄橙色(10Y R 7/3)を呈している。

2. 柱列

S A26(第35図、図版5)

S I 20周辺の精査中に確認されており、S I 20の東側から北西に連なる6本の柱列である。柱穴の規模は、上面で径30cm~40cm、底面は径14cm~18cmで、深さは70cm、埋土はしまりのある暗褐色土(10Y R 3/3)で炭化物粒子を含む。

柱穴間の距離は、西側からpit1-1.8m-pit2-1.5m-pit3-2.9m-pit4-1.5m-pit6で、S I 20の東南コーナーから東へ1.8mに位置するpit6からほぼ直線的に西北に伸びている。この柱列に沿って北側には幅30cmで、斜面を削平した部分があり、これが後述のS D23の南端に接している。



3. 階段状遺構

S D23(第36図、図版6)

S A26に沿う道路の北西端から、斜面に直行するよう北に伸び、途中から東に弧状に曲がる階段状の遺構である。長さ11mで、地山を幅1.2m~0.5m、深さ40cmの溝状に掘り込んだ中に16面の40cm×20cmほどの大きさのテラスがある。テラス部分には地山に含まれる小礫が露頭しており、遺構の南北端の比高差は3mもある。覆土は、黒色土層の下に暗褐色土層(10Y R3/3)があり、部分的に褐色土(地山)ブロックが混入している。

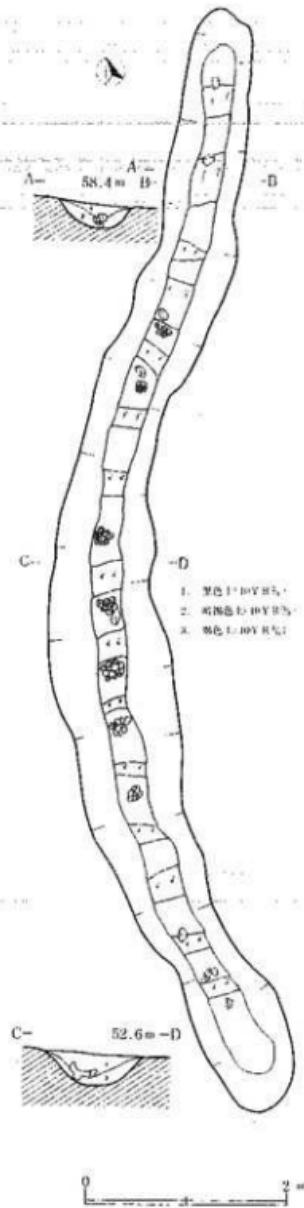
S D23の確認は、S A26よりも先行しており確認時にはSW17に付随する遺構と考えていたが、掘り下げの段階でS A26を検出するにいたり、S I 20→S A26→S D23と繋がる一連の遺構群と解釈した。

4. 火葬墓

S R01(第37図)

北側平坦部の西側縁辺部の盛土中より、土師器の小型壺と壺が炭と骨片とともに出土したもので、原位置は保っていないが、小出I遺跡の火葬墓の状況からしてもこの小型の壺と壺が骨蔵器として利用されていたことは間違いない。

5は底部を欠いているが、口径13cmで底部から大きくふくらみ外傾する口縁に至るもので、切り離しは回転糸切りによる。胎土は肌目が細かく、焼成も良い。色調は、浅黄褐色(7.5Y R8/4)である。6は口径14cm、底径7.7cm、器高17cmで底部から球形に近い体部、鋭く「く」の字状に屈曲する口頸部にいたり、口唇端部は直立する。胎土は1~3mmの砂粒を含むが、焼成も良く、色調は橙色(7.5Y R7/6)を呈している。底部回転糸切りに使用された右撲りの糸の圧痕が明瞭に残っている。



第36図 階段状遺構 S D23

第2節 遺構外出土遺物(第38・39図)

平安時代の遺構外出土遺物は土師器と須恵器である。出土地域は昭和63年度調査範囲の中央部で旧沢の流道筋に沿って東から西に帶状に出土している。

土師器(7~18)

7~8は、肥厚して大きく外反する口縁部から、わずかに膨らみを持ちながら底部にいたるものである。10~12、14・15は底部から直線的に外反する口縁部にいたるもので、いずれも胎土は肌目細かく、焼成も良好で色調は灰褐色を呈している。

13は高台付きの杯で、低い外開きの高台から丸く膨らみながら体部にいたるもので、内面は黒色処理されている。胎土、焼成とも良好で外面の色調は灰黄色を呈している。

16は壺の体部破片と考えられる。丸みのある体部には輪積み痕が明瞭で、胎土に砂粒を含み焼成は不良で、色調は橙色を呈している。

17は高台部分の破片で、胎土・焼成・色調とも13の杯に酷似する。

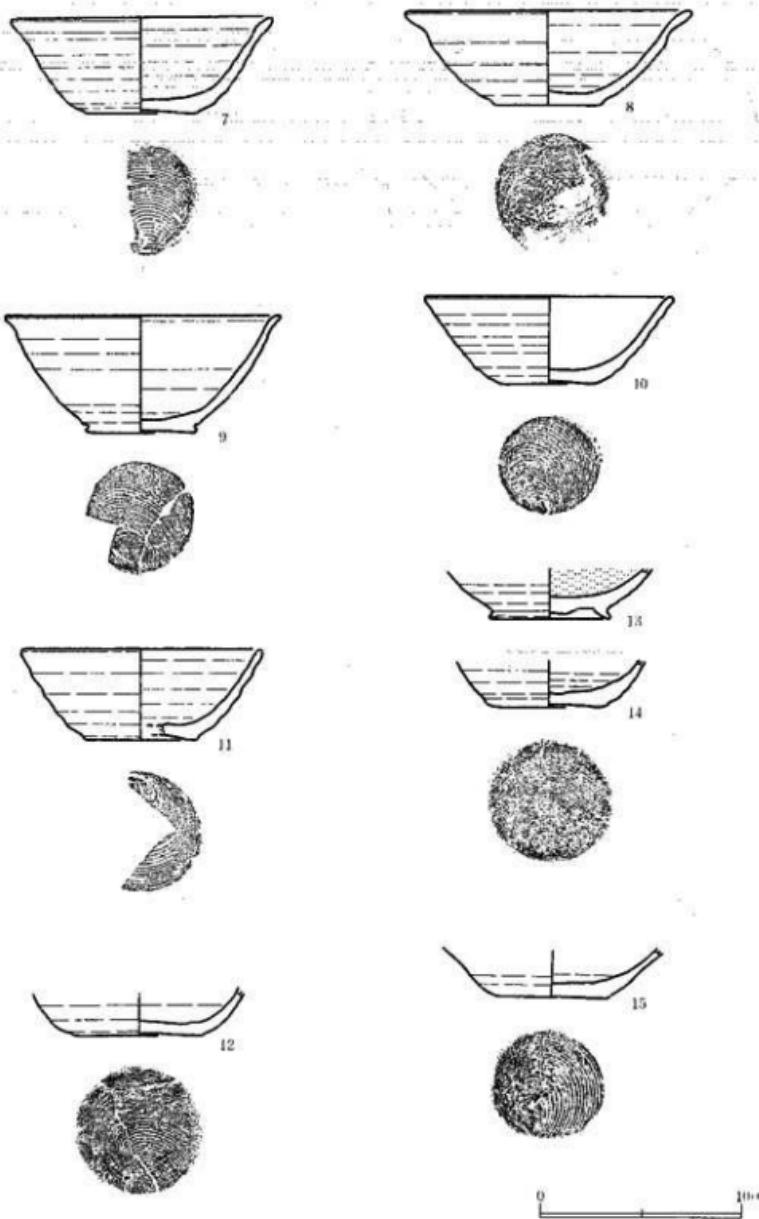
18の壺は直立して突出する口縁部から、頸部で直角に屈曲し体部上半に最大径を持つものである。体部中ほどから下端まで縦方向の粗いヘラケズリが施される。胎土には径3mmほどの砂粒を含み焼成も不良で、色調は茶褐色～暗褐色を呈している。

須恵器(19)

壺の高台部分と思われる。胎土、焼成とも良好で灰黄褐色を呈している。



第37図 火葬墓S R01と出土土器



第38図 造構外出土遺物

小出日遺跡



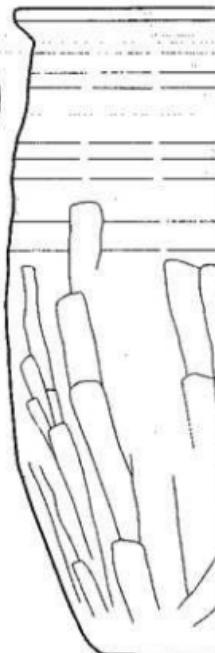
16



17

16

17



18

0

10cm



19

第39図 遺構外出土遺物

第4章 中世以降

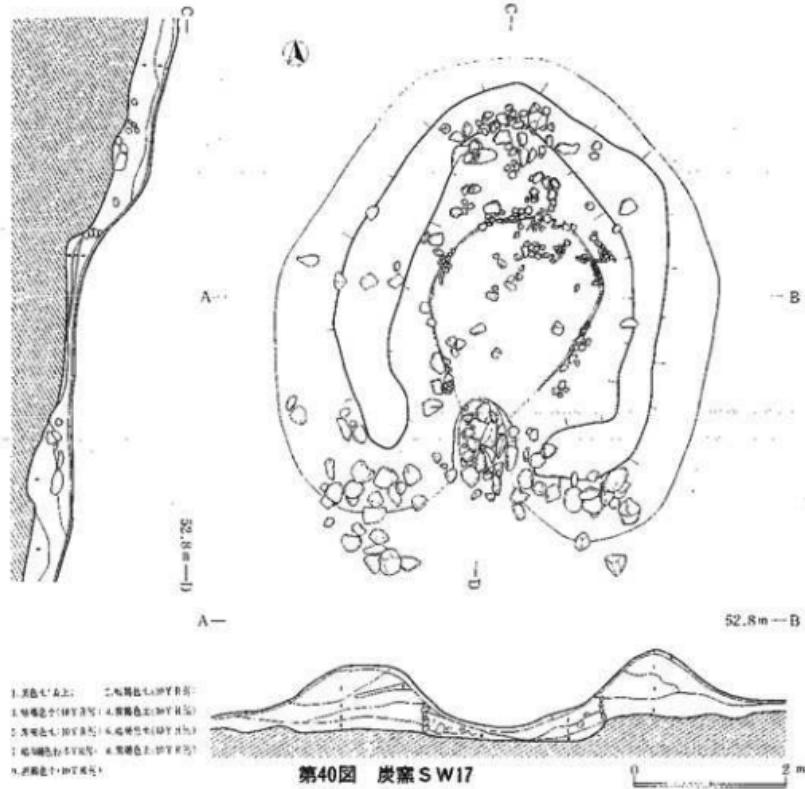
中世から後の時代の遺構は炭窯1基だけである。

1. 炭窯

SW17(第40図、図版7)

調査区南側の斜面に構築された炭窯で、現地表面において中央の窪んだマウンド状になっており炭窯と想定されていたものである。窯本体は、旧表土に角礫を芯材として、その上を暗褐色土と黄褐色土で葺いたもので、内壁部の焚き口付近や煙道部は礫を整然と積み重ねている。

窯本体の規模は、外周で径6.0m、内周2.6m(南北)×2.2m(東西)で、焚き口部はさらに1m×0.7mの梢円形に窪んでいる。土層図の2～4層は窯体部を葺く土で、7層はレンガ状になつた焼土で天井部の落下したものである。8・9層は炭の層である。



第5章 まとめ

小出II遺跡は調査の結果は、縄文時代と平安時代を中心として営まれた遺跡であり、その内容も既述のとおり、小出I遺跡と類似しており、むしろ両遺跡は一遺跡として考えたほうが妥当であろう。ここでは、小出I遺跡の調査結果と照合しながら小出II遺跡を概観してみたい。

第1節 縄文時代

1. 遺物について

遺構外出土の土器をI～III群に分類したが、このうちII群土器は縄文時代中期後半の土器で、小出I遺跡II群土器と同じである。また、III群土器は小出I遺跡IV群1類土器に相当しよう。

I群土器についても小出I群土器の様相と類似している。1類土器の表裏縄文は、口唇部にも縄文が施されるもので、早稻田貝塚第4類土器あるいは赤御堂式に並行する。

2類土器は点数が少ないが、燃糸側面压痕文の施されるもので、花積下層式である。

3類土器は、口唇部が「匂」状を呈し、刺突文の付される土器であり、小出I遺跡では出土していないものであるが、胎土・焼成・色調は後述する4a類土器に類似している。

4類土器は小出I遺跡I群3類土器に共通するもので、長七谷地貝塚第III群土器に並行する。とくに4a類の口縁部文様帶に横走する縄文、体部に羽状縄文の施される土器は、長七谷第III群A類土器に相当しよう。

5類土器は、小出I遺跡I群6c類と同じ文様構成をとり、SK03出土の土器も本類に入る。

6類土器は小出I遺跡には見られなかった土器であるが、4a類土器に類似するのであろう。

7類土器は小出I遺跡6類土器に相当しよう。

以上のように、小出II遺跡の土器を小出I遺跡の土器と対比してみたが、両遺跡出土土器は大きくは縄文時代早期～前期前半、中期後半、弥生時代のものである。しかしながら早期～前期の土器を文様などから見ると、小出II遺跡I群3類土器の刺突の施される土器、同群6類土器の横走する縄文の施される土器は小出I遺跡では検出されなかったものである。こうした土器の様相の差異が両遺跡の造構や他の遺物などに反映されているのかどうかは判然としない。しかしながら小出II遺跡にのみ見られる折断面のある尖頭器(II類)は、その消長の時期が問題となろうが、一つの定型的な石器として捉えられるかもしれない。

次頁に両遺跡のI群土器の対比と石器組成を示す。

土 器

小出 I 遺跡

I群 1類	(表裏繩文)	I群 1類
2類	(燃糸側面圧眞文)	2類
	(刺突文)	3類
3類	(羽状繩文)	4類
4類	(繩文)	
5類	(燃糸文)	5・7類
	(横走繩文)	6類

小出 II 遺跡

石 器

小出 I 遺跡 小出 II 遺跡

石鎌	○	○
石槍	○	×
尖頭器	×	○
石錐	○	○
石篠	○	○
石匙	○	○
搔器	○	○
削器	○	○
打製石斧	×	○
磨製石斧	×	○
断面調整石器	○	○
ビエス・エスキーユ	○	×
石核	○	○
凹石	○	○
磨石	○	○
石皿	○	○
砥石	×	○

第2節 平安時代

小出II遺跡の平安時代については、既述の通り竪穴住居跡(S I 20)・柱列(S A26)・階段状遺構(S D23)・火葬墓(S R01)があるが、これらの遺構の配置は極めて興味深い。遺跡の最低地にあるS I 23の存在、それに続くS A26とさらに斜面を昇るように構築されているS D23はその配置からしても一連の遺構群として把握できる。

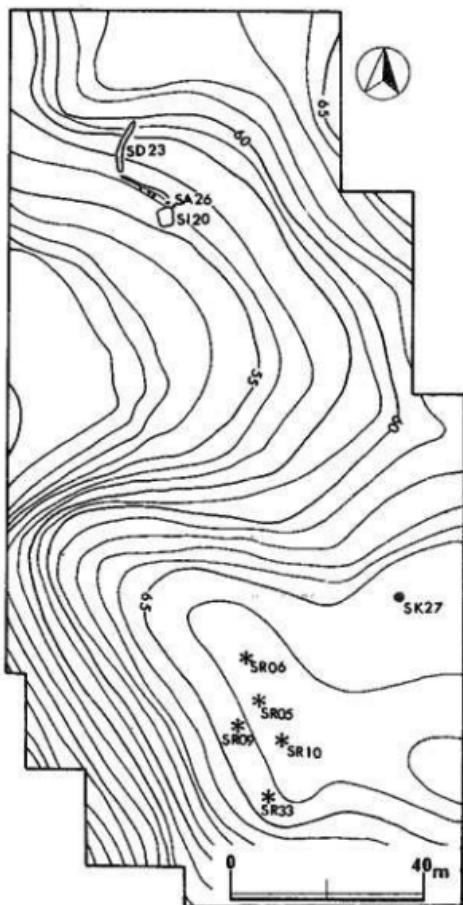
さらに、小出I遺跡をも含めた平安時代の遺構配置(第41図)をみると、5基の火葬墓が南北に連なり、小出II遺跡の竪穴住居跡S D23は、ほぼこの火葬墓の延長線上にあることがわかる。また、小出II遺跡の北側平坦部にも火葬墓があり、S I 23がこれら火葬墓群の中間に位置していることになる。

以上の事からS I 20の沢筋に当たる低地という位置、さらにこれを中心にして南北の平坦部に当該期の火葬墓があることなどを考慮すれば、S I 20が住居空間における住居よりも葬制に強くかかわりをもつ特殊な住居(例えば、モガリのための施設)と考えたほうが妥当であり、S D23・S A26が付随する特殊性も首肯できるのである。

県内における火葬墓については、小出I遺跡で触れたが、平安時代の火葬墓がまとまって検出された例は県内では無い。

こうした火葬墓群に竪穴住居跡の伴う例としては、埼玉県川口市の吠原遺跡がある。遺跡からは8世紀後半～9世紀後半にわたる火葬墓が21基検出され、特に注目されるのは、火葬墓群から離れた台地縁辺部の1軒の竪穴住居の存在である。

住居のカマド付近からは大形の炭化材が



第41図 平安時代遺構配置図

発見され、また完形土器で朱塗りの杯が5点出土し、この住居の特殊性を極めて強いものとしている。小出II遺跡のS I 20の存在も同様な性格を保守しているものと考えられる。

参考文献

- 八戸市教育委員会 『長七谷地遺跡発掘調査報告書—長七谷地2・7・8号遺跡—』
1980・1981（昭和55・56年）
- 青森県教育委員会 『長七谷地貝塚』 青森県埋蔵文化財免掘調査報告書第57集
1980（昭和55年）
- 福島県相馬郡小高町教育委員会 『宮田貝塚—昭和48年7月発掘調査報告—』
1975（昭和50年）
- 庄内昭男 「秋田県における古代・中世の火葬墓」 『秋田県立博物館研究報告第9号』
秋田県立博物館 1984（昭和59年）
- 村田文夫 「葦信仰と墳墓—8墳墓(1)古代—」 『歴史考古学の問題点』 坂詰秀一編
1990（昭和65年）



1 昭和62年度調査（南東▷北西）

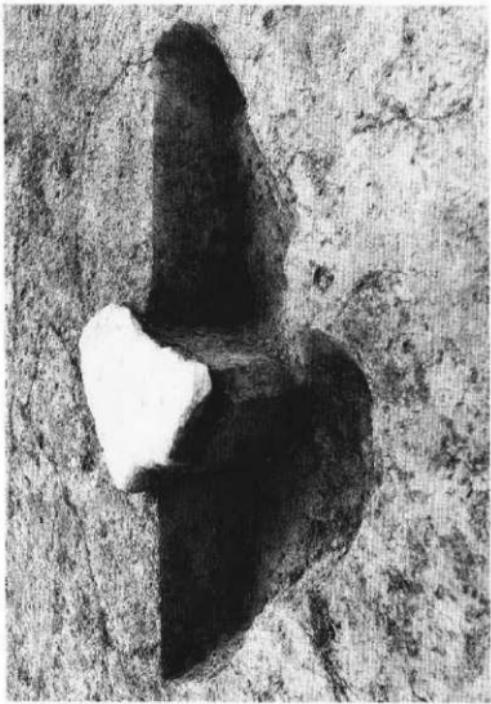


2 昭和63年度調査（南▷北）



小山遺跡 図版2

1 土坑SK08 (東▷西)

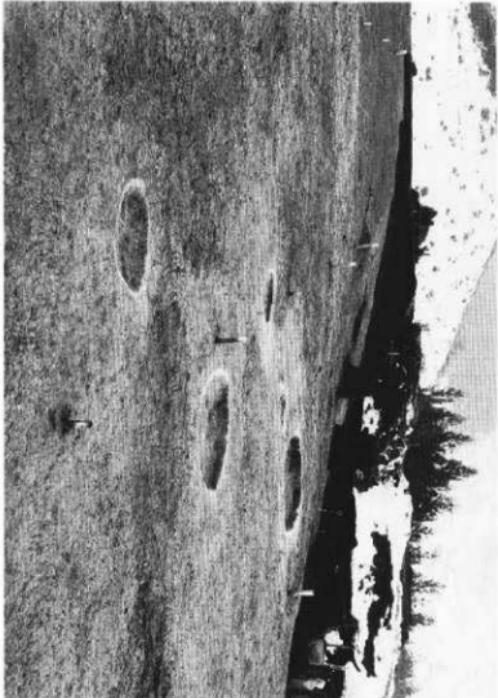


2 土坑SK06土層断面 (南▷北)

小出日遺跡 図版 3



1 土坑 SK 09 (東)



2 手前から土坑 SK 05・SK 07・SK 03 (北東) (南西)



1 垂穴住居跡SI20（西▷東）



2 SI20カマド（北▷南）



1 柱列 SA26 (西▷東)



2 階段状遺構 (南東▷北西)



1 SD23テラス部分（南▷北）



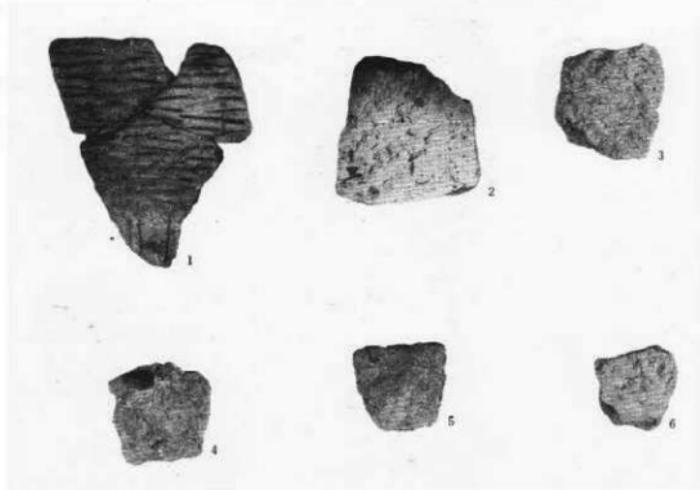
2 S120・SA26・SD23（北▷南）



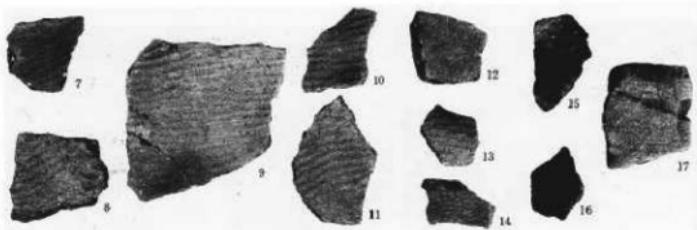
1 岩窓 SW17調査前（南▷北）



2 SW17（南▷北）



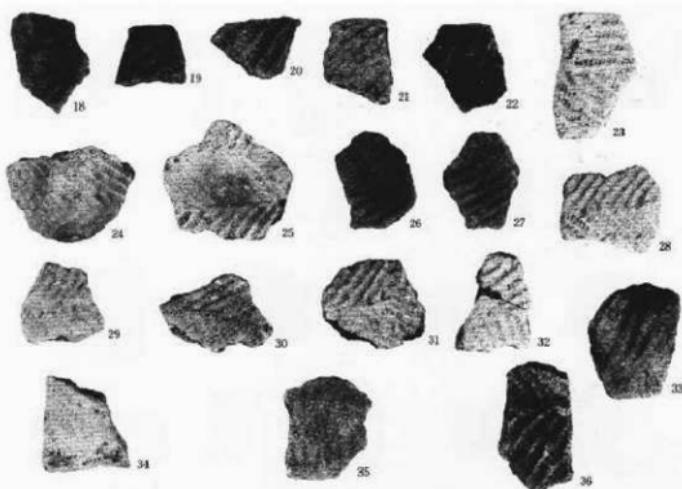
1 土坑內出土土器



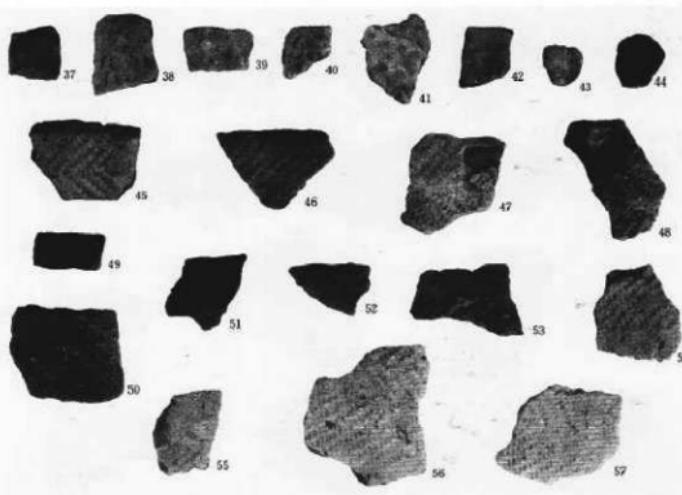
2 造構外出土土器(1)



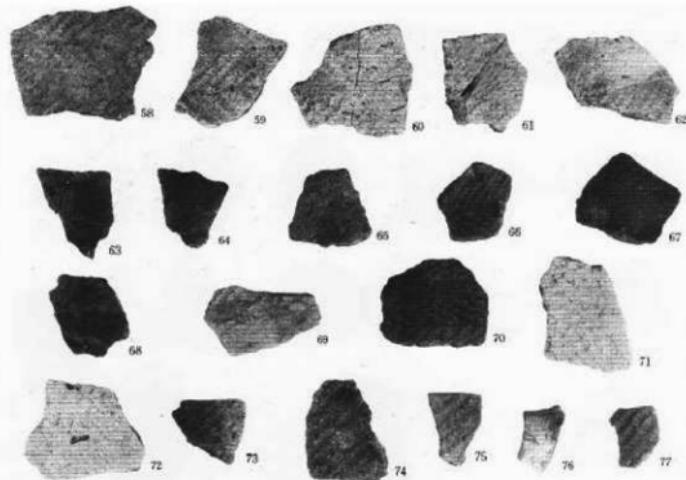
3 同上裏面



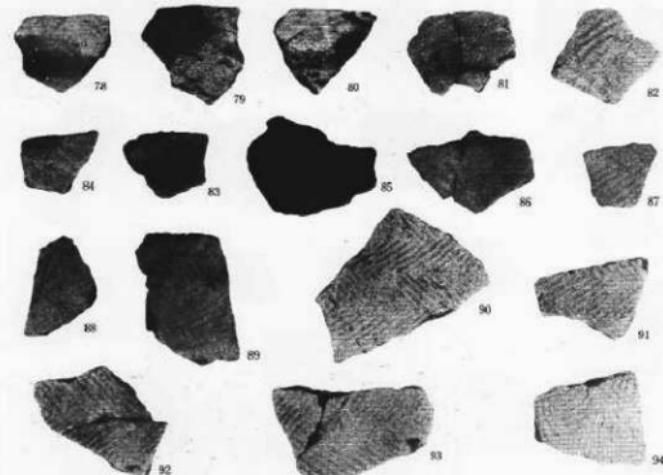
1 遺構外出土土器(2)



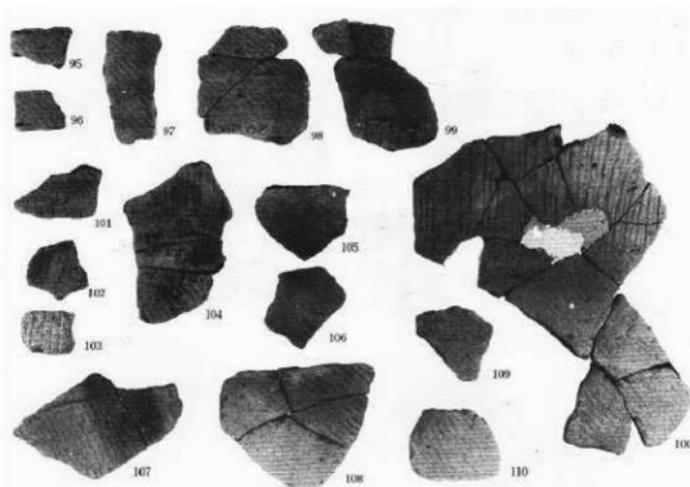
2 遺構外出土土器(3)



1 遺構外出土土器(4)



2 遺構外出土土器(5)



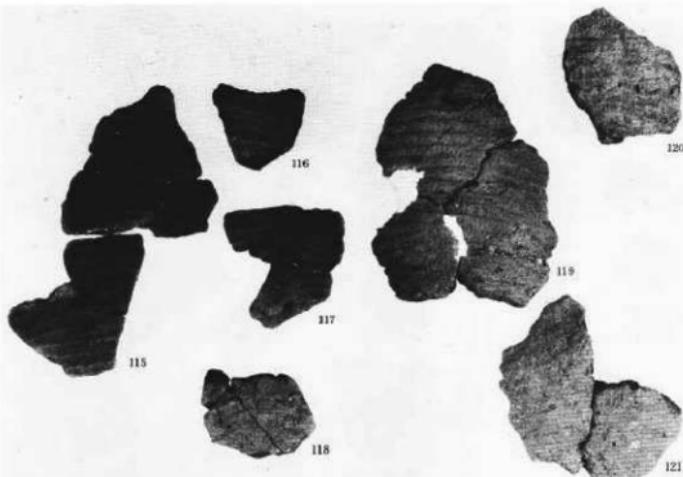
1 遺構外出土土器(6)



2 遺構外出土土器(7)



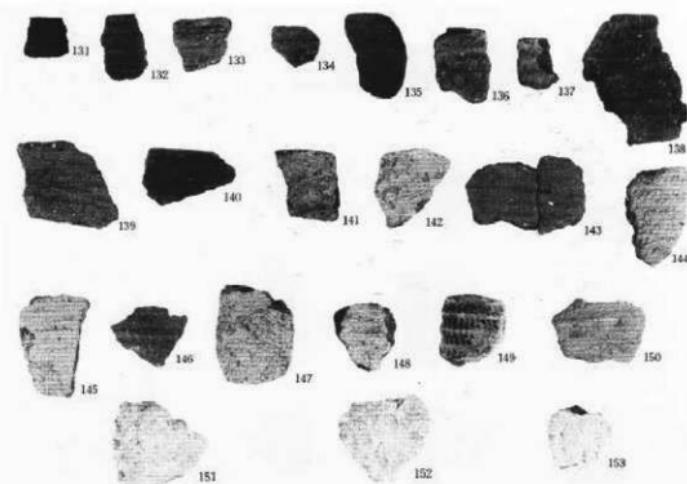
3 向上裏面



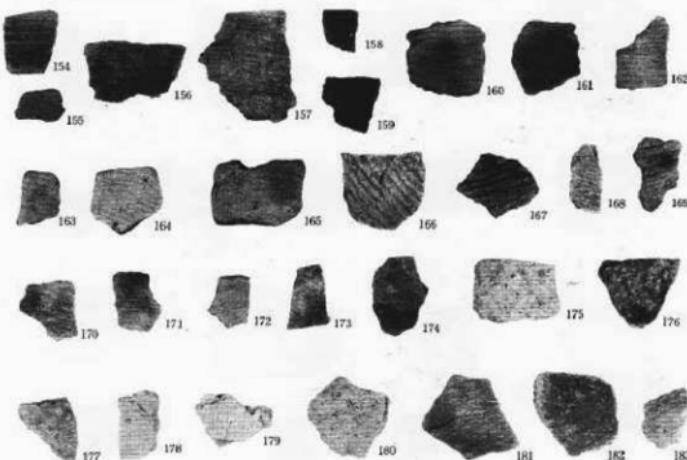
1 造構外出土土器(8)



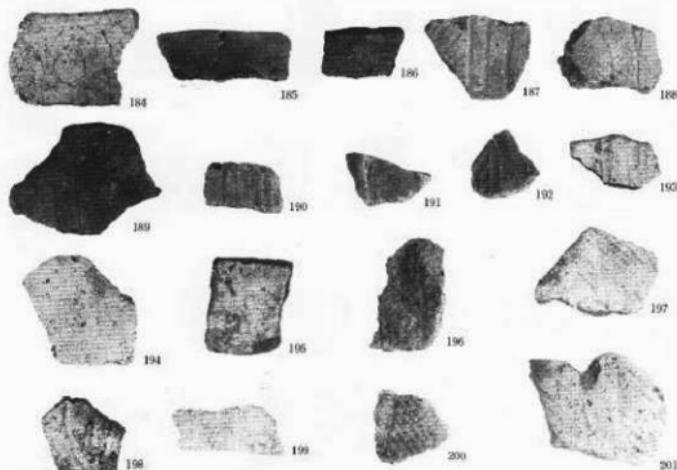
2 造構外出土土器(9)



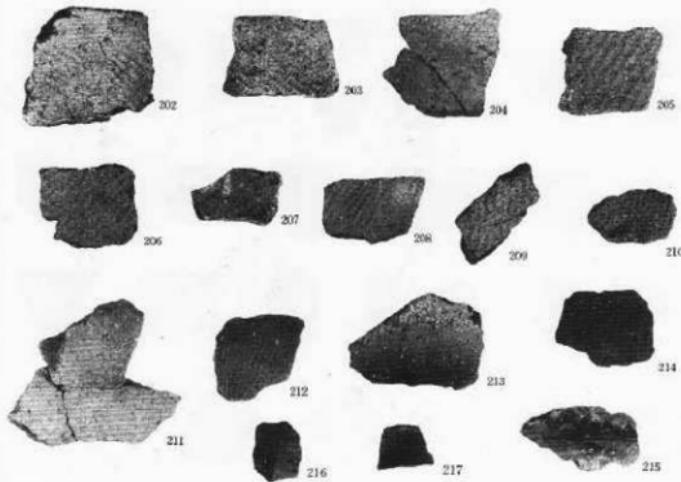
1 遺構外出土土器(1)



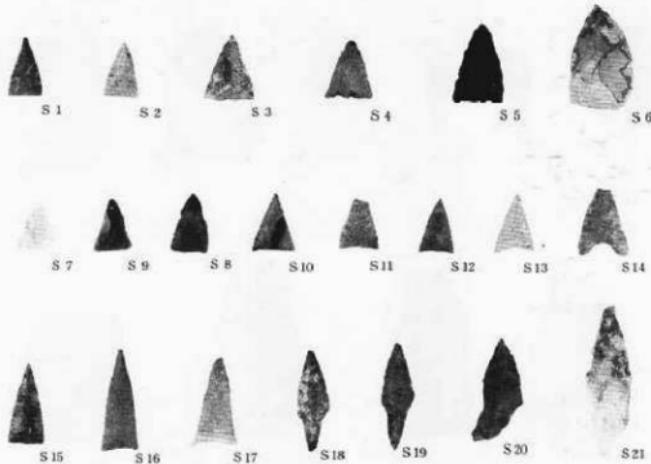
2 遺構外出土土器(1)



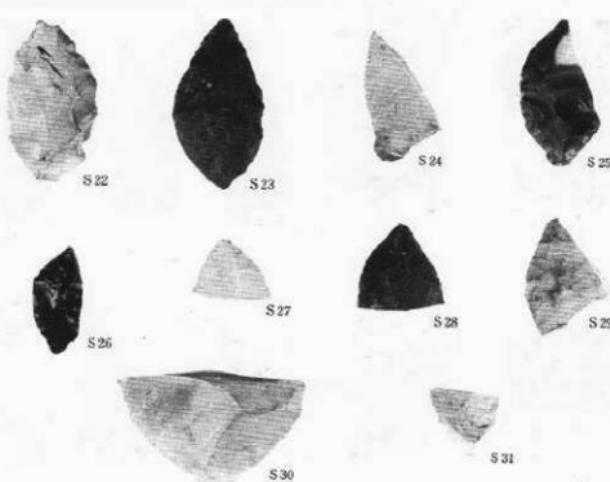
1 遺構外出土土器[12]



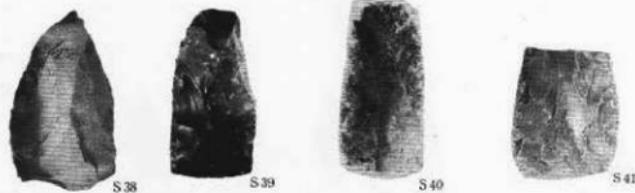
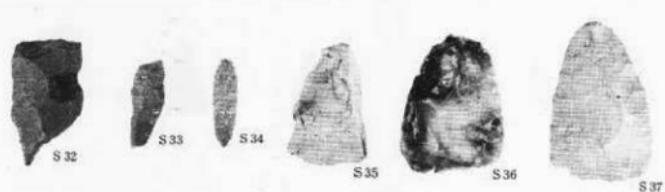
2 遺構外出土土器[13]



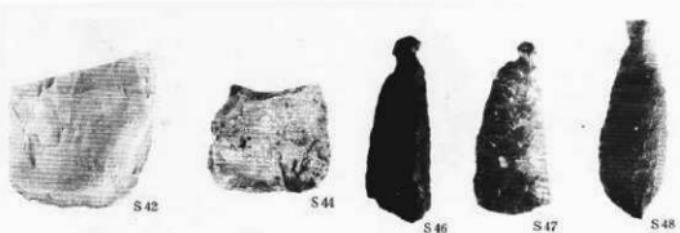
1 造構外出土石器(1)



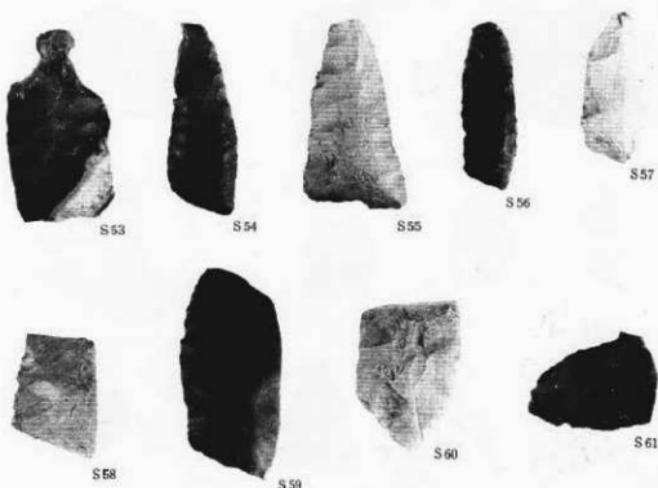
2 造構外出土石器(2)



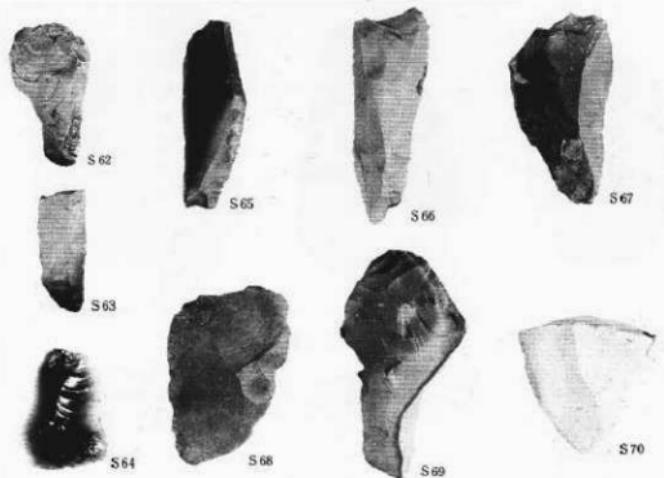
1 造構外出土石器(3)



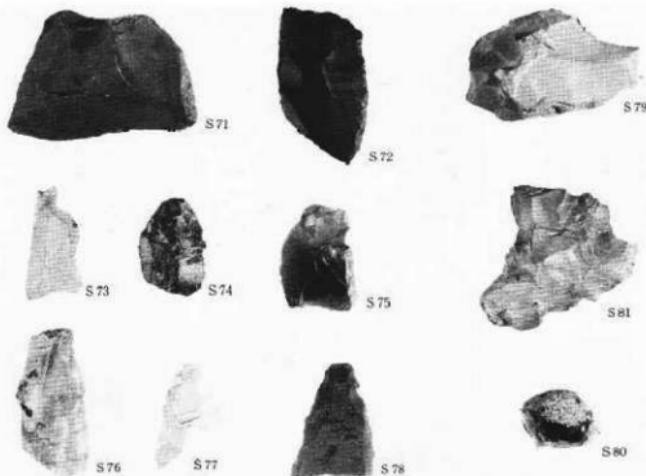
2 造構外出土石器(4)



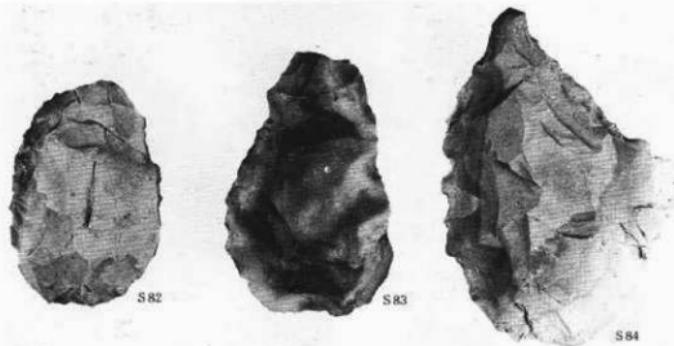
1 遺構外出土石器(5)



2 遺構外出土石器(6)



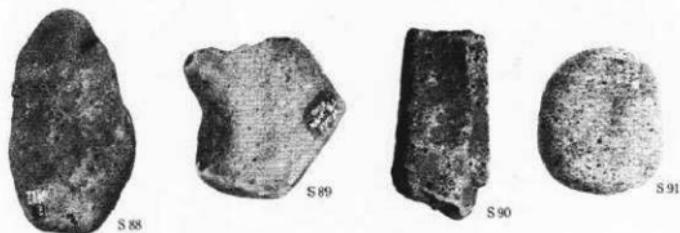
1 遺構外出土石器(7)



2 遺構外出土石器(8)



3 遺構外出土石器(9)・石製品



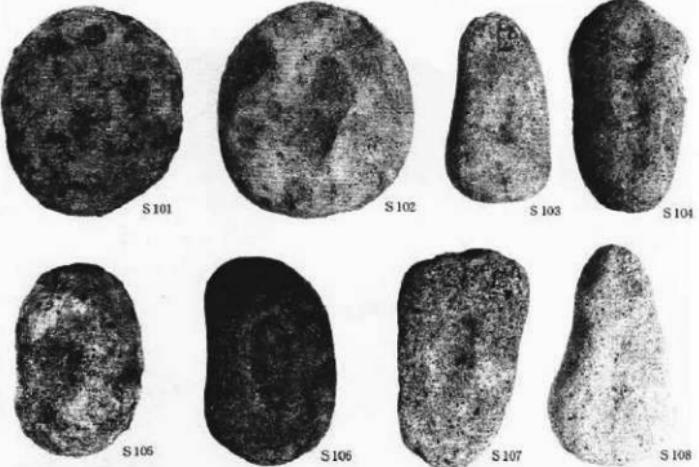
1 遺構外出土石器⑩



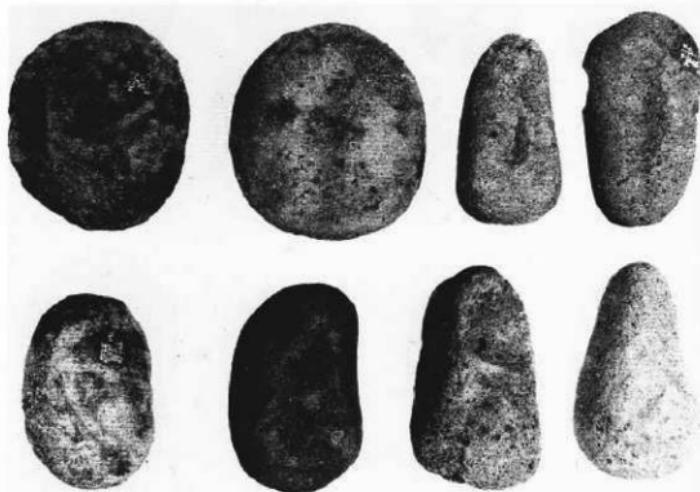
2 遺構外出土石器⑪



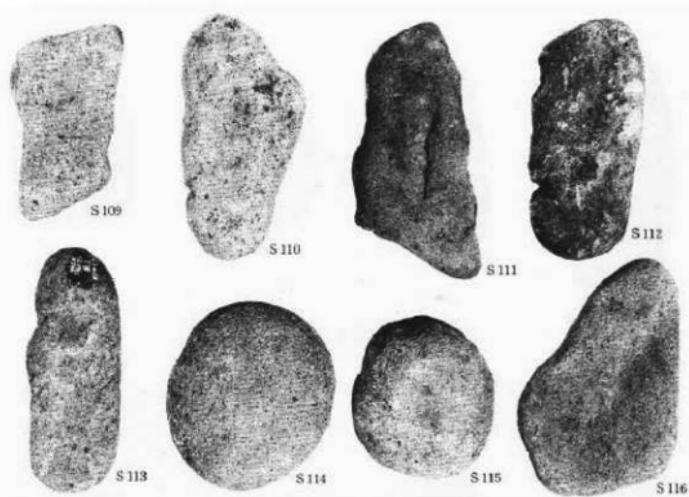
3 同上裏面



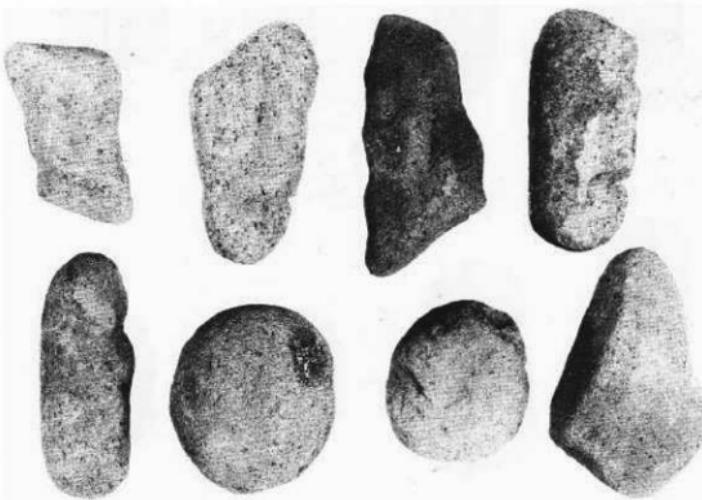
1 遺構外出土石器(2)



2 同上裏面



1 造構外出土石器(1)



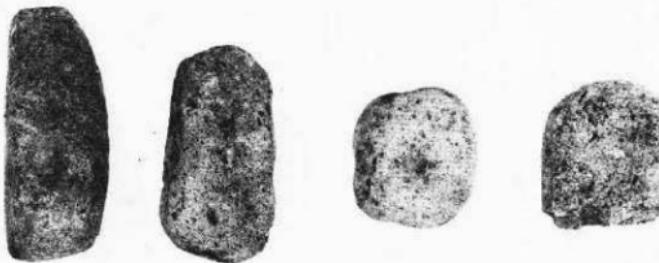
2 同上裏面



1 遺構外出土石器(1)



2 同上側面



3 同上裏面

小出 III 遺跡

第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地

小出田遺跡は、檜岡川中流の右岸に形成された河岸段丘上に所在する。この河岸段丘は、檜岡川へ流れ込む小河川に侵食されて、ほぼ北へ張り出した舌状地形を呈して、全体が山王台と呼ばれており、南側から高位面・中位面・低位面の3面の段丘面からなっている。小出田遺跡はこのうちの標高40~45mの中位段丘面に立地しており、今回の調査は、遺跡の西端部で、台地の西縁辺部に当たる。

遺跡西縁からは小さな沢が入り込み、調査区は、それらの小さな沢部とそれに挟まれた平坦部及び台地の西側斜面である。

第2節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査区は地形や調査の工程との関係などから、便宜上南側からA区・B区・C区・D区の4区に分けた(第1図)。

調査にあたっては、グリッド方式で行った。調査区内(C区)に打設した任意のグリッド原点杭をMA50として、この杭から磁北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、4m×4mのグリッドを調査区全面に設定した。南北基線には2桁の算用数字、東西基線にはアルファベット2文字の組み合わせを付し、各グリッドの名称は南北隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。

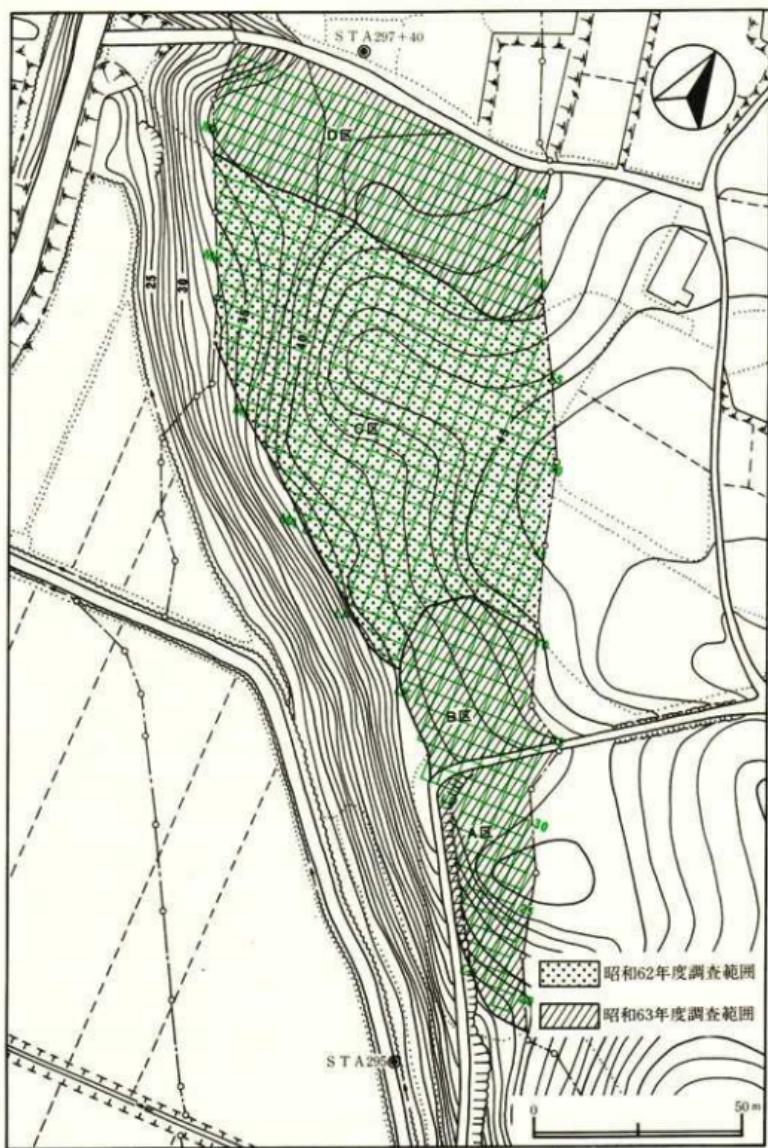
遺構等の実測は、各グリッド杭を利用して簡易造り方測量を行い、縮尺は原則として20分の1とした。調査区の地形図の縮尺は100分の1とした。さらに、遺構平面図と調査区の地形図等から、遺構配置図など必要な図面を作成した。

2. 調査の経過

発掘調査は昭和62・63年度の2ヶ年にわたって行った。昭和62年度はC区の調査を10月19日から12月9日まで実施した。

調査は、調査区外に排土場所を確保できず、調査区内にその場所を求めるを得なかつたことから、まず遺構・遺物の分布状況等を把握し、排土場所を選定するため、10月19日から11月

小出III遺跡



第1図 調査区及び周辺地形図

9日まで試掘トレントを入れて予備調査を行った。その結果、LP～MCラインと48～55ラインの範囲内で土坑などの遺構のプランが5基確認され、縄文土器片などの遺物がまとまって出土した。しかし、LPライン以東の平坦地は、地山まで削平された後に地山上に造成土が盛られており、遺構は検出されなかった。また、MCライン以西、55ライン以北、48ライン以南の傾斜地でも遺構は検出されなかった。出土した縄文土器片などは上部から流入したものと思われ、その量も少なかった。このため、全体的に発掘する範囲をLPライン～MCラインと48ライン～55ラインまでとし、調査区南側と西側の傾斜地を耕土場所に充てた。

11月10日、耕土が流下するのを防ぐため、MIラインと41ラインに沿ってしがらみを設置した。また、試掘トレントの耕土と刈り払いした草木の除去を14日まで行った。16日、48ラインから北へ粗掘りと遺構確認精査を開始した。19日、SI01、SK02・03を検出した。25日、検出された遺構の調査を始めた。27日、ほぼ粗掘りを終了した。同日、SR05、SK06を検出した。11月30日、寒気が強まり降雪となり、調査に支障を来すようになった。

12月1日、昨日から降り始めて積もった雪を除きながら、検出した遺構の調査と遺構確認精査を行い、SK07を検出した。2日、降雪多く遺構上にテントを張って調査を行った。3日～7日まで、SK08・09・10を検出した。8日、SN11を検出し、遺構確認精査を終了した。調査区の全景写真撮影を行った。また、SK02・03は人為的なものではないと判断し欠番とした。9日、すべての遺構の調査と調査区の地形等の測量を完了し、発掘器材を搬出してC区の調査を終了した。

なお、10月23日から、C区の調査と併行して、昭和63年度の調査予定地であるA区・B区に幅1mのトレントを、各5本ずつ入れて試掘調査を11月4日まで行った。この結果、A・B区ともに杉の根によって地山まで搅乱を受けている箇所が部分的に認められた。A区ではKT27～LA27グリッド付近の平坦地から、縄文土器片少量と石器4点が出土し、B区では縄文土器片若干と石器1点が出土した。

昭和63年度はD区の調査を行った後、A・B区の調査を同時に行なった。D区の調査は6月20日～8月10日まで、A・B区の調査は8月17日～9月5日まで実施した。これらの調査は、同年度の5月9日～9月30日まで実施した小出Ⅳ遺跡の調査と併行して行ったものである。

6月20日、伐採された立木の除去と下草刈りを行う。21日、粗掘りと抜根及び遺構確認精査を開始した。数ヶ所に落ち込みを確認したが、すべて風倒木痕であった。8月4日、粗掘りを終了した。10日、遺構確認精査を終了したが、遺構は検出されず遺物の出土量も少量であったため、同日、D区の調査を終了した。

8月17日よりA・B区の調査に入り、まず草木の刈り払いと昨年度の試掘トレントの耕土除去を行った。22日、試掘調査の結果を基に、両区ともグリッド杭に沿って基盤目状に幅1～2m

小出Ⅲ遺跡

のトレンチを4m間隔で設定して調査を開始した。31日、両区とも部分的に杉の根や人為的な攪乱を受けていることが判明した。特にB区の北東部と東側は攪乱が著しくビニール、葉たばこの茎などが混在していた。また、A区のLB26グリッドで黒色土の落ち込みを確認したが現代の攪乱であった。9月2日、A区の平坦地にかかるLA・LB27・28グリッドを全面調査したが、遺物は縄文土器片が6点と僅かであり、遺構も検出されたかった。9月5日、遺構は検出されなかったが、遺物が少量出土したA・B区の調査を完了し、2ヶ年にわたる小出Ⅲ遺跡の発掘調査を終了した。

第3節 遺跡の層序

調査区は杉林であったため、杉の根などによって攪乱を受けている箇所が多かったが、遺跡の層序は、A区のLBライン、C区のLRライン、D区のLTラインに沿って入れた南北トレソチの東壁土層とB区の37ラインに沿って入れた東西トレソチの北壁土層から、以下の通り観察できた。

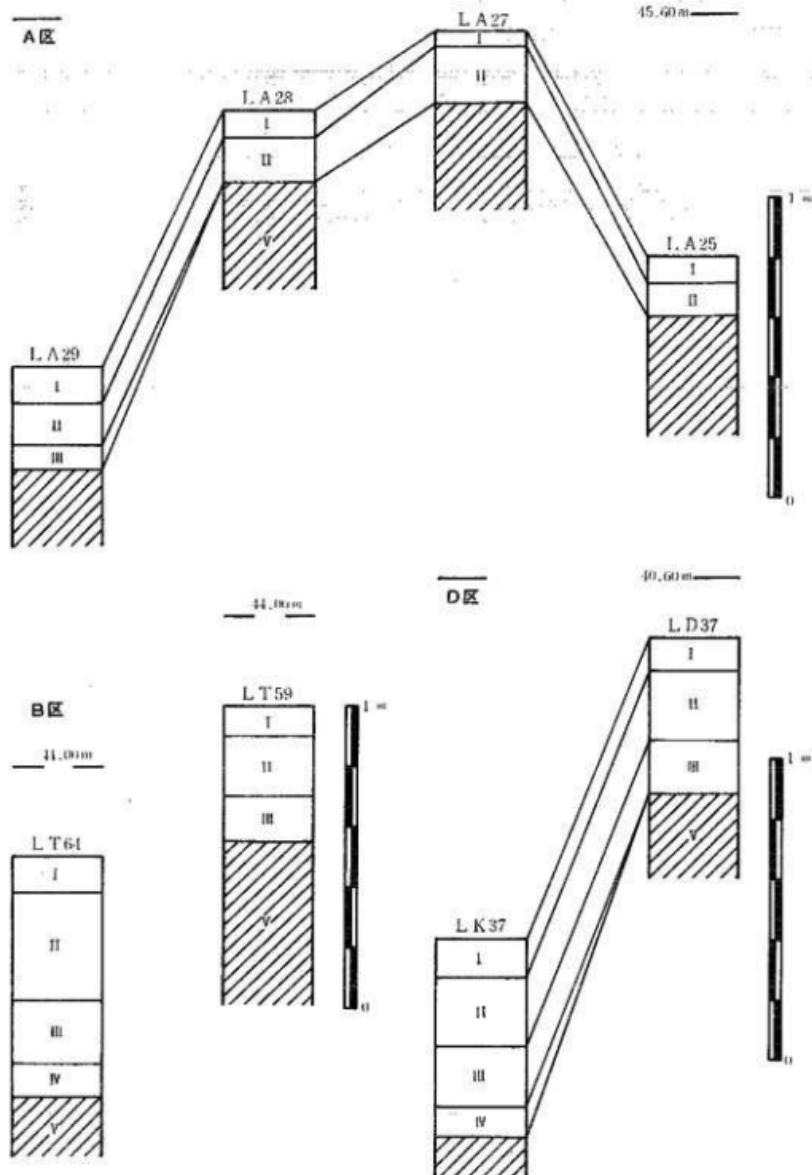
第I層 黒褐色土(10Y R2/3)：調査区全体を覆う表土層である。植物根や腐った葉っぱを多量に含んでいる。

第II層 黒褐色土(10Y R3/2)：縄文土器・石器などの遺物を含んでいる。杉の根に加え人為的にかなり攪乱されている層であり、部分的に盛土されている。

第III層 暗褐色土(10Y R3/3)：縄文土器・石器などの遺物を含んでいるが、部分的に杉の根や人為的な攪乱を受けている。また、大小の礫などが少量含まれている。

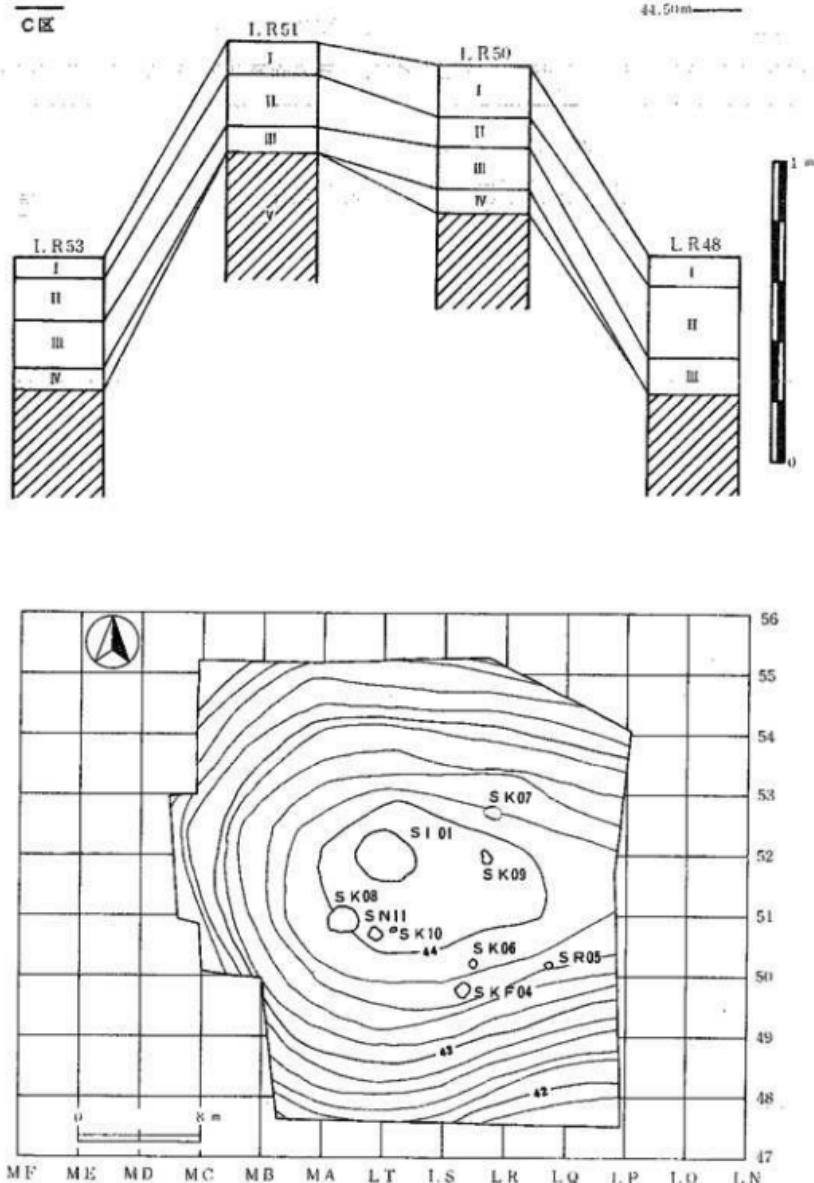
第IV層 褐色土 (10Y R4/4)：礫を少量含む第V層への漸移層であり、C区の平坦地と傾斜地およびB・D区の傾斜地で観察できたが、A区では認められなかった。

第V層：調査区南側のA区からC区にかけては褐色土(10Y R4/6)で、調査区北側のD区に漸移するにつれて黄褐色土(10Y R5/6)となる。前者は粘性の弱い砂質土で礫を含んでおり、C区の南側傾斜地下のB区付近からA区へ漸移するにつれて、混入割合が多くなっている。後者は粘質土でよく縮まっている。



第2図 A・B・D区の土層柱状図

小出田遺跡



第3図 C区の土層柱状図と造構配量図

第2章 繩文時代

第1節 遺構と出土遺物

今回の調査において、A・B・D区では遺構は検出されなかった。C区においては、最大幅20m前後の西向きの小さな舌状台地上の地山面で、繩文時代中期末～後期初頭のはば同一時期に属するとみられる堅穴住居跡1棟、土坑5基、フラスコ状土坑1基、土器埋設遺構1基、焼土遺構1基を検出した(第3図)。C区では遺構外からの出土遺物も大半は遺構と同一時期に属するとみられ、C区は短期間に営まれた小規模な集落跡と認めることができる。

1. 堅穴住居跡

S 101 (第3・4図、図版4)

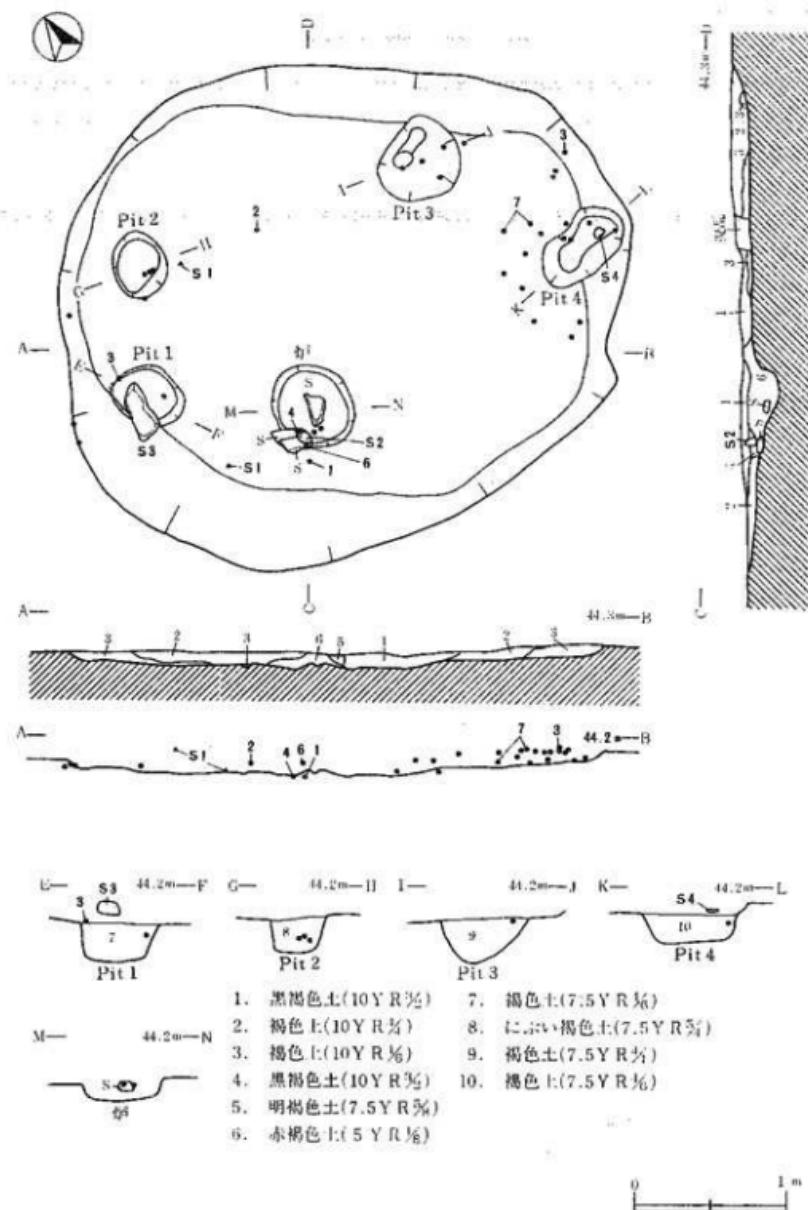
L S・L T51・52グリッドで検出した。平面形は長径(東西)390cm×短径(南北)330cmの椭円形を呈し、確認面から床面までの深さは10cm前後に過ぎない。床面はやや不整で、壁は緩やかに立ち上がっている。堅穴の覆土は1～3層に分かれる。1層は塊状の暗褐色土および炭化物を含み、2・3層には地山土が混在する。各層は均質ではなく、床面上と覆土上位から出土した遺物が接合することから本堅穴住居跡は、人為的に一気に埋め戻された可能性がある。

炉は、床面中央から西寄りに存在し、径60×50cmの椭円形平面で、深さ約15cmの掘り込みをもつ。掘り込みの上位の4層は焼土粒子を含み、掘り込み内の5・6層の焼土とともに炉に伴う堆積とみられる。この掘り込み周囲の一部と掘り込み内には被熱の痕跡がある大形の偏平礫が現状で3個存在することから、掘り込み周囲に明瞭な抜き取り痕は確認できなかったが、本来この炉は掘り込みの周囲に礫を配した石囲炉であったと推定される。

柱穴は、堅穴の長軸端近くに各2基づつ計4基検出した(Pit 1～4)。長径40～60cmの不整円形平面で、床面からの深さは20～30cm前後を測る。柱穴覆土中にはいずれも炭化物や土器破片を含み、さらにPit 1・2には焼土粒子を含んでいる。柱穴覆土はいずれも堅穴覆土2・3層と類似し、基本的に一連の堆積と考えられる。

遺物は覆土中および床面上、さらには炉掘り込みおよび柱穴内からも出土している。土器はいずれも小破片で復元し得るものはなく、出土量も多くはない(第5図)。

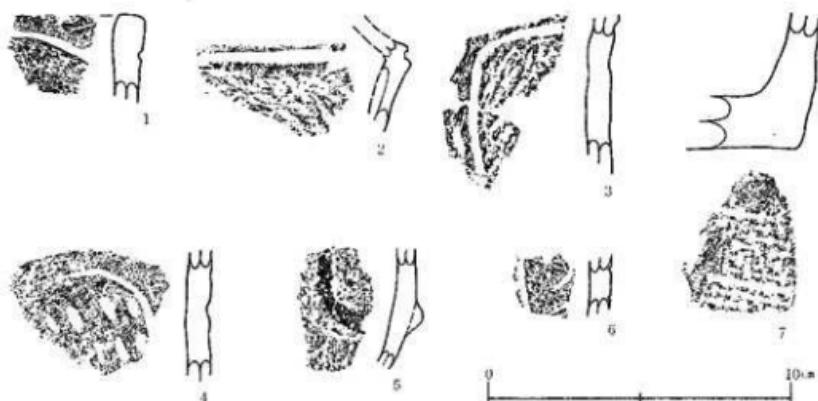
1は深鉢形土器の口縁部破片で、口唇部は平坦に面取りされている。口縁部外面には比較的細い沈線文が施されている。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。床面上からの出土である。2は頸部が「く」の字形に屈曲する深鉢形土器の体部から頸部にかけての破片とみられる。



第4図 積穴住居跡 S101

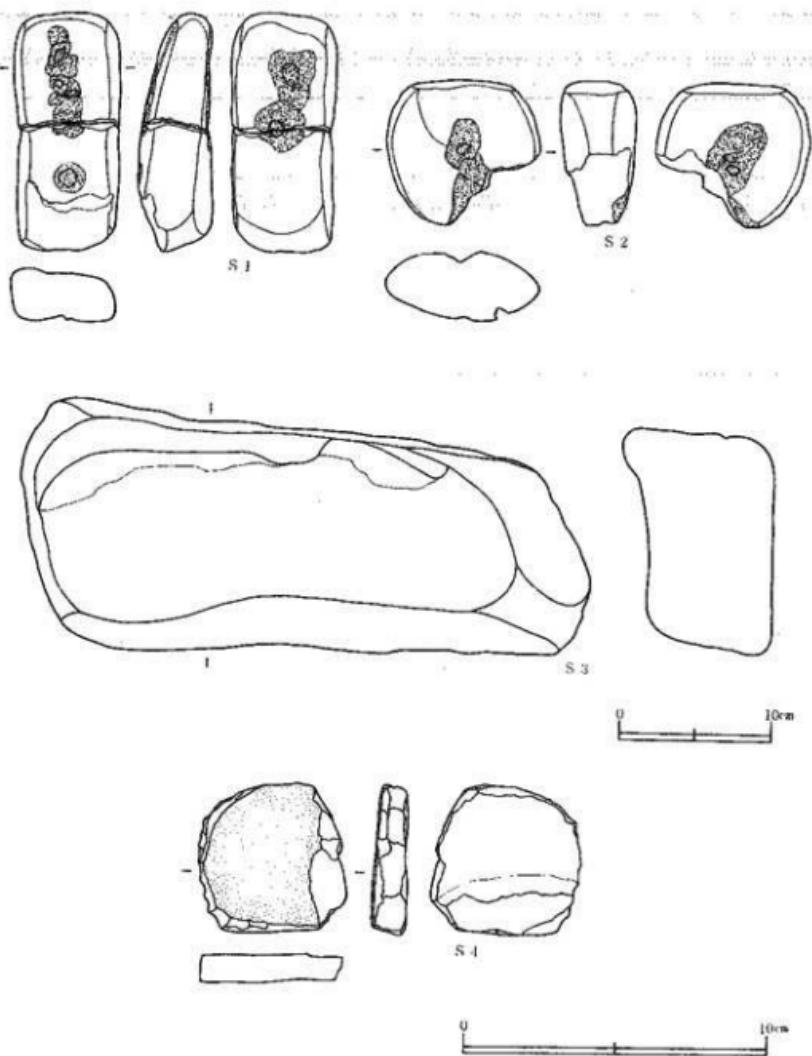
体部にはLR繩文原体が縦位回転施文され、体部と頸部の境の屈曲部には水平に1条の沈線が巡らされている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色である。2層からの出土である。3は深鉢形土器の体部破片である。RL繩文地に水平方向から緩く弧を描いて垂下する沈線が施され、それに平行してもう1条の沈線が垂下し、その間に縦位の刺突列が加えられている。焼成は良好で、色調は褐灰色である。3層下位および床面直上からの出土である。4も深鉢形土器の体部破片である。比較的細い沈線で円弧状の文様が描かれ、その文様中に縦位の刺突が充填されている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色である。6層からの出土である。5は隆帯が施された深鉢形土器の体部の小破片とみられる。隆帯は比較的細く、その横断面形はやや丸みをもつ。RL繩文を地文とすると思われるが、磨滅が著しく、不明瞭である。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。炉からの出土である。6は深鉢形土器の体部の小破片である。縦に垂下する細沈線とその横に斜めに4条の細沈線が施されている。焼成は比較的良好で、色調は内外面とも褐灰色を呈する。4層からの出土である。7は柄代の圧痕を底面に残す深鉢形土器の底部破片である。器厚は比較的厚く、焼成は良好である。色調は外面が浅黄橙色、内面が褐灰色を呈する。2層からの出土である。以上の土器片はいずれも胎土・焼成が類似し、繩文時代中期末～後期初頭に属するとみられる。

第6図 S 1は直方体状の亜角碟の両面に敲打による凹みをもつ凹石である。床面直上と2層上位から出土した破片が接合したものである。S 2は円碟の両面に凹みをもつ凹石である。一端を破損するが、被熱による可能性がある。炉の直上からの出土である。S 3は大形の亜角碟を素材とする石皿である。両面は比較的平坦で、磨面となっている。Pit 1上位の3層からの出土である。S 4は節理面で割れた板状の碟片の周縁を打ち欠いた円盤状石製品である。図の



第5図 S101出土土器

小出田遺跡



番号	出土地区	肩位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	圓 盤
S 1	S 101		凹石	159	70	48	774	安山岩	+
2	"		凹石	96	101	50	461	"	"
3	"		石器	377	166	102	9500	"	"
4	"		円盤状石製品	51	49	12	36	流紋岩	"

第6図 S101出土石器

右面には礫皮面を残している。3層から出土した。

本堅穴化居跡は出土土器から縄文時代中期末～後期初頭に属するとみられる。

2. 土坑

SK06 (第3・7図、図版5)

L R50グリッドで検出した。平面形は70cm×60cmの横円形をなす。底面は比較的平坦で、残存する壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは15cm前後である。覆土は炭化物・地山上を含む。本土坑からの出土遺物はないが、本区の他の遺構・遺物がほぼ縄文時代中期末～後期初頭に属することから、本土坑も同時期と推定される。

SK07 (第3・7図、図版5)

L R52グリッドに位置する。地山面から15cm前後上位で比較的まとまった土器破片を検出したことから、土器検出面で土坑の掘り込みの一端を確認した。土坑の東西両端は既に地山面まで掘り下げていたため、確認面でのその明確な平面形は不明であるが、長径120cm前後、短径90cm前後の横円形をなすものと想定される。底面は若干の凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは20cm前後である。覆土は2層に分かれ、ともに炭化物を含む。

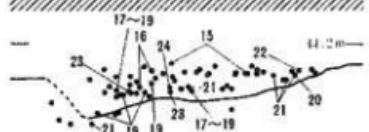
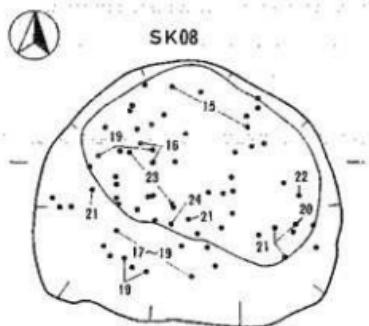
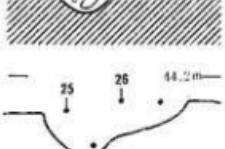
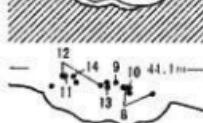
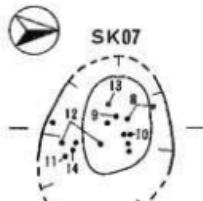
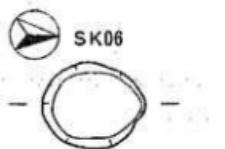
遺物は1層上位から出土した土器破片がある(第8図)。数個体あるが、いずれも小破片で、全形を窺えるものはない。8・9は条間隔のあいた縄文が施文されている。前段の縄の太さが異なるR L縄文が縦位回転施文されたと思われるが、確定ではない。焼成は比較的良好で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。10も8・9と類似した縄文が施文されている。焼成は比較的良好で、色調は外表面が浅黄橙色、内面が灰黄褐色を呈する。11-14はR L縄文が縦位回転施文された深鉢形土器である。底面にはヘラ状工具による沈線が存在する。焼成は比較的良好で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。これらの土器は胎土の特徴から縄文時代中期末～後期初頭に属すると想定される。本土坑の時期も同様に縄文時代中期末～後期初頭に属するとみられる。

SK08 (第3・7図、図版5)

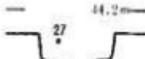
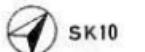
L T50・51グリッドに位置する。平面形は200×170cmの不規格円形を呈する。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは26cm前後である。覆土は2層に分かれ。いずれも炭化物の包含が顕著であり、さらに2層中には地山上も包含する。覆土からは比較的多くの土器破片が両層全体に混在していることから、本土坑は人為的に一気に埋め戻されたものと思われる。

出土土器破片は5個体に分かれるとみられるが、いずれも完形もしくはそれに近い状態まで復元し得る例はない(第9図)。15・16は波状口縁をもつ深鉢形土器である。口縁部には比較

小出田遺跡



1. 淡色土(10Y R 5/6)
2. 黄褐色土(10Y R 5/6)



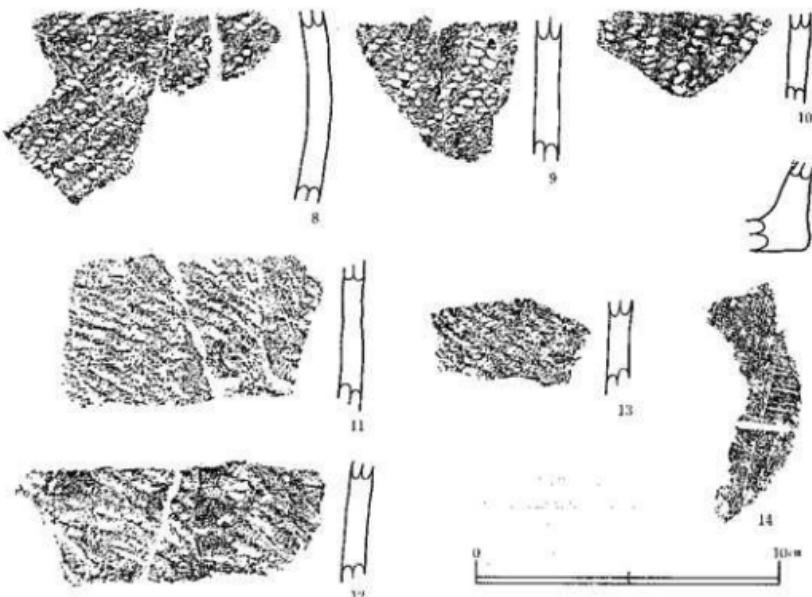
1. 淡色土(7.5Y R 5/6)
2. 黄褐色土(7.5Y R 5/6)



第7図 土坑SK06・SK07・SK08・SK09・SK10

的節の細いL R 繩文が縦位回転施文される。焼成は良好で、色調は内外面とも黒褐色を呈する。17~19は平縁の深鉢形土器である。口縁は微かに内湾し、口唇部は丸く調整されている。底部は平底である。口縁から体部にかけてはR L 繩文が縦位回転施文される。焼成は比較的良好で、色調は外面が浅黄褐色、内面が橙色を呈する。20・21は頸部が若干屈曲する深鉢形土器である。口唇部は丸く調整され、外面にはL 繩文が縦位回転施文されている。焼成は良好で、色調は外面が灰黄褐色から褐灰色、内面がにぶい橙色を呈する。22は深鉢形土器の体部破片とみられる。現状では1条の沈線が水平に巡り、その下位にはL 繩文原体が横位回転施文され、さらにその下では同一原体が縦位回転施文され、羽状繩文状を呈する。焼成は比較的良好で、色調は内外面とも明褐灰色を呈する。23・24は体部が微かに張る深鉢形土器である。縦位回転施文のR L 繩文を地文とし、現状で体部上半には口縁部から垂下するとみられる断面三角形の隆帯が巡り、その上位には隆帯と平行に細沈線が施されている。焼成は比較的良好で、色調は内外面とも浅黄褐色を呈する。以上の出土土器のうち23・24は縄文時代後期初頭に属し、他の土器も胎土・焼成が類似し、同一時期に属するとみられる。これらの出土土器から本土坑の時期も縄文時代後期初頭に属すると考えられる。

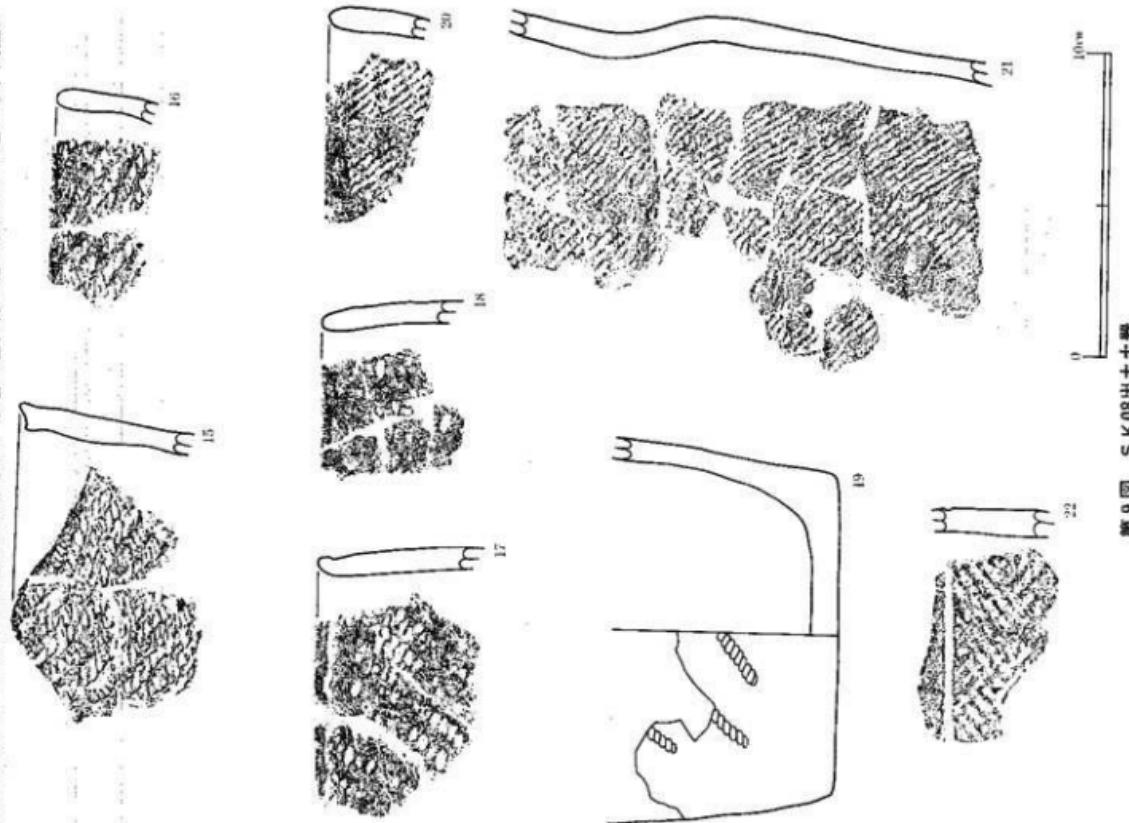
SK09 (第3・7図、図版6)



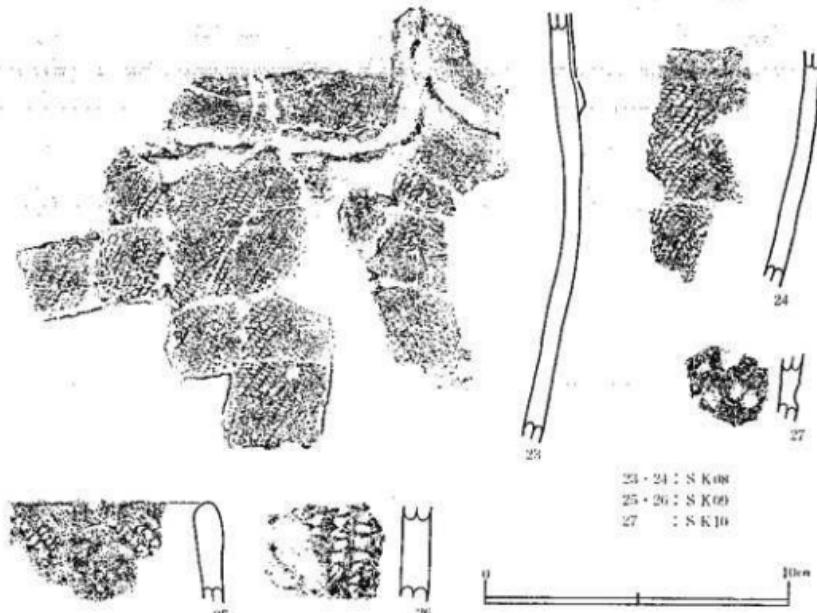
第8図 SK07出土土器

小出皿遺跡

L.R51・52グリッドで検出した。平面形は長径110cm、短径70cmの不整精円形をなす。底面には凹凸があり、確認面からの深さは約40cmである。覆土は2層に分かれる。覆土が認められないことから、周囲か物を少量含むが、両層は地山兼移層に類似し、顯著な包含物が認められないことから、周囲か



第9図 SK08出土土器



第10図 SK08・SK09・SK10出土土器

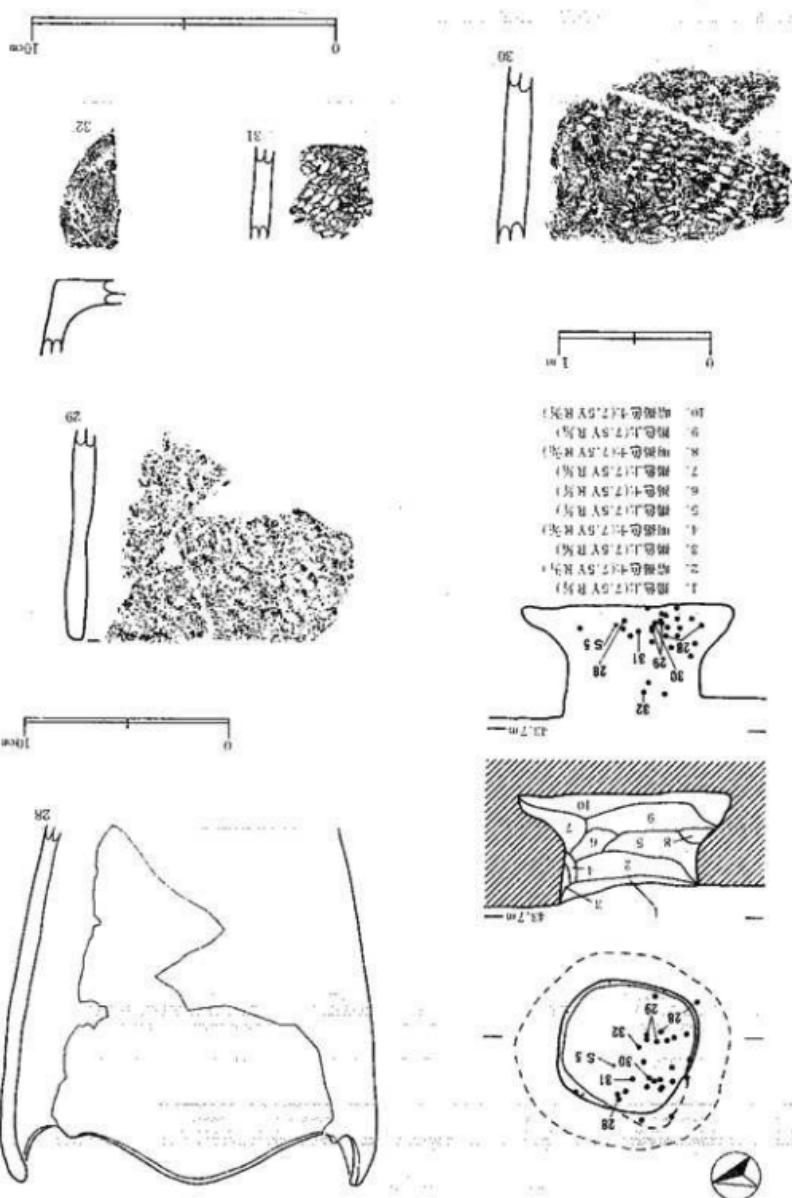
らの流入土と思われる。

本土坑の上位及び底面付近からは若干の土器破片が出土している（第10図）。25は口縁部が若干内湾する深鉢形土器の破片である。外面には単節斜綱文が施文されるが、摩滅が著しく、原体は特定し難い。焼成は比較的良好で、色調は浅黄橙色を呈する。26はL燃系文が継走する深鉢形土器の破片である。焼成は良好で、色調は外面が黒色、内面が褐灰色を呈する。これらの土器は胎土などから縄文時代中期末～後期初頭に属するとみられ、本土坑も同時期に属すると思われる。

SK10（第3・7図、図版6）

L S50グリッドで検出した。平面形は長軸50cm、短軸30cmの橢円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さはおよそ20cmである。底面は中央に小さな凹凸があるほかは、ほぼ平坦である。覆土上層には炭化物および明赤褐色土粒子が少量含まれる。1層からは土器の小破片が1点出土している。第10図27はヘラもしくは竹管状工具によって刺突が施されている。焼成は比較的良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面が褐灰色を呈する。出土遺物から本土坑の時期を特定することは困難であるが、周辺の遺構・遺物分布から本土坑も縄文時代中期末～後期初頭に属するとみられる。

圖11 圖書大刀與土鏡SKFO4出土工具



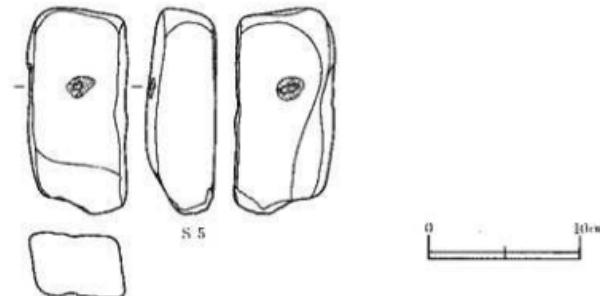
總覽圖用小

3. フラスコ状土坑

SKF04 (第3・11図、図版6・7)

L R 49グリッドで検出した。開口部平面形は径85~90cmの隅丸方形を呈する。壁は確認面から20cm前後まではほぼ垂直に掘り込まれ、それ以下は大きく末広がりになっている。底面径は130~140cm、確認面から底面までの深さはおよそ70cmを測る。覆土は10層に分かれる。4・7・8層は地山土を多量に含み、壁の崩壊土とみられる。他の層は炭化物を含む（1・3・5・6・9・10層）あるいはさらに焼土粒子を含む（1・2・5・9層）。また、9・10層を中心として、土器破片が含まれている。本遺構の覆土は焼土粒子や炭化物の混在が顯著で、基本的に人為堆積とみられる。遺物が下半に集中することとその上位に壁の崩壊土が堆積することからは、土坑の下半と上半の堆積には時間差が存在した可能性がある。

遺物は主に下層である9・10層から出土している（第11・12図）。28は波状口縁を有する深鉢形土器である。口縁部はそれぞれ4単位の大波頂部と小波頂部とで構成されると推定される。口縁部は若干内湾し、体部の張りは顯著でない。外面とも摩滅が著しく、施文等は不明である。29は深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁はほぼ直立し、口唇部は面取りされている。外面は摩滅が著しく、施文等の詳細は不明である。焼成は比較的の良好で、色調は内面が浅黄橙色を呈する。30は深鉢形土器の体部破片である。L R 繩文が継位回転施文される。焼成は比較的の良好で、色調は外面がにぶい黄橙色、内面が浅黄橙色を呈する。29と同一個体の可能性がある。31は小破片で、深鉢形土器と思われるが、器形の詳細は不明である。外面にL R 繩文が横位回転施文される。焼成は比較的の良好で、色調は内外面ともに明褐灰色を呈する。32は小形の深鉢形土器の底部破片である。底面および底部側面にはヘラ状工具による調整痕がある。焼成・



番号	出土地区	層位	器種・分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図版
S.5	SKF04	四石		137	67	46	641	安山岩	9

第12図 SKF04出土石器

小出山遺跡

色調は31と類似し、同一個体の可能性がある。S 5は亜角礫の両面に敲打による浅い凹みをもつ凹石である。國の側面を中心に一部に被熱痕が認められる。

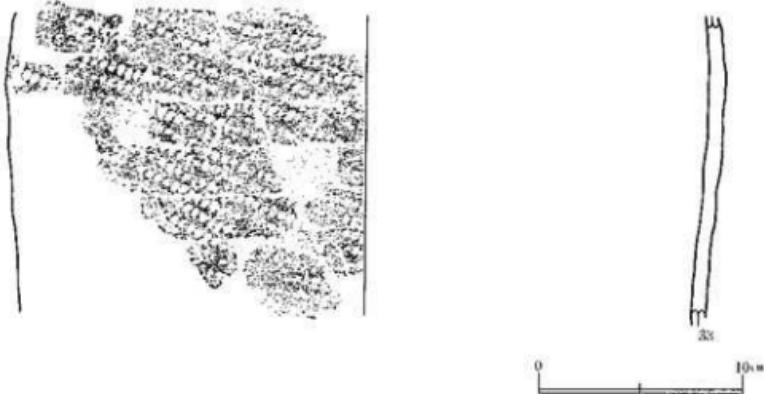
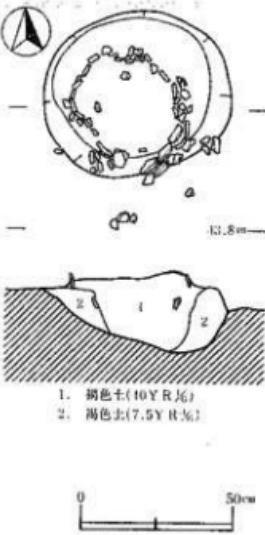
本遺構は、28が縄文時代後期初頭に属することから、おおむね同時期のものとみられる。

4. 土器埋設遺構

S R 05 (第3・13図、図版7)

LQ50グリッドに位置する。地山面直上で深鉢形土器が埋設されていることを確認した。土器は細かく破損しており、遺構全体の残存状況も良好ではない。埋設のための掘り込みは平面形が径60×55cmのはば円形で、確認面からの深さは25cm前後である。覆土の1層が埋設土器内の堆積土、2層が土器埋設時の裏込め土である。ともに炭化物を少量含むが、他に顯著な包含物は認められない。埋設土器第13図33は口縁部から体部上半と底部とを欠く深鉢形土器で、正位に埋設されていた。器表面にはLR縄文が縱位回転施文されている。焼成は比較的良好で、色調は外面が褐灰色、内面が浅黄橙色を呈する。

本遺構は埋設土器の胎土の特徴から縄文時代中期末～後期初頭に属すると推定される。



第13図 土器埋設遺構 S R 05と出土土器

5. 焼土遺構

S N 11 (第3図)

L T 50グリッドに位置する。地山上面が径90cm前後の不整形に焼土化している。本遺構に確実に伴うとみられる遺物はないが、周囲に隣接する繩文時代中期末～後期初頭の遺構群と確認面はほぼ同一であり、本遺構も同時期のものと推定される。

第2節 遺構外出土遺物

1. 土器

出土した土器は、繩文時代前期・中期・後期・晩期のもので、このうち前期と晩期の土器は数点と僅少であった。また、出土した土器の量は、コソテナ(規格54cm×34cm×9.5cm)でA区・B区・D区がその3分の1箱、C区が3箱ほどの計4箱弱であった。

なお、A区～D区から出土した土器を一括し、これらを時期別に第I群～第VI群に分けて記載した。第14図34～40・46～50、第15図51～53・59・65、第16図76、第17図105はA区から、第16図88・90・93、第17図107はB区から、第14図41～44、第15図54～58・60～64・66～75、第16図77～79・81～87・89・91・92、第17図96～104・106はC区から、第16図80・94、第17図95はD区からの出土である。

第I群土器(第14図34・35、図版10)：繩文時代前期に位置付けられると思われる土器である。

34・35は深鉢形土器の体部の破片で、同一個体である。L撚糸文が縦位回転施文されており、内面には径1.5cmほどの木の実痕が認められる。なお、前期の土器はこの2点だけである。

第II群土器(第14図36～50・第15図51～53、図版10・11)：繩文時代中期中葉に位置付けられると思われる粗製土器である。

36と37は深鉢形土器の口縁部の破片である。36は結節のあるL R繩文を横位回転施文している。37も36と同様な結節をもつ繩文が横位回転施文されているが、器面が磨滅しており原体は判然としない。38～40は深鉢形土器の体部の破片で、同一個体である。結節のあるL R繩文が縦位回転施文されている。41～43は深鉢形土器の口縁部と体部の破片で、同一個体である。結節のあるR L繩文が縦位回転施文されている。結節は撚りの細いL原体で縛って作られている。44は深鉢形土器の体部の破片である。結節のあるL R繩文が縦位回転施文されている。45は深鉢形土器の口縁部の破片である。口唇にはL R繩文が回転施文され、口縁部にはL R繩文が縦位回転施文されている。46～50は深鉢形土器の口縁部と体部の破片で、同一個体である。0段多条のL R繩文が縦位回転施文されている。51～53は深鉢形土器の口縁部及び体部の破片で、同一個体である。平縁でわずかに外反する口縁から体部下端付近まで、R L R繩文が縦位回転

施文されている。

第III群土器(第15図54~75、図版11)：縄文時代中期末葉～後期初頭に位置付けられると思われる土器である。

54は深鉢形土器の頸部の破片である。無文地に断面三角形の隆帯を貼付し、その一方の側面に沿って刺突文が施されている。55と56は深鉢形土器の体部の破片である。いずれもR L縄文を縦位回転施文した上に、沈線によって区画された磨消帯が施されている。57は深鉢形土器の体部の破片である。曲線状に隆帯を貼付して、無文地面上に刺突文を施している。58~61は深鉢形土器の破片で、58が口縁部、59~61が体部である。4点とも沈線による葉脈状文が施されている。62・63は深鉢形土器の口縁部～体部の破片で、同一個体である。頸部で内屈する口縁部は無文で、頸部上端には刺突列が施され、体部にはR L縄文が縦位回転施文されている。64は波状口縁を成すと思われる深鉢形土器の口縁部の破片である。肥厚する口縁部には鈎の手状の沈線が施され、その直下からは刺突が加えられた隆帯が垂下している。L R縄文を縦位回転施文して地文としている。65・66は深鉢形土器の体部の破片で、いずれも曲隆帯が施されている。66はR L縄文を地文としている。67・68は深鉢形土器の体部の破片で、同一個体である。R L縄文を縦位回転施文した上には縦方向に連鎖状貼付文が施されている。69は深鉢形土器の体部の破片である。地文は器面磨滅のため不明であるが、縦方向に施された隆帯上には刺突が加えられている。70は深鉢形土器の体部の破片である。縄文を縦位回転施文した上に隆帯を平行に施し、その内側に磨消を施している。71・72は深鉢形土器の口縁部の破片である。71は口縁に平行に沈線が施され、これに連繋して「U」字状の沈線が施されている。72は連鎖状貼付文が施されている。73は深鉢形土器の体部の破片である。R L縄文を縦位回転施文した上に平行沈線を施し、その沈線間に刺突文を施している。74は深鉢形土器の体部の破片である。R L縄文を横位回転施文した上に曲沈線を施し、その沈線の一方に磨消を施している。75は深鉢形土器の口縁部の破片である。R L縄文が横位回転施文され、その下には口縁と平行に沈線が1条施されている。口縁部は幾分内湾するものと思われる。

第IV群土器(第16図76~80、図版12)：縄文時代後期中葉に位置付けられると思われる土器である。

76は深鉢形土器の体部の破片である。R L縄文を縦位回転施文した上に細い沈線を入れて、その一方に磨消を施している。77は深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁と口縁に平行する沈線間は無文で、沈線下部にはL R縄文が横位回転施文されている。78・79は深鉢形土器の体部の破片で、同一個体である。横方向に施された沈線上部は無文で、その下部にはL原体とR原体によって羽状縄文が施されている。80は注口土器の注口部の破片である。

第V群土器(第16図81~87、図版12)：縄文時代中期末葉～後期に位置付けられると思われる

圖14-1 路面鋪設工具

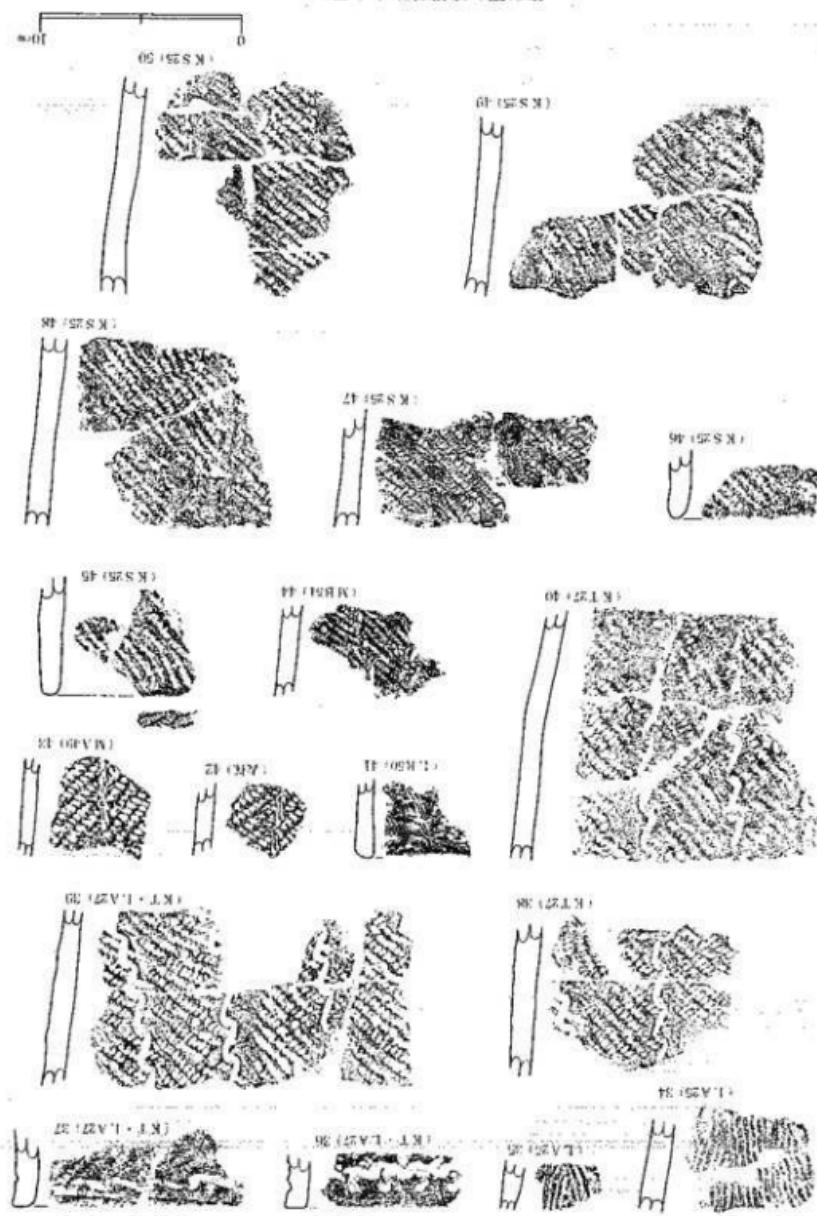
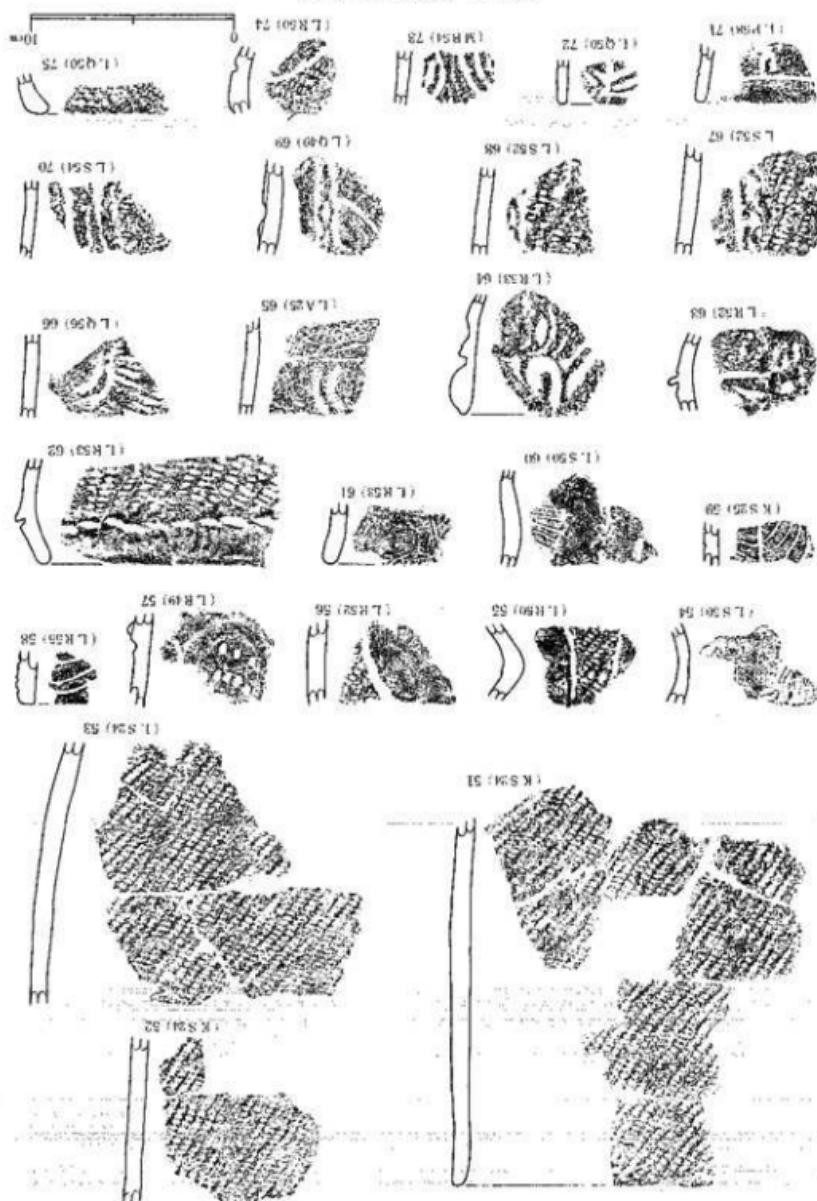
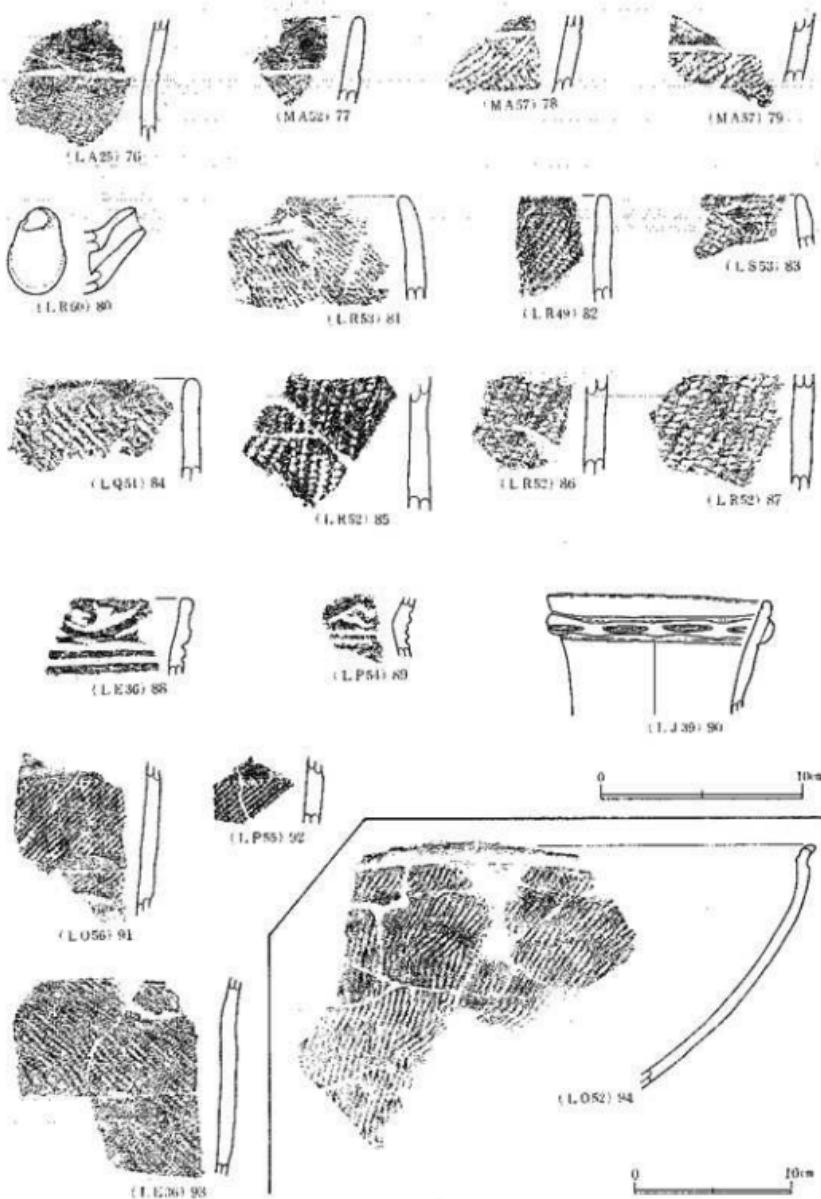


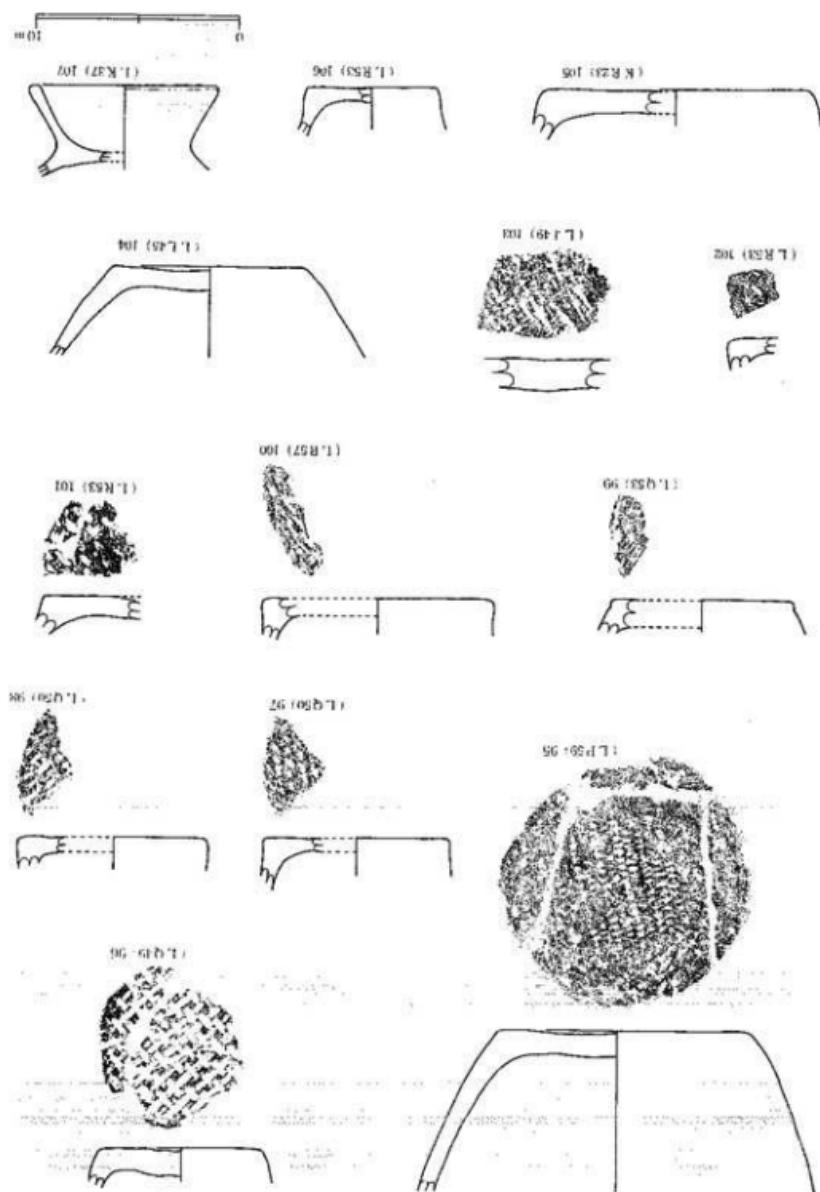
圖154 遷鄧外出土玉器(2)





第16図 造構出土土器(3)

第17圖 遺物外出土土器(1)



粗製土器である。

81・82は深鉢形土器の口縁部～体部の破片である。81は内湾する口縁部から体部にはし歛糸文が縦位回転施文されている。82は口縁から幅1cmほどの無文帯をもち、その下部からRL繩文が縦位回転施文されている。83は深鉢形土器の口縁部の破片である。LR繩文が縦位と斜位に回転施文されている。84は深鉢形土器の口縁部の破片である。0段多条のLR繩文が縦位回転施文されている。85～87は深鉢形土器の体部の破片である。85・86は同一個体で、RL繩文が縦位と斜位に回転施文されている。87はRL繩文が縦位回転施文されている。

第VI群土器(第16図88～94、図版12)：繩文時代晩期に位置付けられると思われる土器である。

88・89は鉢形土器の口頸部の破片である。いずれも口縁部には三叉状文が施され、頸部には口縁に平行に沈線が数条施されている。90は壺形土器の口頸部の破片である。口縁部には、口縁と平行に太い隆帯が貼付され、その上には横方向に断続的に沈線が施されている。また、隆帯に沿って上下に沈線が施され、口縁部の内面には口縁に沿って1条の沈線が施されている。91～93は深鉢形土器の体部の破片である。91・92は同一個体で、無文帯に挟まれた中にLR繩文が横位回転施文されている。93はRL繩文が横位回転施文されている。94は鉢形土器の口縁部～体部の破片である。口縁には小突起をもち、口縁部は幅1cmほどの無文帯で、その内面には口縁に沿って沈線が1条施されている。体部にはLR繩文が横位回転施文されている。

底部資料(第17図95～107)

95～106は深鉢形土器の底部の破片である。95～103は底面に網代痕が認められたものである。107は台付土器の底部～台部の破片である。

2. 石 器

出土した石器は、石錐、石匙、石箇、スクレイバー、磨製石斧、石剣、扁平打製石器、凹石、磨石などである。その出土点数は完形のものと欠損したものを合わせて20点ほどである。

なお、土器と同様にA区～D区から出土した石器を一括して記載した。第18図S11、第19図S16、第20図S22・24はA区から、第20図S20はB区から、第18図S6・7・10・12、第19図S15・18・19、第20図S21・23はC区から、第18図S8・9・13、第19図S14・17はD区からの出土である。

石錐(第18図S6・7、図版13)：S6は、剥片の末端側のみの両側縁に二次加工を施して錐部を作り出し、打面側をつまみ部としている。錐部の先端を欠損している。S7は、貝殻状の剥片の一端に二次加工を施して錐部を作り出している。

石匙(第18図S8～11、図版13)：S8は、縦型の石匙である。背面の一方の側縁と末端に二次加工を施して刃部を作り出している。背面と主要剥離面には素材の剥離面を大きく残している。

小出Ⅲ遺跡

S 9～11は横型の石匙である。S 9・10は、つまみ部に相対する背面の縁辺に二次加工を施して刃部を作り出し、S 11はつまみ部に相対する縁辺の両面に二次加工を施して刃部を作り出している。また、S 10のつまみ部には、アスファルトが付着している。

石鎧(第18図 S 13、図版13)：S 13は、背面のほぼ全面と主要剝離面の両側縁に二次加工を施した石鎧である。

スクレイバー(第18図 S 12、第19図 S 14～17、図版13)：S 12は半円状を呈する側縁に刃部が作出されている。S 14は横長の剥片の側縁にていねいな二次加工を施して、尖頭器状に作り上げている。図右の上辺中央部にはアスファルトが付着しており、ソケット状の柄が付くものと思われる。刃部は、本来弧状を呈していたと考えられるが、中央部が新しく欠損している。S 15はほぼ直線的な片側縁に二次加工が施されて刃部が作出されている。S 16は背面の片側縁と主要剝離面の片側縁上端に二次加工が施され刃部が作出されている。上半が欠損している。S 17は、背面の両側縁に二次加工が施され刃部が作出されており、上下が欠損している。

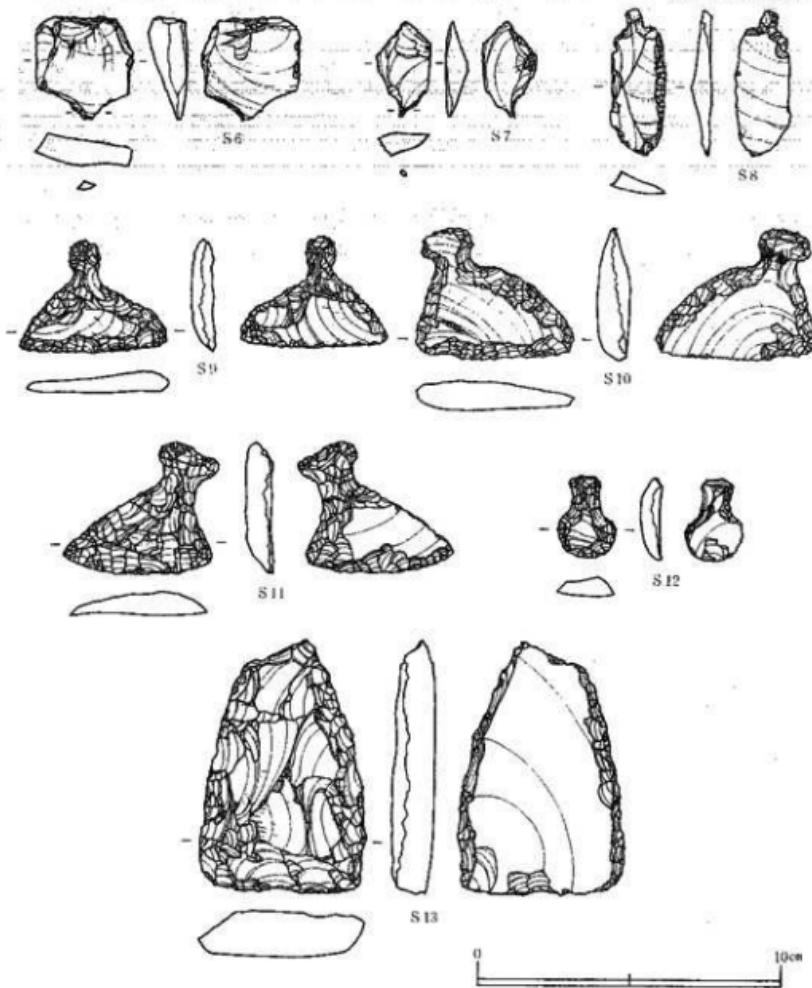
磨製石斧(第18図 S 18、図版13)：S 18は刃部側を欠損している。遺存部の全面は研磨されており、断面形がほぼ隅丸長方形を呈している。定角式磨製石斧に属するものである。

石劍(第19図 S 19、図版13)：S 19は石劍の先端部の破片である。残存部の全面は研磨されて薄身に仕上げられている。

扁平打製石器(第20図 S 20、図版13)：頁岩の扁平な転疊を素材として、長側縁の一方を両面から打ち欠いて刃部を作り出している。また、短側縁の一方を打ち欠いて直線的に仕上げている。全体に風化が著しい。

凹石(第20図 S 21・22、図版13)：円疊と亜角疊を素材として、同一面の1～2箇所に凹みが作られているものである。S 21は三面に凹みが作られ、S 22は両面に凹みが作られている。また、S 21は一面に数条の刻線がある。

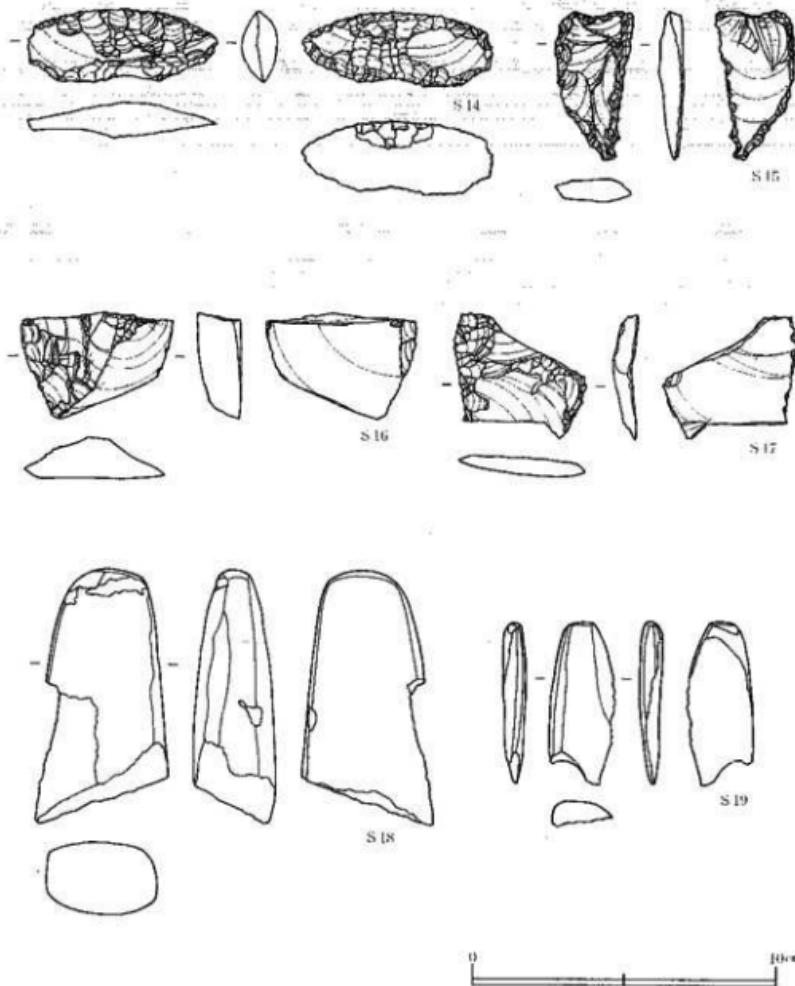
磨石(第20図 S 23・24、図版13)：円形や橢円形の疊を素材として、その平面を磨面としたものである。S 23は両面を磨面とし、S 24は片面を磨面としている。また、S 24の磨面は磨り減って幾分凹んでおり、磨られた時に生じたと思われる刻線が数条認められる。



番号	出土地点	層位	器種 - 分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石 材	試版
S 6	L R53	III	石鎌	34	22	13	13	頁岩	13
7	L R49	III	*	32	18	8	3	*	*
8	LQ57	I	石鎌	48	19	7	4	*	*
9	ME59	I	*	28	50	8	9	*	*
10	LQ53	III	*	44	53	11	23	*	*
11	KSS2	III	*	44	52	9	14	*	*
12	LTS2	表掲	スクレイパー	28	19	7	3	*	*
13	ME61	I	石鎌	84	56	14	75	*	*

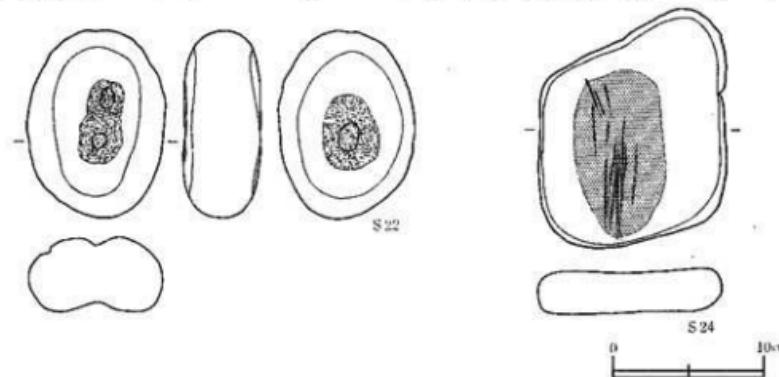
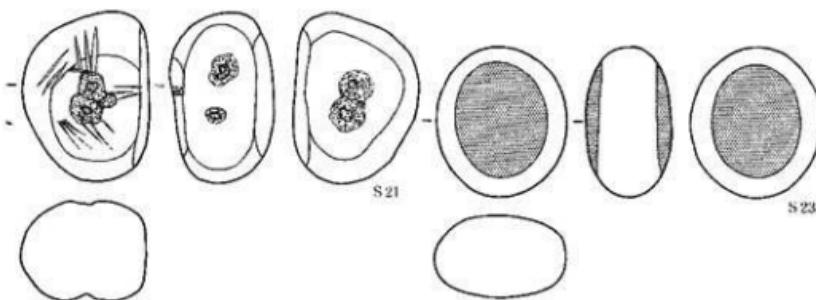
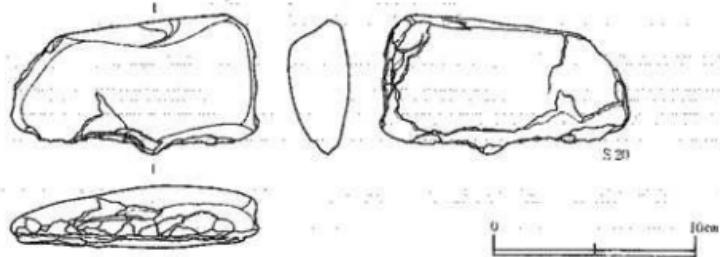
第18図 造構外出土石器(1)

小出田遺跡



番号	出土地区	層位	器種-分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	調査
S14	MA64	I	スクレイパー	25	72	12	16	頁岩	13
15	LR49	IV	々	49	37	8	10	々	々
16	KT27	II	々	36	50	15	23	々	々
17	MB64	I	々	41	45	9	11	々	々
18	LQ54	表浜	磨製石斧	85	45	28	134	安山岩	々
19	LP51	II	石剣	54	23	8	10	粘板岩	々

第19図 造構外出土石器(2)



番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	国版
S20	L I 34	I	扁平打製石器	69	126	30	313	真 磨	9
21	L D54	I	凹石	113	84	69	737	安 山 岩	タ
22	L B27	N	"	124	92	50	600	森 田 砂	タ
23	L S51	II	磨石	91	87	57	707	安 山 岩	タ
24	L B27	N	磨石(縫剥)	159	125	28	822	タ	タ

第20図 遺構出土石器(3)

第3章 中世・近世

第1節 遺構外出土遺物

1. 中世の遺物（第21図108～111、図版14）

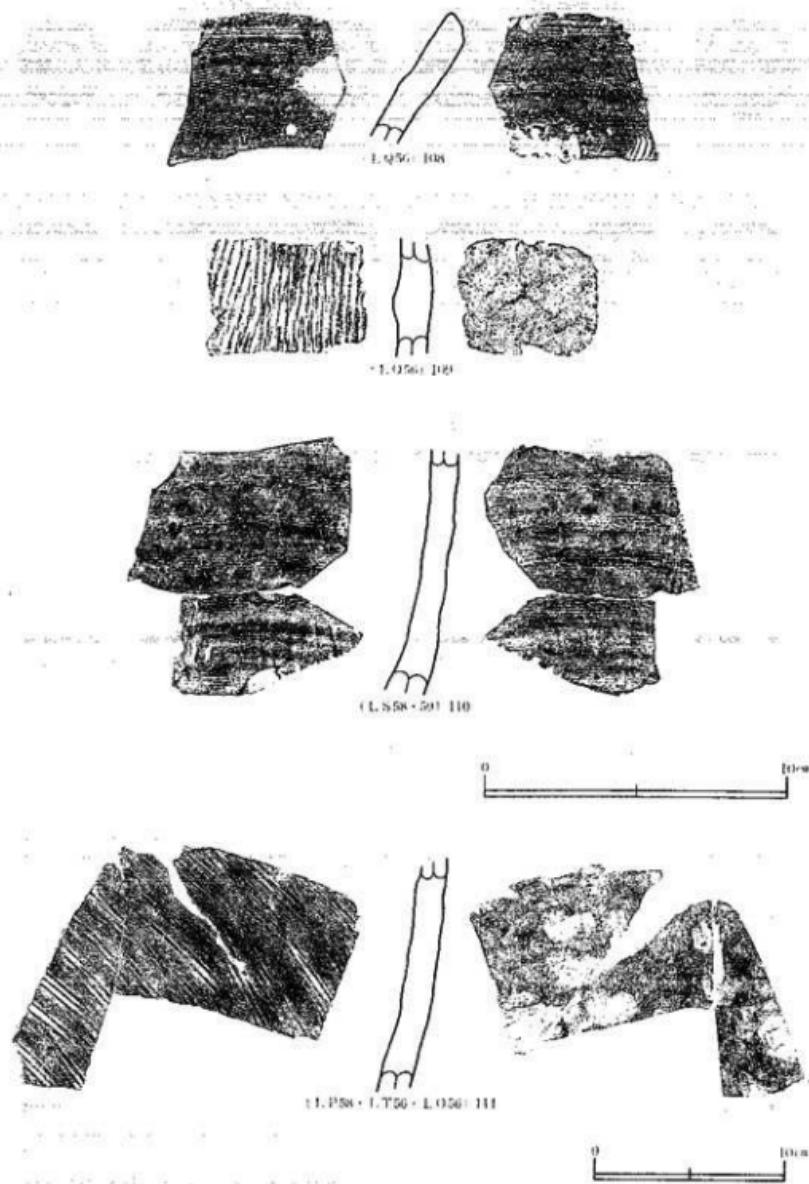
遺構は検出されなかったが、中世陶器の擂鉢・壺・壺などの破片が若干出土した。これらの中世陶器はMAライン～LPラインと56ライン～60ラインの範囲内のC区北側からD区南側にかけての傾斜地から出土した。しかし、7点と少なく全体の形状を把握できるものはなかった。なお、109は蛍光X線分析試料とした。

108は擂鉢の口縁～体部の破片である。成形はロクロで行われ、成形後の調整は外面には認められないが、内面には底面から口縁部に向かけて施されたと思われる節目が認められる。胎土は砂粒を多く含み緻密で、焼成は良好である。色調は外面が青灰色で、内面が暗青灰色である。109は壺の体部の破片である。成形はロクロで行われ、成形後の調整は外面が平行叩きされており、内面には2～2.5cmほどの橢円形の当て具痕が認められ、外面には自然釉がかかっている。胎土は砂粒を多く含み緻密で、焼成は良好である。色調は外面が褐灰色で、内面が灰褐色である。110は壺の底部付近の破片と思われる。成形はロクロで行われ、成形後の調整は内外面とも認められない。胎土は砂粒を多く含み緻密で、焼成は良好である。色調は外面が褐灰色で、内面が灰褐色である。111は大壺の体部の破片と思われる。成形はロクロで行われ、成形後の調整は外面が平行叩きされており、内面には2～3cmの橢円形の当て具痕が認められる。胎土は砂粒を多く含み緻密で、焼成は良好である。色調は外面が暗赤色で、内面が暗赤褐色である。

2. 近世の遺物（第22図1～12、図版14）

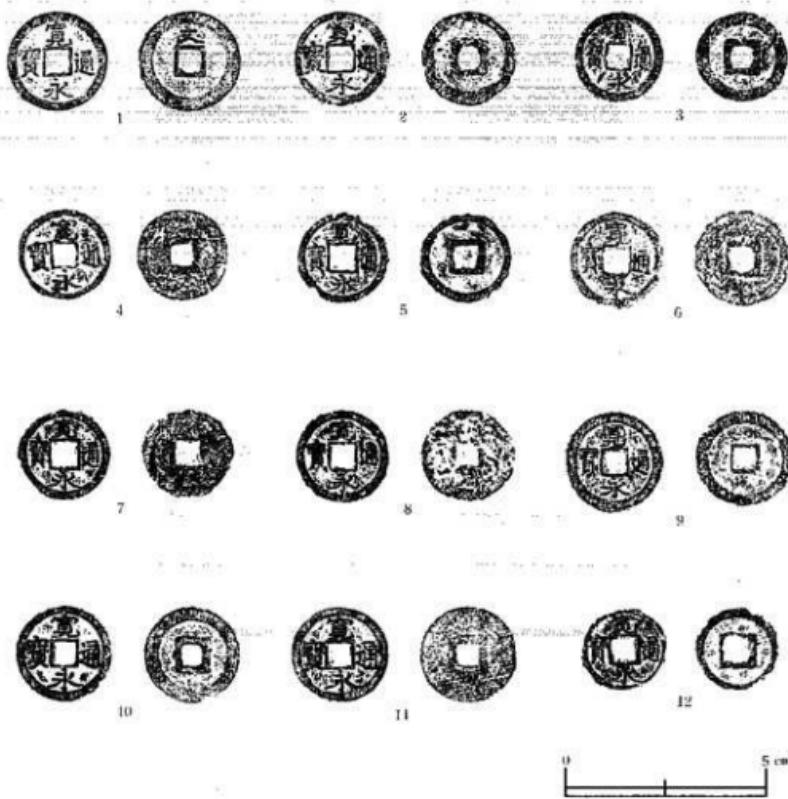
遺構は検出されなかったが、江戸時代に流通した貨幣である銭貨が12枚出土した。出土銭貨のうち12枚はB区西側の傾斜地から出土したが、これ以外の銭貨はLTライン～MBラインと51ライン～54ラインの範囲内のC区の台地先端部付近から出土した。

1～12はすべて表面に寛永通寶の四文字が刻まれているが、裏面には1のみが「文」の1字が刻まれているだけで、他の銭貨には文字が刻まれていない。なお、これらの出土地区と法量は第22図の通りである。



第21図 遺構外出土中世陶器

小出遺跡



番号	出土地区	量 目	直 径	番号	出土地区	量 目	直 径
1	L T53	0.84 (3.15)	2.5	7	L T51	0.45 (1.69)	2.3
2	L T53	0.70 (2.61)	2.4	8	L T51	0.50 (1.88)	2.3
3	L T53	0.70 (2.61)	2.3	9	L T51	0.76 (2.86)	2.5
4	L T53	0.63 (2.36)	2.3	10	MA52	0.69 (2.59)	2.4
5	L T53	0.63 (2.38)	2.3	11	MA51	0.91 (3.40)	2.4
6	L T52	0.61 (2.27)	2.4	12	L J 36	0.35 (1.32)	测定不能

量目単位：匁()内 g 直径単位：cm

第22図 遺構外出土古錢

第4章まとめ

小出Ⅲ遺跡の発掘調査は、昭和62・63年度の2ヶ年にわたって11,200m²を調査した。その結果、A・B・D区から遺構は検出されず、C区から9基の遺構が検出されたにとどまった。また、検出された遺構は、植林や畑地などの土地造成の際の擾乱を受けており、遺存状態の良好なものはなかった。遺物もまた擾乱層からの出土であり、ほとんどが破片の上に磨滅しており遺存状態の良好なものは少なかった。以下、遺構と遺物について若干ふれてまとめとする。

1. 遺構について

遺構は上述のように、C区とした小規模の台地上において、その中央に位置する竪穴住居跡S I 01と、これを取り囲む様に位置する土坑SK 06~10、フラスコ状土坑SK F 04、土器埋設遺構SR 05、焼土遺構SN 11を検出した。これらの遺構群は、遺構内およびC区全体の出土土器がほぼ縄文時代中期末から後期初頭の時期に限定されることから、大勢としていずれも当該時期に属するものとみられる。遺構群間により細かな時期差があるかは、当該時期の土器編年が未確定の上に出土土器の大半が小破片であること、遺構間に切り合いがないことから不明である。しかし逆に、後者からこれら遺構群は同時期に併存していたものと想定しておきたい。この想定からC区は小形の竪穴住居跡1軒と僅かの土坑等から構成される小規模で短期の集落と評価される。少なくとも本区は、秋田県南部において、縄文時代中期後半に認められる多数の竪穴住居跡からなる大規模な集落が衰退した後に、新たに出現する集落であり、当該期の社会を考える上で注意すべき資料と言えよう。

2. 遺物について

遺物は、縄文時代の土器・石器と中世陶器や寛永通寶などが出土したが、その出土量は調査面積に比して少なかった。また、遺物の出土箇所は遺構が検出されたC区に集中し、A・B・D区では散発的に出土しただけであった。

縄文土器は前期～晚期の土器が出土したが、その主な土器はC区の台地平坦部とその周辺から出土した、中期末～後期初頭に位置付けられると思われる土器群であった。

石器はその時期を特定しがたいが、第19図S 14は縄文時代晚期の遺跡からの出土例が多くなってきた石器で、第20図S 20は縄文時代前期の遺跡から出土する例が多い石器であり、調査区からは時期を同じくする土器の出土もあることから、両者はそれぞれの時期に位置付けられるものと考えられる。また、S 14はスクレイパーとして取り扱ったが、弧状を呈する長辺の片側面

小出田遺跡

に着柄のためと思われるアスファルトが付着しているもので、この石器の機能・用途については検討が必要であると思われる。なお、この石器と同種のものが平鹿遺跡・石名館遺跡・手取清水遺跡などの遺跡でも单一か数点まとめて出土している。
(註1) (註2)
(註3)

中世陶器は、7点出土したが破片資料でその全容を知り得ることができなかった。しかし、これらの陶片が、珠洲系陶器の生産窯跡である大烟窯跡出土の陶器と酷似することから、珠洲系陶器である可能性をもつものと考えられる。さらに出土した陶片のうち1点(第21図109)の陶片について、奈良大学の三辻利一教授の御厚意により行った横光X線分析法による产地推定では、小出田遺跡から南西方向へ直線距離で約1kmに位置する桧山腰窯跡で生産されたものという結果が得られた。

近世の遺物は、江戸時代の寛永通寶が12枚出土した。寛永通寶の素材には青銅・真鍮・鉄の三種類があるが、当遺跡で出土した錢の素材は青銅と思われる。

以上、遺跡の一部であるC区は、狹少な台地平坦部を占地する集落跡と判断されたが、他の地区については少量の遺物が出土したにとどまり、全体として小出田遺跡がどのような性格をもつ遺跡かを充分に把握することができなかった。しかしながら、検出された遺構と出土遺物から、本遺跡は縄文時代前期～晩期、中世、近世と多岐にわたる複合遺跡であることが判明した。

註1 秋田県教育委員会『平鹿遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第101集 1983
(昭和58年)

註2 秋田県教育委員会『石名館遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第112集 1984
(昭和59年)

秋田県教育委員会『石名館遺跡第2次発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第138集
1986(昭和61年)

註3 秋田県教育委員会「手取清水遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書V』秋田県
文化財調査報告書第190集 1990(平成2年)

註4 南外村教育委員会『大烟窯跡発掘調査報告書』1980(昭和55年)

秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』1987(昭和62年)

註5 註4と同じ



1 遺跡遠景（北西▷南東）



2 遺跡遠景（南▷北）



1 C区全景（東▷西）



2 D区全景（南▷北）



1 B区全景（南▷北）



2 A区調査風景（南西▷北東）

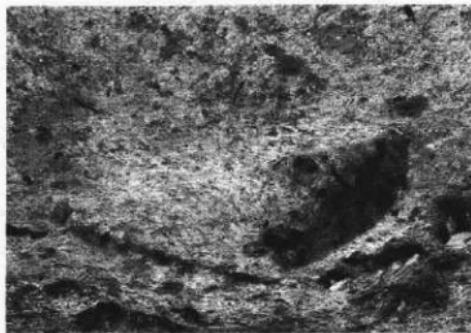


1 穴住居跡S101 (北>南)

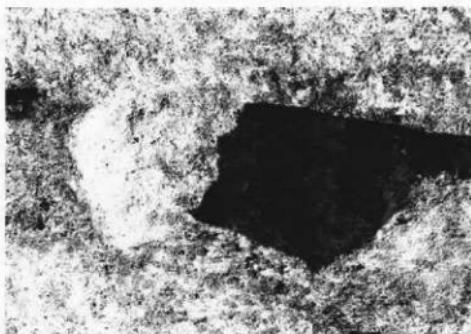


2 S101# (西>東)

3 土坑S K08 (南 \rightarrow 北)



2 土坑S K07 (東 \rightarrow 西)

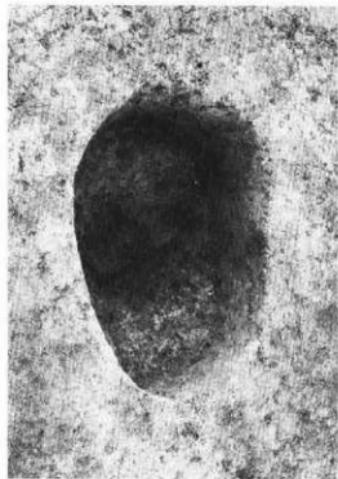


1 土坑S K06 (東 \rightarrow 西)





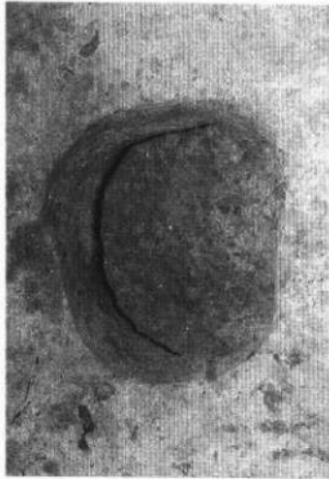
1 土坑SK09（南西▷北東）



2 土坑SK10（東▷西）



3 フラスコ状土坑SKF04土層断面（東▷西）



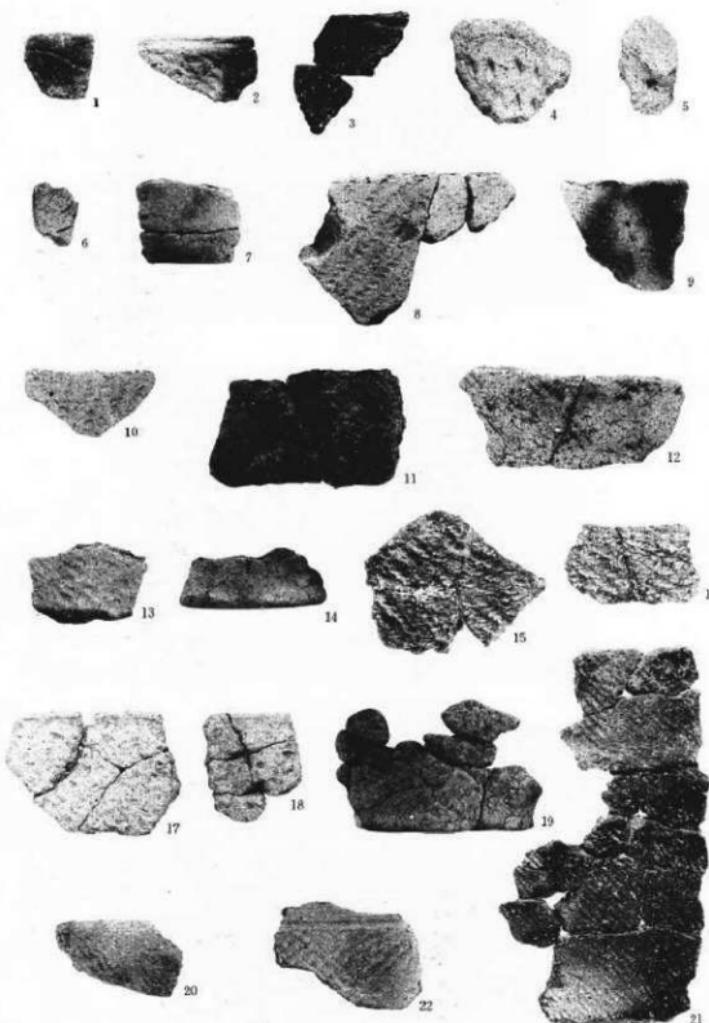
1 SKF 04 (東△西)



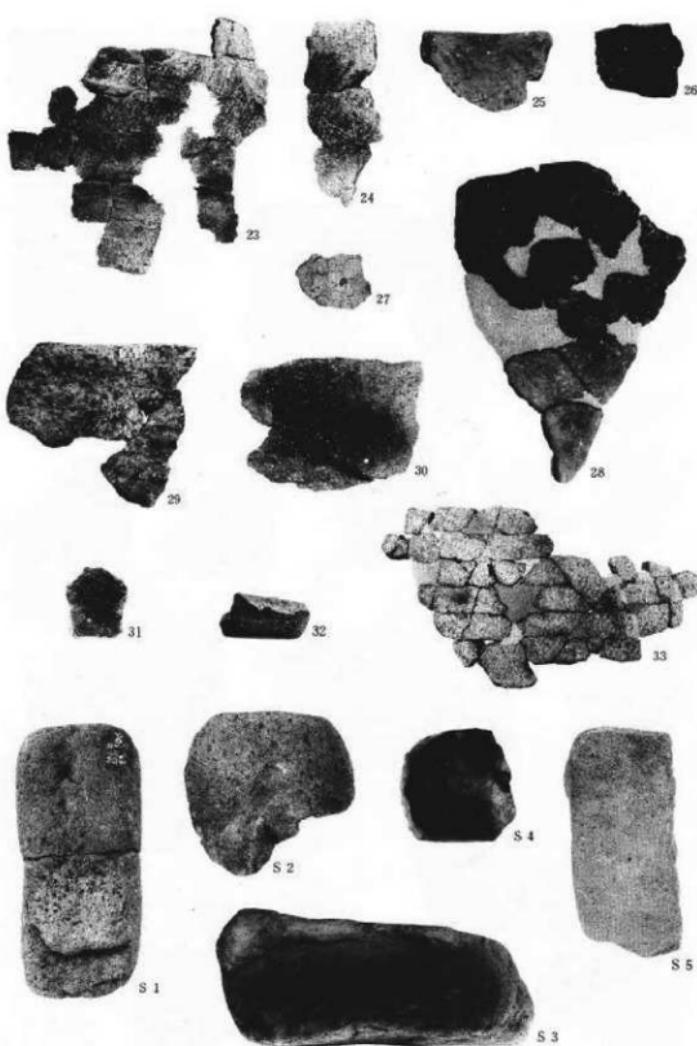
2 土器埋設遺構 SR05 (北△南)



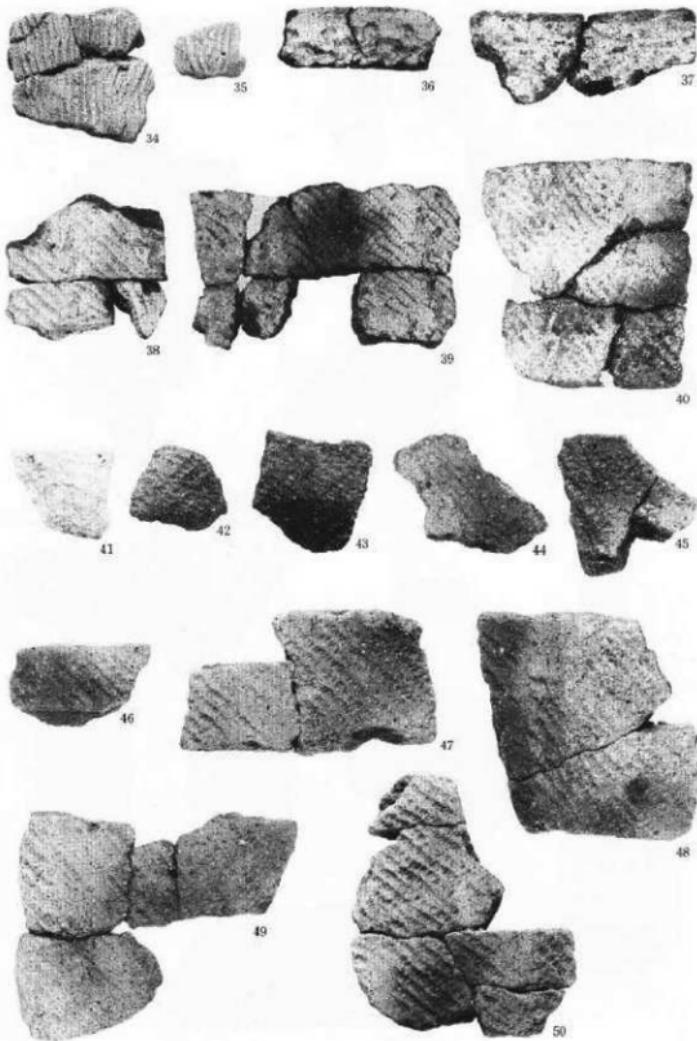
3 SR05土層断面 (北△南)



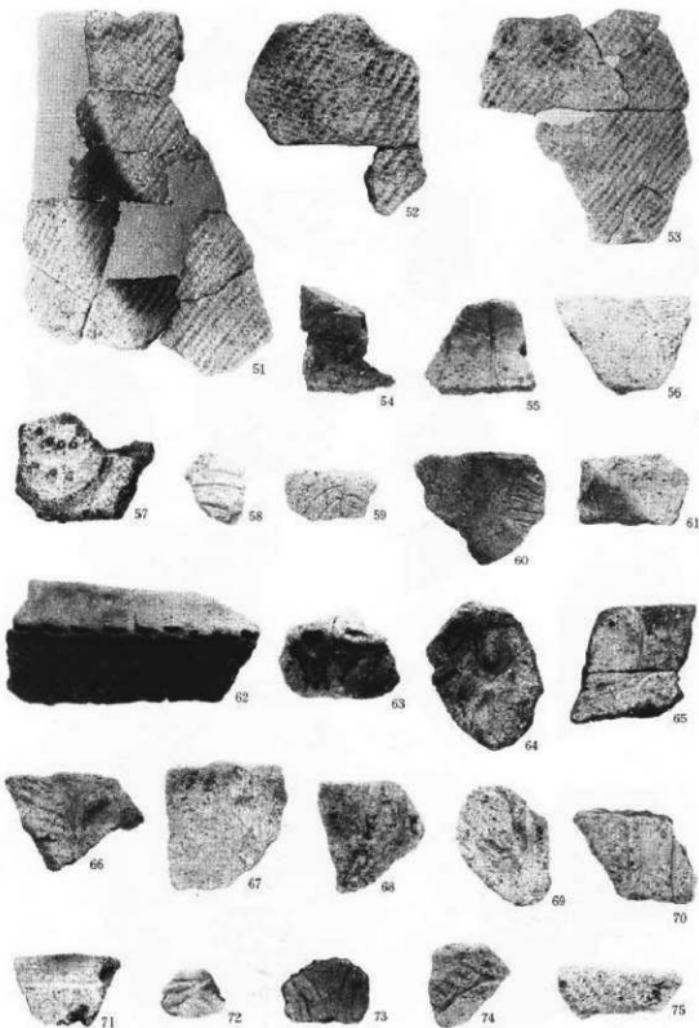
遺構内出土土器(1)



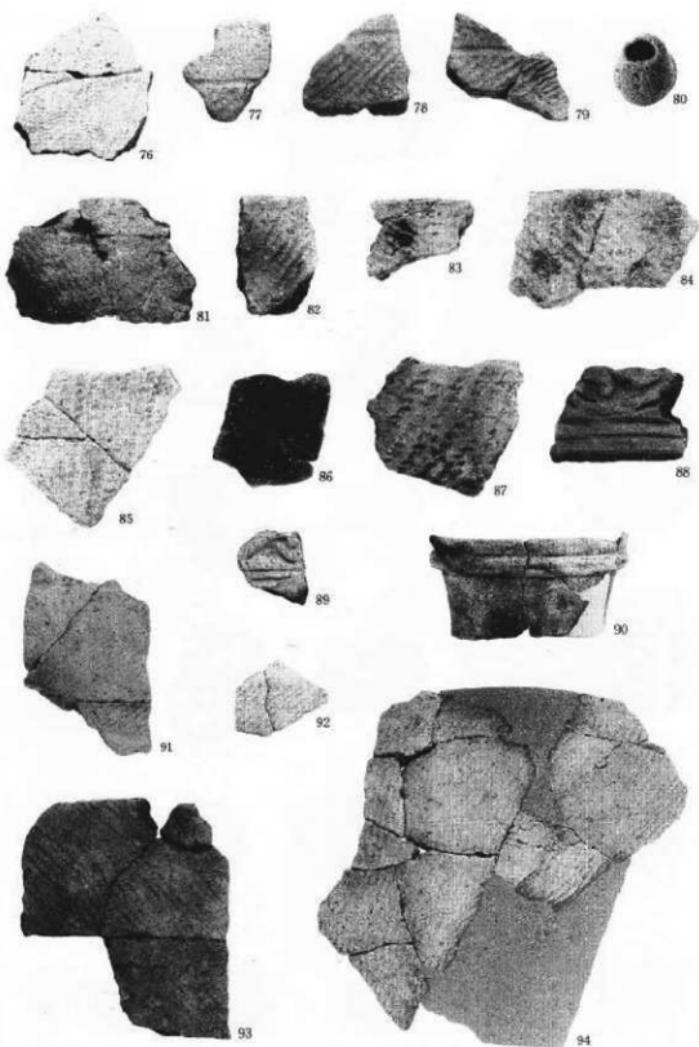
遺構内出土土器(2)・石器



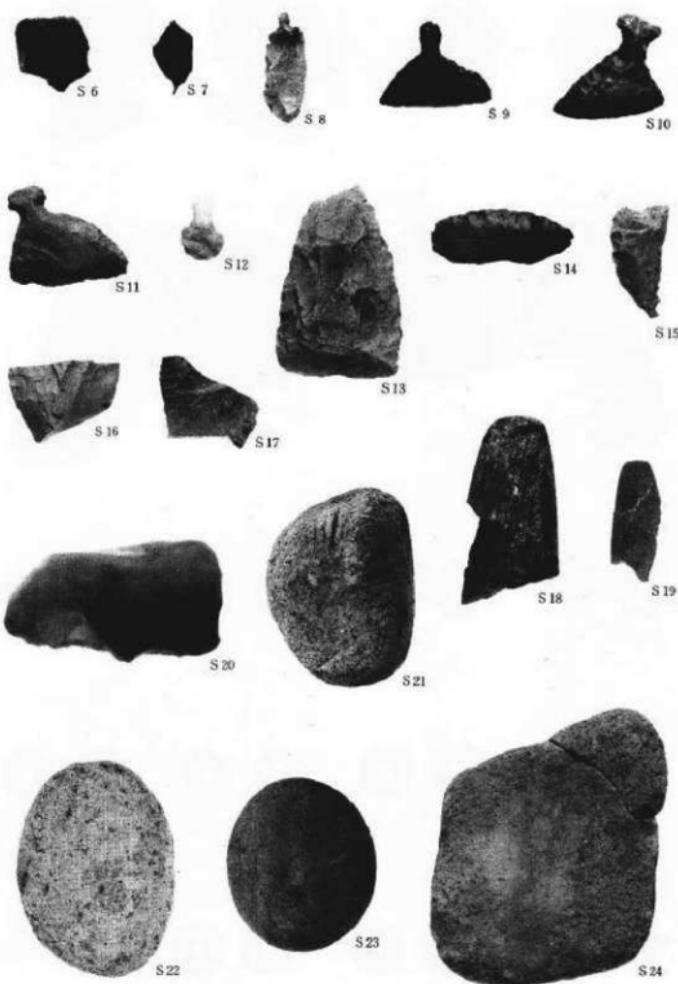
遺構外出土土器(1)



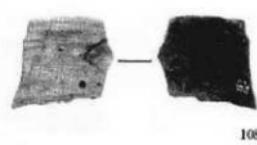
遺構外出土土器(2)



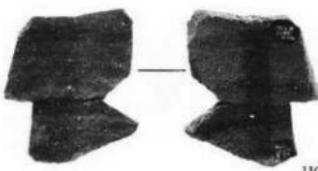
遺構外出土土器(3)



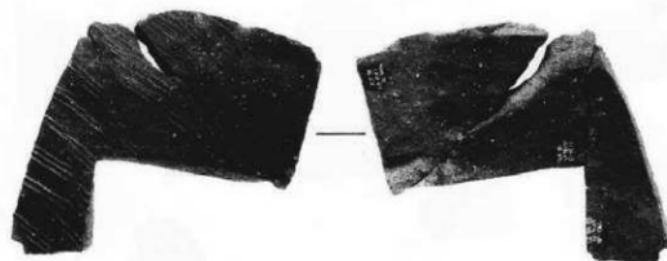
遺構外出土石器



108



110



111



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

造橋外出土中世陶器・古錢

小出 IV 遺跡

第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地

小出Ⅳ遺跡は、権岡川中流の右岸に形成された河岸段丘上に存在する。この段丘は、小河川によって開析されて、ほぼ北に向かって張り出す舌状地形を呈しており、遺跡はその段丘先端部北端に立地している。この段丘先端部の幅は約200mであるが、その中央部には北側から小さな沢が入り込んでおり、段丘北端の平坦面を東西に分けている。

本遺跡は、西側平坦面上にあり、その東西幅は40~110m、南北140~200mと考えられる。遺跡の北～西側は段丘崖で急斜面となっており、南側は小出Ⅲ遺跡との間に西側から入り込む小さな沢によって画される。道路計画路線は、小出Ⅳ遺跡のうち西側約3分の2にかかるが、遺跡全体のうち、遺跡を東西に横切る県道30号以南については、著しい削平を受けており、今回の調査対象から外された。従って、調査区は小出Ⅳ遺跡のうちの北西部に当たる。現況は、大部分が宅地で一部が畠地であり、同区に係らなかった東部分は雑木林となっている(第1図)。

第2節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

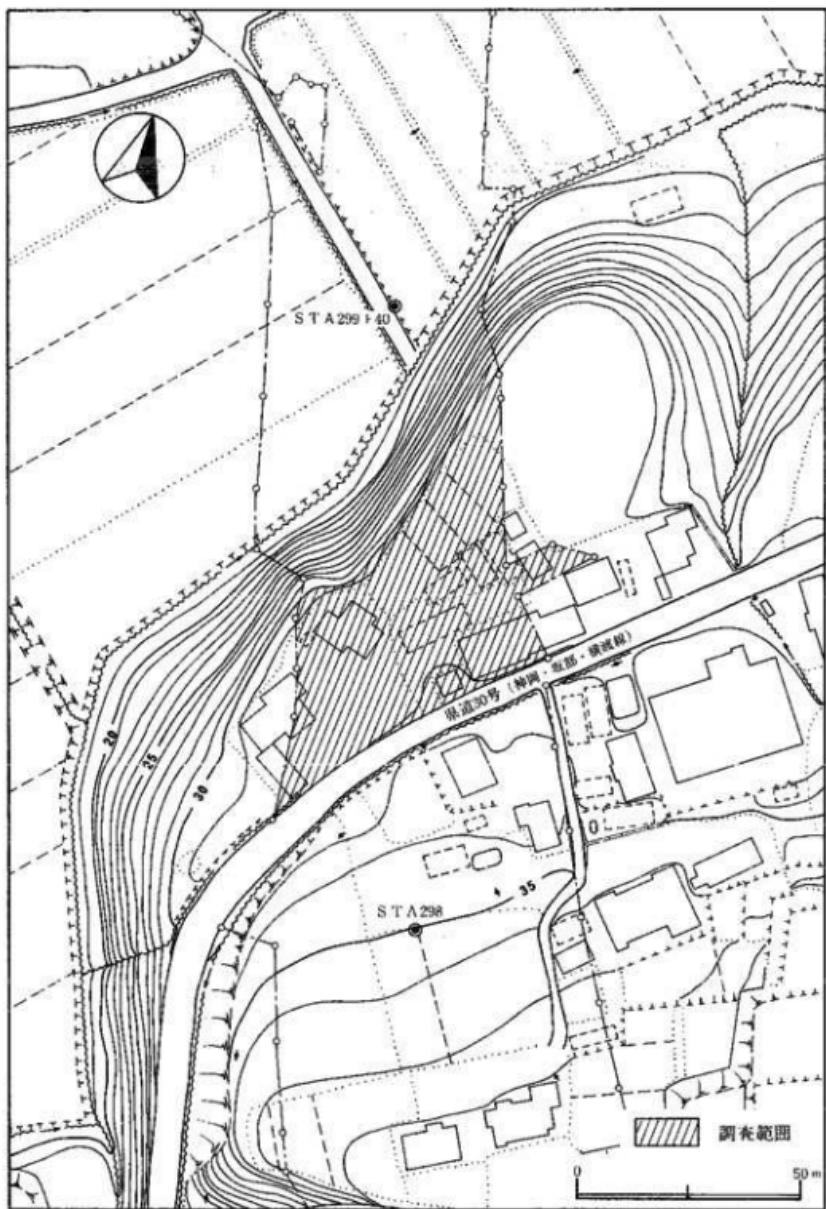
調査区中央部に打設した任意のグリッド原点をMA50として、この杭から西北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、4m×4mのグリッドを設定した。また、南北基線には2桁の算用数字、東西基線にはアルファベット2文字の組み合わせを付し、各グリッドの名称は南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。

遺構等の実測は、各グリッド杭を利用して造り方測量を行い、原則として縮尺は20分の1とした。調査区範囲図は平板測量を行い、縮尺は250分の1とした。さらに、これらの遺構平面図と調査範囲図等から、遺構配置図など必要な図面を作成した。

なお、旧石器時代の遺物の採り上げ方法は、小出Ⅰ遺跡の旧石器時代の遺物の採り上げ方法と同じである(小出Ⅰ遺跡の「第2節 調査の方法と経過 1. 調査の方法」を参照)。

2. 調査の経過

5月9日、調査に先立って、発掘器材を搬入して、調査区内に残された家屋廃材と伐採された立木などの除去作業およびプレハブ設置場所の整地作業を行った。翌10日、調査区南側の宅



第1図 調査区及び周辺地形図

地跡部分(48ライン以南)から発掘調査を開始した。12日から19日の間、発掘調査と併行して、グリッド杭の打設を行った。16・17Hの両日、排土場所とした調査区外西側斜面下に沿って北流する排水路に、排土が入らないように、排土流入防護柵を設置し、さらに排水路をコンパネで覆う作業を行った。18日、調査区北側の畠地部分(48ライン以北)の粗掘りと遺構確認精査を開始した。27日、ME46グリッドの第IIa層上面ではほぼ橢円形を呈する落ち込みを確認し、SK01としたが、現代の攪乱と判明し欠番とした。31H、LT51・52、MA51・52グリッドでSK02を検出した。

6月2日、調査区南側の宅地跡部分の調査を終了した。本地区は第Ia層だけの単純層で、表土から第IIa層面までの層厚は平均20cmであった。遺構は検出されず、遺物も縄文土器と石器が数点出土したにとどまった。同日、MA48グリッドの第IIa層上面で橢円形を呈する落ち込みを確認しSK03としたが、自然の窪みと判明し欠番とした。LR53・54グリッドで堅穴住居跡と思われる遺構を確認しSI04とした。旧石器時代の遺物が第Ib層下部から3点出土した。3日、LP55・56グリッドでSK05を検出した。旧石器時代の遺物が第Ib層中から3点と第IIa層上部から19点出土した。6日、LS55グリッドの第Ib層より旧石器時代の石核が1点出土した。8日、調査区北側(48ライン以北)の粗掘りを終える。10日、LQ56グリッドでSK06、LR58グリッドでSK07を検出した。本日より、旧石器時代の遺構・遺物確認のため、旧石器時代以降の時代の遺構の調査が終了したグリッドと、遺構が検出されなかったグリッドの第IIa層を掘り下げるにした。14日、LP56・57グリッドの調査区東端に土層観察の為のトレンチを入れた。23日、LQ57グリッドでSK08・09、SI10を検出した。このうちSK08は木の根跡と判明し欠番とした。

7月1日、SR11を検出した。2日、SK02・SK05~07・SK09・SR11の6遺構の調査を終了した。16日まで旧石器時代の遺物が280点検出されたが、同時代の遺構は検出されない。20日、SI10の調査を終了した。

8月1日、第IIa層上面の遺構確認精査を終えた。9日、SI04の調査を終えて、旧石器時代以降の時代の遺構の調査をすべて完了した。10日、旧石器時代の遺物の分布範囲は、ほぼ52ラインから60ラインまでと判明した。26日、土層観察の為のトレンチを、調査区東端に新たに2本設定して掘り下げた。

9月1日、旧石器時代の遺物の採り上げのため、グリッド杭の再打設を行い、9日から採り上げを開始し、22日に完了した。27日、旧石器時代の調査を終了した。その結果、遺構は検出されなかったが、石器等の遺物が300点以上出土した。同日、調査区東端に入れた3本のトレンチの土層図の作成を完了した。28日、遺跡遠景と近景等の撮影準備及びその撮影を行った。30日、調査区の地形図など、すべての実測作業を完了し、発掘機材を搬出して小出IV遺跡の発

掘調査を終了した。

第3節 遺跡の層序

調査区は、宅地造成や畑地整地と耕作などによって、縄文・弥生時代の遺構確認面である第Ia層まで部分的に攪乱が及んでいた。また、調査区南側と東側の宅地跡では、第Ia・Ib層を欠如する部分があった。遺跡の層序は、調査区東端の土層観察用トレンチの土層から、以下の通り分けられた。

第Ia層 黒褐色土(10YR2/3)：耕作土および盛土である。

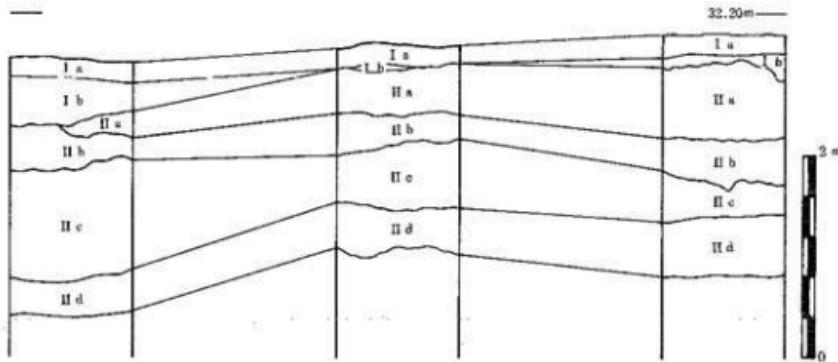
第Ib層 黒褐色土(10YR3/2)：部分的に後世の攪乱を受けているが相対的に安定している層である。旧石器～弥生時代の遺物を包含しており、このうち旧石器時代の遺物は層下部から出土する。

第IIa層 明黄褐色土(10YR6/6)：よくしまった粘質土である。縄文・弥生時代の遺構確認面で、旧石器時代の遺物包含層である。

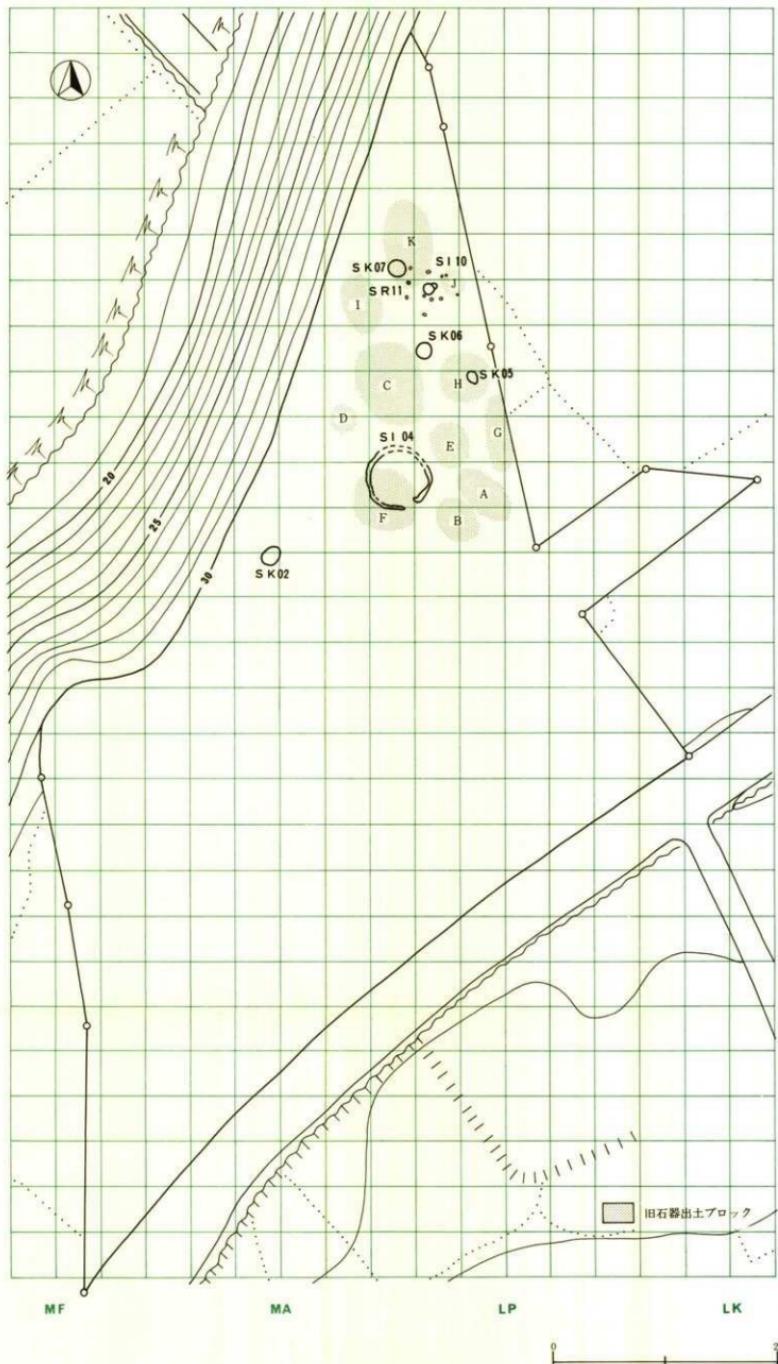
第IIb層 明黄褐色土(10YR7/6)：よくしまった粘質土で、明緑灰色土(7.5G Y8/1)のかたまりを少量含んでいる。

第IIc層 明黄褐色土(10YR7/6)：よくしまった砂質土で、軟質の円礫を少量含んでいる。また、炭化物を若干含んでいる。

第IId層 淡黄褐色土(10YR8/4)：砂礫土である。層中部から層下部に大小礫を多量に含んでいる。



第2図 土層柱状図



第3図 造構配置図

第2章 旧石器時代

第1節 遺物の出土層位と平面分布

1. 遺物の出土層位（付図9）

旧石器時代の遺物は、層位的には、そのほとんどが第I b層下部～第II a層から出土しており、一部は第II b層からも若干出土している。遺物が出土する深さは、最も浅いところ（LO53付近）では地表から20cmほどで、最も深いところ（LR57付近）では100cmほどを測る。しかし、これは、地形の傾斜に沿うものであり、遺物包含層は約50cmの幅で安定しているといえる。

2. 遺物の平面分布（付図9）

遺物の平面分布は、調査区北側に位置する畠地部分のLO52～LT52グリッドを結ぶラインとLO60～LT60グリッドを結ぶラインの間の東西20m、南北32mにわたっており、この範囲内には遺物の集中が11箇所で認められた。これらをそれぞれA・B・C・D・E・F・G・H・I・J・Kブロックと呼称することにする。この他にブロック外から石刃、剝片、碎片、礫などが検出された。

Aブロック

LO52・53、LP52・53グリッドに位置し、長軸（北西～南東）760cm×短軸（北東～南西）330cmの精円形の範囲内に遺物が分布している。遺物の総数は64点で、搔器2点、石刃13点、剝片36点、碎片12点、礫1点である。分布状態は、LP53グリッドの南西付近に若干まとまりが見られるものの、全体としては北西から南東方向に向かうにつれて散漫となる状態を呈している。

Bブロック

LP52・53、LQ52・53グリッドに位置し、Aブロックの西側に隣接している。長軸（北西～南東）533cm×短軸（北東～南西）411cmの精円形の範囲内に遺物が分布している。遺物の総数は39点で、ナイフ形石器1点、彫器1点、石刃2点、剝片24点、碎片9点、礫1点である。分布状態は、LQ52グリッドの北東隅を中心にまとまっているが、南東・南西側では散在している。

Cブロック

LQ54～56、LR54～56、LS55・56グリッドに位置し、長軸（南東～北西）835cm×短軸

小出Ⅳ遺跡

(北東—南西)678cmの楕円形の範囲内に遺物が分布している。遺物の総数は70点で、搔器1点、彫器1点、石刃7点、剝片44点、碎片16点、石核1点である。分布状態はL R55グリッドの北側付近にまとまりをもつが、ここから周辺に向かうにしたがって散漫となる。ブロック中央部に受熱した石器が集中している。

D ブロック

L S54・55グリッドに位置し、長軸(北西—南東)382cm×短軸(北東—南西)336cmの楕円形の範囲内に遺物が分布している。遺物の総数は24点で、石刃9点、剝片13点、碎片1点、礫1点である。分布状態はL S54グリッドの北側付近にまとまりをもち、これを中心として東・北・西側に向かっては散漫となる。ブロック中央部に受熱した石器が集中している。

E ブロック

L P54、L Q54グリッドに位置し、長軸(南北)470cm×短軸(東西)394cmの楕円形の範囲内に遺物が分布している。遺物の総数は19点で、石刃1点、剝片15点、碎片2点である。分布状態は東・北・西側では若干まとまっているが、南側では単一に存在している。

F ブロック

L R52・53、L S52・53グリッドに位置し、長軸(北西—南東)655cm×短軸(北東—南西)551cmの楕円形の範囲内に遺物が分布している。遺物の総数は15点で、剝片13点、碎片2点である。分布状態は北西側—南西側にかけて点在している。

G ブロック

L O53～55、L P54・55グリッドに位置し、長軸(北西—南東)730cm×短軸(北東—南西)330cmの楕円形の範囲内に遺物が分布している。遺物の総数は17点で、剝片12点、碎片5点である。分布状態は北側—南側にかけて点在している。

H ブロック

L P55・56、L Q55・56グリッドに位置し、長軸(北西—南東)522cm×短軸(北東—南西)470cmの楕円形の範囲内に遺物が分布している。遺物の総数は13点で、搔器1点、剝片9点、碎片3点である。分布状態は全体に散在している。

I ブロック

L R57、L S57・58グリッドに位置し、長軸(北西—南東)568cm×短軸(北東—南西)435cmの楕円形の範囲内に遺物が分布している。遺物の総数は12点で、ナイフ形石器1点、搔器1点、石刃3点、剝片6点、碎片1点である。分布状態は北西側に数点まとまって存在しているが、全体的には散漫な状態を呈している。

J ブロック

L P57・58、L Q57・58グリッドに位置し、長軸(北西—南東)411cm×短軸(北東—南西)295

cmの横円形の範囲内に遺物が分布している。遺物の総数は6点で、搔器1点、石刃2点、剝片1点、削器1点である。分布状態は中心的なまとまりをもたず、北・西側に散在している。

K ブロック

L Q58・59、L R58・59グリッドに位置し、長軸(北西—南東)940cm×短軸(北東—南西)574cmの横円形の範囲内に遺物が分布している。遺物の総数は20点で、搔器2点、石刃7点、二次加工のある剝片1点、剝片7点、碎片2点、礫1点である。分布状態はL Q58グリッドの北西隅付近を中心として東西南北に点在している。

第2節 出土遺物

ナイフ形石器3点、搔器10点、彫器2点、削器1点、二次加工のある剝片2点、石刃49点、剝片191点、碎片55点、石核1点、礫1点の321点が出土した。

ナイフ形石器(第4図、図版9)

248は先端が尖がった石刃を素材としている。基部の二側縁と先端部の一側縁に微細な細部加工を腹面側から施している。基部は欠失している。039+040は先端が幅広の石刃を素材としている。基部の一側縁を浅く打ち欠き、相対する側縁の基部から器体中央にかけて、微細な細部加工を腹面側から施している。両側縁に刃こぼれが認められ、器体中央で折損している。LT55@は全体に肉厚で先端が尖がった石刃を素材としている。基部から先端部近くに及ぶ一側縁に急斜度加工が施されているが、これに相対する側縁は、礫皮面を残したままである。先端部を僅かに欠失している。

これらのナイフ形石器の背面構成からみてみると、248、LT55@は両設打面石核から、039+040は、おそらく単設打面石核から剥離されたものであろう。

搔器(第5～7図157・LT55@、図版9)

いわゆるエンド・スクリーバーと呼ばれる縦形搔器で、石刃を素材として、打面と相対する端部に細部加工を施して刃部を作出している。刃部の形状は、弧状を呈するもの(280・263・260・250・192・LS57@・085)を主体とするが、直線的なもの(157・LT55@)もある。刃部を観察すると、263、192、LT55@は、図上刃部の左側が偏減りしており、使用のくせが認められる。また、001+131は、刃部再生剝片(129)が接合しており、刃部が凸状になっていることからも、使用頻度の高さが窺われる。

基部加工が施されているのは263のみであるが、280、001+131といった大形のものは、器体中央の両側縁に、つぶれや剝離痕が認められることから、装着方法との関連が考えられるものである。

彫器(第7図018・210)

018は、寸詰まりの縦長剝片を素材として、打面部に彫刀面を作出している。彫刀面の作出は、図上右肩より打面を広く除去し、その後左肩の背面向り4条の槽状剝離を施すことによって行われている。210も、寸詰まりの縦長剝片を素材として、打面部から図上左肩にかけて一条の彫刀面を有するものである。打面は、彫刀面の作出によって残っていない。

二次加工のある剝片(第7図264・L S51②)

264は、肉厚で幅広の石刃の頭部の一側縁に微細な細部加工を施したものである。L S51②は、縦皮面を残す石刃の二側縁に細部加工を施したものである。上半分と末端部を欠失している。

削器(第8図259+L Q60)

肉厚で幅広の石刃を素材として、右側縁下半から末端にかけて細部加工を施したものである。左側縁から末端にかけては折損している。器体も中央部で折損している。

石刃(第8図L Q46④、第9図～第12図)

長幅分布からみて4類にわけることができる。

1類：長さが約12cmで、幅約4.5cmのもの(L Q46④・L T55①・284)

2類：長さは1類とはほぼ等しいが、幅が2.5cmと細身のもの(L S57⑤・081+083・059)

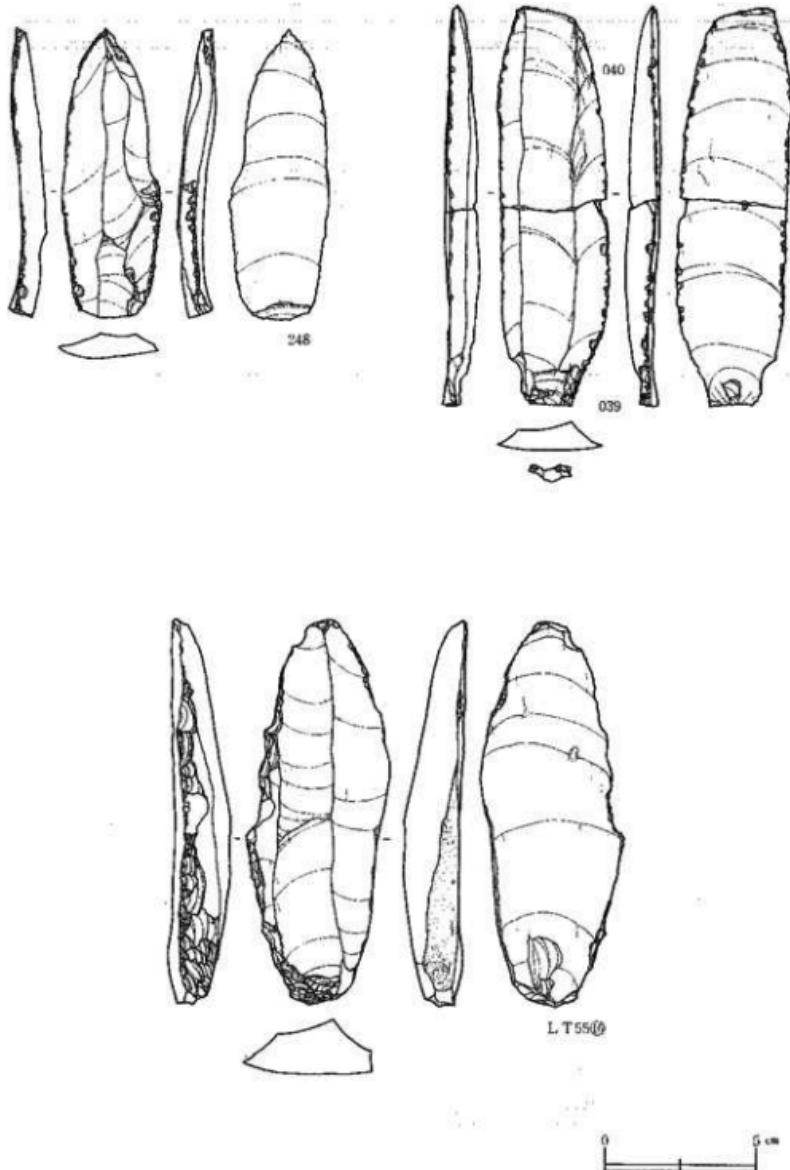
3類：長さは約8cmで、幅が3～4cmのもの(L Q60⑩・L S56③・282・265)

4類：長さは3類とはほぼ等しいが、幅が2～2.5cmと細身のもの(309・225・174・044)

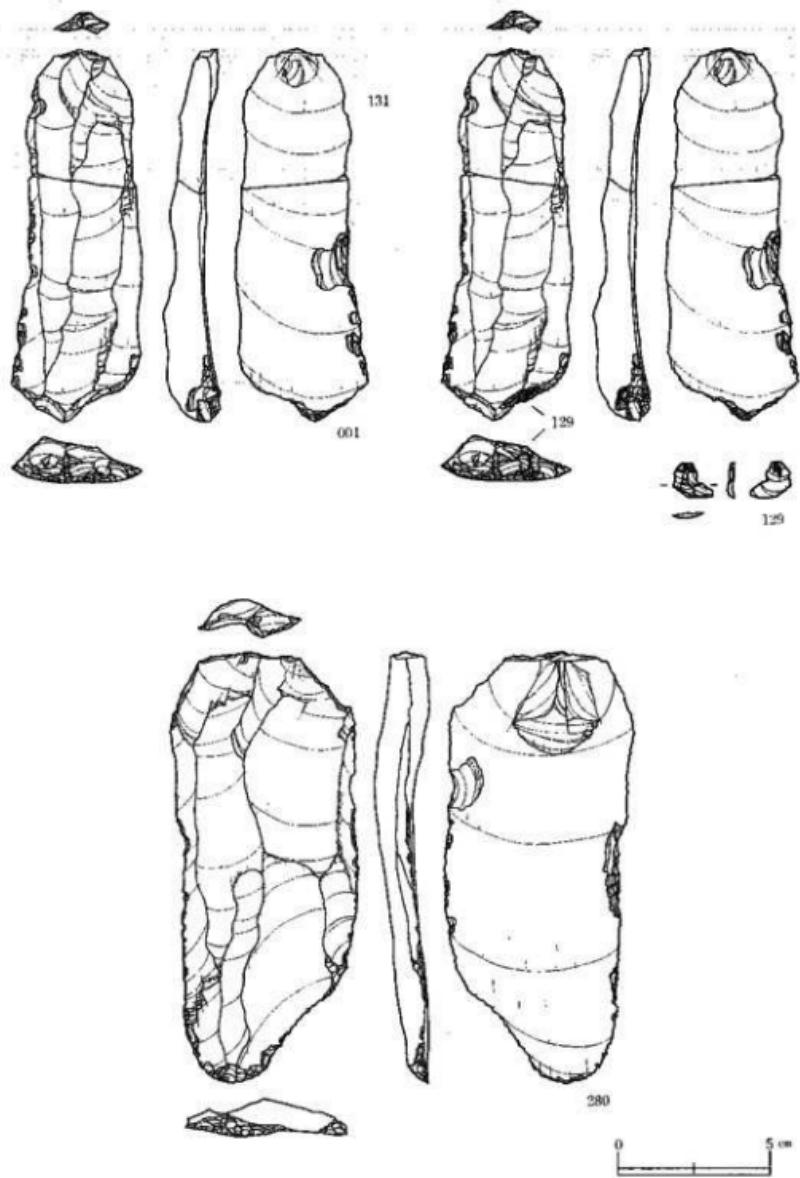
石刃を素材とする他器種との対応関係をみてみると、1類がナイフ形石器の素材、1類・3類が摺器の素材になっていると思われる。また、2類は石刃として、4類は後述するように折断して使用されていた可能性もある。

石刃における背面構成は、腹面の剥離方向と同方向のものと逆方向のものから成っており、各個体とも、両設打面石核から剥離されたものと考えられる。また、174は、石核の側方調整の痕跡を残している。打面も、打面調整が施されている点で共通している。しかし、L T55①のように、広い打面をもっているものと、284のように狭いものという個体による差異も認められる。

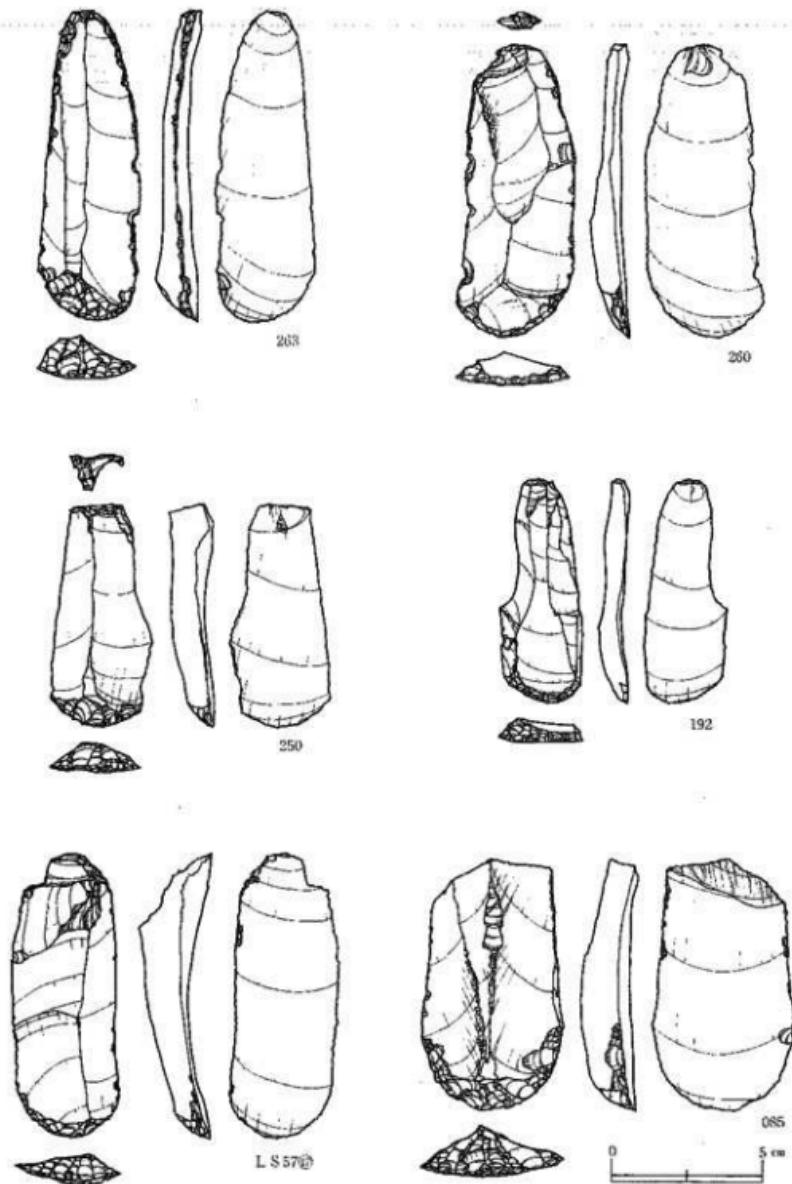
L S56⑩・249・258・121・L R57⑬・201・281・261・170・L Q54⑤は、折断された石刃である。これが意図的であるかどうかは確定できないが、これらは4類に属しているということと、281を除いては厚さが1cm以下という共通性をもっている。側縁には刃こぼれも認められ、使用されたものであることがわかる。



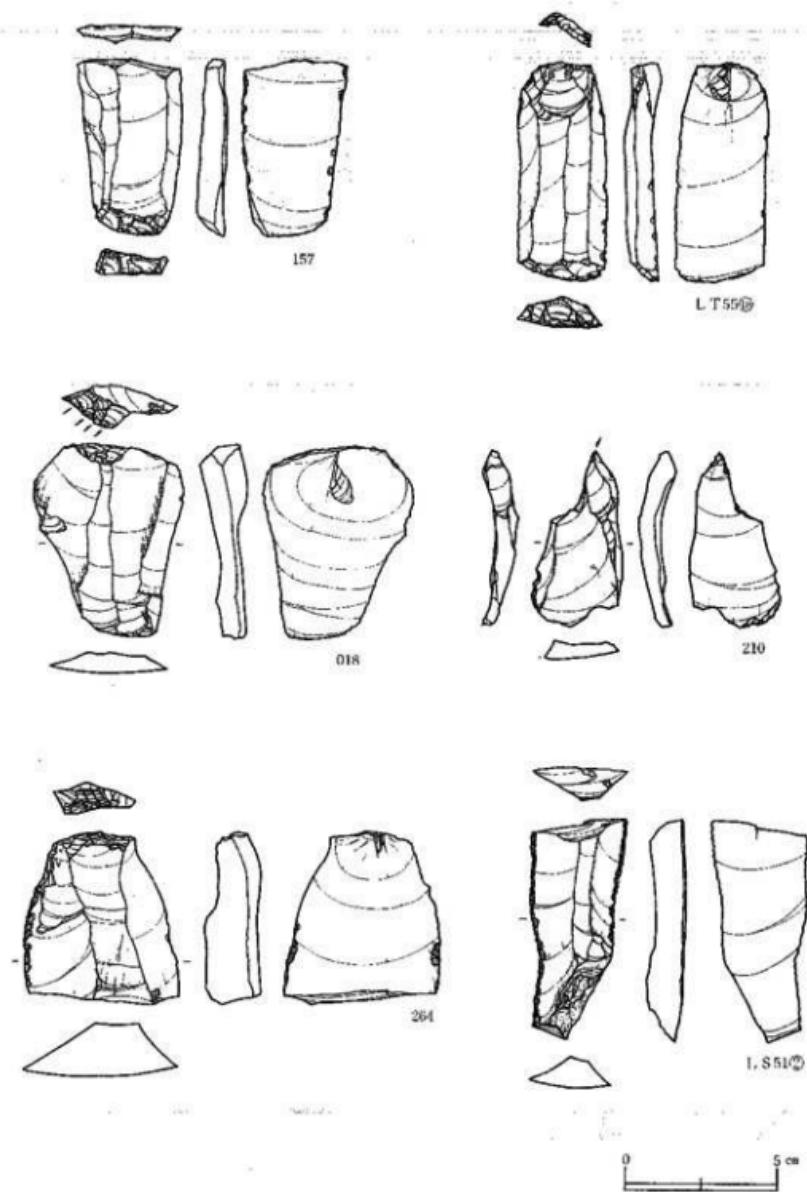
第4図 ナイフ形石器



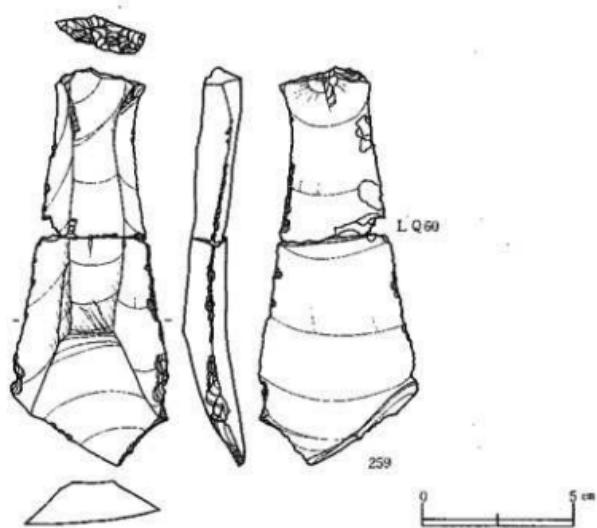
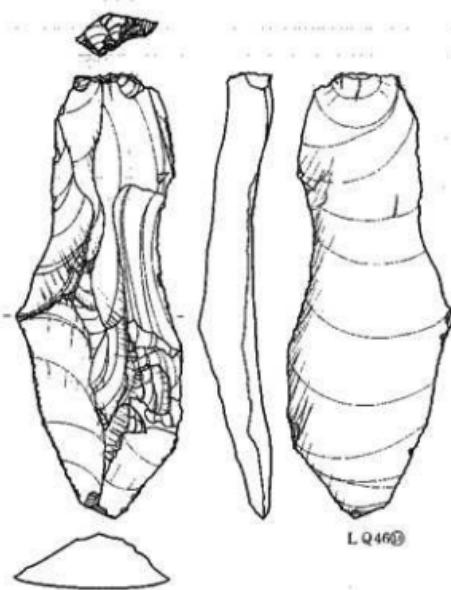
第5図 種器(1)



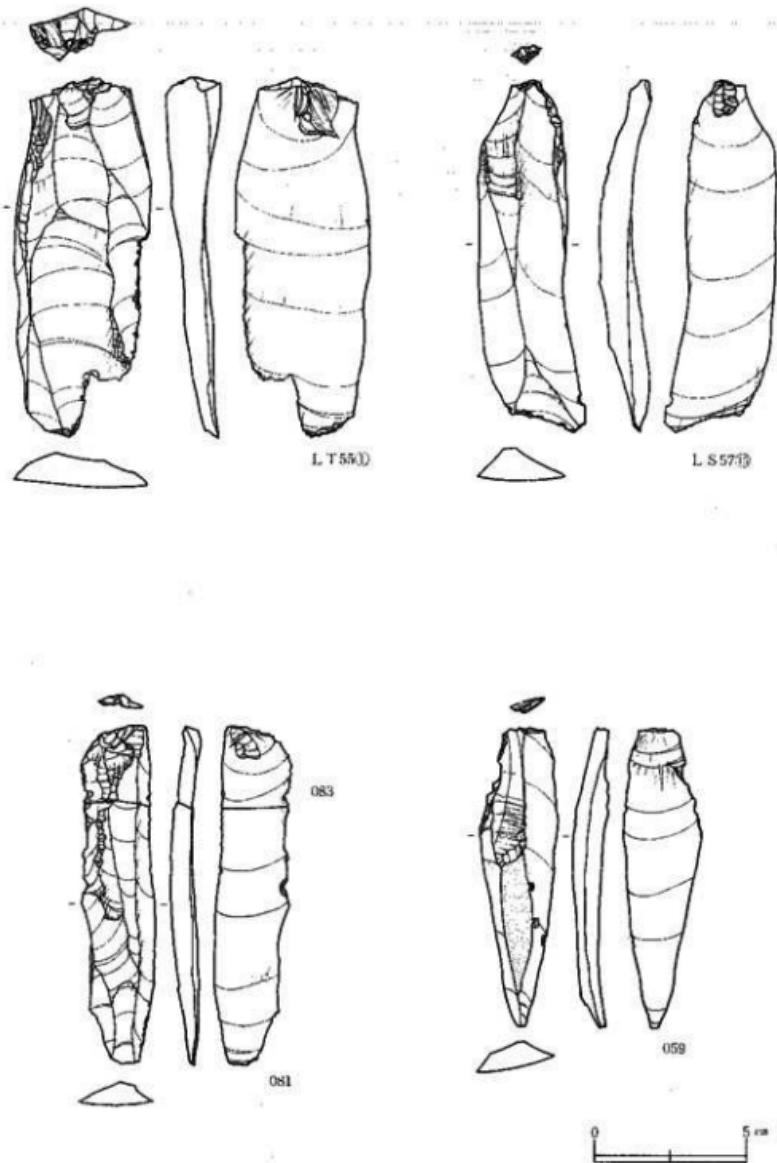
第6図 掘器(2)



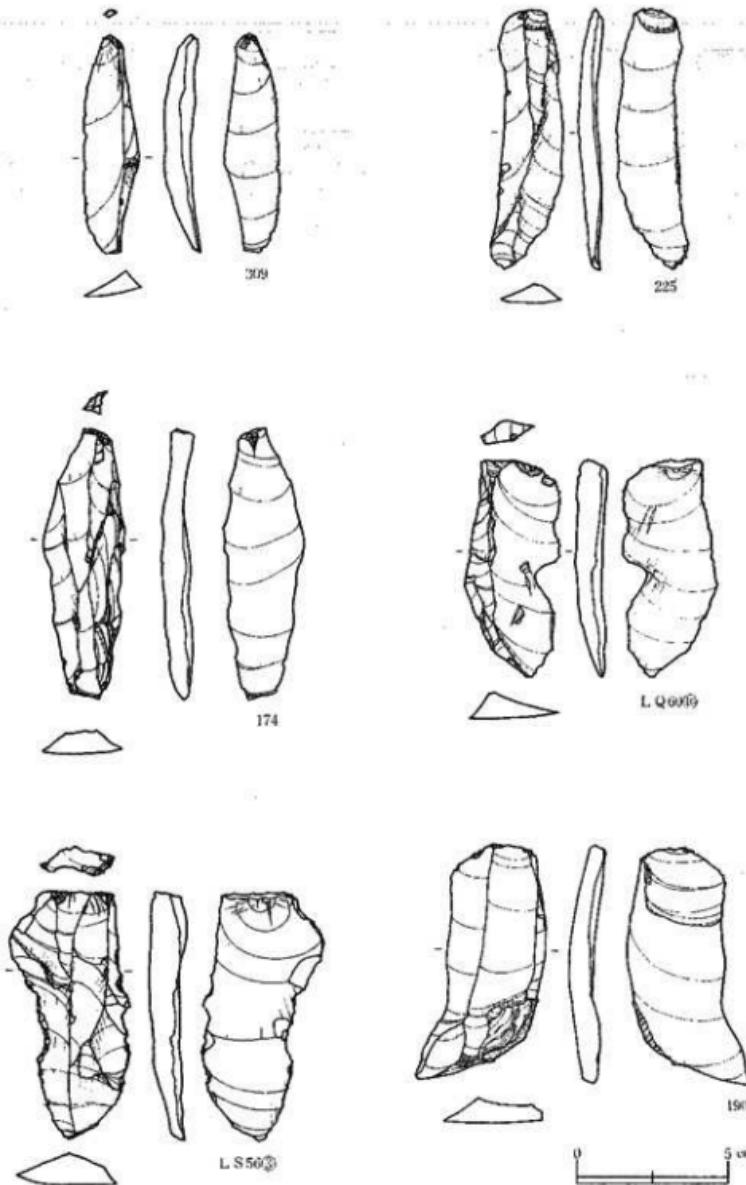
第7図 摂器(3)・彫器・二次加工のある剥片



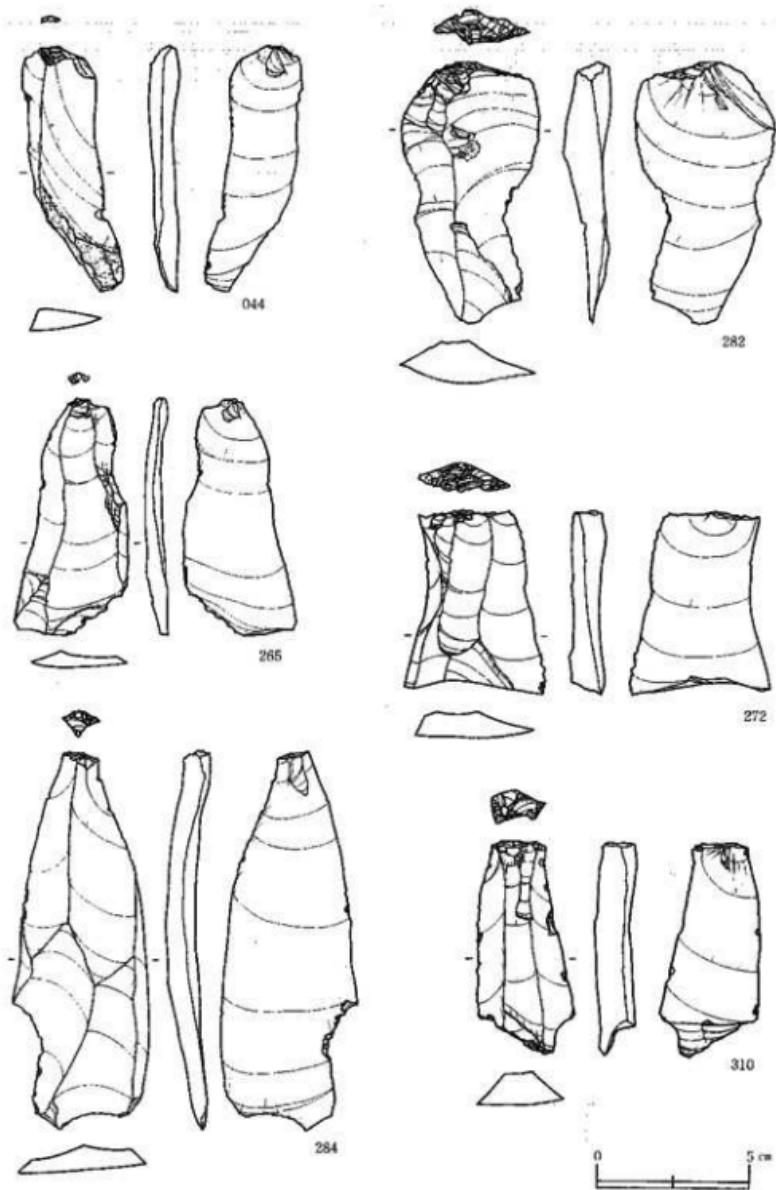
第8図 石刃(1)・削器



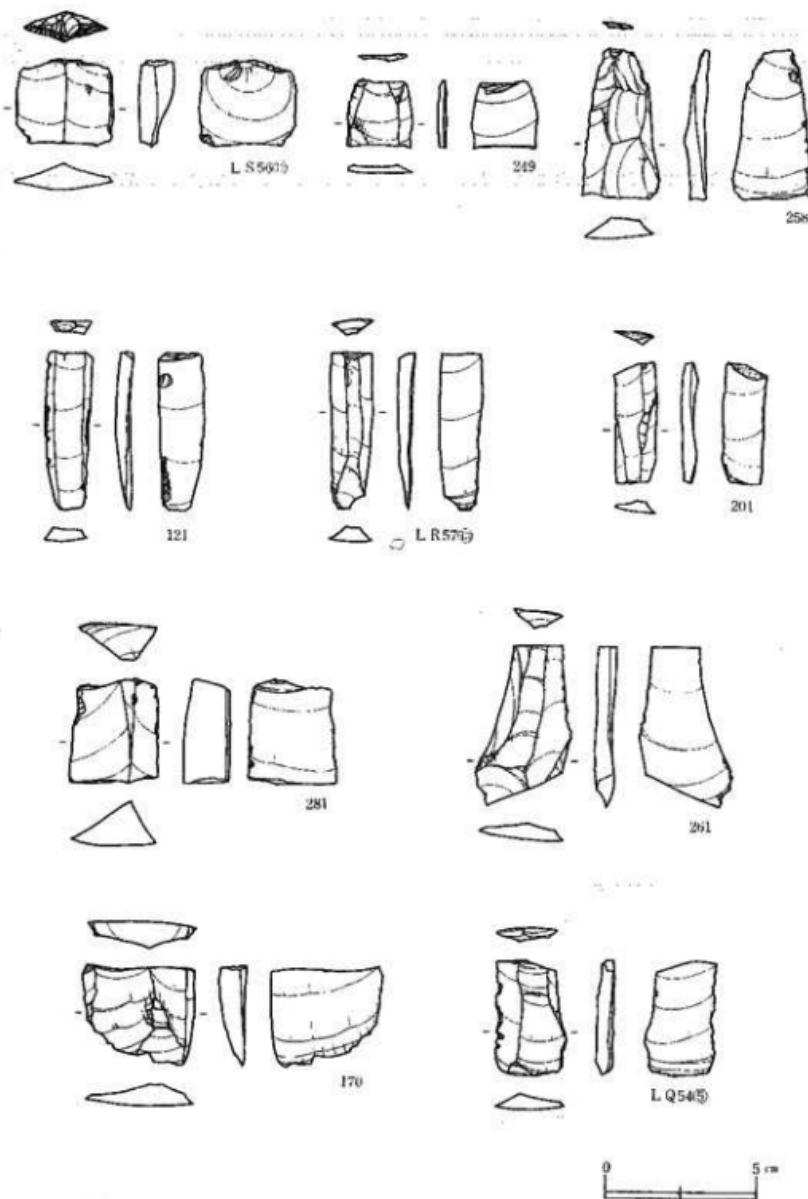
第9図 石刃(2)



第10図 石刃(3)



第11図 石刀(4)



第12圖 石刀(5)

第3節 個体別資料と剝片剝離技術

1. 個体別資料（第1表）

単独資料が23点と個体No.を付したものがNo.1～No.16まであり、39点の母岩を識別した。このうち遺跡内で剝片剝離作業の行われているものは、No.1とNo.2の2個体で、他のものは搬入品である可能性が高い。

個体No.1：灰白色の珪質頁岩で疊皮面とそれに近い部分は灰褐色である。グリッド一括資料も含む総数は126点で、うち38点が接合し、良好な石刃技法の接合資料が得られている。接合資料には疊皮面がごく一部しか残っておらず、表面には石核を一周する形で剝離痕跡があることから、この個体は、他の場所である程度の作業が行われた後、本遺跡に搬入されたものと思われる。搔器、彫器、二次加工のある剝片が各1点と、石刃24点があり、本遺跡石器群の主体をなす個体である。

個体No.2：不純物の混入がなく緻密な黒耀石である。熱を受けて白色化しているものが多い。一部に疊皮面を残しており、拳大の原石であったことが推測される。総数は32点で彫器を1点含んでいる。

個体No.3：灰褐色で黒色の細かい斑点をもつ珪質頁岩である。グリッド一括資料である搔器1点を加えた総数は4点であり、うち2点は石刃である。

個体No.4：灰黃褐色の珪質頁岩である。グリッド一括資料も含めると総数は12点であり、石刃が2点と削器が1点含まれている。石刃・削器ともに重厚である。

個体No.5：部分的に白色の細い縞状の模様が入る褐色の珪質頁岩である。8点出土しているが、うち2点は1個の搔器が折損したものである。他の剝片は、搔器の刃部の細部加工剝片である。

個体No.6：褐灰色の珪質頁岩で灰白色の縞状の模様が入っている。中央部で折損した搔器の刃部側のものが1点出土している。

個体No.7：白色の斑点が入る褐色の珪質頁岩である。珪質が他の個体に比べて強い。2点出土しており、うち1点は石刃である。

個体No.8：灰黃褐色の珪質頁岩である。グリッド一括資料も含めると8点出土しており、うち3点は石刃である。

個体No.9：褐灰色の珪質頁岩である。5点出土しており、うち1点は石刃の頭部である。

個体No.10：黒褐色の珪質頁岩である。グリッド一括資料も含めると6点出土しており、うち搔器が1点、石刃が3点ある。

個体No.11：褐灰色の珪質頁岩である。礫皮面は灰白色で、風化にしたがって黄色化する。

剝片3点が出土している。

個体No.12：灰黄褐色で黒色の細かい斑点のある珪質頁岩である。剝片4点が出土している。

個体No.13：黒褐色の珪質頁岩である。部分的に灰白色に変化している。剝片6点が出土している。

個体No.14：灰白色の珪質頁岩である。珪質が強く、玉髓に近い。石刃1点と剝片3点が出土している。

個体No.15：白色の玉髓である。石刃が1点と2次加工のある剝片が1点出土している。

個体No.16：灰黄褐色の珪質頁岩である。石刃が2点と剝片が1点出土している。

器種NO.	单	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	不	計	
K	2(1)																		2(1)	
E S	4	1					1(1)	1				1							8(1)	
G		1	1																2	
B	4	24(4)		2	1			1	1	1	2					1	1	2	49(4)	
S					1														1	
R F		1															1		2	
F	13	74	28	1	8	6		1	5	4	2	3	4	6	3	1	1	26	186	
C		14	3																38	55
C U		1																	1	
P E																		6	6	
計	23(1)	116(4)	38	3	10	7(1)	1	2	6	5	5	3	4	6	4	3	3	70	309	

第1表 個体別器種組成表

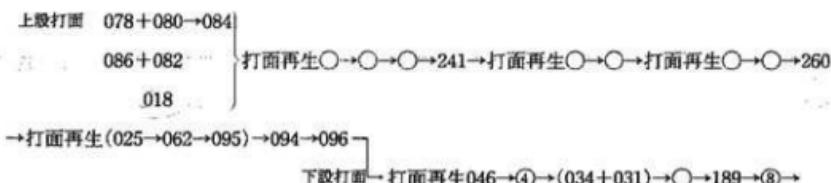
※グリッド一括資料を除く

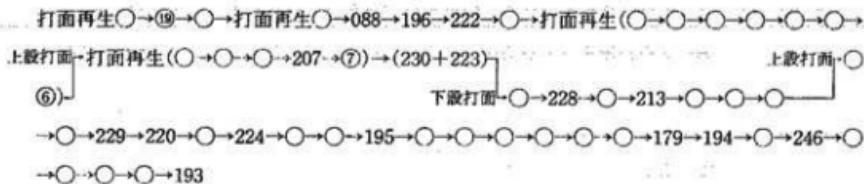
2. 剥片剝離技術（付図8、第13～20図）

ここでは、接合資料の得られた個体No.1について、その剥片剝離技術をのべる。

個体No.1は、38点が接合しており、うち振器が1点、彫器が1点、石刃が16点、石核が1点含まれている。他は石核調整剝片である。

以下、剥片剝離の工程は→で表し、折断されたものの接合関係は+で表す。数字は遺物番号に対応し、○中の数字はグリッド一括資料のもので、石器属性表の末尾にある番号に対応している。また、存在の予測される剝片については○で示している。





078+080と086+082と018は切り合い関係がなく、剥片剝離の前後関係は定かではないが、これらの剥片を剝離するための打面の設定は石核上面においてなされる。078+080に次いで084を剝離した後、打面再生が行われ241が剝離されるが、再び打面再生が行われ、260が剝離される。これらの打面再生剥片は遺跡に残されてはいない。260は搔器として剥片末端に細部加工が施されるが、接合資料にみる剝離痕の長さより現存の長さが8 mm程減じていることから、刃部作出のみならず刃部再生の行われたことが予測される。

さらに石核上面において打面再生が行われ、025、062、095が打面調整剝片及び打面再生剝片として残されている。この打面において、094、096が剥離されてから、打面は石核下面に移動する。

剥離の切り合い関係からみて、最初の下設打面は、上設打面に先行して設定されており、046は打面再生剥片といえる。ここでは④が疊皮面除去のために剥離され、統いて034+031、189、⑧が剥離され、次いで打面再生後⑩が剥離される。その後再び、打面再生が行われ、088、196、222が剥離された後、さらに打面再生が⑥によって行われる。⑥の背面には、数枚の剥離痕が残されている。

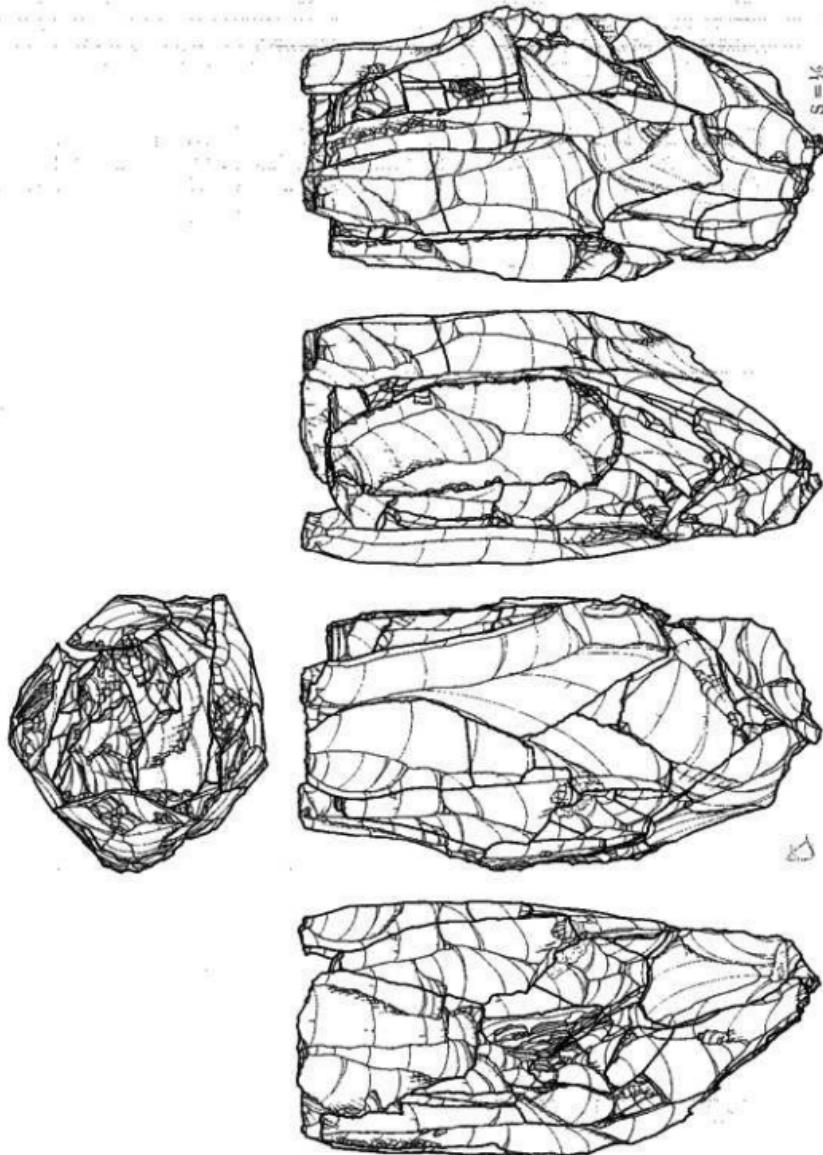
この後、上設打面に移動して、ここでも207、⑦を含む打面再生が行なわれる。ここで、230+223を剥離した後下設打面に移動して、228、213を剥離するが、再び上設打面に戻り、229、220、224、195を剥離する。195は、作業面調整剥片である。統いて、179、194、246が剥離され、193の残核が残される。ここで注目されることは、195と179の間の剥片が存在せず、剥離痕から見る限りこれらは良好な石刃であることから、これら石核の最終末段階の剥片の欠如は、他遺跡への搬出を示唆しているといえよう。

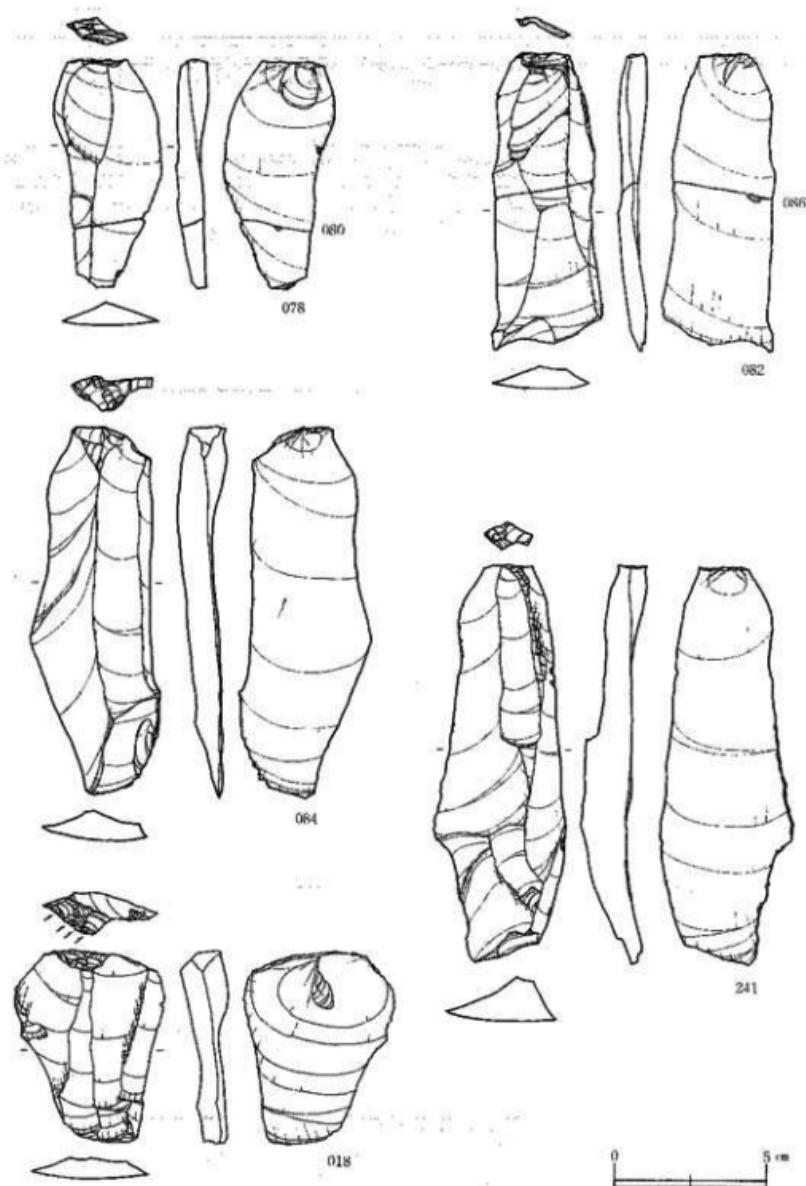
この個体の技術的特徴をまとめると、①両設打面である、②打面調整が顕著である、③打面の再生と転位が顕著である、ということになろう。特に打面再生は上設打面で5回、下設打面で4回行われ、打面転位は、上設で6回、下設で5回行われている。作業面調整剝片が少数であるのは、こうした両設打面からの効率的な剥片剝離に因るのであろう。

また、他の個体の石器、剝片についても、これらの技術的特徴は共通しており、共通の技術基盤の中で製作されたものといえる。

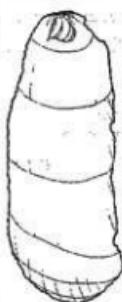
S = 1/2

第13圖 個體No. 1 接合資料





第14図 個体No.1 (1)



260



025



062



005



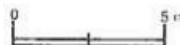
094



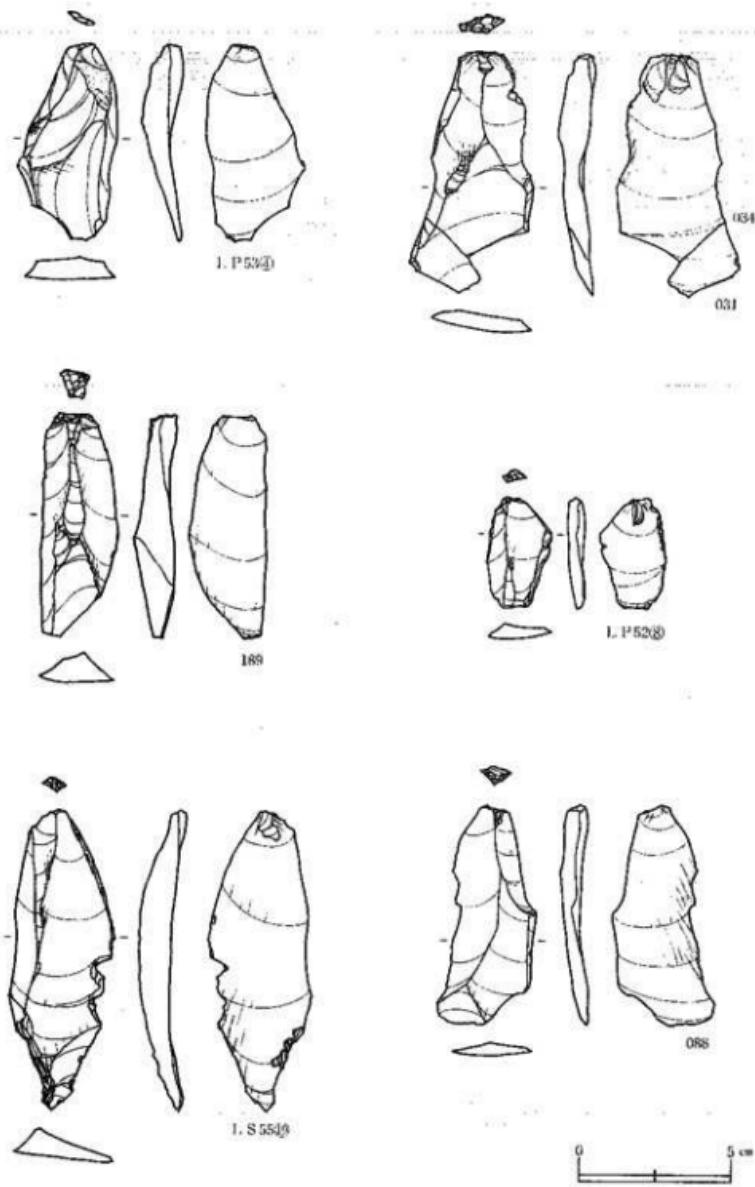
096



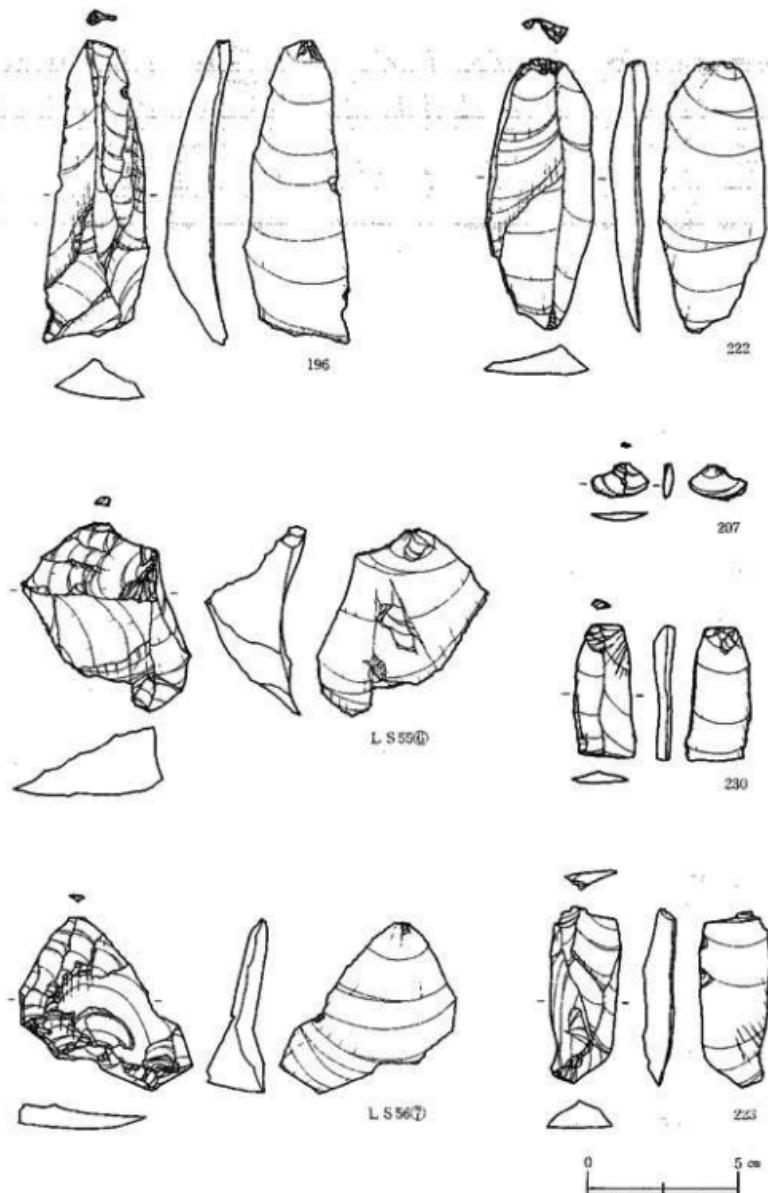
046



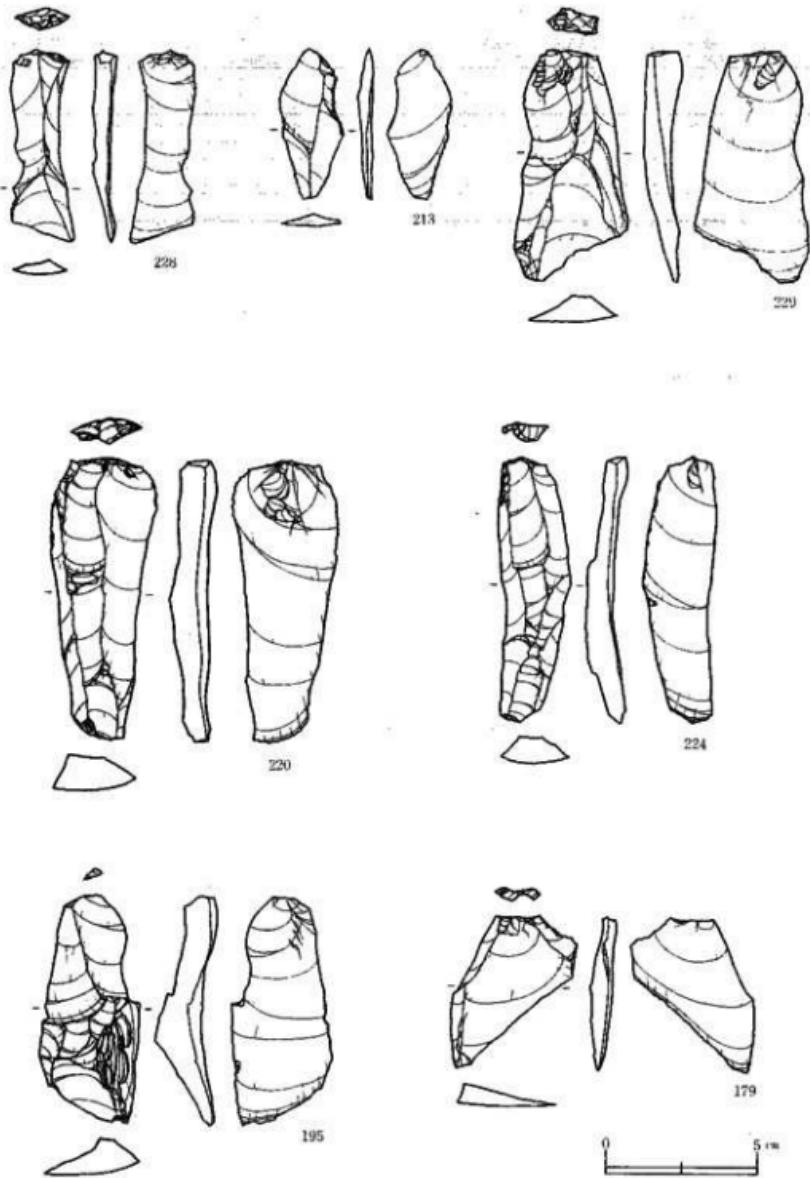
第15図 個体No. 1 (2)



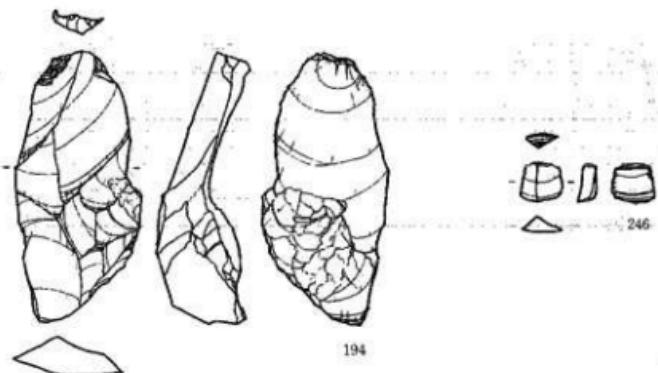
第16図 個体No.1 (3)



第17図 個体No.1 (4)

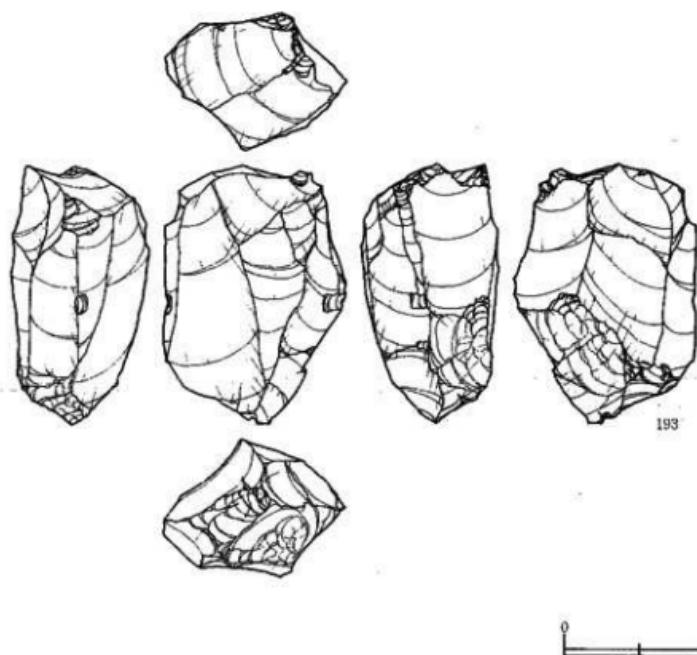


第18図 個体No. 1 (5)



194

246



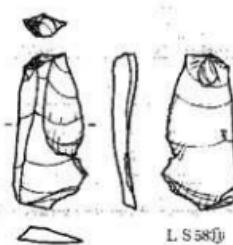
193

0 5 cm

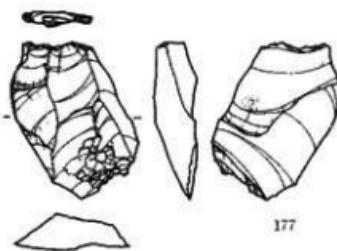
第19図 個体No. 1 (6)



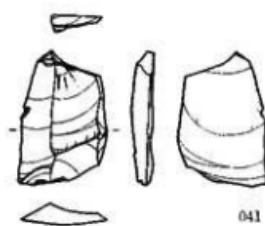
227



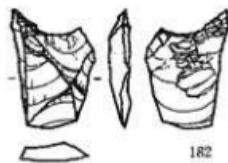
L S 58(j)



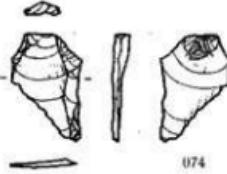
177



041



182



074



178



第20図 個体No.1(接合外)

第4節 ブロック構成とブロック間の関係

1. 器種組成（付図9、第2表）

本遺跡のブロックを構成する器種組成は石器の製作・消費・廃棄という観点から、次の3類型に分けることができる。

類型A：製品と10点以上の剝片・碎片で構成されるもの

類型B：欠損した製品と剝片・碎片で構成されるもの

類型C：製品と10点以下の剝片・碎片で構成されるもの

ブロック	K	RS	G	B	S	RF	F	C	CO	PE	計
A		2		11(2)			36	12		1	62(2)
B	1(1)		1	2(1)			23	9		1	37(2)
C	1	1	7				44	16	1		76
D				8(1)			13	1		1	23(1)
E		(1)					16	2			18
F							13	2			15
G							12	5			17
H		1					9	3			13
I	1	1		3			6	1			12
J		1		2	1		1	1			6
K	2		6		2	7	2		1	20	
外				1			6	1		2	10
計	2(1)	8(1)	2	40(4)	1	2	186	66	1	6	309

第2表 ブロック別器種組成表

※グリッド一括資料を除く

類型A

A・B・C・Dブロックがこれに該当する。これらは、ナイフ形石器、搔器、彫器、石刃のいずれかを保有し、剝片剝離作業によって生じる剝片・碎片を14~60点保有し、他のブロックを凌駕している。本遺跡の石器製作作業の中心的なブロックであるとともに、消費の場であったことが予測される。

類型B

E・F・G・Hブロックがこれに該当する。製品で残されているのは、Eブロックにおいては、中央部で折損した搔器の基部で、Hブロックにおいては、同じく中央部で折損した搔器の刃部である。Eブロックにおいては、001+131の搔器の刃部再生剝片も出土している。これらのブロックは、製品が欠損品であり数量的に少ないととも、15点前後の剝片・碎片しか保有していないことから、廃棄の場であったと考えられよう。

類型C

I・J・Kブロックがこれに該当する。ナイフ形石器、搔器、石刃のいずれかを保有し、10点以下の剝片・碎片から構成されるもので、消費の場であったと想定される。

2. 個体別組成（第3表）

個体別資料の保有率からみると、本遺跡のブロックは以下に示すとおり3大別される。

1類：A・Bブロック 個体No.1が主体を占め、他の個体を数点ずつ保有するものである。

小出Ⅳ遺跡

個体NO	单	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	不	計
A	2	40(2)				1			2	2		1		1			2	11	67(2)
B	2(1)	23(1)								1	1			1				9	37(2)
C	8	21	18		1				1	1			1			2		17	70
D	2	8(1)	12														1	22(1)	
E	2	3			4(1)					1							1	6	19
F	1	5				1			1			1	2	3			1	15	
G	1	2		3	1									3			7	17	
H		1			1	1					2		1	1			6	13	
I	2	2		1	2				1	1					1		2	12	
J		3	1		1												1	6	
K	3	6		2	1			2	1		1					1	3	20	
外		3	1		1								1				4	10	
計	23(1)	116(4)	22	3	10	7(1)	1	2	6	5	5	3	4	6	4	3	3	70	309

第3表 ブロック別個体組成表 ... 準グリッド一括資料を除く

2類：C・Dブロック 個体No. 1、No. 2が主体を占め、他の個体を数点ずつ保有するものである。

3類：E～Kブロック 各個体を数点ずつ保有するものであるが、No. 4とNo. 5の保有の有無からさらにE～G、H～Kに細別される。

3. 接合関係とブロック間の関係（付図9、第21図）

ここでは、前節でみてきた個体No. 1の接合資料における剥片剝離工程とその分布から、ブロック間の関係について述べる。

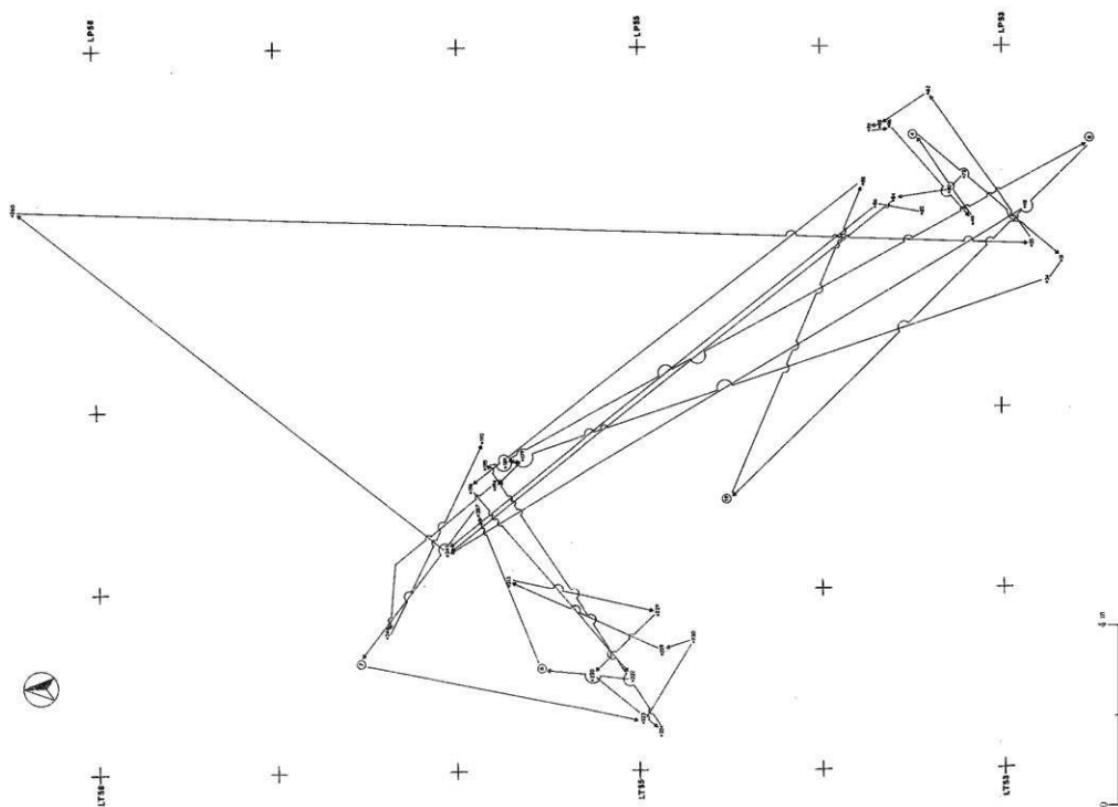
剝片剝離工程にしたがって個体No. 1の動きを示したのが第21図であるが、ブロック名については付図9をあわせて参照いただきたい。

最初に剝離された、078+080、086+082はAブロックに、018と084はBブロックに残されている。続く241はCブロックに、搔器である260はJブロックにあるが、062の打面再生から096まではAブロックに存在し、下設打面に転位してから088までの間には、B→A→B→C→A→C→Aというブロック間での移動がみられる。

196以降では、ブロック間の移動はC・Dブロックに終始する。196・222は、それぞれC・Dブロックにあり、上下の打面再生がCブロックで行われた後、230、223、228は再びDブロックに残されている。続く213がCブロックに戻るもの、上設打面に転位後の229、220、224はDブロックに存在し、195から残核の193まではCブロックに残されていた。

全体を通してみると、剝片剝離作業の前半(078から031)は主にA・Bブロックで行なわれ、後半(196から193)はC・Dブロックで行なわれたことがわかる。また、両者の過渡期(189から088)には、A・Cブロック間の関係も想定される。

図21 條体(No.1)複合開拓図



接合関係からみるならば、A・Bブロック、C・Dブロックがそれぞれ強固な関係を保ち、1個の石核を共有しながらそれぞれにおいて剝片剥離作業を行っていたことと、A・B→C・Dという前後関係のあったことが指摘できよう。また、打面再生、打面転位がブロック間の移動の契機となっているとは必ずしも言い難く、打面再生剝片がA・Cブロックに残され、剝片・碎片の数量もA・CブロックがB・Dブロックを凌駕していることから、A・Cブロックが石核調整をはじめとする剝片剥離作業を主体的に行った場であり、B・Dブロックはそれに付随する形で剝片剥離作業を行った場と想定される。

第5節 遺跡の構造

前節でみてきたブロック構成とブロック間の関係から、本遺跡の構造について推察する。

本遺跡の石器製作作業は、個体No. 1のあり方からA・Bブロック、C・Dブロックがそれぞれ主従の関係を保ちながら個体を共有して行われており、なおかつA・BブロックからC・Dブロックへと個体が移動していることがわかった。

このA・Bブロック、C・Dブロックを併存とするか前後関係とするかは、個体No. 2の存在に注目して考えてみたい。個体No. 2は、C・Dブロックにおいてのみ認められた個体であり、黒曜石という原産地の限定された石材であることから、遺跡で占める割合も低く貴重な存在であったと思われる。

A・Bブロック、C・Dブロックを仮に2単位集団の併存とすると、個体No. 1の共有関係から見る限り両者の関係は密接であり、その中で黒曜石を共有しないことは、いささかの疑問が残る。したがってこの場合は、A・BブロックからC・Dブロックへという剝片剥離作業の動きを1単位集団の動きとして捉え、1単位集団がA・BブロックからC・Dブロックへと場所を移して石器製作を行ったと解釈したい。これを傍証するものとしては、個体No. 1と個体No. 2の各ブロックでの保有数がある。Aブロックでは、40点、Bブロックでは23点の個体No. 1の保有数に対しCブロックではその数が21点、Dブロックでは8点と減少する。ところが個体No. 2の保有数がCブロックで18点、Dブロックで12点あり、それをC・Dブロックの個体No. 1の保有数に加えると、その数は、Cブロックで40点、Dブロックで20点となり、これはA・Bブロックの個体No. 1の保有数にはほぼ匹敵することになる。おそらく、C・Dブロックでは個体No. 1の保有数の減少を補うために、個体No. 2を補足したものと考えられる。

また、A・Cブロック、B・Dブロックは、それぞれブロックの規模と性格に共通性が認められることから、AからCブロック、BからDブロックへと移動したことが想定される。個体No. 1の接合関係がA・Cにおいて認められたことも、このことの証左となろう。

では、これらのブロックと他のブロックとの関係はどうであろうか。個体No. 1は量的には偏在するものの、AからKまでの各ブロックで保有されており厳密にみるならば、A・BブロックからC・Dブロックへと移動はあるものの、すべてのブロックが同一時期に形成されたことを物語っている。

ここで、器種組成からみたブロック類型に戻ってみると、類型Bと類型Cのブロックが、類型Aとどのような関係にあるのかが問題となつてこよう。

前節で類型Bは廃棄の場、類型Cでは消費の場と想定した。これらのブロックの中で接合関係をもつのは、AブロックとE・Jブロックであり、E・Jブロックは、Aブロックに付随して廃棄、消費を行つた可能性がある。他のブロックについては、接合関係をもたないことから、ブロック間の関係を厳密に捉えることはできないが、廃棄の場とした類型Bのブロックが、石器製作、消費の場とした類型Aブロックの中間地点に分布することと、消費の場とした類型Cが舌状台地の先端部に並んでいる状況は、我々に本遺跡の構造を示唆するものに他ならない。

つまり、2つの主従の関係にあるブロック（2世帯と想定する）からなる1単位集団が、個体No. 1の母岩を共有して、最初に石器製作を行つた場がA・Bブロックであり、同時にそこでは消費も行われた。ここでの不要物は、Eブロックをはじめとする周辺部に廃棄され、この段階での消費は、台地縁辺部のJブロックにも及ぶこととなつた。

続いて、石器製作の場はC・Dブロックに移り、Aの世帯はCへ、Bの世帯はDへ移動した。ここでも、石器製作とともに消費が行われ、不要物は、A・Bブロックとの中間部に廃棄され、消費活動は、K・Iブロックなどの台地縁辺部に及んでいたと想定されるわけである。

したがつて、本遺跡は、2世帯からなる1単位集団の石器製作と消費、そして廃棄によって形成されたと言つてよい。

註1 ここでの分析の視点及び方法は、すべて砂川遺跡における研究に基づいている。

戸沢充則 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』 第4巻第1号 東京考古学会
1968(昭和43年)

砂川遺跡調査団 『砂川先土器時代遺跡 埼玉県所沢市砂川遺跡の第2次調査』 所沢市教育委員会 1974(昭和49年)

註2 A・B・C・Dの各ブロックが製品を定量的に保有していることと、C・Dブロックにおける受熱石器のあり方が2つの場所を想起させることから、各々を独立したものと捉え、これを世帯と仮定する。

小野 昭 「後期旧石器時代の集団関係」『考古学研究』 第22巻第4号 考古学研究会
1976(昭和51年)

遺物NO	グリット	S	N	E	W	標	高	器種	石	材	個体NO	ブロック	長	幅	厚	重	持因NO	受照
001	L Q52	188	361	31.428	E S	真	岩	5	A	123	43	21	67.96	5				
002	L Q52	214	379	31.491	C	タ	不		A									
003	L Q52	248	266	31.615	F	タ		1	A									
004	L P52	226	20	31.539	F	タ		1	A									
005	L P52	223	33	31.632	F	タ		1	A									
006	L P52	218	38	31.635	F	タ		1	A									
007	L P52	271	27	31.644	F	チャート		1	A									
008	L P52	351	27	31.576	F	真	岩	1	A									
009	L P52	89	252	31.454	F	タ		1	B									
010	L P52	146	282	31.607	F	タ	単		B									
011	L P52	238	218	31.710	F	タ		1	B									
012	L P52	312	235	31.722	F	タ		1	B									
013	L P52	224	305	31.673	F	タ		1	B									
014	L P52	395	173	31.685	C	玉	髓	1	A									
015	L P52	366	310	31.641	F	タ		1	B									
016	L P52	399	361	31.670	F	真	岩	9	B									
017	L P52	383	355	31.550	F	タ		1	B									
018	L P52	359	353	31.764	G	タ		1	B	64	50	15	34.36	7-14				
019	L P52	324	362	31.679	F	タ		1	B									
020	L P52	348	379	31.737	F	タ	不		B								H	
021	L Q52	344	5	31.660	F	タ		1	B									
022	L Q52	355	6	31.657	F	タ		1	B									
023	L Q52	351	15	31.699	F	タ		1	B									
024	L Q52	374	17	31.607	F	タ		1	B									
025	L Q52	334	38	31.709	F	タ		1	B	27	11.5	2.5	0.61	15				
026	L Q52	315	58	31.597	C	タ	不		B									
027	L Q52	284	56	31.669	C	タ		1	B									
028	L Q52	262	40	31.609	C	タ		1	B									
029	L Q52	255	63	31.676	F	タ	不		B									
030	L Q52	254	268	31.674	P E	タ	不		B									
031	L Q52	268	70	31.743	B	タ		1	B								16	
032	L Q52	288	84	31.696	C	タ	不		B									
033	L Q52	289	91	31.690	C	タ	不		B									
034	L Q52	300	120	31.706	B	タ		1	B	25	24	9	18.03	16				
035	L Q52	231	188	31.671	F	タ		13	B									
036	L Q52	335	81	31.761	F	タ		1	B									
037	L Q52	358	102	31.463	C	タ	不		B									
038	L Q52	394	123	31.662	F	タ		1	B									
039	L Q53	10	164	31.809	K	タ	単		B	68	36	11	49.06	4				
040	L Q53	50	156	31.765	K	タ	単		B	68	36	12	49.06	4				
041	L Q53	23	63	31.651	F	タ		1	B	44.5	39.5	7	8.11	20				
042	L Q53	20	69	31.615	C	タ	不		B									
043	L Q53	48	63	31.661	C	タ		1	B									
044	L Q53	69	45	31.822	B	タ		10	B	81.5	33	10	17.07	11				
045	L Q53	64	11	31.595	F	タ	不		B								H	
046	L P53	65	391	31.620	F	タ		1	B	59.5	36	10	9.86	15				
047	L P53	68	382	31.558	C	タ		1	B									
048	L P53	11	347	31.622	F	タ		1	B									

第4表 旧石器属性表(1)

小出IV遺跡

遺物NO	グリッド	S N	E W	標 高	器種	石 材	個体NO	ブロッ ク	長	幅	厚	重	持國NO	受熱
049	L P53	57	292	31.676	C	頁 岩	1	A						
050	L P53	55	287	31.676	F	"	1	A						
051	L P53	35	200	31.661	P E	"	不	A						
052	L P53	23	194	31.512	F	"	1	A						
053	L P53	60	158	31.570	C	"	1	A						
054	L P53	105	145	31.653	F	"	1	A						
055	L P53	99	136	31.690	C	"	不	A						
056	L P53	126	108	31.709	F	"	不	A					H	
057	L P53	95	18	31.795	F	"	9	A						
058	L P53	90	21	31.753	F	"	1	A						
059	L P53	193	64	31.702	B	"	16	A	99.5	26	11.5	18.35	9	
060	L P53	188	78	31.650	B	"	16	A						
061	L P53	167	86	31.652	F	"	單	A						
062	L P53	161	105	31.742	F	"	1	A	67	47	18	17.41	15	
063	L P53	154	113	31.470	C	"	1	A						
064	L P53	126	228	31.772	F	"	1	A						
065	L P53	250	182	31.665	C	"	1	A						
066	L P53	156	267	31.721	C	"	不	A					H	
067	L P53	157	272	31.715	F	"	1	A						
068	L P53	140	260	31.706	F	"	1	A						
069	L P53	157	287	31.695	F	"	1	A						
070	L P53	124	296	31.748	F	"	不	A					H	
071	L P53	123	297	31.754	F	"	1	A						
072	L P53	119	272	31.745	F	"	1	A						
073	L P53	110	275	31.740	F	"	1	A						
074	L P53	129	284	31.738	F	"	1	A	36	23	5.5	2.34	20	
075	L P53	105	263	31.737	F	"	1	A						
076	L P53	108	259	31.742	F	"	8	A						
077	L P53	88	266	31.743	F	"	1	A						
078	L P53	82	289	31.713	B	"	1	A	23	23	9	18.88	14	
079	L P53	97	322	31.509	C	"	1	A						
080	L P53	115	325	31.745	B	"	1	A	56	36	11	18.88	14	
081	L P53	110	367	31.850	B	"	1	A	87	25	10	21.44	9	
082	L P53	176	372	31.565	B	"	1	A	57	37	10	23.69	14	
083	L P53	212	367	31.794	B	"	1	A	27	23	8	21.44	9	
084	L P53	242	342	31.875	B	"	1	A	122.5	43	16	52.62	14	
085	L P53	230	309	31.807	E S	"	單	A	83.5	47	19	59.58	6	
086	L P53	283	353	31.749	B	"	1	A	49	34	10	23.69	14	
087	L P53	284	342	31.713	F	"	1	A						
088	L P53	308	305	31.860	B	"	1	A	73	33	9	11.31	16	
089	L P53	315	278	31.730	C	"	不	A						
090	L P53	320	267	31.765	F	"	1	A					*	
091	L P53	325	349	31.556	F	"	不	A						
092	L P53	337	195	31.707	C	"	不	A						
093	L P53	322	188	31.787	F	"	11	A						
094	L P53	295	185	31.770	B	"	1	A	89.5	40	12	20.50	15	
095	L P53	269	178	31.743	F	"	1	A	43.5	43	10.5	9.94	15	
096	L P53	250	175	31.788	B	"	1	A	105	28	12	22.89	15	

第4表 旧石器属性表(2)

遺物NO	グリッド	S N	E W	標 高	番種	石 材	個体NO	ブロック	長	幅	厚	重	押送NO	受領
097	L P53	227	170	31.752	B	頁 岩	9	A						
098	L P53	261	164	31.767	F	〃	8	A						
099	L P53	1	124	31.637	F	〃	1	A						
100	L O53	356	380	31.578	F	〃	14	G						
101	L P53	114	293	31.644	C	〃	1	A						
102	L P53	118	299	31.663	F	〃	13	A						
103	L R53	4	33	31.672	F	〃	13	F						
104	L R53	4	147	31.592	F	〃	13	F						
105	L R53	12	167	31.623	F	〃	13	F						
106	L R53	65	318	31.700	織文									
107	L R53	82	172	31.490	F	〃	1	F						
108	L R53	155	234	31.488	F	〃	1	F					H	
109	L R53	160	232	31.488	F	〃	5	F						
110	L R53	164	234	31.488	C	〃	1	F						
111	L R53	202	296	31.547	F	〃	12	F						
112	L R53	318	398	31.593	F	〃	1	F						
113	L S53	278	34	31.602	F	〃	12	F						
114	L S53	182	14	31.590	F	〃	単	F						
115	L S53	296	111	31.582	C	〃	不	F						
116	L S53	260	123	31.658	F	〃	11	F						
117	L S53	30	71	31.711	F	〃	8	F						
118	L S52	380	92	31.656	F	〃	1	F						
119	L R54	226	164	31.497	F	〃	1	外					H	
120	L R54	332	152	31.524	F	〃	不	外					H	
121	L Q54	238	390	31.585	B	〃	1	外	52	15	5	4.37	12	
122	L Q54	126	251	31.490	F	〃	単	E						
123	L Q54	112	183	31.558	F	〃	不	E					H	
124	L Q54	208	212	31.485	C	〃	不	E						
125	L Q54	183	172	31.552	F	〃	1	E						
126	L Q54	207	138	31.731	織文									
127	L Q54	256	105	31.638	F	〃	16	E						
128	L Q54	274	113	31.596	F	〃	9	E						
129	L Q54	249	59	31.622	F	〃	5	E						
130	L Q54	263	74	31.625	F	〃	不	E						
131	L Q54	315	78	31.749	E S	〃	5	E	123	43	21	67.96	5	
132	L Q54	341	30	31.592	F	〃	5	E						
133	L Q54	350	35	31.530	F	〃	不	E						
134	L P54	39	365	31.785	F	〃	5	E						
135	L P54	220	356	31.691	F	〃	不	E						
136	L P54	259	346	31.646	F	〃	不	E						
137	L P54	278	368	31.497	C	〃	不	E						
138	L P54	287	360	31.498	F	〃	5	E						
139	L P54	86	106	31.495	F	〃	1	G						
140	L P54	148	96	31.550	F	〃	不	G						
141	L P54	159	114	31.573	F	〃	14	G						
142	L P54	315	107	31.503	F	〃	14	G						
143	L P54	305	67	31.543	C	〃	不	G						
144	L P54	303	26	31.511	C	〃	不	G						

第4表 旧石器属性表(3)

遺物NO	グリッド	S N	E W	標 高	器種	石 材	個体NO	ブロック	長	幅	厚	重	坪圖NO	受熱
145	L O54	119	325	31.530	C	真 磨	不	G						H
146	L O54	124	342	31.525	F	"	不	G						
147	L O54	112	366	31.543	C	"	不	G						
148	L O54	125	377	31.550	F	"	單	G						
149	L O54	212	348	31.505	F	"	4	G						
150	L O55	88	392	31.529	F	"	4	G						
151	L P55	14	108	31.497	F	"	4	G						
152	L P55	49	93	31.545	C	"	不	G						
153	L P55	106	84	31.528	F	"	1	G						
154	L P55	65	140	31.527	F	"	5	G						
155	L P55	153	255	31.707	F	"	4	H						
156	L P55	339	101	31.580	F	"	10	H						
157	L P55	310	292	31.751	E S	"	6	H	58.5	34.5	10	18.19	7	
158	L P55	395	320	31.570	C	"	不	H						H
159	L P56	5	333	31.494	F	"	10	H						
160	L P56	11	158	31.522	F	"	1	H	32.5	34.5	13	14.03		
161	L P56	18	157	31.520	F	"	13	H						
162	L P56	169	391	31.598	F	"	12	H						
163	L P56	172	389	31.595	C	"	不	H						H
164	L Q55	334	26	31.590	F	"	不	H						
165	L Q55	317	114	31.585	F	"	不	H						
166	L Q55	368	82	31.636	F	"	不	H						
167	L Q55	83	337	31.520	F	"	不	C						
168	L Q55	304	348	31.570	F	"	不	C						
169	L Q56	48	6	31.610	C	"	不	H						
170	L Q56	226	380	31.520	B	"	15	C	33	27.5	9.5	10.00	12	
171	L R55	36	46	31.522	B	"	4	C						
172	L R55	85	75	31.600	C	"	不	C						
173	L R55	115	131	31.420	C	"	不	C						
174	L R55	160	170	31.500	F	玉 銚	15	C	89	27	10.5	17.66	10	
175	L R56	63	253	31.438	F	真 岩	車	C						
176	L R56	240	78	31.662	F	"	1	C						
177	L R55	243	101	31.510	F	"	1	C	52	41	14	18.72	20	H
178	L R55	252	101	31.505	F	"	1	C	28.5	16	4	1.17	20	H
179	L R55	253	105	31.553	F	"	1	C	51	41	8	8.06	18	
180	L R55	254	114	31.546	F	黑曜石	2	C						H
181	L R55	253	120	31.539	F	"	2	C						H
182	L R55	252	142	31.577	F	真 岩	1	C	39	27.5	7	5.52	20	H
183	L R55	239	165	31.529	C	黑曜石	2	C						H
184	L R55	262	137	31.545	F	"	2	C						H
185	L R55	257	152	31.580	F	真 岩	1	C						H
186	L R55	279	167	31.527	C	"	不	C						
187	L R55	288	153	31.552	F	黑曜石	2	C						H
188	L R55	284	145	31.553	F	真 岩	2	C						H
189	L R55	300	125	31.611	B	"	1	C	74	25.5	14	14.70	16	
190	L R55	308	102	31.620	B	"	單	C	78	42	11	24.56	10	
191	L R55	322	92	31.495	F	黑曜石	2	C						H
192	L R55	311	35	31.751	E S	真 岩	單	C	75	27	10	16.52	6	

第4表 旧石器属性表(4)

遺物NO	グリッド	F	S	N	E	W	標高	器種	石材	個体NO	ブロック	長	幅	厚	重	標図NO	受類
193	L R 55	347	70	31.700	C O	真 岩	1	C	95	61	45	234.21	19				
194	L R 55	322	172	31.590	F	々	1	C	95	42	30.5	63.90	19				
195	L R 55	343	129	31.654	F	々	1	C	76	33	20	24.41	18				
196	L R 55	375	182	31.605	B	々	1	C	101	35	21	35.07	17				
197	L R 55	353	173	31.546	F	黒曜石	2	C								H	
198	L R 55	334	149	31.515	F	真 岩	平	C									
199	L R 55	348	155	31.525	F	々	不	C									
200	L R 55	363	24	31.580	F	々	9	C									
201	L R 55	390	40	31.711	B	々	単	C	40	15	5	2.82	12				
202	L R 55	395	120	31.551	F	黒曜石	2	C								H	
203	L R 55	398	133	31.463	F	々	2	C								H	
204	L R 55	397	240	31.437	F	真 岩	1	C									
205	L R 55	392	264	31.400	F	々	単	C									
206	L R 55	395	276	31.388	F	黒曜石	2	C								H	
207	L R 55	361	232	31.342	F	真 岩	1	C	11.5	19	3	0.49	17				
208	L R 55	365	246	31.330	C	々	不	C									
209	L R 55	313	210	31.480	F	黒曜石	2	C								H	
210	L R 55	287	253	31.476	G	々	2	C	58	29.5	12	8.77	7	H			
211	L R 55	304	275	31.356	F	真 岩	1	C									
212	L R 55	293	347	31.462	F	々	単	C									
213	L R 55	290	388	31.420	F	々	1	C	50	21	5	3.21	18				
214	L R 55	387	337	31.398	F	黒曜石	2	C								H	
215	L S 55	323	10	31.270	C	真 岩	不	C									
216	L S 55	333	48	31.318	F	々	1	C									
217	L S 55	197	13	31.459	F	々	12	C									
218	L S 55	148	180	31.202	F	黒曜石	2	D								H	
219	L S 55	145	221	31.115	F	々	2	D								H	
220	L S 55	100	197	31.233	B	真 岩	1	D	93.5	35	15	36.56	18				
221	L S 55	71	294	31.137	F	黒曜石	2	D								H	
222	L S 55	6	198	31.381	B	真 岩	1	D	90	40.5	12	26.65	17				
223	L S 54	395	294	31.214	B	々	1	D	58	23.5	10.5	12.14	17				
224	L S 54	355	323	31.270	B	々	1	D	93.5	27	14	14.30	18				
225	L S 54	397	182	31.399	B	々	単	D	86	24	8	9.45	10				
226	L S 54	383	183	31.398	F	々	単	D									
227	L S 54	372	189	31.435	B	々	1	D	75.5	20.5	7	6.18	20				
228	L S 54	355	141	31.450	B	々	1	D	64	21	8	6.40	18				
229	L S 54	363	55	31.585	B	々	1	D	77	37.5	12	20.69	18				
230	L S 54	285	113	31.505	B	々	1	D	44.5	20.5	7	4.43	17				
231	L S 54	320	129	31.380	F	黒曜石	2	D								H	
232	L S 54	290	153	31.357	F	真 岩	1	D								H	
233	L S 54	335	171	31.337	F E	々	不	D									
234	L S 54	332	187	31.318	F	黒曜石	2	D								H	
235	L S 54	359	197	31.346	F	々	2	D								H	
236	L S 54	370	170	31.280	F	々	2	D								H	
237	L S 54	368	158	31.205	F	々	2	D								H	
238	L R 56	26	97	31.479	F	々	2	C								H	
239	L R 56	5	129	31.474	C	真 岩	不	C								H	
240	L R 56	43	146	31.397	F	々	1	C									

第4表 旧石器属性表(5)

小出Ⅳ遺跡

遺物NO	グリッド	S N	E W	標 高	器種	石 材	個体NO	ブロック	長	幅	厚	重	柄國NO	受熱
241	L R 56	26	320	31.356	B	真 岩	1	C	132	43.5	21	62.21	14	
242	L R 56	58	287	31.282	C	々	1	C						
243	L R 56	114	148	31.263	F	黒 雷 石	2	C						H
244	L R 56	259	61	31.369	F	真 岩	1	C						
245	L S 56	193	53	31.168	F	〃	基	C						
246	L S 56	157	99	31.067	F	〃	1	C	13	14	6	0.95	19	
247	L S 57	115	59	31.000	F	〃	不	I						II
248	L S 57	272	156	31.837	K	〃	基	I	96	33	12	26.74	4	
249	L S 57	357	204	31.603	B	〃	8	I	22.5	22	3	1.74	12	
250	L S 57	400	187	31.744	E S	〃	10	I	74	33.5	15	26.74	6	
251	L R 57	5	310	31.149	F	〃	3	I						
252	L R 57	182	278	31.002	F	〃	1	I						H
253	L R 57	2	170	31.170	F	黒 雷 石	2	外						H
254	L Q 57	2	269	31.426	F	真 岩	不	外						H
255	L Q 57	7	268	31.431	F	〃	4	外						H
256	L Q 57	359	304	31.097	F	〃	7	K						
257	L P 57	334	372	31.220	C	〃	不	J						H
258	L P 57	387	378	31.170	B	〃	1	J	50	26	8	7.81	12	
259	L P 58	169	273	31.235	S	〃	4	J	76	53	20	91.33	8	
260	L P 58	182	360	31.175	E S	〃	1	J	97	39.5	13	32.03	6-15	
261	L Q 58	21	3	31.161	B	〃	1	J	53	31	6.5	8.37	12	H
262	L Q 58	129	74	31.115	F	黒 雷 石	2	J						H
263	L Q 58	180	303	31.170	E S	真 岩	單	K	103	33	14	33.71	6	
264	L Q 58	247	337	31.112	R F	王 磬	15	K	57	51	18.5	55.30	7	
265	L Q 58	350	210	31.084	B	真 岩	3	K	78.5	38	18	14.08	11	
266	L Q 58	375	207	31.031	C	々	不	K						
267	L Q 58	377	199	31.050	F	〃	1	K						
268	L Q 58	363	347	31.165	F	〃	4	K						
269	L Q 58	369	345	31.142	F	〃	8	K						
270	L Q 58	398	340	31.095	R F	〃	1	K						
271	L R 58	202	28	31.173	B	〃	10	K						
272	L R 58	192	28	31.084	B	〃	1	K	61	46.5	11.5	31.61	11	
273	L R 58	188	30	31.084	F	〃	1	K						H
274	L R 58	253	337	30.907	C	〃	1	外						
275	L R 58	346	317	30.935	P E	〃	不	外						
276	L R 58	352	315	31.935	P E	〃	不	外						
277	L R 58	373	145	31.043	P E	〃	不	K						
278	L R 59	31	56	31.016	F	〃	1	K						
279	L R 59	103	30	31.025	C	〃	不	K						
280	L R 59	193	35	31.118	E S	〃	單	K	143	62	18	119.90	5	
281	L R 59	382	108	30.984	B	〃	1	K	34.5	29.5	15	16.19	12	
282	L Q 59	200	307	31.124	B	〃	7	K	86.5	45.5	16	39.52	11	
283	L Q 59	83	267	31.115	F	〃	基	K						
284	L Q 59	33	69	31.221	B	〃	3	K	125	45	14.5	44.89	11	
285	L P 53	295	294	31.690	F	〃	不	A						H
286	L Q 54	104	179	31.546	F	〃	1	E						
287	L Q 54	187	171	31.496	F	〃	單	E						
288	L Q 54	254	59	31.579	F	〃	不	E						

第4表 旧石器属性表(6)

遺物NO	グリッド	S N	E W	標 高	器種	石 材	體体NO	ブロック	長	幅	厚	重	持國NO	受熱
289	L R55	240	97	31.432	C	黒曜石	2	C						H
290	L R55	243	101	31.497	C	頁 岩	不	C						H
291	L R55	249	111	31.468	C	々	不	C						H
292	L R55	274	157	31.347	C	々	不	C						H
293	L R55	300	122	31.576	F	々	不	C						
294	L R55	303	105	31.513	C	々	不	C						H
295	L R55	306	104	31.516	C	々	不	C						H
296	L R55	345	62	31.655	F	々	8	C						
297	L R55	354	67	31.686	C	々	不	C						H
298	L R55	358	73	31.610	F	黒曜石	2	C						H
299	L R55	342	184	31.382	C	頁 岩	不	C						H
300	L S54	360	148	31.271	F	黒曜石	2	D						H
301	L S54	362	181	31.268	F	々	2	D						H
302	L S54	362	187	31.248	C	々	2	D						H
303	L S55	5	190	31.307	F	々	2	D						H
304	L S57	221	153	30.819	C	頁 岩	不	I						H
305	L S57	353	23	30.870	F	々	4	I						
306	L S57	343	58	30.723	F	々	4	I						
307	L P53	294	294	31.689	F	々	不	A						
308	L S57	64	170	30.769	F	々	1	I						H
309	L S57	287	145	30.750	B	々	14	I	72	18	12	8.00	10	
310	L S57	293	148	30.731	B	々	單	I	70.5	32.5	13.5	29.12	11	
311	L R54	133	104	31.086	F	々	11	外						
①	L T55				B	々	4		129.5	45	18	66.35	9	
②	L S51				R F	々	單		73	31.5	12	24.54	7	
③	L S56				B	々	4		82.5	40.5	13	31.06	10	
④	L P53				F	々	1		65	32.5	13	17.60	16	
⑤	L Q54				F	々	1		38	23.5	6	5.26	12	
⑥	L S55				F	々	1		63	56	32	44.97	17	
⑦	L S56				F	々	1		57	58	19	24.05	17	
⑧	L P52				F	々	1		37	21.5	6	4.18	16	H
⑨	L NS2				織文									
⑩	L Q60				B	々	10		72	31.5	10.5	24.54	10	
⑪	L S58				B	々	8		51	25	8	6.64	20	
⑫	L S56				B	々	8		29	32	12	9.09	12	
⑬	L R57				B	々	6		51.5	14.5	5.5	3.98	12	
⑭	L Q46				B	々	單		148	56.5	24	100.95	8	
⑮	L S57				B	々	單		116.5	36	17	36.12	9	
⑯	L T55				K	々	單		128	47	20	109.34	4	
⑰	L S57				E S	々	3		94.5	36	24	44.89	6	
⑱	L T55				E S	々	單		72	33	12	26.70	7	
⑲	L S55				B	々	1		90.5	24.5	15	23.96	16	

第4表 旧石器属性表(7)

第3章 繩文時代

第1節 遺構と出土遺物

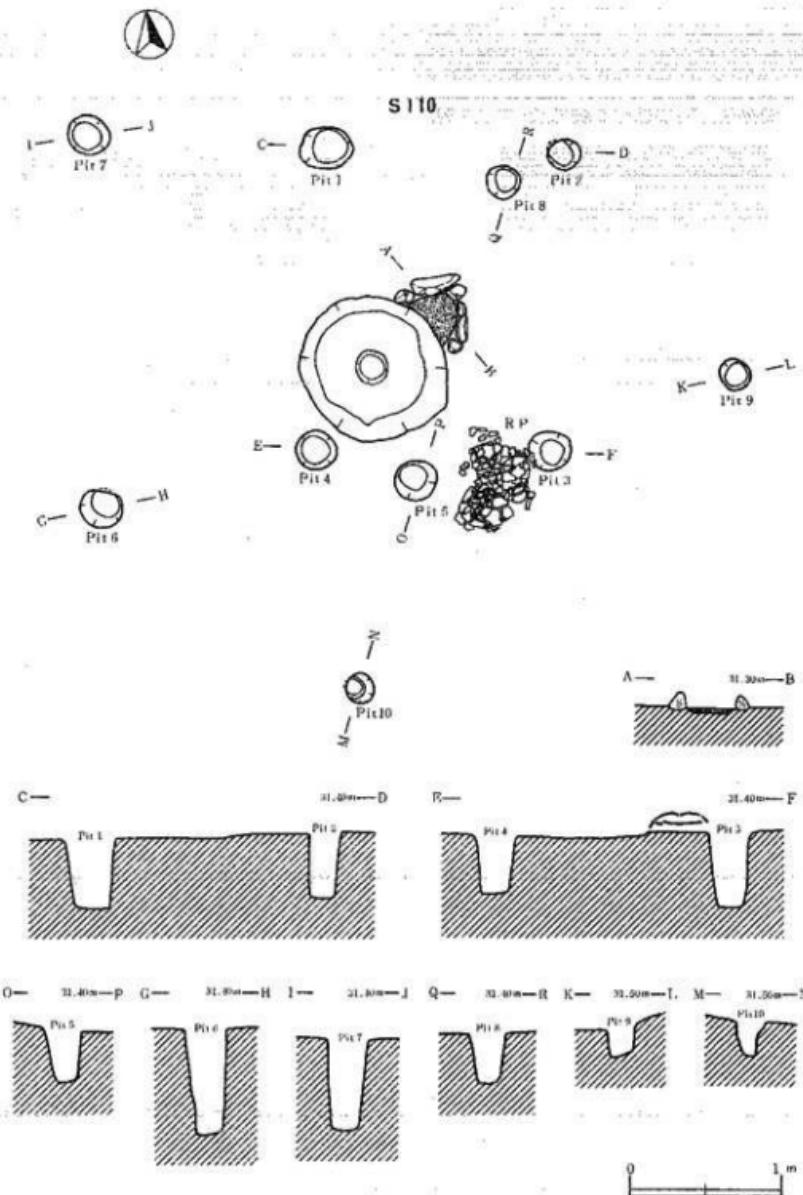
1. 壺穴住居跡

S 110 (第3・22図、図版14)

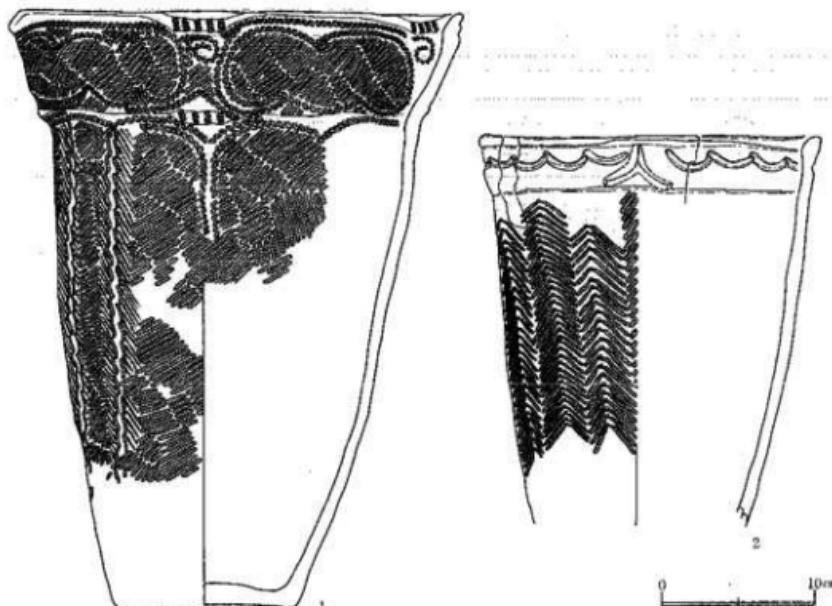
LQ57・58グリッドで検出された。本壺穴住居跡が位置する箇所は畠地整地時の抜根と掘り返しなどによって、第IIa層と上部層が大分攪乱を受けており、壁はその際に削平されたものと考えられ検出されなかつたが、LQ57グリッドの北側中央部の第IIa層上面に石圓炉と、この周囲に柱穴と考えられるピットが検出されたため、壺穴住居跡と判断した。また、SK19と重複しており、新旧関係は石圓炉の西側半分を切っているSK19が新しい。

住居跡のはば中央部に付設されたと思われる石圓炉は、SK19に切られており全容を把握できなかつたが、遺存する石圓炉の長軸(北西—南東)は54cmで、短軸(北東—南西)は33cmである。炉壁に用いられた6個の碟が遺存していて、それが半円状を呈していることから、全体の形状はほぼ円形を呈していたものと推定される。石圓炉は床面を幾らか掘りくぼめて、その中に碟を固定して配置しており、6個の碟は、内側が火熱を受けて赤変していた。ピットは石圓炉を中心としてPit1～Pit10の10個が検出された。このうち、石圓炉を中心点として、ほぼ同じ距離に位置するPit1～Pit4の4個のピットが主柱穴と思われ、Pit5～Pit10は支柱穴と思われる。これらのピットの平面形はほぼ円形を呈しており、Pit1は径36cm・深さ47cm、Pit2は径22cm・深さ43cm、Pit3は径27cm・深さ50cm、Pit4は径28cm・深さ40cm、Pit5は径28cm・深さ34cm、Pit6は径28cm・深さ66cm、Pit7は径27cm・深さ61cm、Pit8は径23cm・深さ32cm、Pit9は径21cm・深さ19cm、Pit10は径20cm・深さ23cmを測る。これらのピットの覆土はしまりが弱く、明黄褐色土粒子と炭化物を少量含む黒褐色土の単層で、柱痕跡は認められなかつた。床面は、ほぼ平坦である。本壺穴住居跡は、ピットの位置関係から径5mほどの円形を呈するプランであったものと推定される。

遺物は、石圓炉の南縁より南東へ57cmの床面上から、第23図1・2の2個体分の繩文土器が、1が2の上に重なり合って横位に潰れた状態で出土した。1は底部から外傾して立ち上がり、頸部で弱く屈折し、内湾ぎみの口縁部に至る深鉢形土器である。口径29.01cm、器高39.5cm、底径11.4cmを測る。口縁部文様帶は地文にR L繩文を継位回転施文した後、L R原体の側面圧痕による連弧状の区画文が5単位配置されている。各単位区画文間の上下には原体圧痕が継位に4～5条施され、その上位にはさらに渦巻状の側面圧痕が加えられている。体部には



第22図 壇穴住居跡 S 110



第23図 S110出土土器

R L 繩文を縦位と横位に回転施文した後、体部上端に L R 原体の側面圧痕を連弧状に施し、さらにこれに連繋して2つの結節がある L R 原体を縦位回転して綾格文を施している。2は体下部から底部にかけてと口縁部を半分ほど欠損している。体下部から口縁部までは外傾して立ち上がる深鉢形土器である。口縁部文様は「人」の字状の隆帯と連弧状の沈線が横位に施文されている。体部には R L と L R 原体による結束の羽状繩文が縦位に施されている。図上復原による口径は22.3cm、残存する器高は25.6cmである。いずれも繩文時代中期前葉に位置づけられると思われる土器である。

2. 土坑

S K 0 2(第3・24図、図版1)

L T51・52、MA51・52グリッドに位置する。第II-a層上面で検出された。平面形は長軸(北東—南西)183cm×短軸(北西—南東)163cmの橢円形を呈し、確認面からの深さ16cmである。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は2層に分けられた。両層ともしよりの弱い軟質土であり、明黄褐色土粒子を少量含んでいる。自然堆積土と思われる。

遺物は繩文土器片と碎片が1点づつ出土した。繩文土器は細片で脆いため図示できなかったが、粘土縫が貼付されているのが認められる土器である。繩文時代中期に位置付けられると思われる土器である。

S K 0 5 (第3・24図、図版15)

L P55・56グリッドに位置する。第II a層上面で検出された。平面形は長軸(北西—南東)118cm×短軸(北東—南西)114cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ54cmである。底面は平坦で、壁は南壁側がオーバーハングしているが、北壁側は急傾斜で立ち上がっている。覆土は6層に分けられた。1～5層は明黄褐色土粒子を少量含んでおり、1～3層はしまりが弱く、4～6層は堅くしまっている。また、5・6層は壁の崩落土であり、他の層は土坑外からの流入土と思われる。

遺物は出土しなかった。

S K 0 6 (第3・24図、図版15)

L Q56グリッドに位置する。第II a層で検出された。平面形は長軸(北東—南西)139cm×短軸(北西—南東)137cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ23cmである。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は2層に分けられた。両層ともしまりの弱い軟質土で、炭化物とにぶい黄褐色土粒子を少量含んでおり、さらに大きさ7～15cmほどの礫を7個含んでいる。これらの礫は1・2層にかけて混在していることから、本土坑は人為的に埋められたものと思われる。また、礫はすべて部分的に焼けており、炉壁として用いられた後に本土坑に捨てられたものと推定される。出土遺物は上記の礫7個である。

S K 0 7 (第3・24図、図版16)

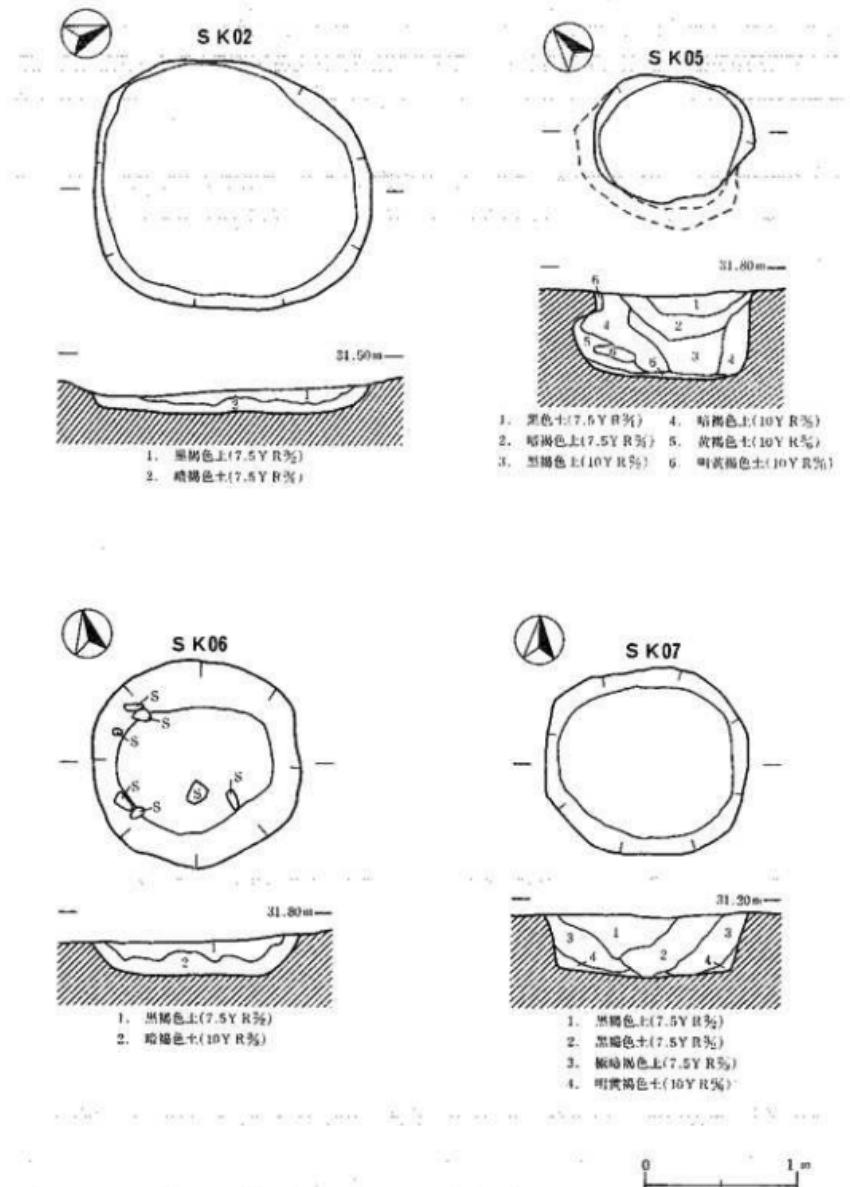
L R58グリッドに位置する。第II a層上面で検出された。平面形は長軸(東西)134cm×短軸(南北)124cmの梢円形を呈し、確認面からの深さ41cmである。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は4層に分けられた。1～3層はしまりが弱く、4層は幾分堅くしまっている。全層とも炭化物と明黄褐色土粒子を少量含んでいる。自然堆積土と思われる。

遺物は出土しなかった。

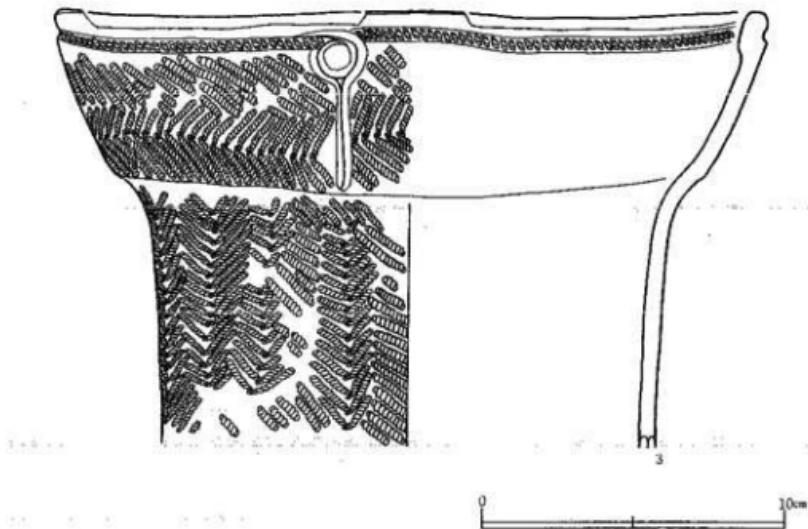
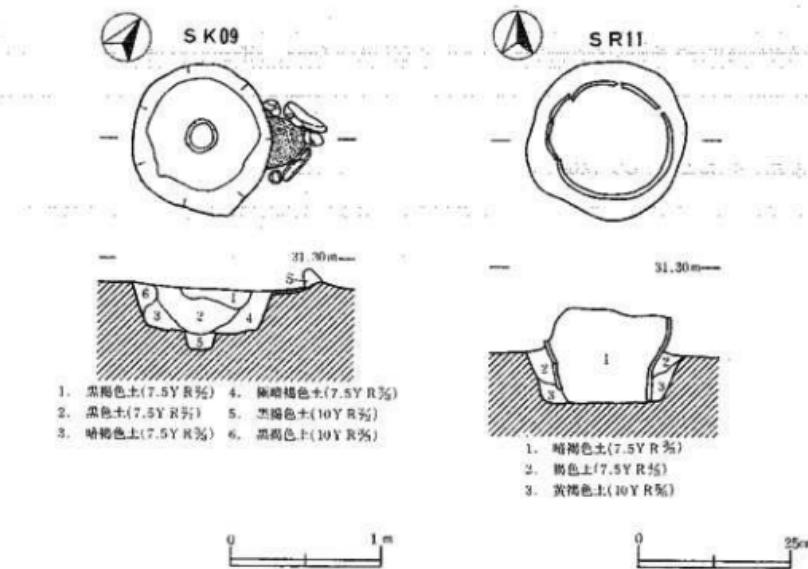
S K 0 9 (第3・25図、図版16)

L Q57グリッドに位置する。第II a層上面で検出された。S I 10と重複しており、同遺構の炉の西側半分を切っている。平面形は長軸(北西—南東)99cm×短軸(北東—南西)92cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ29.5cmである。底面は平坦であるが、その中央部には径22cm、深さ12cmのビットが掘られている。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は6層に分けられた。1層は幾分堅くしまっているが、以外の層はしまりの弱い軟質土である。また、4層は炭化物若干と明黄褐色土粒子を多く含み、他の層は明黄褐色土粒子を少量含んでいる。自然堆積土と

小出W遺跡



第24図 土坑SK02・SK05・SK06・SK07



第25図 土坑SK09・土器埋設造構SR11と埋設土器

思われる。

遺物は縄文土器片が4片出土した。すべて小破片でもろいため図示できなかった。

3. 土器埋設遺構

S R 11(第3・25図、図版17)

L Q57・58、L R57・58グリッドに位置する。第IIa層上面で検出された。上器を埋設するための掘り方の平面形は径26cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ15cmである。底面はほぼ平坦であり、壁は急傾斜で立ち上がっている。この掘り方には、体下部から底部を欠いている深鉢形土器を正位に埋設している。覆土は、3層に分けられた。1層は埋設された土器内の覆土で、2・3層は掘り方内の覆土である。1層はしまりの弱い軟質土で、炭化物を少量含んでいる。2・3層はいずれもしまりの強い硬質土である。

埋設されていた土器(第26図3)は、体部から頸部まではほぼ直線的に立ち上がり、頸部で段を作して、口縁部は内湾ぎみに立ち上がる深鉢形土器である。口縁部文様帶は地文にRL縄文と第一種結束羽状縄文を縦位回転施文した後、縦位に施された粘土紐貼付文によって4単位に区画されており、その区画文を連繋して原体の側面圧痕が口縁と平行に施されている。口径は22.9cmで、残存する器高は14.5cmである。

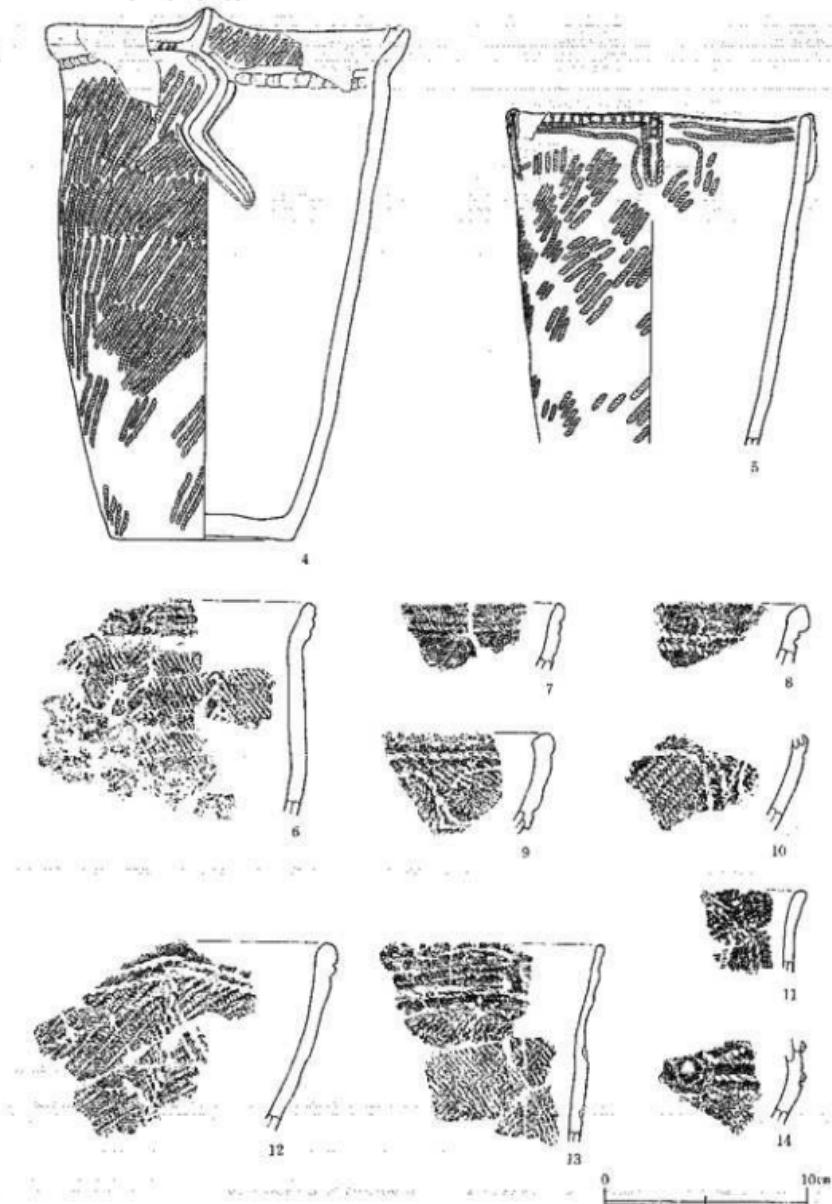
第2節 遺溝外出土遺物

1. 土器

出土した土器は、コンテナ(規格54cm×34cm×9.5cm)で約1箱分である。このうち完形に近い形まで接合復元できたのは2個体で、他はすべて破片資料である。また、出土した土器の多くは、縄文時代中期に位置付けられるものであるが、後期の土器も少量出土した。

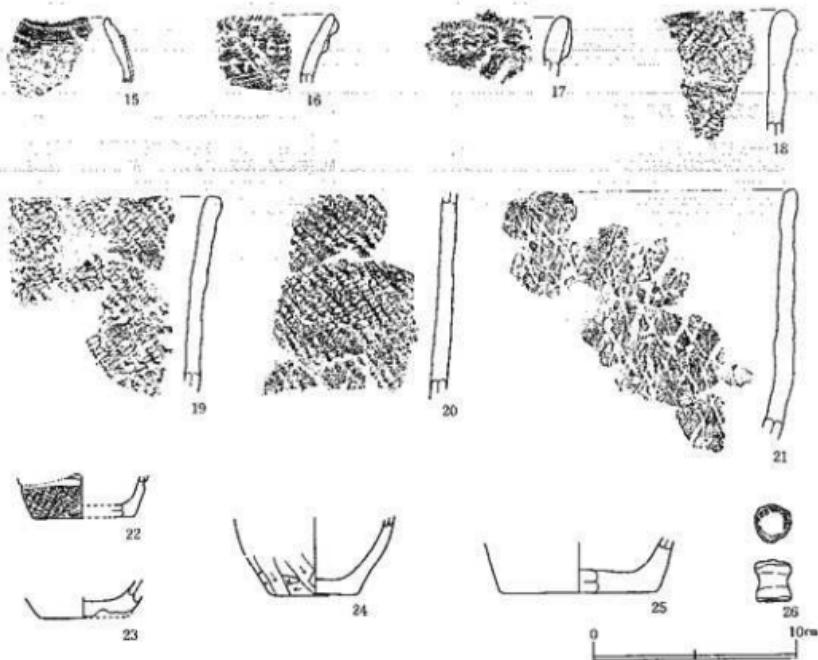
縄文時代中期の土器(第26図4～14・第27図15～17、図版18・19)

4は口縁部を3分の1と体部を部分的に欠損している。体部がやや外傾して立ち上がり、短い口縁部が外反する深鉢形土器で、口縁には突起をもっている。地文にLR単節の斜縄文を施した後、口縁の突起頂部から波状を成す隆帯を垂下させ、その途中から左側へ横位に隆帯を施している。また、波状を呈する隆帯に沿って幅広で浅い沈線が施され、口縁に平行する隆帯上には、L原体の側面圧痕が施されている。頸部には爪形の刺突列が施されている。口径17.5cm、器高(突起部から)26.4cm、底径8.3cmを測る。5は口縁部を2分の1と体下半から底部を欠損している。体部から口縁部まではほぼ直線的に立ち上がっている深鉢形土器である。RL単節の斜縄文を地文としている。口縁部には4箇所に隆帯を縦位に施し、これを連繋してL原体の



第26図 遺構外出土土器(1)

小出W遺跡



第27図 造構外出土土器(2)・土製品

側面圧痕が口縁と平行に施されている。口径15.2cm、残存する器高16.5cmを測る。6は深鉢形土器の体部～口縁部の破片である。僅かに外傾する口縁部には、L原体の側面圧痕が施され、体部には第1種結束羽状繩文を縦位回転施文している。7は深鉢形土器の口縁部の破片である。L原体の側面圧痕が施されている。8～10は口縁部がやや内窓すると思われる深鉢形土器の口縁部の破片である。いずれもLR原体の側面圧痕が施されており、9は地文にRL単節の斜繩文が、10はLR単節の斜繩文が施されている。11・12は深鉢形土器の口縁部の破片である。11はLR原体の側面圧痕が施されている。12は地文にLR単節の斜繩文を施した後、原体の側面圧痕を横位と斜位に2条平行に施している。13は深鉢形土器の口縁部～体部の破片である。口縁部には短い隆帯を縦位に1条と、口縁に平行に3条施して、それに沿わせてL原体の側面圧痕文を施文している。体部には地文にLR単節の斜繩文を施した後、体部上端に原体の側面圧痕を弧状に施している。14は深鉢形土器の頸部～体部の破片である。頸部にはL原体の側面圧痕が環状に施された円盤状の粘土壁貼付文と、数条の隆帯を横位に施して、さらに隆帯に沿わせてLR原体の側面圧痕を施している。体部には地文にLR単節の斜繩文を施文した後、体部

上端に原体の側面圧痕を施している。15~17は深鉢形上器の口縁部の破片である。15は口縁に平行に2条の隆帯を施し、その上下と口縁部上端に原体の側面圧痕を横位に施している。16は口縁に刻み目を施し、口縁部には原体の側面圧痕が施された隆帯と、爪形の刺突列が横位に施されている。17は口縁に平行するLR原体の側面圧痕を施した後、隆帯を施している。

縄文時代後期の土器(第27図18~21、図版19)

18~21は粗製深鉢形上器の口縁部~体部の破片である。18はLR原体による羽状繩文が縦位回転施文されている。19と20は同一個体である。RL単節の斜繩文が施されている。21はL撲糸文が網目状に施されている。

底部資料(第27図22~25、図版19)

22~25は深鉢形上器の底部の破片である。22は底縁に平行に沈線が施されており、この沈線と底縁の間にはLR単節の斜繩文が施されている。23はヘラ状の工具によって、ナデられた痕跡が認められる。

2. 土製品

出土した土製品は、耳栓1点のみである。

耳栓(第27図26): 26は、ほぼ臼形に仕上げられており、その片方の円面には縁辺に沿って半周する刺突列が施されている。

3. 石器

出土した石器は、石鎌・石槍・石錐・石匙・石篋・スクレイバー・磨製石斧・石錘・凹石などである。その出土点数は完形のものと欠損したものを合わせて30点である。また、石核、剝片、碎片がコンテナ(規格54cm×34cm×9.5cm)で1箱分出土した。

石鎌(第28図S 1~7、図版20): 基部の形態から、基部が抉れて凹状を呈する凹基無茎鎌(S 1)、基部が凸状を呈する凸基有茎鎌(S 2~7)、基部が尖っている尖基鎌(S 6・7)の3種類に分けられた。ほとんどは両面に押圧剝離が施されているが、S 1・3・4は片面に、S 2・7は両面に素材の剝離面を残している。アスファルトの付着したものはなかった。

石槍(第28図S 8~10、図版20): S 10は両面の全面が二次加工されているが、S 8・9は側縁に細かい剝離が施されているのみで、両面に素材の剝離面を残している。3点とも断面形は凸レンズ状を呈しており、基部の形状は直線的である。

石錐(第28図S 11・12、図版20): S 11・12ともつまみ部と錐部が明瞭である。いずれも錐部の断面形は三角形を呈し、その先端を欠損している。

石匙(第28図S 13、図版20): 縱型の石匙である。つまみ部は素材剝片の末端側に作出されて

いる。また、両面ともに素材の剝離面を大きく残している。

石鎚(第28図S14・第29図S15~20・第30図S21、図版20・21)：S15~17は両面とも全面が二次加工されており、S14~20は両面に二次加工が施されているが、素材の剝離面が片面(S18)や両面(S14・19・20)に残っている。S21は片面のみに二次加工が施されているものである。刃部を欠損している。

スクレイバー(第30図S22・23、図版21)：素材剝片の側縁に細かい二次加工を施して、刃部を作出しているものである。S22は背面の末端側から片側縁に刃部が作出されている。S23は基端と末端に刃部が作出されている。いずれも素材の剝離面を両面に大きく残している。

ピエス・エスキュー(第30図S24・25)：S24・25とも背面の全面が二次加工されているが、主要剝離面には素材の剝離面を大きく残している。このうち、S24は打面が残っており、両側縁を折断している。また、いずれも素材の末端側を細かく剝離しているが、S24は主要剝離面の末端に、S25は背面の末端に加えられている。

磨製石斧(第30図S26、図版21)：刃部を欠損している。遺存部の全面は研磨されており、断面形がほぼ隅丸長方形を呈する定角式磨製石斧である。

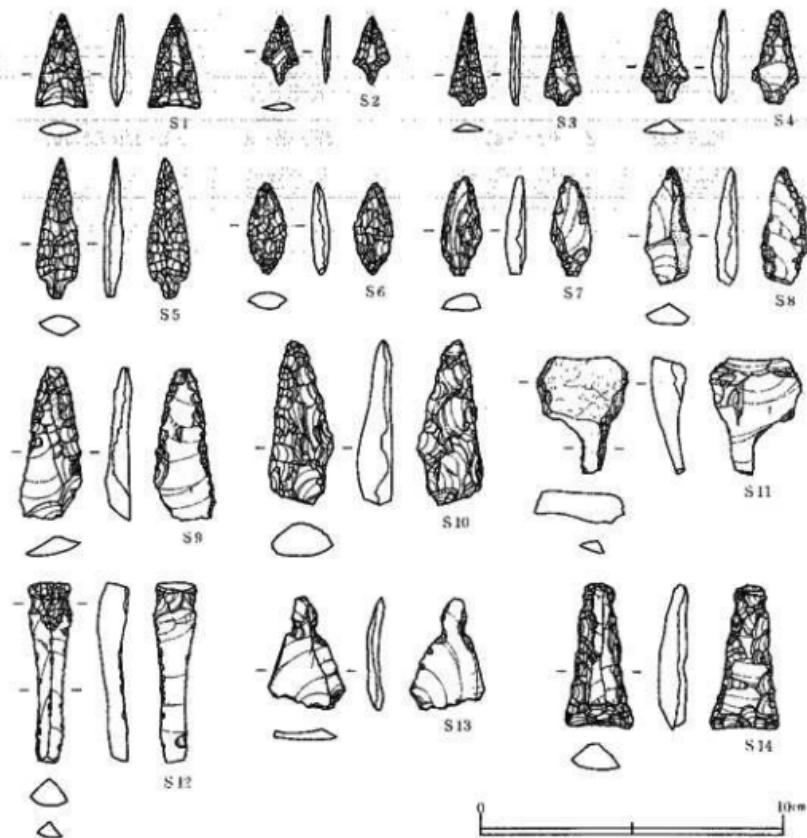
石錘(第31図S27、図版21)：扁平な円錐を素材として、その短軸両端を打ち欠いて抉りを入れている。

凹石(第31図S28~30、図版21)：橢円形の錐を素材として、同一面の1~3箇所に2・3個の重複する凹みが作られているものである。S28は両面に凹みをもち、S29・30は三面に凹みをもっている。

4. 石核

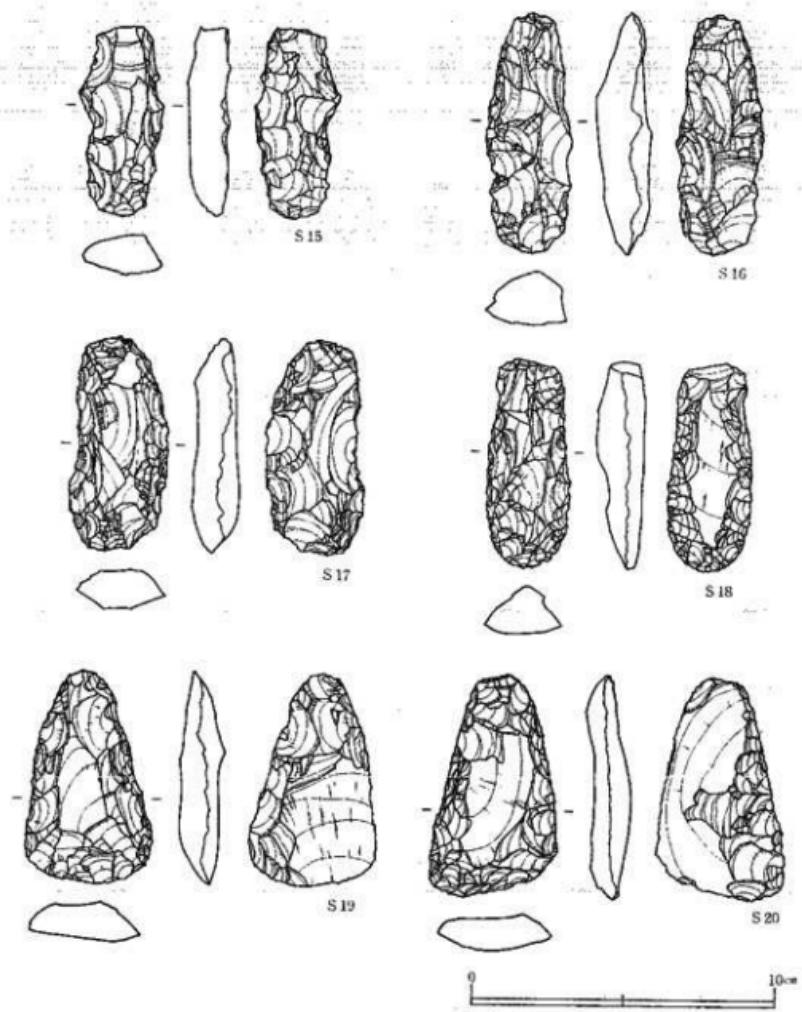
石核(第32図S31~33、図版21)：石核には3形態が認められる。S31は円錐の錐皮面を除去して直方体に仕上げ、石核上面と両側面に打面を作出し、石核正面を作業面として3つの打面から剝片を剝離するものである。最初は上面から、続いて側面から剝片が剝離されている。S32は分割錐を素材とし、打面を石核上面に設定して剝片を剝離するものである。打面は上面のみであるが、作業面は石核正面から側面に及んでいる。S33は板状の錐を素材とし、錐皮面を直接打面として剝片を剝離するものである。打点は石核を一周する。

それぞれの石核から剝離される剝片の大きさは、石核の形態に規定される。S32はより細長剝片志向であり、S33は、横長剝片志向であると言える。



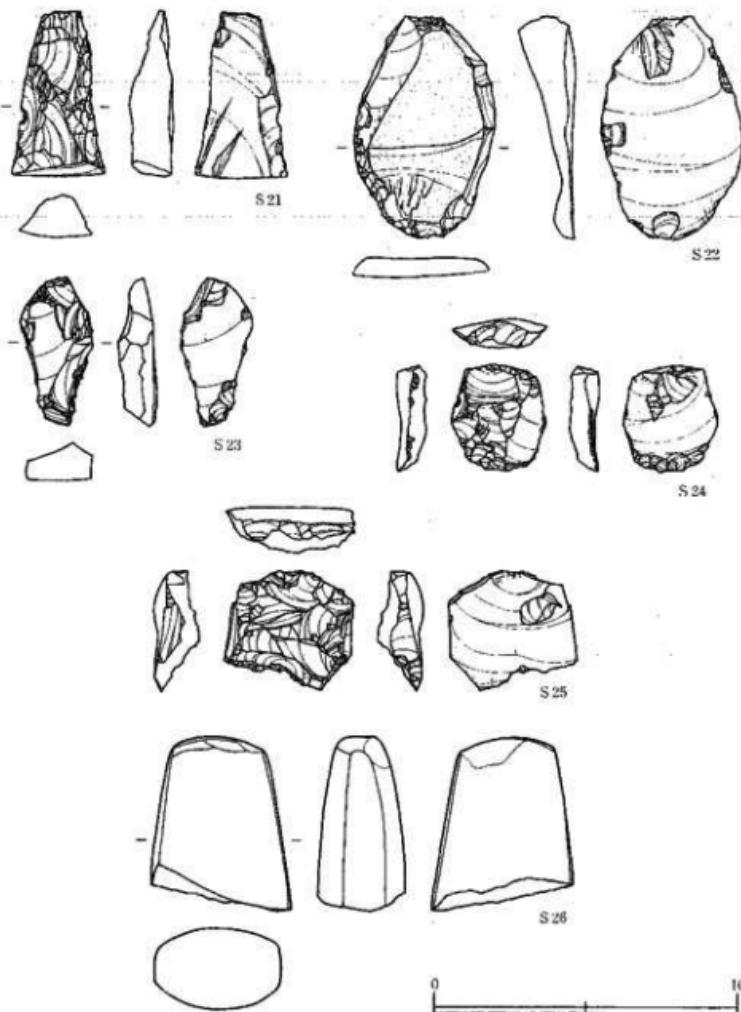
番号	出土地区	層位	器種・分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S 1	L P53	I	石鏃	31	17	5	2	頁岩	20
2	L N51	I	#	24	13	3	1	#	#
3	L O50	I	#	31	12	4	1	#	#
4	L O50	I	#	31	16	6	1	#	#
5	L S58	I	#	47	14	7	3	#	#
6	L N52	I	#	31	13	6	2	#	#
7	L R53	I	#	34	14	7	3	#	#
8	L P53	I	石鏃	39	16	7	3	#	#
9	L O51	I	#	50	20	8	6	#	#
10	L Q54	I	#	54	22	12	11	#	#
11	L N56	I	石鏃	39	30	11	10	#	#
12	L R53	I	#	60	15	11	6	#	#
13	L T52	I	石鏃	38	25	6	3	#	#
14	L Q60	I	石鏃	49	23	9	8	#	#

第28回 造構外出土石器(1)



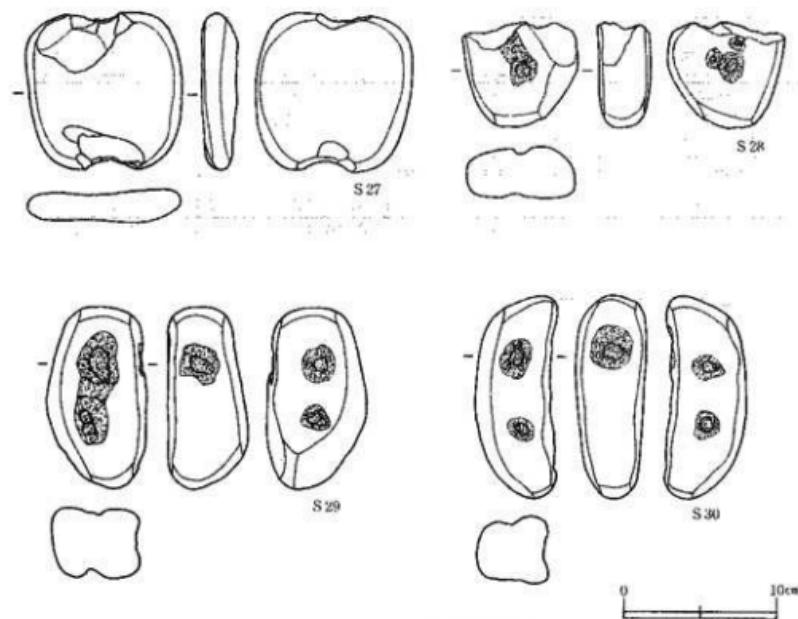
番号	出土地区	層位	器種一分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S15	LR58	I	石器	63	28	19	28	頁岩	20
16	LR59	I	"	81	29	19	38	"	"
17	LS56	I	"	71	33	16	41	"	"
18	ME46	I	"	70	28	16	32	"	"
19	LQ61	I	"	77	42	15	40	"	"
20	LQ60	I	"	75	43	16	39	"	"

第29図 遺構外出土石器(2)



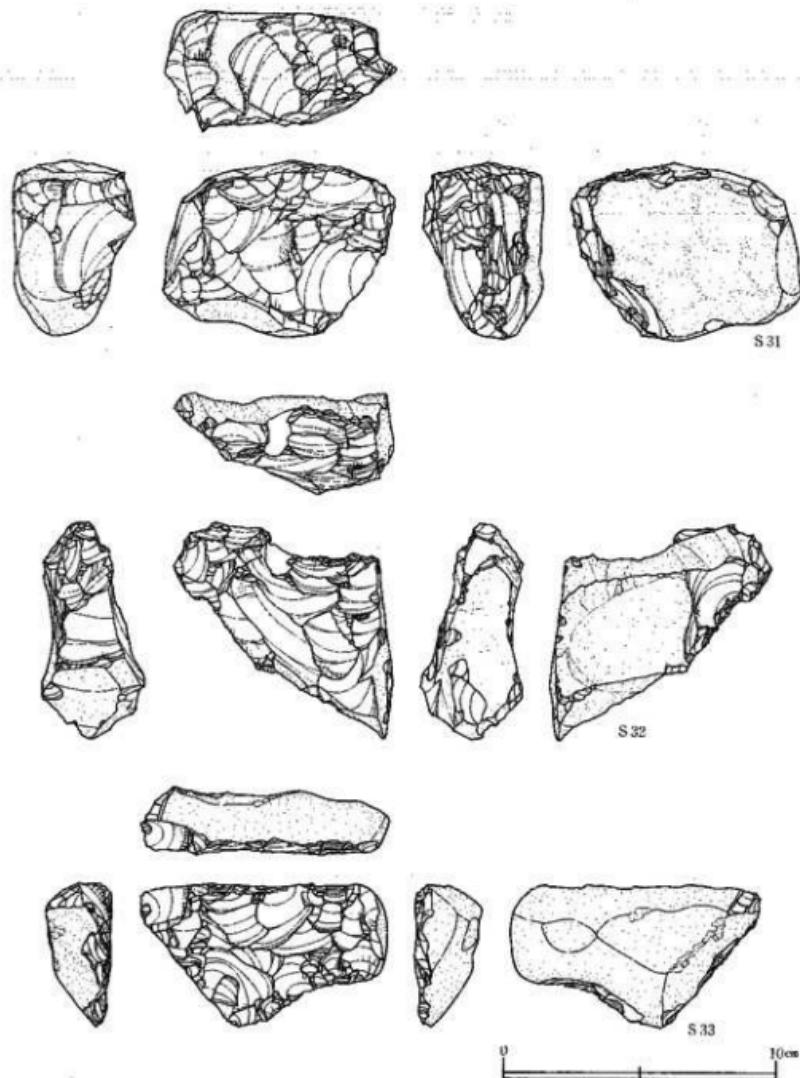
番号	出土地区	層位	器種-分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図版
S21	L R56	I	石鏨	55	31	20	23	頁 石	21
22	MA53	I	スクレイパー	74	46	19	40	" "	
23	L M52	I	"	49	24	13	13	" "	
24	L R52	I	ビエヌ・エスキュー	35	31	10	10	" "	
25	L N52	I	"	40	43	14	22	" "	
26	L S56	I	磨製石斧	58	47	29	121	安山岩	"

第30図 造構外出土石器(3)



番号	出土地区	層位	器種-分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	圖版
S27	L Q61	I	石鏃	104	105	23	351	安山岩	21
28	L Q53	I	凹石	70	77	36	226	〃	〃
29	L R53	I	〃	121	66	55	547	〃	〃
30	L R56	I	〃	135	54	47	339	〃	〃

第31図 遺構外出土石器(4)



番号	出土地区	層位	分類 - 分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	図版
S31	L R57	I	石核	65	84	44	361	真岩	21
32	L R59	I	"	78	80	37	146	"	"
33	L R51	I	"	52	90	25	110	"	"

第32図 遺構外出土石核

第4章 弥生時代

第1節 遺構と出土遺物

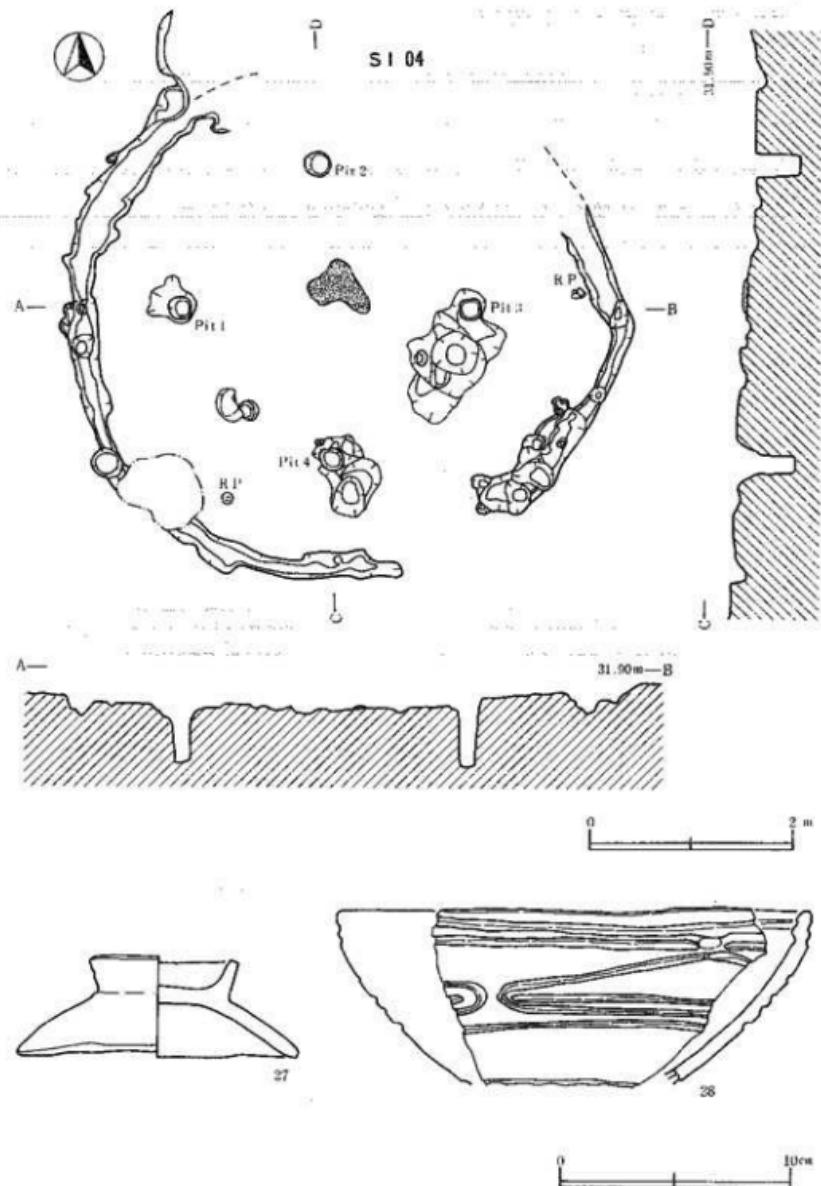
1. 壺穴住居跡

S 104 (第33図、図版22)

L Q53・54、L R53・54グリッドで検出された。本壺穴住居跡は畑の耕作やその耕作物によって、壁や床面などの大部分が著しく攪乱を受けており、住居跡の北側部分は消失していた。

平面形はほぼ円形を呈し、壁溝と地床炉を有する壺穴住居跡で、その大きさは径5.5m前後と推定される。壁は攪乱によって、ほとんどその高さを残しておらず、明確に把握することができなかった。床面は攪乱されて凹凸していたが、部分的に認められる床面の状態からほぼ平坦で堅くしまっていたものと推定される。この床面の4箇所にはピットが穿たれている。検出された4個のピットは、地床炉を囲む様にあり、その位置関係から主柱穴と判断された。上部が攪乱されていたが、平面形はほぼ円形を呈しており、Pit 1は径24cm・深さ55cm、Pit 2は径25cm・深さ45cm、Pit 3は径23cm・深さ65cm、Pit 4は径23cm・深さ57cmを測る。地床炉は床面のほぼ中央部に位置している。その範囲は長軸(北西—南東)56cmで、短軸(北東—南西)45cmである。攪乱を受けたため底面から盛り上がった様になっているが、本来は掘り込みをもつ地床炉であつと思われる。平面形は円形か梢円形を呈していたものと推察される。壁溝はやはり攪乱を受けて原状を損ねていたが、検出された状態の上面幅は約14~39cmで、底面幅は約6~26cmであり、検出面からの深さは10~20cmほどである。また、壁溝は南東部で途切れ開口している。開口部の幅は約93cmである。この部分は、おそらく構築当初から掘り込みます、出入り口として設計されたものと推定される。また、部分的に堅い面が認められた。

遺物は、地床炉から南西へ2.1mの床面で弥生土器の蓋形土器1点(第33図27)と、地床炉から東へ2mの床面で鉢形土器の破片1点(第33図28)の計2点が出土した。27は完形の蓋形土器である。文様は施されておらず、胎土には1~4mmの砂粒を多く含み、この砂粒が器面に露出してザラザラしている。口径12cm、器高4.5cm、つまみ部径6.3cmを測る。28は体部~口縁部の破片である。体部から外傾して立ち上がり、内湾ぎみの口縁部に至る。文様は沈線による変形工字文が施されており、口縁部の内面には口縁に平行に沈線が1条施されている。図上復原による口径は20.4cmで、器高は7.6cmである。



第33図 S104と出土土器

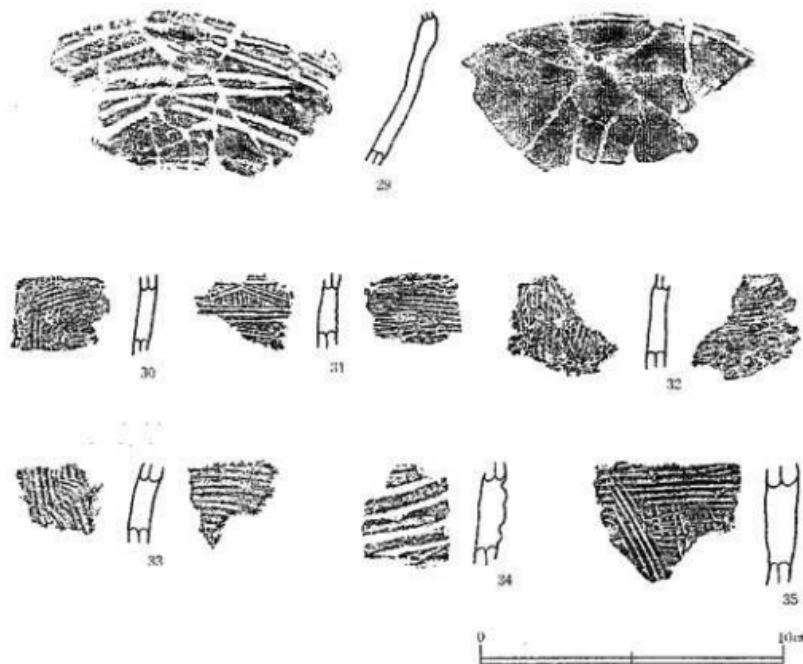
第2節 遺構外出土遺物

1. 土器（第34図29～35、図版23）

11点出土した。出土した土器はすべて破片であり、全体の形状を知り得る資料はなかった。29は鉢形土器の口縁部～体部の破片と思われる。外面には変形工字文が施されており、丁寧に磨かれている内面の口縁端には、口縁に平行に沈線が1条施されている。

30～35は鉢形土器の体部の破片と思われる。30は条の細い撚糸文が縦位と斜位に施されている。31は外面に縦位に刷毛目を施した後に、細い沈線で平行もしくは鋸歯状の文様を施しており、内面には横位に刷毛目を施している。32・33は両面ともに刷毛目が施されており、いずれも外面は縦位に施し、内面は横位に施している。34は外面に刷毛目を施した後に、横位に平行する数条の沈線を施している。35は外面に横位と斜位に刷毛目が施されている。内面には粘土紐の接合痕が認められる。

これらの土器は胎土に1～2 mmの砂粒を少量含み非常に緻密で、焼成は良好である。



第34図 遺構外出土土器

第5章 まとめ

調査の結果、旧石器時代の遺物が集中する箇所が11ブロックと、縄文時代の竪穴住居跡1軒、土坑5基、土器埋設遺構1基と、弥生時代の竪穴住居跡1軒の計8遺構が検出され、旧石器時代～弥生時代の遺物が出土した。

以下、旧石器時代と縄文・弥生時代の遺構と遺物について若干考察を加えてまとめとしたい。

1. 旧石器時代

(1) 石器群の構造

本遺跡の石器群は、打面調整・打面再生・打面転位を頻繁に行いながら、石核を一周する形で石刃を剥離する石刃技法を技術基盤とする。ナイフ形石器・搔器・彫器は、すべて石刃に細部加工を施して製作されているが、石刃自体も使用されたと思われる痕跡を残している。また、ナイフ形石器は幅広の石刃を素材とした東山型ナイフ形石器の特徴を有し、縦形搔器（エンド・スクレイパー）^(註1)を組成することから、本石器群は東山系石器群として理解される。

(2) 遺跡の構造

本遺跡は、2世帯からなる1単位集団の石器製作・消費・廃棄の場であると想定した。保有される器種では搔器と石刃が主体を占めていることから、加工を中心とする生活の場であったことが考えられる。この単位集団は、個体No.1をほぼ消費する期間に本遺跡を占拠し、ここで製作した石刃を携えて、他の場所へ移動したといえる。また、その間、黒曜石の補給が行われていることから、他集団との接触または原石の採集という作業も想定される。

(3) 編年的位置付け

先述したように、本石器群は東山系石器群として捉えられるが、では、東山系石器群は、東北地方におけるナイフ形石器文化の中でどのような位置付けがなされているのであろうか。

学史を振り返ってみると、1960年代半ばの遺跡の発見期には、杉久保系と東山系という双極^(註2)をなすナイフ形石器の存在が明らかとなり、1960年代の終わりから1970年代には両者の編年がなされることとなった。両者の理解にあたっては、東山系が東北地方を中心とする、そして杉久保系が中部北半を中心とする、系統差と解釈する共通認識は窺えるものの、研究者によって^(註3)その編年はまちまちであった。1980年代に入ると、両者を年代差として捉える論考が出されたが、やはり編年については見解の相違が見られている。^(註4)

ここでは、ナイフ形石器とそれに組成する石器群の型式学的連続性を概観することにより、当該期の編年の予察を行い、小出Ⅳ遺跡を編年的に位置付けたい。

小出Ⅳ遺跡第6章でみてきたように、立川ロームⅦ層に併行する石器群として、此掛沢Ⅱ遺跡をあげることができる。此掛沢Ⅱ遺跡、風無台Ⅰ遺跡のナイフ形石器は、大略的に見ると、基部の両側縁又は片側縁に細部加工を施すが、その作り出しは顕著ではなく、丸みを帯びる。また、素材となる剝片が幅広であることから、先端形も尖鋭ではない。こうした特徴を有する（註5）ナイフ形石器は、金谷原遺跡にも見出される。したがって、此掛沢Ⅱ遺跡に後続する遺跡として金谷原遺跡があげられよう。これらは金谷原型ナイフ形石器と言われているが、その他に基部、先端部とともに尖鋭な、いわゆる杉久保型ナイフ形石器もこれに組成している。また、金谷原遺跡ではナイフ形石器の先端部加工も看取されるようになるが、これは幅広の先端部を量する素材に対して、杉久保型ナイフ形石器の尖鋭な先端部が要求されたためではないかと思われ、先行する石器群に杉久保系の影響が加わったものとして理解される。これらのナイフ形石器には、彫器の組成が顕著であり、縦形搔器は見られない。

これに後続するものとして、横道遺跡があげられよう。横道遺跡では、金谷原遺跡でもみられた柳葉形を呈する杉久保型ナイフ形石器を主体とするがここでは、基部加工と先端部加工に加え、基部裏面加工も看取される。石器組成は先行する金谷原遺跡とはほぼ同様である。（註6）

これに続く石器群としては米ヶ森遺跡が考えられる。米ヶ森遺跡はその報文の中で、杉久保型ナイフ形石器と東山型ナイフ形石器の折衷型式を有するとして評価されており、杉久保型ナイフ形石器から東山型ナイフ形石器への変遷を捉える上で、好資料といえる。このナイフ形石器の特徴は、加工の部位と基部の作り出しは杉久保型ナイフ形石器に連続するが、素材となる剝片が、幅広で重厚となり、先行する杉久保型ナイフ形石器の柳葉形で繊細なものとは、際立った違いを見せる。これは、素材を生産する技術基盤の違いを予測させるものであり、東山系石器群の技術基盤との共通性が指摘される。また、ナイフ形石器に共伴する石器には、彫器に加えて縦形搔器が顕著に見られるという組成上の変化も現れる。

こうした石器群を受けて、東山系石器群は成立し、いわゆる東山型ナイフ形石器を保有し、（註8）（註9）（註10）（註11）縦形搔器に特徴づけられる、東山遺跡・横前遺跡・乱馬堂遺跡・南野遺跡などの多くの遺跡がみられるようになる。また、ここで顕著な縦形搔器は後続する槍先形尖頭器を有する石器群の中でも認められることから、東山系石器群がより後出的でナイフ形石器文化の終末期まで存続（註12）するものと考えられるのである。

以上のように、金谷原→横道→米ヶ森→東山という年代的序列が想定されたが、これは、概ね藤原氏による技術基盤に基づく編年によ一致している。そして、これは立川ローム層に対比するとⅦ層からⅣ層における変遷と考えられる。このことは、AT降灰後の東北地方のナイフ形石器文化が、杉久保系から東山系へと年代差をもって変化し、独自の地域性をもって変遷したことを物語っており、越中山K遺跡・弓張平B遺跡の異系統性もより明瞭となるのである。

したがって東山系石器群として理解される小出IV遺跡の石器群は、東北地方の独自の変遷の中から生成したものであり、ナイフ形石器文化の後半～終末期にその編年的位置付けがなされると言えよう。

2. 繩文・弥生時代の遺構と遺物

(1) 遺構について

検出された遺構のうち、縄文時代(S I 01)と弥生時代(S I 04)の堅穴住居跡2軒は、塗地整地とその後の耕作および耕作物によって著しく攪乱を受けており遺存状態が良好でなく、その全容を把握することはできなかった。しかし、各々の出土遺物から、S I 10は縄文時代中期の前葉に、S I 04は弥生時代前期に構築されたものと考えられる。

土坑は、坑内や周辺から出土した遺物などから、5基とも縄文時代中期に位置付けられると思われるが、S I 10を切っているSK09を除く土坑が、S I 10と構築時を同じくするものか、SK09と同じものは不明である。しかし、各遺構の時期差はさほどないものと考えられる。また、土器埋設遺構は、その埋設された土器から縄文時代中期の前葉に位置付けられるものと思われ、S I 10と同時期のものと考えられる。

(2) 出土遺物について

縄文時代の出土遺物のうち土器は、中期・後期の土器が出土したが、その大半は中期の土器で、後期の土器は少量であった。なお、中期の土器の大半は、原体の側面圧痕を基調として、これに粘土紐縦帯による文様が施され、地文として斜縄文や縦位の羽状縄文などが施される点から、大木7b式土器に併行するものと思われる。また、出土した石器も大方はこれらの土器に伴うものと考えられる。

弥生時代の遺物は土器のみで、遺構内外合わせて十数点と僅少であった。これらの土器の時期は、おおよそ弥生時代前期～中期頃に位置付けられるものと思われる。

以上、本遺跡は旧石器時代・縄文時代・弥生時代の集落遺跡であることがわかった。また、当調査区外東側の雜木林となっている南北約45m、東西約41mに及ぶ未調査部分の範囲内には、今回の調査で検出された遺構や出土遺物の分布状況から、当該時代の遺構群が存在するものと予測される。

なお、今回県内では初めて、純粹な東山系石器群が発掘調査で得られ、本遺跡が当該石器群の編年的、分布論的研究に寄与するものは大きいと言える。また、県下の旧石器時代の集団構成の一端が明らかとなったことも大きな成果であろう。

小出Ⅳ遺跡

- 註1 森嶋 稔 「上ヶ原遺跡」『日本の旧石器文化』2 雄山閣 1975(昭和50年)
- 註2 加藤 稔 『山形県の無土器文化』 山形考古友の会 1964(昭和39年)
加藤 稔 「東北地方の先土器時代」『日本の考古学I 先土器時代』 河出書房新社
1965(昭和40年)
- 註3 加藤 稔 「東北地方の旧石器文化(前編)」『山形県立山形中央高等学校研究紀要』第1号
1969(昭和44年)
佐藤達夫 「ナイフ形石器の編年の一考察」『東京国立博物館紀要』5 1969(昭和44年)
加藤 稔 「東北地方の旧石器文化(後編)」『山形県立山形中央高等学校研究紀要』第3号
1973(昭和48年)
- 森嶋 稔 註1と同じ
- 註4 藤原紀敏 「東北地方における後期旧石器時代石器群の技術基盤」『考古学論叢』I 宝文
社 1983(昭和58年)
- 安蒜政雄 「先土器時代の石器と地域」『岩波講座 日本考古学』5 岩波書店 1986
(昭和61年)
- 註5 註2(加藤1964)と同じ
- 註6 加藤 稔・佐藤祐宏 「山形県横道遺跡略報」『石器時代』 第6号 1963(昭和38年)
- 註7 協和町教育委員会 『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』 1977(昭和52年)
- 註8 加藤 稔 『山屋・東山遺跡』 新庄市教育委員会 1964(昭和39年)
- 註9 註2(加藤1964)と同じ
- 註10 新庄市教育委員会 『乱馬堂遺跡発掘調査報告書』 山形県・新庄市教育委員会報告書 6
1982(昭和57年)
- 註11 新庄市教育委員会 『南野遺跡発掘調査報告書』 1977(昭和52年)
- 註12 安蒜政雄氏は、東山型を岩宿型との併行関係で捉え(安蒜1986)、ナイフ形石器文化の最古段
階に位置付けているが、安蒜氏の言う東山型に該当するのは、秋田県松木台田遺跡、福島県
成田遺跡等であり、ここで言う東山系石器群とは明瞭に分離されるものであると考えている。
- 註13 註4(藤原1983)と同じ



1 遺跡遠景（北西▷南東）



2 遺跡近景（西▷東）



1 調査前全景（南▷北）



2 調査後全景（北▷南）



1 旧石器出土状況（南▷北）



2 旧石器出土状況（北▷南）



1 A・Bブロック旧石器出土状況（北西▷南東）



2 A・Bブロック旧石器出土状況（南東▷北西）



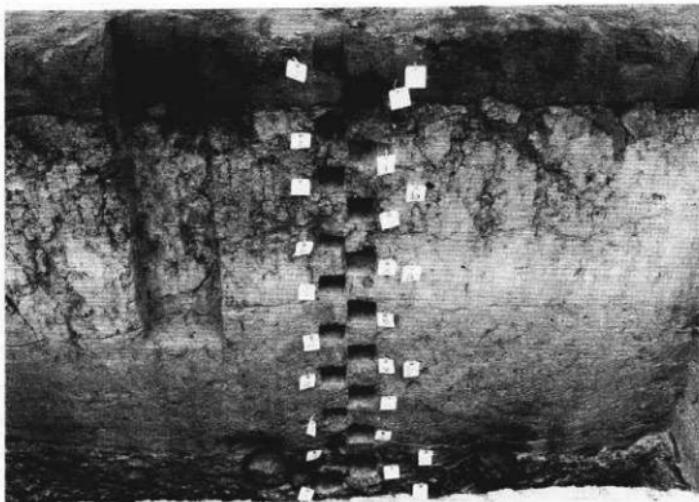
1 C・Dブロック旧石器出土状況（北東▷南西）



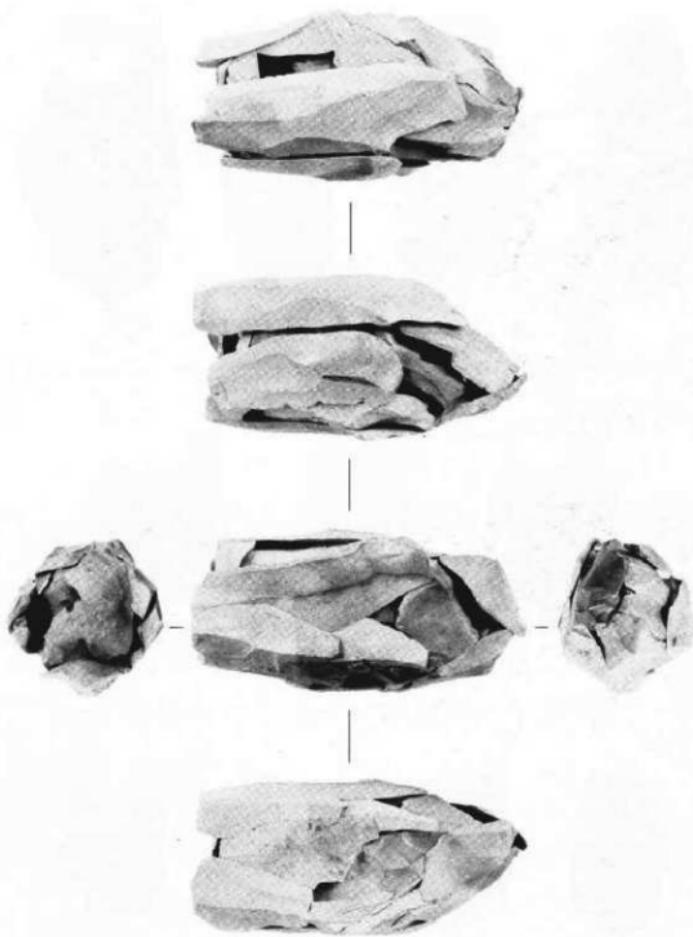
2 C・Dブロック旧石器出土状況（南西▷北東）



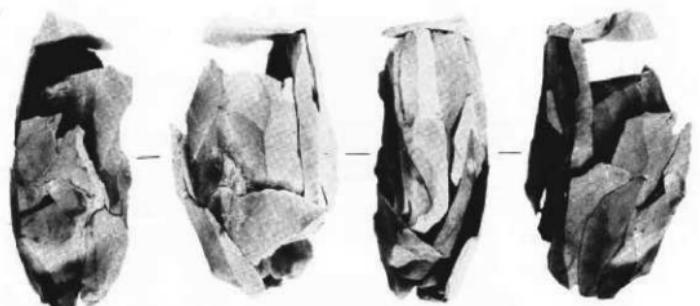
1 D ブロック旧石器出土状況



2 遺跡基本土層（西▷東）



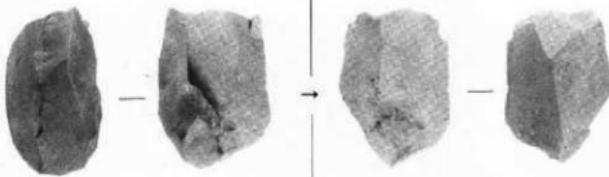
個体No.1 接合資料(1)



↓

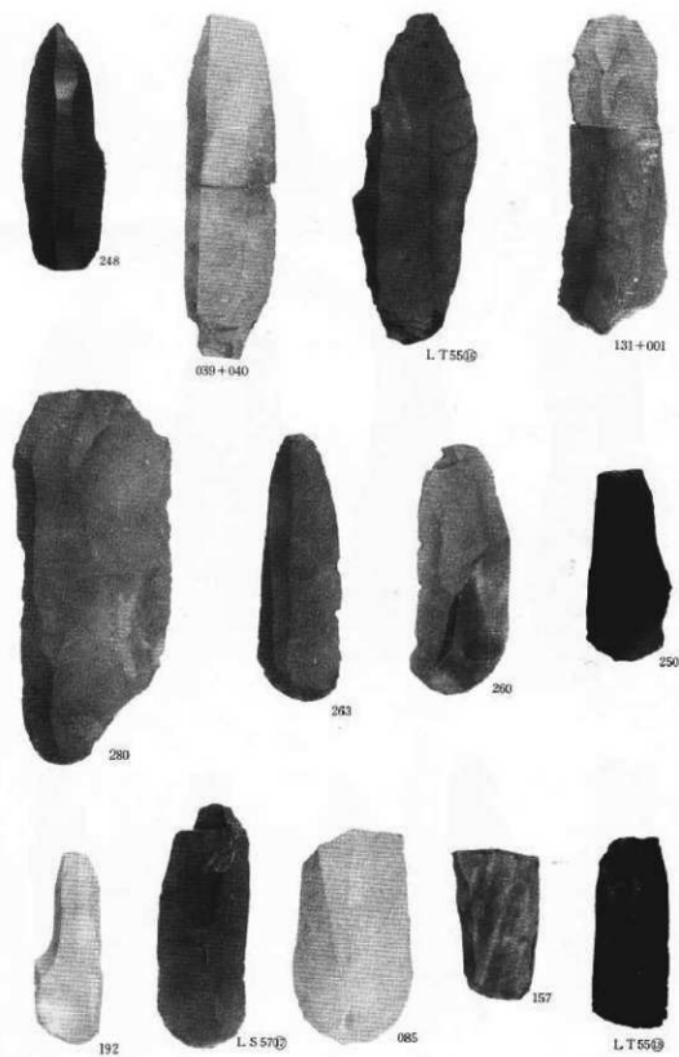


↓

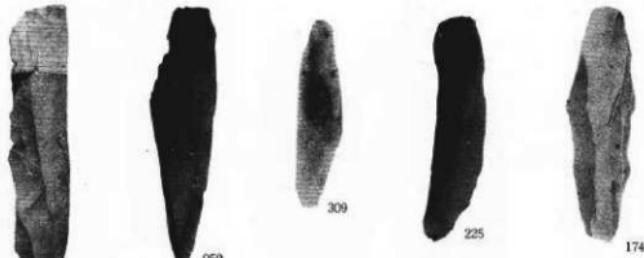
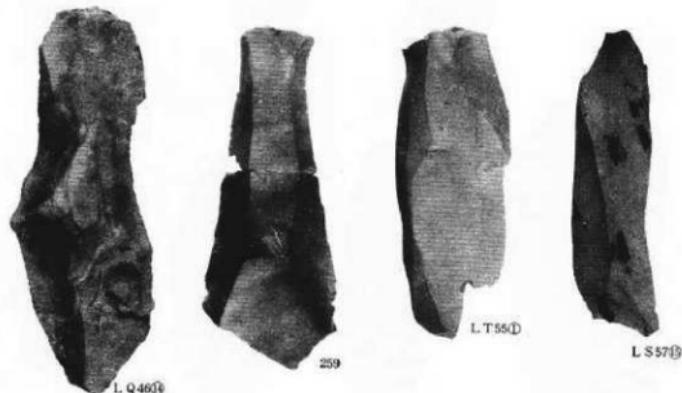
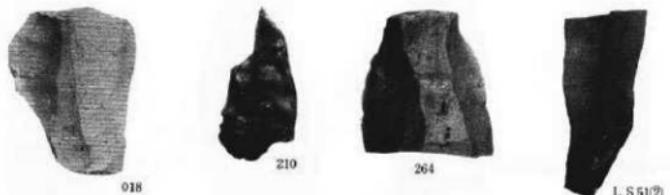


→

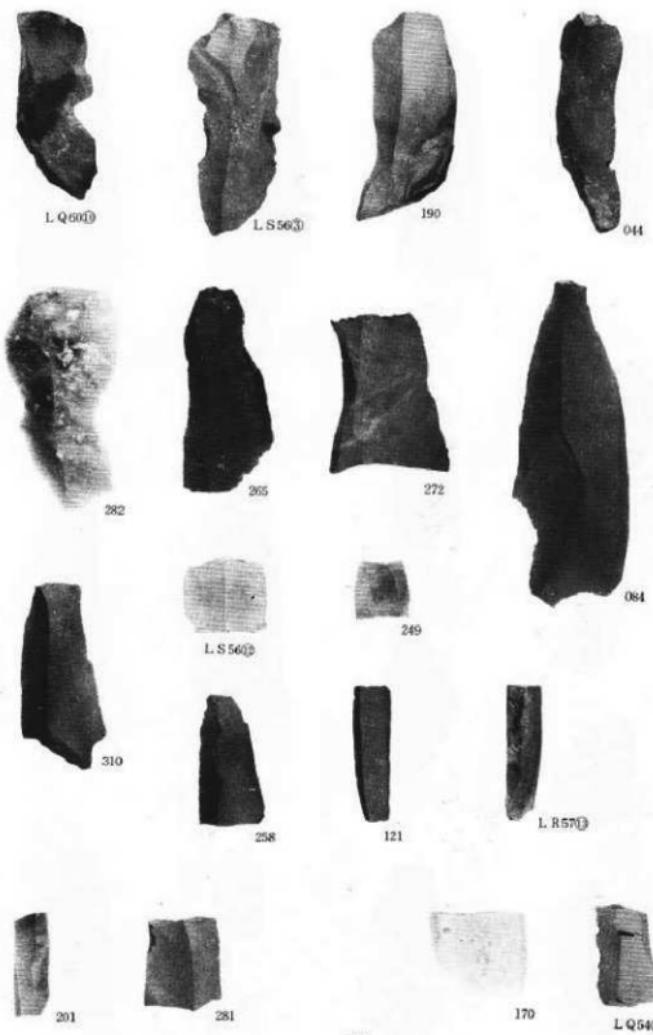
個体No.1 接合資料(2)



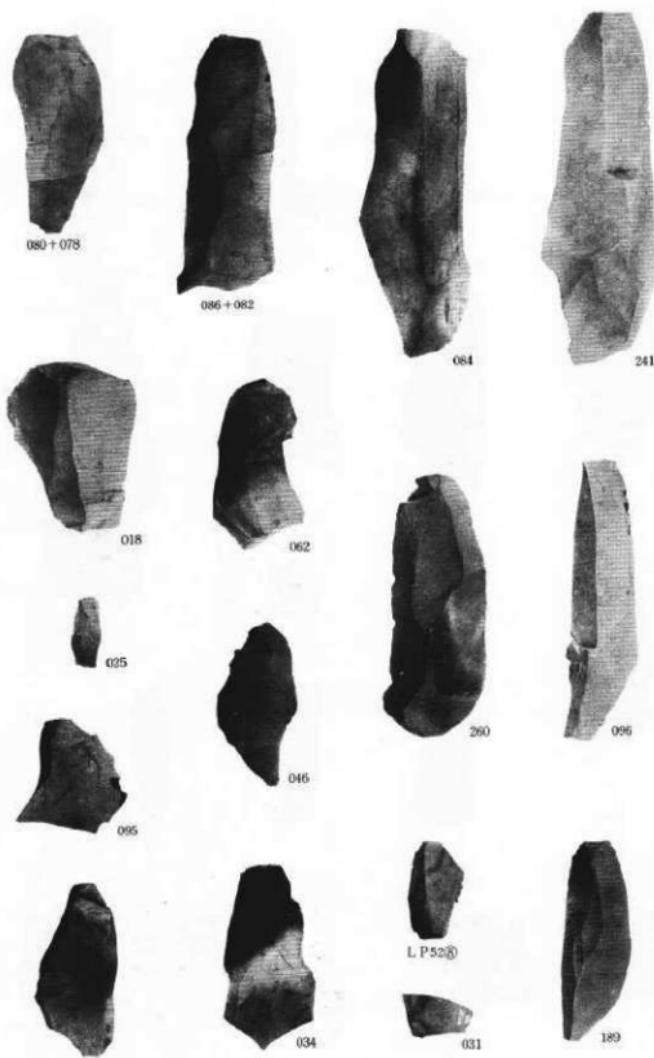
出土旧石器(1)



出土旧石器(2)



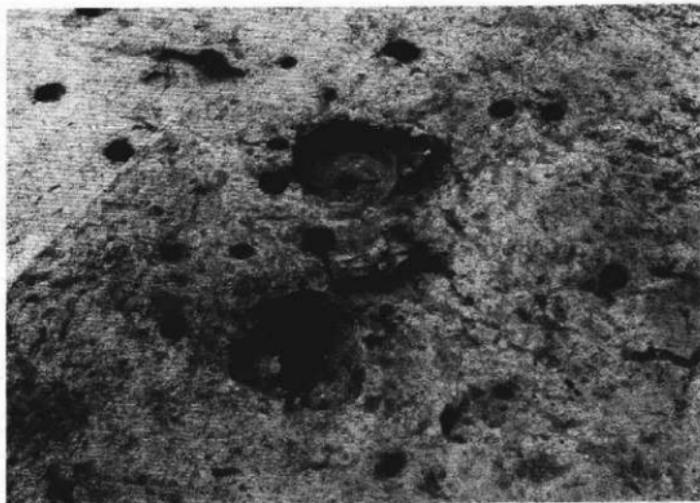
出土旧石器(3)



個體No. 1 (1)



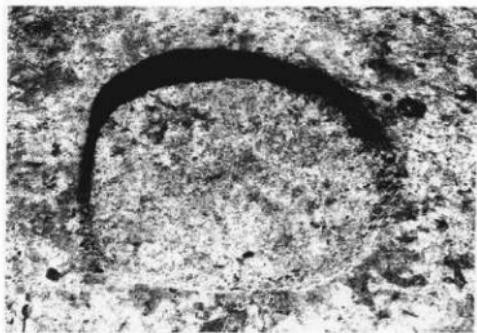
個体No. 1(2)



1 墓穴住居跡 S110 (南>北)



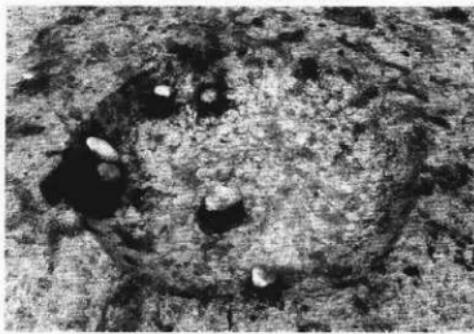
2 S110遺物出土狀況 (南>北)



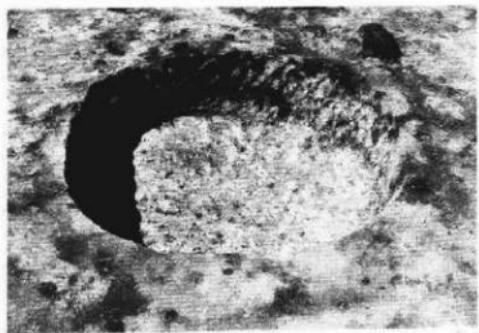
1 土坑SK02（東▷西）



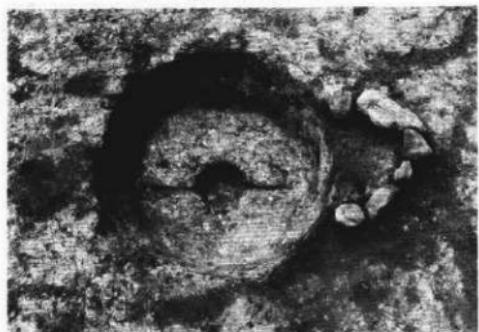
2 土坑SK05（南西▷北東）



3 土坑SK06（南▷北）



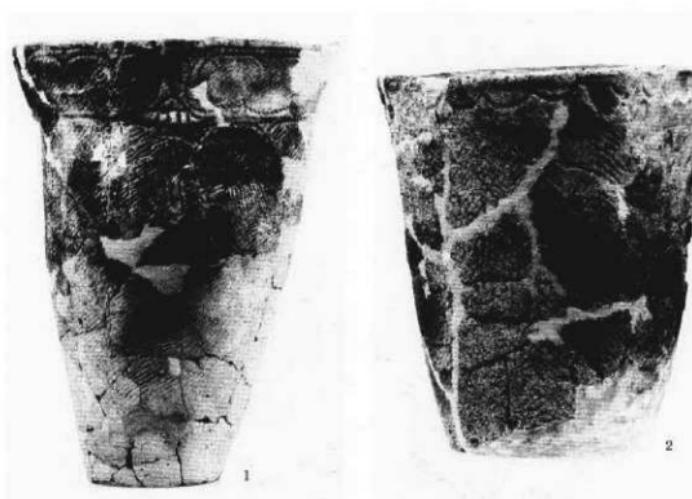
1 土坑SK07（南▷北）



2 土坑SK09（南▷北）



3 土器埋設遺構SR11（南▷北）



1 穹穴住居跡 S110出土土器



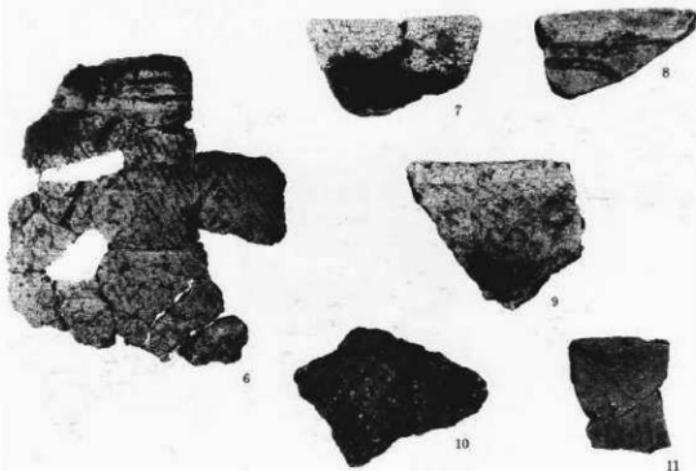
2 土器埋設遺構 S R11出土土器



4



5



6

7

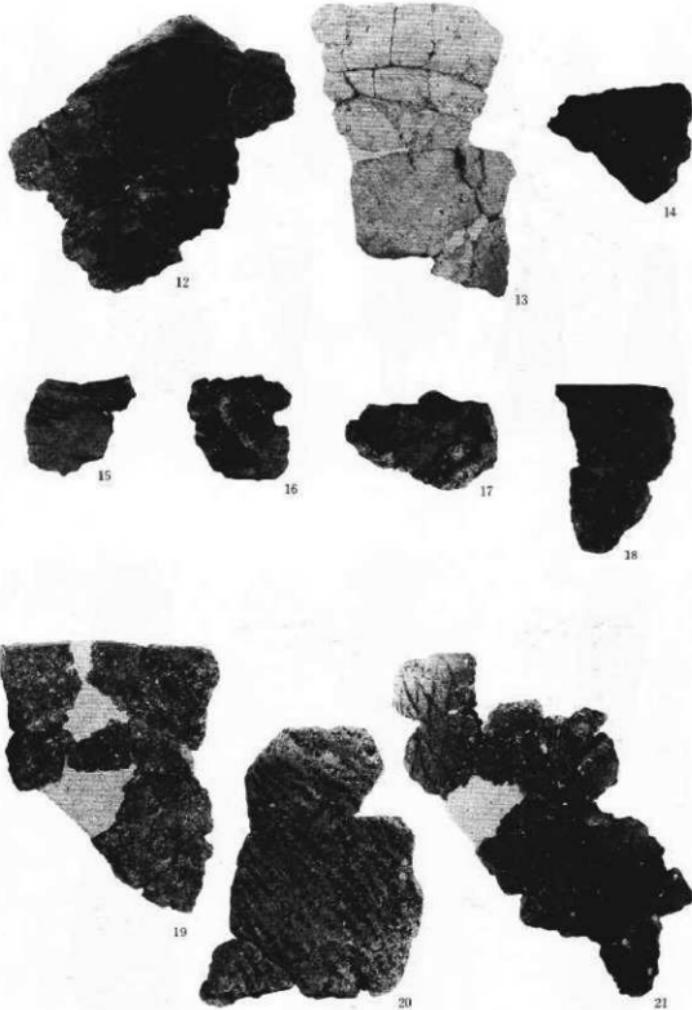
8

9

10

11

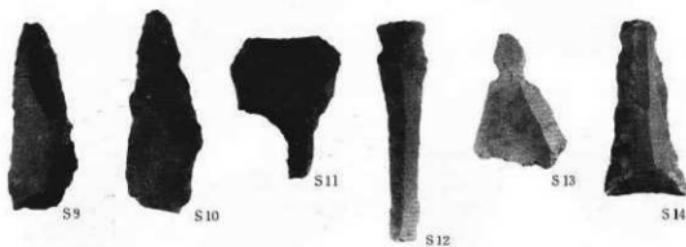
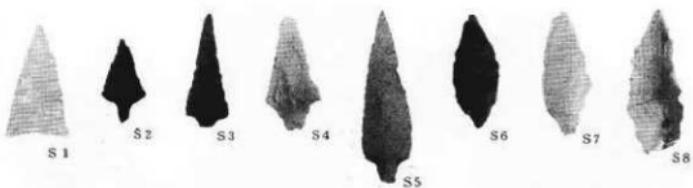
遺構外出土土器(1)



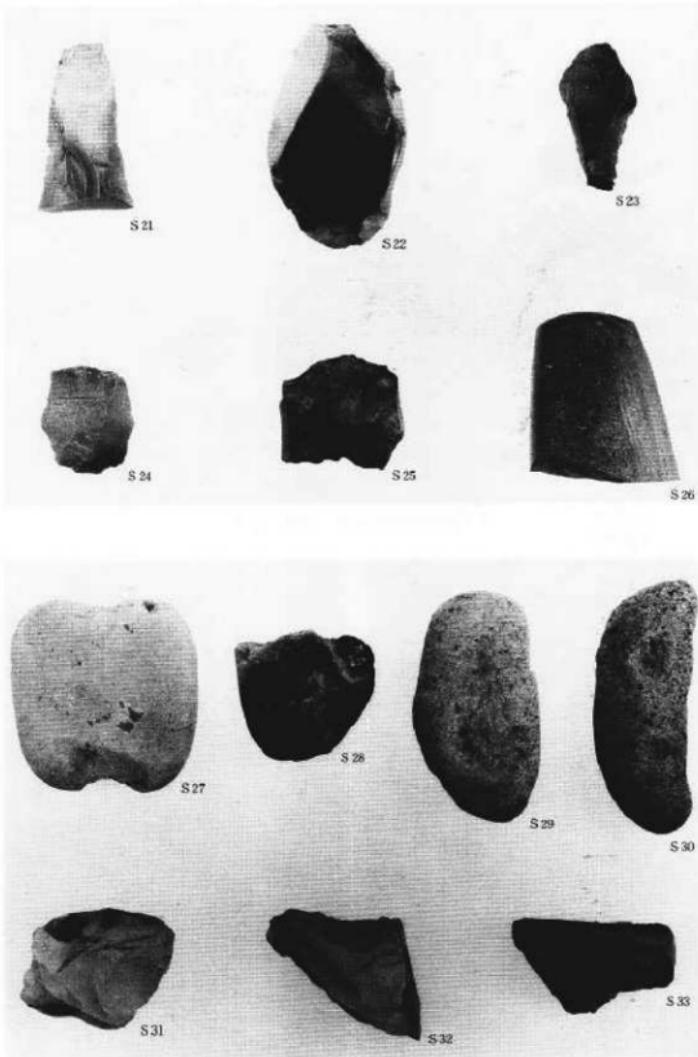
遺構外出土土器(2)

小出Ⅳ遺跡

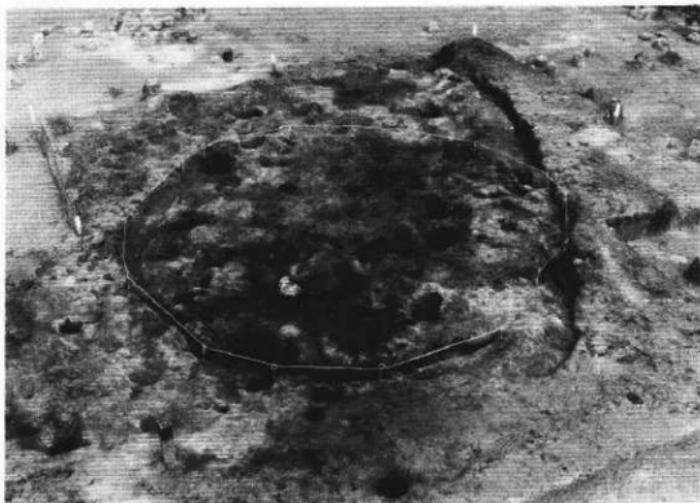
圖版20



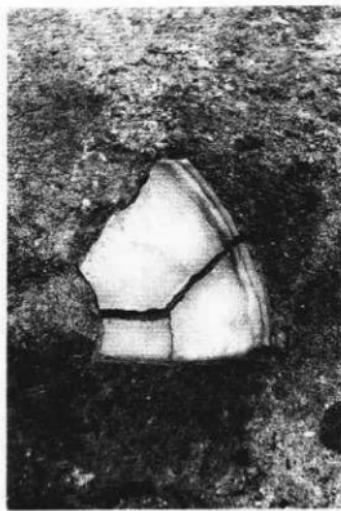
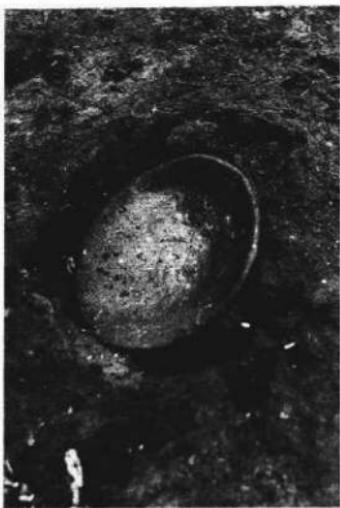
遺構外出土石器(1)



遺跡外出土石器(2)



1 墓穴住居跡 S104 (南東▷北西)



2 S104出土遺物 (左:南▷北・右:西▷東)



27



28

1 穹穴住居跡S104出土土器



29



30



31



32



33



34



35

2 造構外出土土器

科 学 的 分 析

1. 小出遺跡出土中世陶器の産地推定

奈良教育大学 三辻 利一

まずははじめに、地元の大畠窯・桧山腰窯・甕ヶ沢窯から出土した中世陶器が蛍光X線分析法により分析された。これらのデータを基礎として、小出遺跡から出土した中世陶器の産地推定を試みたので、その結果について報告する。

土器資料は表面を研磨して付着汚物等を除去したのち、タンクスチンカーバイド製乳鉢（硬度9.5）の中で100~200メッシュ程度に粉碎された。粉末資料は塩化ビニール製リングを枠にして、約15トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3~5mmのコイン状試料を調整し、蛍光X線分析した。2次ターゲット方式のエネルギー分散型蛍光X線分析装置を使い、K・Ca・Fe・Rb・Srの5元素が定量分析された。分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値で表示された。

第1表には桧山腰窯・甕ヶ沢窯出土中世陶器の分析値を示す。

また、第1・2図には生データをプロットして作成したRb-Sr分布図を示す。桧山腰窯と甕ヶ沢窯の中世陶器の分布領域はびたりとは一致せず、化学特性に少し差違があることを示した。つまり、両者の相互識別の可能性がある訳である。第1・2図で使われている桧山腰窯と甕ヶ沢窯はそれぞれ、桧山腰窯・甕ヶ沢窯の今回分析した中世陶器を全部包含するようにして設定されている。このようにして設定された領域は使用上、簡便であるという利点をもつが、その反面、定性的であるという欠点をもつ。

そこで、より定量的に相互識別の結果を表示するため、桧山腰窯・甕ヶ沢

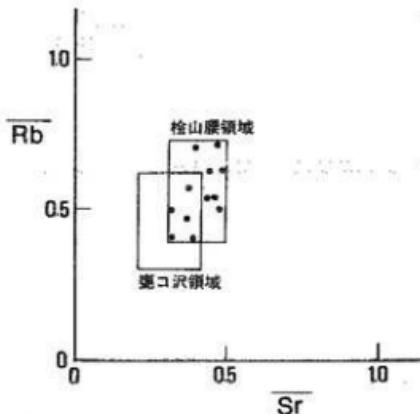
窯跡名	試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr
桧山腰窯	1	0.428	0.121	2.20	0.471	0.372
	2	0.490	0.146	2.11	0.571	0.383
	3	0.531	0.134	2.17	0.710	0.396
	4	0.649	0.152	1.94	0.718	0.470
	5	0.517	0.159	2.01	0.631	0.449
	6	0.470	0.160	1.99	0.538	0.440
	7	0.523	0.200	1.84	0.625	0.489
	8	0.452	0.128	1.89	0.497	0.308
	9	0.369	0.201	2.00	0.398	0.387
	10	0.335	0.099	2.01	0.413	0.316
	11	0.411	0.246	1.80	0.498	0.482
	12	0.478	0.227	1.79	0.537	0.464
甕ヶ沢窯	1	0.314	0.120	2.04	0.356	0.273
	2	0.421	0.102	1.74	0.533	0.352
	3	0.367	0.104	2.11	0.402	0.276
	4	0.329	0.103	2.23	0.389	0.276
	5	0.335	0.127	2.29	0.364	0.294
	6	0.492	0.140	1.82	0.610	0.405
	7	0.363	0.132	2.23	0.426	0.302
	8	0.341	0.121	2.17	0.404	0.289
	9	0.335	0.124	2.21	0.389	0.267
	10	0.434	0.137	1.76	0.509	0.367
	11	0.362	0.074	1.80	0.314	0.215

第1表 窯跡出土中世陶器の分析値

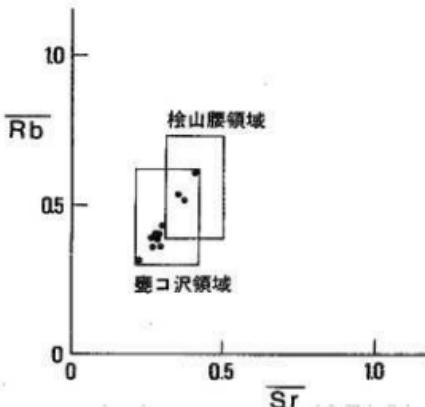
群の2母集団間の判別分析を行った。使用因子はK・Ca・Rb・Srの4因子である。まずはじめに、大畠群と桧山腰窯群の判別分析図を第3図に、大畠群と堀口沢群の判別分析図を第4図に示す。 $D_{(1)}$ ・ $D_{(2)}$ ・ $D_{(3)}$ はそれぞれ大畠群・桧山腰窯群・堀口沢群の重心からのマハラノビスの汎距離である。マハラノビスの汎距離とは母集団の重心から何 σ （標準偏差）分、離れているかを示す統計学上の距離のことである。第3・4図より、大畠群の中世陶器は $D_{(1)} \leq 10$ の領域にすべてが分布しており、桧山腰窯群の中世陶器も $D_{(2)} \leq 10$ の領域にすべてが分布している。

また、堀口沢群のものも $D_{(3)} \leq 10$ の領域に分布していることがわかる。実は、全国各地の窯跡出土須恵器の分布データでも、窯（母集団）、Xのサンプルの95%以上が $D_{(x)} \leq 10$ の領域に分布していることが判明した。 $D_{(x)} = 10$ とは母集団の重心から約3 σ の距離に相当する。つまり、各母集団は半径3 σ の球状の存在なのである。点で表示しても意味がないのである。図3・4をみると、多少の偏りがあるものの、各母集団は広がりをもつて、分離していることがわかる。このようにしてこれら3基の窯は同じ地元の窯ではあるが、ほぼ、相互識別できることがわかった。

次に、遺跡出土中世陶器の産地を推定するには、先に得られた境界線を利用する。すなわち、母集団（X）への経験的帰属条件として、 $D_{(x)} \leq 10$ を採用する。そこで、小出遺跡出土中世陶器にこの方法を適用した。第3・4図には小出遺跡の中世陶器もプロットしてある。No.7のサンプルは $D_{(x)} \leq 10$ （X = 1・2・3）を満足するのは母集団（2）のみであることがわかる。すなわち、桧山腰窯産の可能性が高い。逆に、他のサンプルで堀口沢群に対応するものは1点もないことがわかる。堀口沢窯産の中世陶器は含まれていないとみられる。では、No.7



第1図 桧山腰窯出土中世陶器のRb-Sr分布図



第2図 堀口沢窯出土中世陶器のRb-Sr分布図

以外のサンプルはどの母集団に對応するのか。第3・4図より、No. 5以外のサンプルはすべて大畠群に對応することがわかる。

また、表2に示したマハラノビスの汎距離の二乗の値も、大畠群からがもっとも小さい。すなわち、大畠群からの距離が一番近い訳である。この結果、No. 4・6・8・9の4点は大畠群產と推定された。

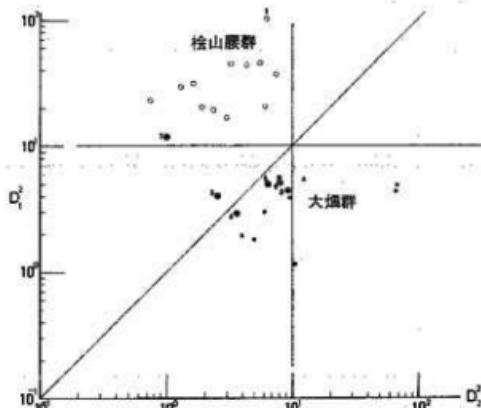
なお、No. 5は3基の窯からは均等に近い距離にあり、どの窯に帰属させてよいのか判断できなかったので、產地不明とした。

しかし、地元產の中世陶器であることは間違いない。

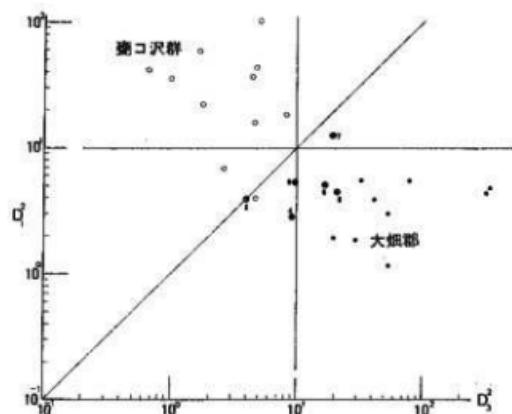
なお、念のため、第5図には大畠窯の領域とともに、小出遺跡のサンプルのRb-Sr分布図を示しておいた。

なお、2点の須恵器のRb-Sr分布図を図6に示しておく。成沢1・2・3号窯領域には対応せず、成沢窯産の須恵器ではない。秋田県内の他の窯を探さなければならぬが、もしかしたら、北陸産の可能性もある。

秋田県内の窯跡出土須恵器もかなり分析されているが、中心的な窯の存在がなく、產地推定の研究はむしろ、秋田城・払田櫓などの中心的な遺跡から出土した須恵器の產地を求める作業を優先的に進めた方が得策であると考えられている。



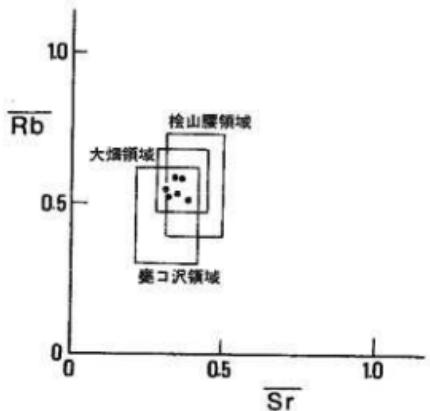
第3図 大畠群と楓山腰群の相互識別
(K, Ca, Rb, Sr因子使用)



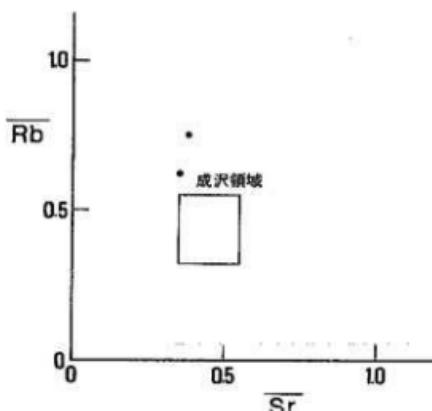
第4図 大畠群と楓山腰群の相互識別
(K, Ca, Rb, Sr因子使用)

遺跡名	試料番号	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	D'(1)	D'(2)	D'(3)	推定產地
小出 I 通路	4	中世陶器	0.414	0.101	1.69	0.519	0.315	2.8	3.6	9.1	大畠窯
〃	5	〃	0.414	0.124	1.80	0.525	0.348	4.1	2.5	?	
小出 II 通跡	6	〃	0.422	0.112	1.78	0.576	0.364	5.1	6.5	17	大畠窯
小出 III 通跡	7	〃	0.409	0.163	2.08	0.501	0.389	13	1.0	19	椚山腰窯
北田山田ヶ沢 I 通跡	8	〃	0.407	0.059	2.05	0.544	0.312	4.6	9.3	21	大畠窯
北田山田ヶ沢 II 通跡	9	〃	0.417	0.098	1.80	0.576	0.346	5.4	7.9	20	〃
小出 I 通跡	10	須恵器	0.441	0.149	1.43	0.620	0.346				
小出 II 通跡	11	〃	0.577	0.104	1.64	0.754	0.381				

第2表 小出遺跡出土土器の分析データ



第5図 小出遺跡出土中世陶器のRb-Sr分布図



第6図 小出遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図

2. 重鉱物等分析

(1) 分析の目的

仙北郡南外村の小出I遺跡および小出IV遺跡では、考古学的にみて各々年代の異なると考えられる旧石器時代の石器群が発見された。これらの石器群の年代を決定するためには、まず地形や地質層序について地形学・地質学的に分析される必要がある。ここでは、とくにわが国で盛んに行われている火山灰層序学(テフロクロノロジー)的手法によって、遺物包含層の年代を求めるすることにする。火山灰層序学とは、すでに噴出年代が知られている示標(しひょう)テフラ層の層位を明らかにすることによって、地層や地形面などの年代を求める方法である。小出遺跡の分析では、連続的に採取された土壌試料を分析対象とし、重鉱物組成および軽鉱物組成の変化からテフラの降灰層準をもとめた。さらに明らかになったテフラの降灰層準について、特徴的な鉱物を対象として屈折率を求め、示標テフラとの対比を行うことを試みた。

(2) 分析試料と分析の方法

鉱物分析を行った試料は、小出I遺跡のBブロックとDブロックより採取された30点と、小出IV遺跡第2トレンチより採取された13点の計43点である。屈折率測定は、小出I遺跡BブロックのNo.3、DブロックのNo.2・6の3試料について、火山ガラスと斜方輝石の2要素ずつ(計6回)を行った。

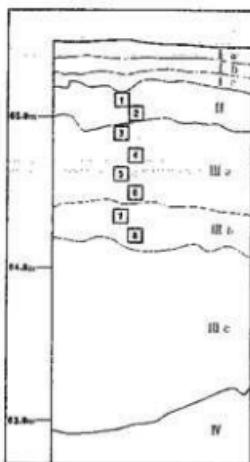
- (1) 試料60gを秤量
- (2) 超音波洗浄と分析篩(1/16mm)による篩別を繰り返し、泥分を除去。
- (3) 80°Cで恒温乾燥。
- (4) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- (5) テトラブロモエタン(比重2.96)を用いて比重分離。
- (6) 偏光顕微鏡下で重鉱物・軽鉱物各々について250粒同定し、重鉱物組成・軽鉱物組成を求める。
- (7) テフラの降灰層準の試料を対象として、特徴的な鉱物を選別。
- (8) 新井(1972)の方法により屈折率測定。

(3) 分析結果

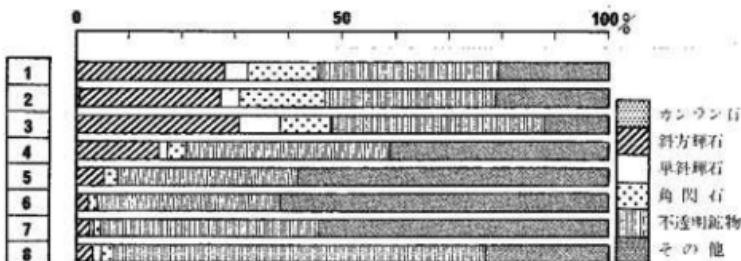
小出I遺跡Bブロック(第7図)

重鉱物組成ダイアグラムを第8図にその内訳を第3表に示した。No. 3以上の層準に斜方輝石が多く含まれている。角閃石や単斜輝石も、量は少ないものの斜方輝石と同様な傾向を示す。おもに磁鐵鉱からなる不透明鉱物の割合は、全体を通じて大きい。軽鉱物組成ダイアグラムを第9図にその内訳を第4表に示した。軽鉱物組成では、火山ガラス、石英、長石いずれもNo. 3以上の層準で多く認められる。火山ガラスは、平板状のいわゆるバブル型、分厚い中間型、繊維束状に発泡した軽石型などの様々な形態のガラスからなる。なおバブル型のガラスは、比較的分厚い。バブル型と中間型の火山ガラスには、褐色がかった有色ガラスも含まれている。磁鐵鉱などの不透明鉱物を除いて、重鉱物や軽鉱物いずれもNo. 3の層準以上で多く認められる。不透明鉱物が下位で多く認められたことは、不透明鉱物が風化に対して抵抗性が大きいために残存したもので、テフラ本来の鉱物組成を反映するものでないと考えられる。

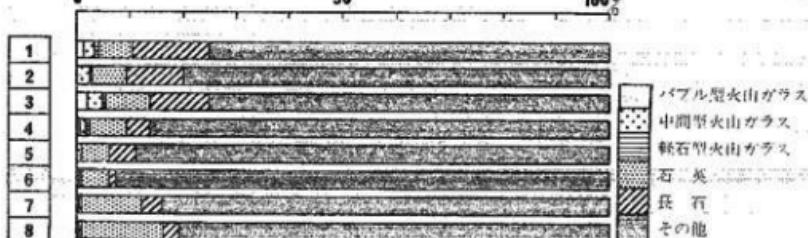
No. 3以上の層準では、特に鉱物を多く含む層準は認められない。わずかにNo. 3の層準で火山ガラスの割合が大きいことから、No. 3の層準がテフラの降灰層準の可能性が大きいと考え、火山ガラスと斜方輝石の屈折率を測定した。火山ガラスの屈折率(n)は1.491-1.507で非常に範囲が広い。斜方輝石の屈折率(γ)は1.706-1.710である。



第7図 小出I遺跡Bブロックの分析試料の層位



第8図 小出I遺跡Bブロック重鉱物組成ダイアグラム



第9図 小出I遺跡Dブロック重鉱物組成ダイアグラム

試料番号	重鉱物組成						同定鉱物粒数
	カナラン石	斜方輝石	单斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	
1	70	11	33	84	52	250	
2	2	66	9	40	80	53	250
3		77	19	24	100	300	250
4	1	38	4	9	95	103	250
5		13		7	84	146	250
6		6		4	86	154	250
7		7	1	4	102	136	250
8		8	4	6	174	58	250

第3表 小出I遺跡Dブロック重鉱物組成の内訳
小出I遺跡Dブロック(第10図)

重鉱物組成ダイアグラムを第11図に、その内訳を第5表に示した。No. 3以上の層準、No. 9の層準に斜方輝石が多く出現する。またNo. 3以上の層準には、角閃石も比較的多く含まれている。全体を通して不透明鉱物の割合が大きい。

軽鉱物組成ダイアグラムを第12図に、その内訳を第6表に示した。火山ガラスは、No. 11以上の大部分の試料で認められる。とくにNo. 6付近から上位で比較的多く認められるようになり、No. 2付近の層準には多く含まれている。また斜方輝石がわずかに多く認められたNo. 9には、透明のバブル型火山ガラスが認められた。No. 6の火山ガラスは、比較的分厚いバブル型および中間型である。またNo. 2に含まれる火山ガラスは、比較的分厚いバブル型、中間型、スポンジ状に発泡した軽石型などの火山ガラスで、中間型のガラスには褐色がかかった有色ガラスが認められる。この地点では、No. 2、No. 6付近がテフラの降灰層準の可能

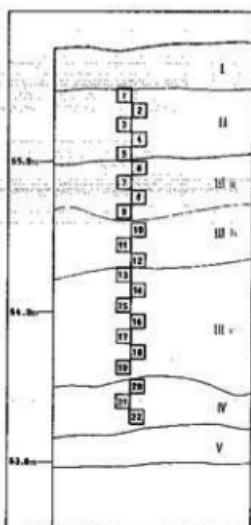
試料番号	軽鉱物組成						同定鉱物粒数
	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	
1	3	5	2	16	36	188	250
2		6	1	16	27	200	250
3	5	7	1	21	28	188	250
4	1	3	2	17	11	216	250
5		2		13	13	222	250
6	1	1		13	3	232	250
7	1	1		28	10	210	250
8	1	1		38	8	202	250

第4表 小出I遺跡Dブロック軽鉱物組成の内訳

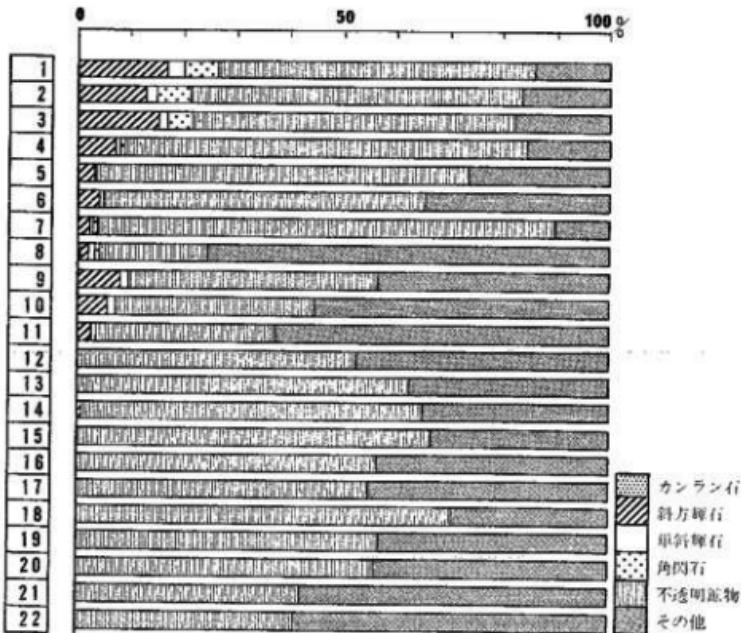
内訳

科学的分析

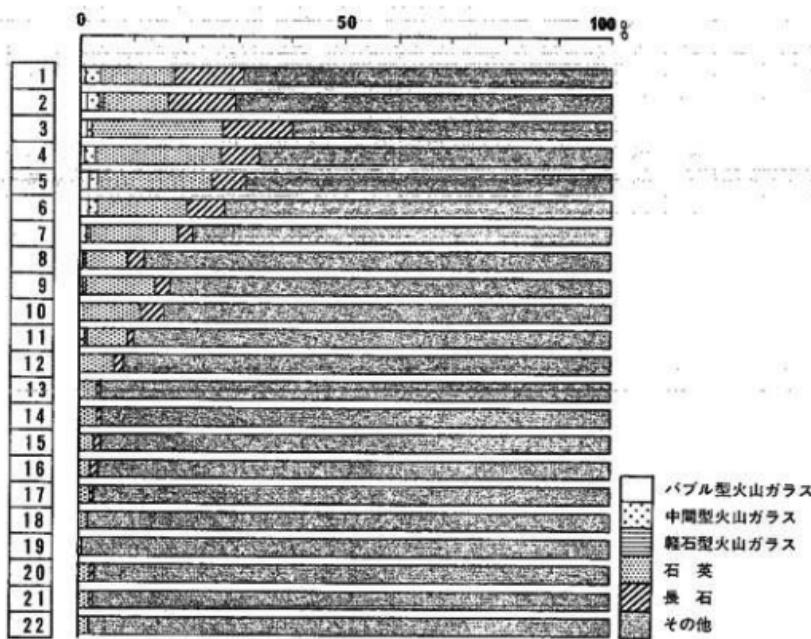
性が大きいと考えられる。そこでNo. 2と6を対象として、火山ガラスと斜方輝石の屈折率を測定した。No. 2の火山ガラス(n)と斜方輝石(τ)の屈折率は、それぞれ $1.493-1.510$ と $1.705-1.710$ である。またNo. 6の火山ガラス(n)および斜方輝石(τ)の屈折率は、 $1.492-1.508$ と $1.706-1.710$ である。いずれの試料も、含まれる火山ガラスの屈折率の範囲が広い。



第10図 小出I遺跡Dブロックの分析試料の層位



第11図 小出I遺跡Dブロック重鉱物組成ダイアグラム



第12図 小出I遺跡Dブロック軽鉱物組成ダイアグラム

小出IV遺跡第2トレンチ(第13図)

重鉱物組成ダイアグラムを第14図に、その内訳を第7表に示した。この地点の試料には斜方輝石や角閃石また単斜輝石などの鉱物が多く含まれる層準は認められず、全体を通して不透明鉱物の占める割合が非常に大きい。軽鉱物組成ダイアグラムを第15図に、その内訳を第8表に示した。軽鉱物組成では、No. 1でわずかに分厚いバブル型や褐色や淡緑色の有色ガラスからなる火山ガラスが認められるものの、石英や長石の変化に大きな特徴はない。おそらくNo. 1付近がガラス質の示標テフラの降灰層準と考えられるが、斜方輝石その他の重鉱物組成上の変化が認められないので、屈折率測定の対象とはしなかった。

(4) 考察—示標テフラとの対比

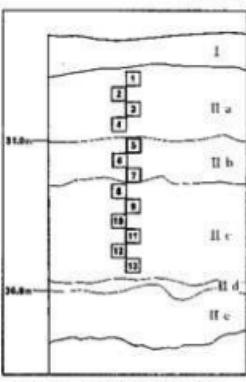
鉱物分析の結果、全体としてテフラの降灰層準を明確に把握することはできなかったものの、小出I遺跡BブロックにおいてNo. 3付近、DブロックではNo. 2と6付近に示標テフラの降灰層準があることが推定された。ここで示標テフラとの対比を行うにあたっては、すでに公表されている、示標テフラの特徴が記載されたカタログ(町田ほか, 1984, Ara-i, et al., 1986

試料番号	重鉱物組成						同定鉱物粒数	同定鉱物粒数					
	カル	斜方輝	単斜輝	角閃石	不透明鉱物	その他							
1	42	8	16	148	36	250	1	2	7	35	33	173	
2	32	5	16	155	42	250	2	3	6	1	31	32	
3	38	4	12	151	45	250	3	3	2	62	33	150	
4	18	1	3	189	39	250	4	2	5	59	18	166	
5	8	1		174	67	250	5	4	4	54	16	172	
6	10	2	1	150	87	250	6	4	4	42	18	182	
7	6	1	2	215	26	250	7		3	1	42	7	
8	1	4	3	2	51	189	8		1	1	20	8	
9	20	4	1	116	109	250	9	1		1	33	7	
10	14	4		93	139	250	10			28	11	211	
11	7	2		84	157	250	11		2	1	19	3	
12	1			130	119	250	12			16	4	230	
13	1	1	1	153	94	250	13			8	1	241	
14	2			160	88	250	14			8	2	240	
15				166	84	250	15			7	3	240	
16				141	109	250	16			5	4	241	
17		1		135	113	250	17			5	1	244	
18				176	74	250	18			4		246	
19				1	141	108	19			1		249	
20		1		1	138	110	20			5	2	243	
21					105	145	21			5	1	244	
22					1	101	148	22			5		245

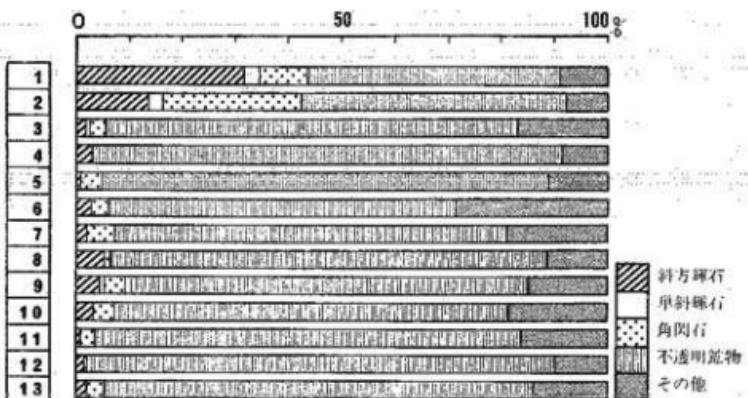
第5表 小出I遺跡Dブロック重鉱物組成の内訳 第6表 小出I遺跡Dブロック軽鉱物組成の内訳

など)を主な資料とした。なお鳥海火山起源の降下テフラについては、これまでほとんど記載されていないことから、対比作業を行う材料がない。

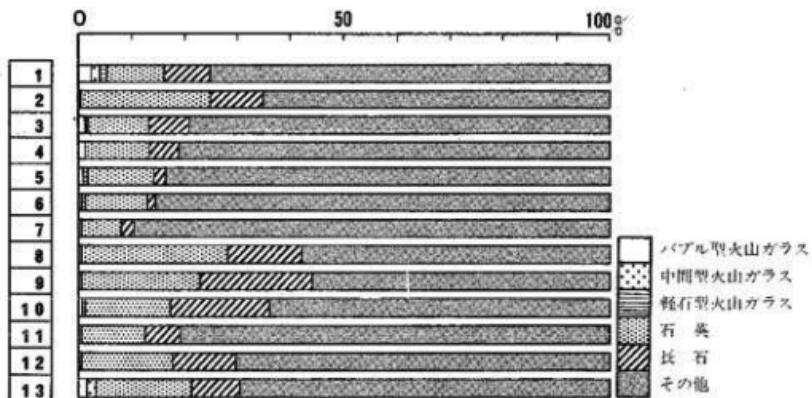
小出I遺跡BブロックのNo. 3とDブロックのNo. 6は、層位および鉱物組成さらに屈折率などから同一テフラであることが考えられる。なお小出IV遺跡第2トレンチの試料番号1付近にもこのテフラの降灰層があることが推定される。したがって、3地点間にはほぼ同時間面が設定され、層序対比の手がかりが得られたことになる。これらの層準にある火山ガラスの屈折率の範囲は大きく、混入物が多いことも否定はできないものの、



第13図 小出IV遺跡第2トレンチの分析試料の層位



第14図 小出IV遺跡第2トレンチ重鉱物組成ダイアグラム



第15図 小出IV遺跡第2トレンチ軽鉱物組成ダイアグラム

斜方輝石の屈折率や角閃石を含む特徴などから、約1.0—1.3万年前に十和田カルデラから噴出した十和田一八戸テフラ(To-HP; 町田ほか, 1984)に対比される可能性が考えられる。火山ガラスの屈折率も、八戸テフラの火山ガラスの範囲(1.503—1.508; 町田ほか, 1984)を含んでいる。とくに土井・新井(1986)は、最近、八戸テフラの1噴火輪廻中の火碎流(八戸火碎流)が岩手火山山麓まで分布し、従来考えられていたより分布が広いことを明らかにしている。また日本第四紀学会より出版された日本第四紀地図(日本第四紀学会, 1987)には八戸火碎流が仙北郡北部まで達しているように描かれている。小出遺跡付近にまで到達したことも充分考えられる。ただし降灰層準が明瞭でないため、今回検出したテフラが、火碎流堆積物に由来する風成2次

試 料 番 号	重鉱物組成					同定鉱物粒数
	斜方輝石	单斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	
1	79	7	23	118	23	250
2	34	7	65	124	20	250
3	5	1	8	193	43	250
4	8	1	1	218	22	250
5	2		10	210	28	250
6	7		8	163	72	250
7	5		13	184	48	250
8	13		3	205	29	250
9	11	2	10	189	38	250
10	8		10	185	47	250
11	2		7	200	41	250
12	4		1	220	25	250
13	5		8	202	35	250

第7表 小出IV遺跡第2トレンチ重鉱物組成の内訳

試 料 番 号	軽鉱物組成					同定鉱物粒数
	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	
1	6	4	3	27	22	188
2	1			61	25	163
3	3	1		29	19	198
4	3			30	14	203
5	1	1	2	31	6	209
6	1	2		29	4	214
7		1		19	6	224
8	1			69	35	145
9	1			56	53	140
10	2		1	40	47	160
11	1			30	17	202
12	1			43	30	176
13	4	4		45	23	174

第8表 小出IV遺跡第2トレンチ軽鉱物組成の内訳

堆積物の可能性も考えられる。そうであれば、八戸テフラの噴出年代より若干新しくなることも考えておかなければならない。

小出I遺跡DブロックのNo. 2の層準に認められるテフラは、上位の土壤(I層)の分析を行っていないため明確にのべることはできない。しかしB地点においてII層が縄文時代中期以前の遺物包含層となっていることも併せて考えると、約5000—5500年前に十和田カルデラから噴出した十和田中継軽石(To-Cu, 町田ほか, 1984)に対比される可能性がある。早田ほか(1988)は山形県や福島県内の数ヶ所で発見された細粒ガラス質火山灰が、すでに田村ほか(1986)により十和田中継軽石に対比されている安家火山灰(菊地ほか, 1981)と同一テフラであることを述べている。このことから、小出遺跡付近にも十和田中継軽石が分布していることも充分考えられよう。

なおごく少量ではあったが、小出I遺跡DブロックNo. 9に薄いバブル型透明ガラスが認められた。この火山ガラスは約2.1—2.2万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰(AT: 町田・新井, 1976)に対比される可能性もわずかながら考えられる。

(5) まとめ

顯著ではないものの、小出I遺跡BブロックではTo-Hp、小出I遺跡DブロックではTo-CuおよびTo-HP、小出IV遺跡第2トレンチではTo-HPに対比される可能性がある層準が検出された。またATについては、最近男鹿半島においてATが純層で発見されたことが報告された(白石ほか,1988)ことから、今後場所によっては、秋田県内の旧石器時代の遺跡でも、明瞭なたちでATを示標として使えることがあると考えられる。

引用文献

- 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究—. 第四紀研究, 11, p. 254-269.
- Arai, F., Machida, H., Okumura, K., Miyauchi, T., Soda, T. and Yamagata, K. (1986) Catalog for late Quaternary marker-tephras in Japan II—tephras occurring in northeast Honshu and Hokkaido—. Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ., no. 21, 223-250.
- 土井宣大・新井房夫(1986)岩手山麓に分布する十和田火山,八戸テフラ. 日本地質学会東北支部会講演要旨.
- 菊池強一・桧垣大助・吉永秀一郎(1981)北上山地東部に分布する縄文前期火山灰層について(摘要). 東北地理, 33, p. 57-58.
- 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, 339-347.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ. 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, 865-928.
- 日本第四紀学会(1987)日本第四紀地図. 東京大学出版会.
- 白石建雄・竹内貞子・林信太郎・林 聰子(1988)秋田県男鹿半島で発見された姶良Tn火山灰. 第四紀研究, 27, p. 187-190.
- 早田 勉・八木浩司・西城 潔・新井房夫・高田将志(1988)縄文時代の示標テフラ—吾妻火山灰. 東北地理, 40, p. 231.
- 田村俊和・宮城豊彦・桧垣大助・西城 潔(1986)早池峰自然環境保全地域の地形および地質. 早池峰山環境保全地域調査報告書.

3 ^{14}C 年代測定

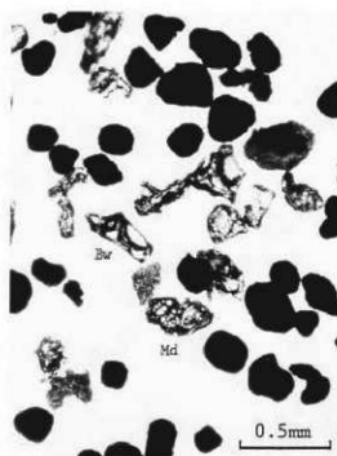
年代値の算出には、 ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線の計算値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料の β 線計数率の差が 2σ でかのときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときには、MODERNと標示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

記

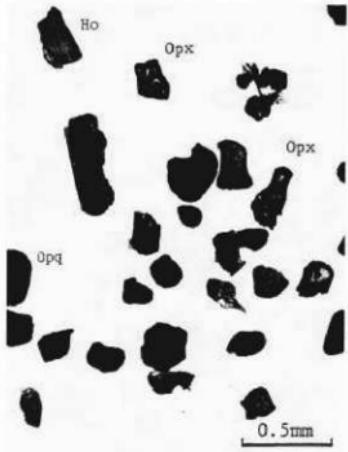
Code No.	試料	年代(1950年よりの年数)
G a K -14163	Charcoal from 仙北郡南外村 No.1 7K I - I - A III	5350±170 3400 B.C.
G a K -14164	Charcoal from 仙北郡南外村 No.2 7K I - I - D II	1830±90 A.D. 120
G a K -14165	Charcoal from 仙北郡南外村 No.3 7K I - IV - 2 I IC	34850±2230 32900 B.C.



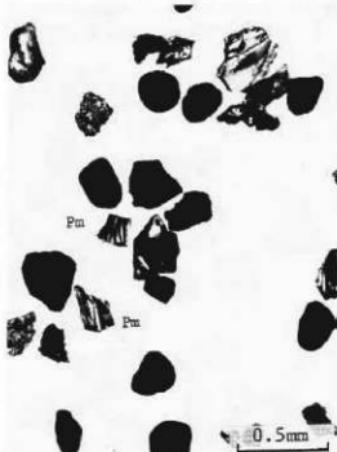
1 小出I遺跡BブロックNo.3（重鉱物）



2 小出I遺跡BブロックNo.3（軽鉱物）



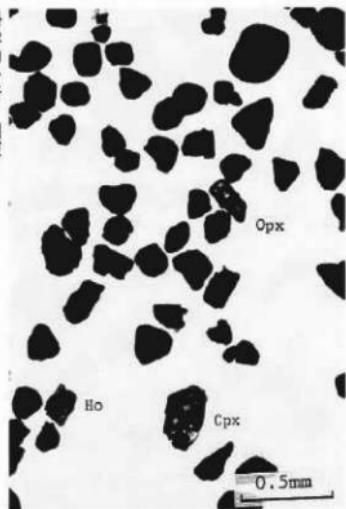
3 小出I遺跡DブロックNo.2（重鉱物）



4 小出I遺跡DブロックNo.5（軽鉱物）

Opx : 斜方輝石, Cpx : 単斜輝石, Opx : 不透明鉱物, Ho : 角閃石,

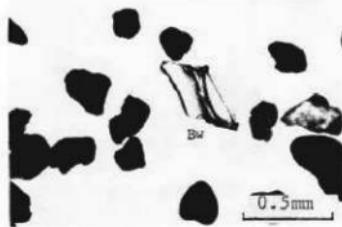
Bw : バブル型火山ガラス, Md : 中間型火山ガラス, Pm : 軽石型火山ガラス



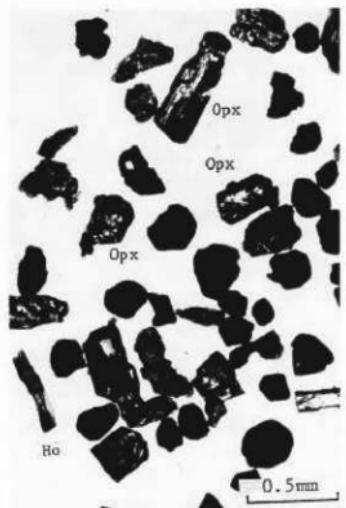
1 小出 I 遺跡 D ブロック No. 6 (重鉱物)



2 小出 I 遺跡 D ブロック No. 6 (軽鉱物)



3 小出 I 遺跡 D ブロック No. 9 (軽鉱物)



4 小出 IV 遺跡 第 2 トレンチ No. 1 (重鉱物)



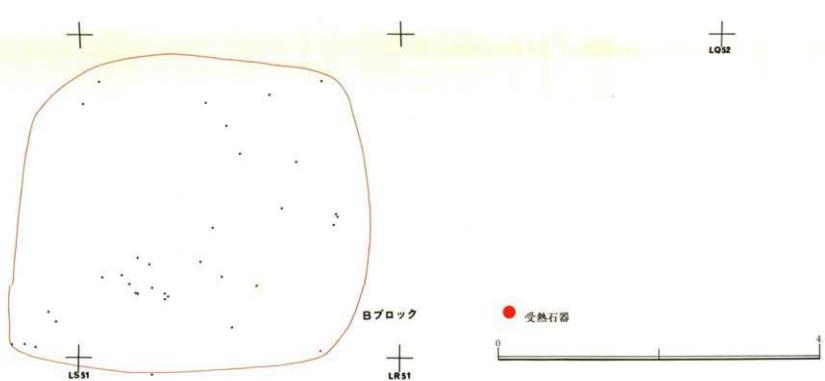
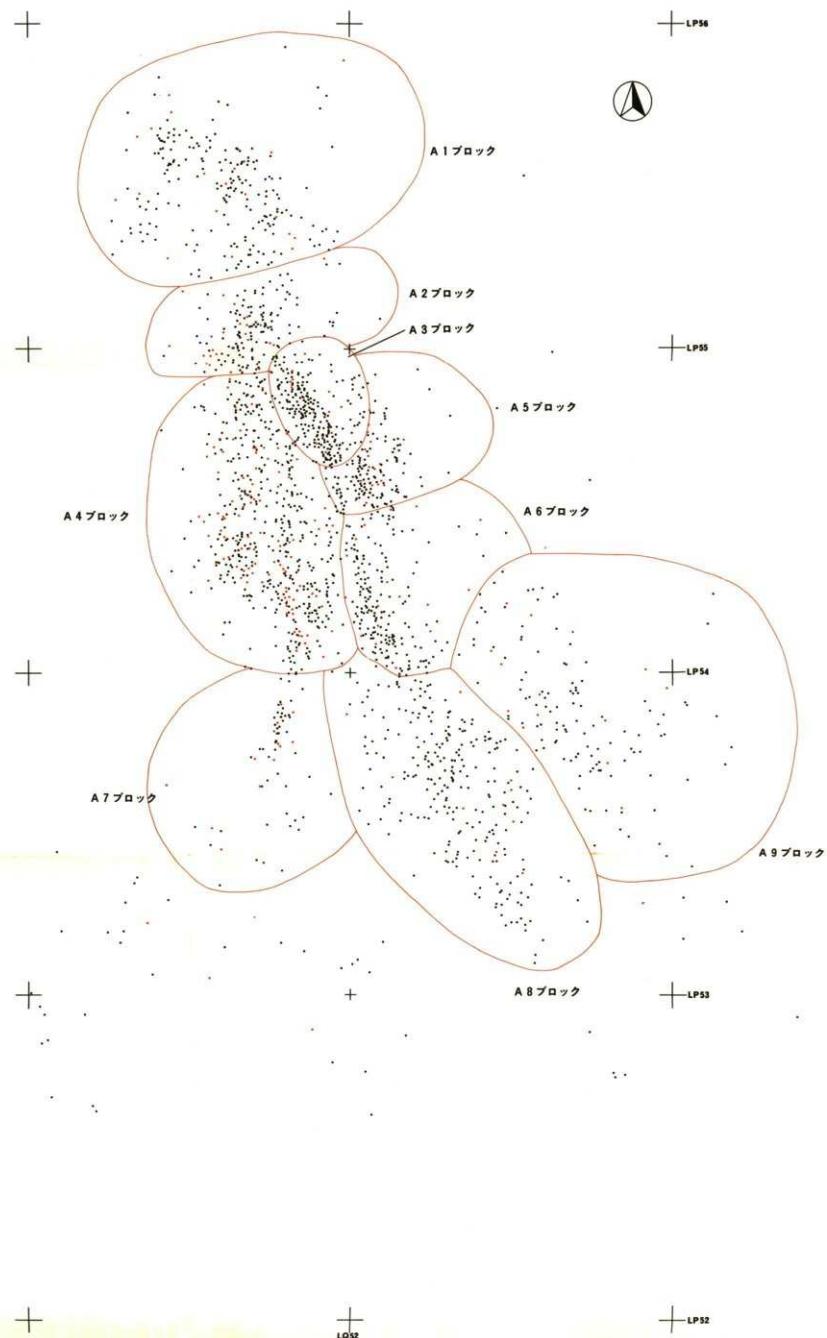
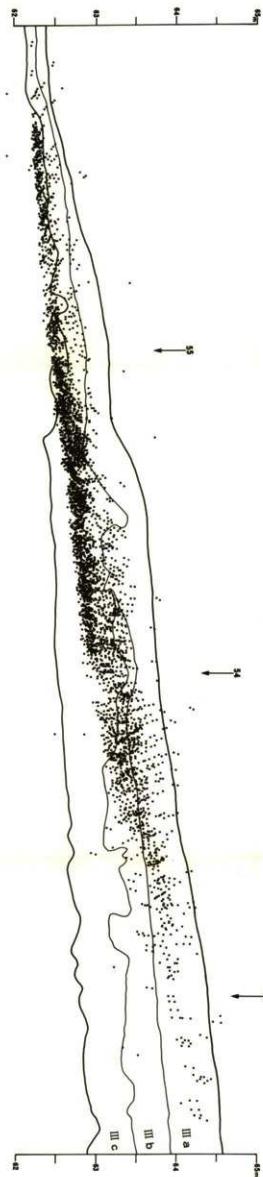
5 小出 IV 遺跡 第 2 トレンチ No. 1 (軽鉱物)

あとがき

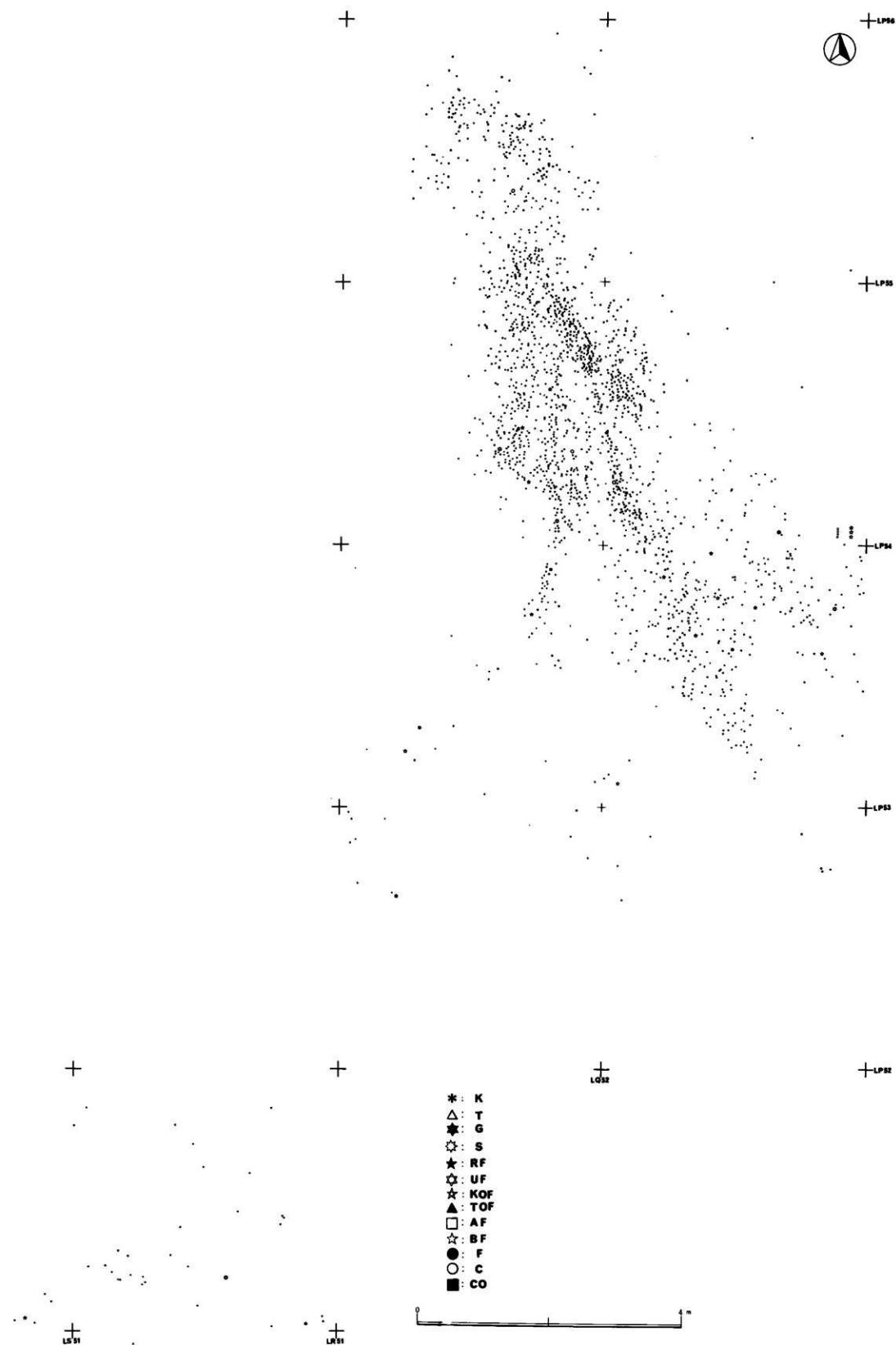
発掘調査及び整理作業に関しては下記の方々の協力を得ました。(五十音順)

発掘調査：阿部亨 五十嵐運藏 石山貴一 石山二郎 石山ミツエ 伊藤アヤ子 伊藤卯之松
伊藤運二 伊藤勝雄 伊藤喜一郎 伊藤キヨノ 伊藤金一 伊藤サダ 伊藤順子
伊藤信一 伊藤清一 伊藤成子 伊藤節子 伊藤長一郎 伊藤テル 伊藤利雄
伊藤智 伊藤昇 伊藤ハル 伊藤弘伊藤フヂエ 伊藤マツエ 伊藤ミツ 伊藤光子
伊藤密子 伊藤裕子 伊藤良工 伊藤禮子 大坂銀市 加藤光一 加藤サクラ
加藤貞子 加藤民子 加藤春雄 菊地アイ子 菊地みよ子 綱川忠治郎
綱川保太郎 工藤キン子 小林敏夫 小林正美 小松キワ子 今キミエ 今良治
今田寿夫 今野キヨエ 今野才子 今野佐治右エ門 今野俊一 今野正一
今野時雄 今野トク子 今野トミ 今野春彦 今野エジノ 斎藤善一 斎藤俊子
斎藤泰幸 佐々木キミエ 佐々木健 佐々木清高 佐々木伝右エ門 佐々木花子
佐々木ミサ 佐々木陸之助 佐々木礼治 佐藤愛子 佐藤健治朗 佐藤ケ子
佐藤シモ 佐藤精治 佐藤タミ子 佐藤テツ 佐藤豊太郎 佐藤フヨ 佐藤ミツ
佐東容子 佐渡哲美 須川恭一 鈴木慶一 鈴木善藏 鈴木龍子 相馬昭夫
相馬キヨ 相馬謙 相馬兼治 相馬鉢平 相馬省二 相馬太一 相馬タケノ
相馬トム 高橋英吉 高橋七四郎 高橋秀造 高橋政子 高橋精孝 高橋トミヨ
高橋美智子 高橋吉美 高橋儀見 高橋隆治 戸崎政敏 藤原キエ 藤原三重子
藤原ヨシ 藤原吉次 藤原与四郎 三浦満子 武藤勇 武藤留吉 八幡一治
八幡テツヨ 八幡ヨシ子 渡辺一光

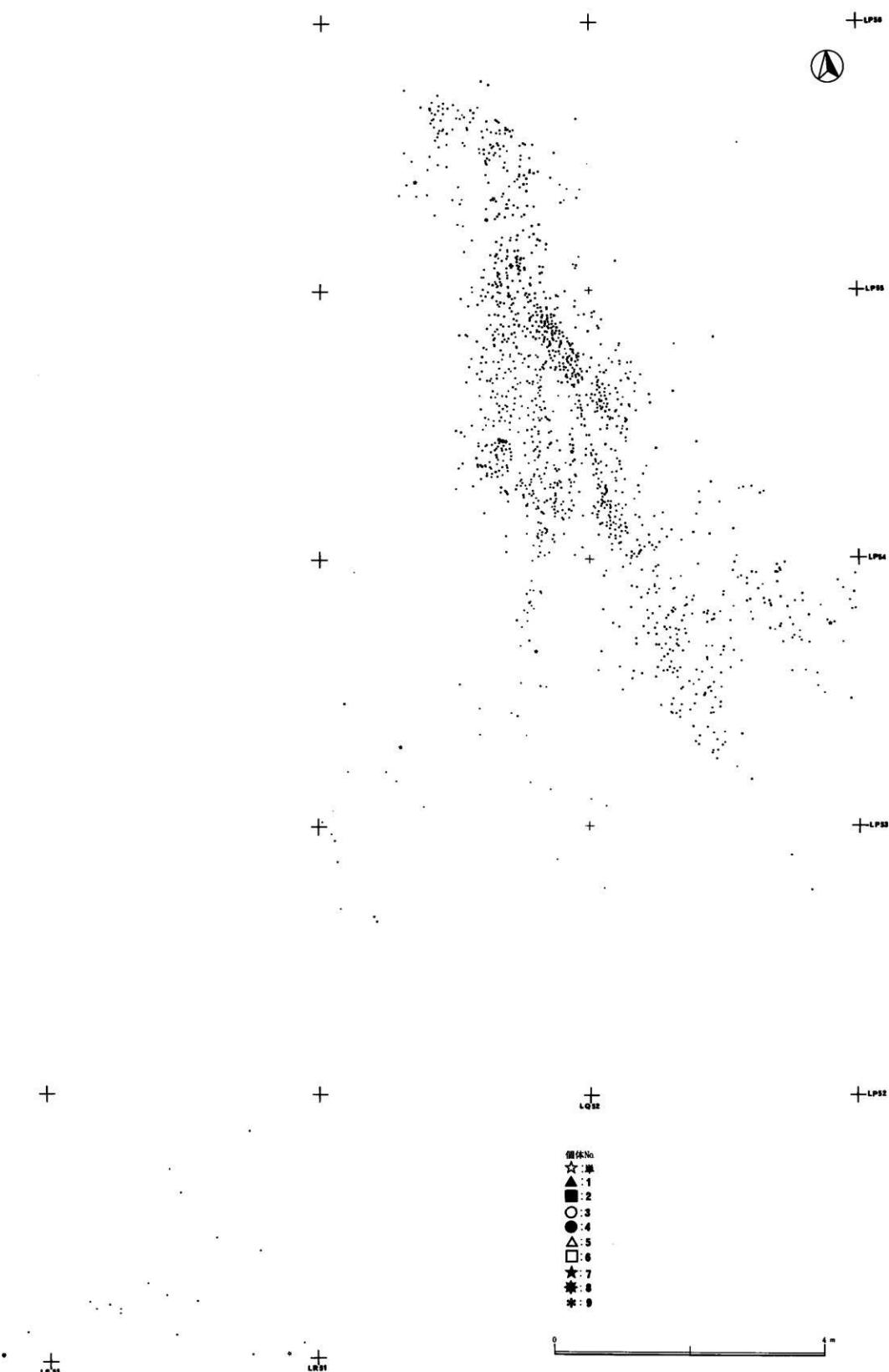
整理作業：泉谷昭子 伊藤昭彦 加藤悦子 草薙圭子 小松都子 小柳都 斎藤美江子
佐藤せい子 鶴津竜子 進藤始子 鈴木孝子 高橋江美子 高橋京子
高橋小百合 高橋フサ子 中島広美 新田和子 藤倉寿枝 藤田悦子
本間美紀子 森川たま子



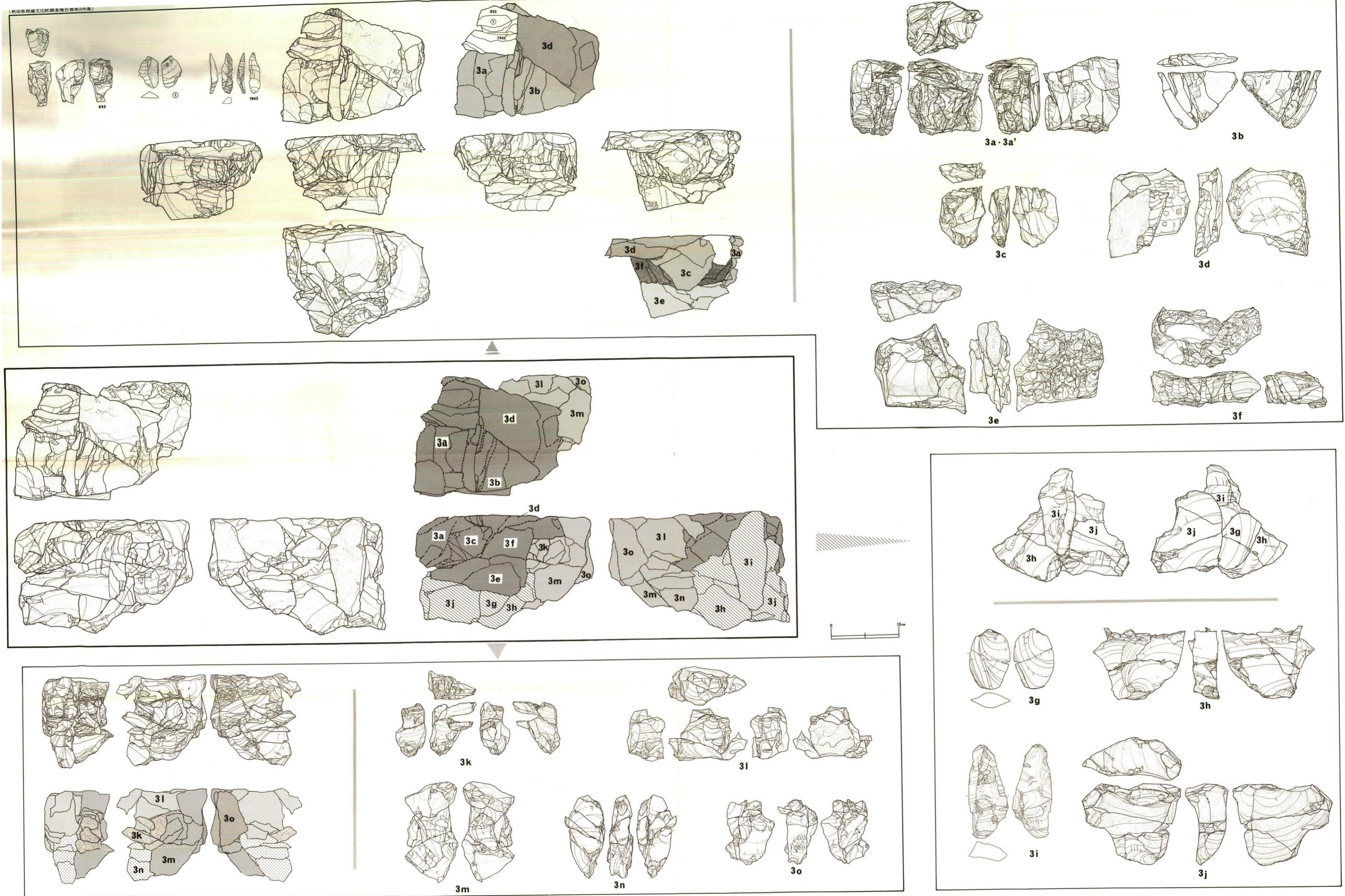
付図1 小出I遺跡A B区旧石器出土分布図



付図2 小出I遺跡A B区器種別分布図

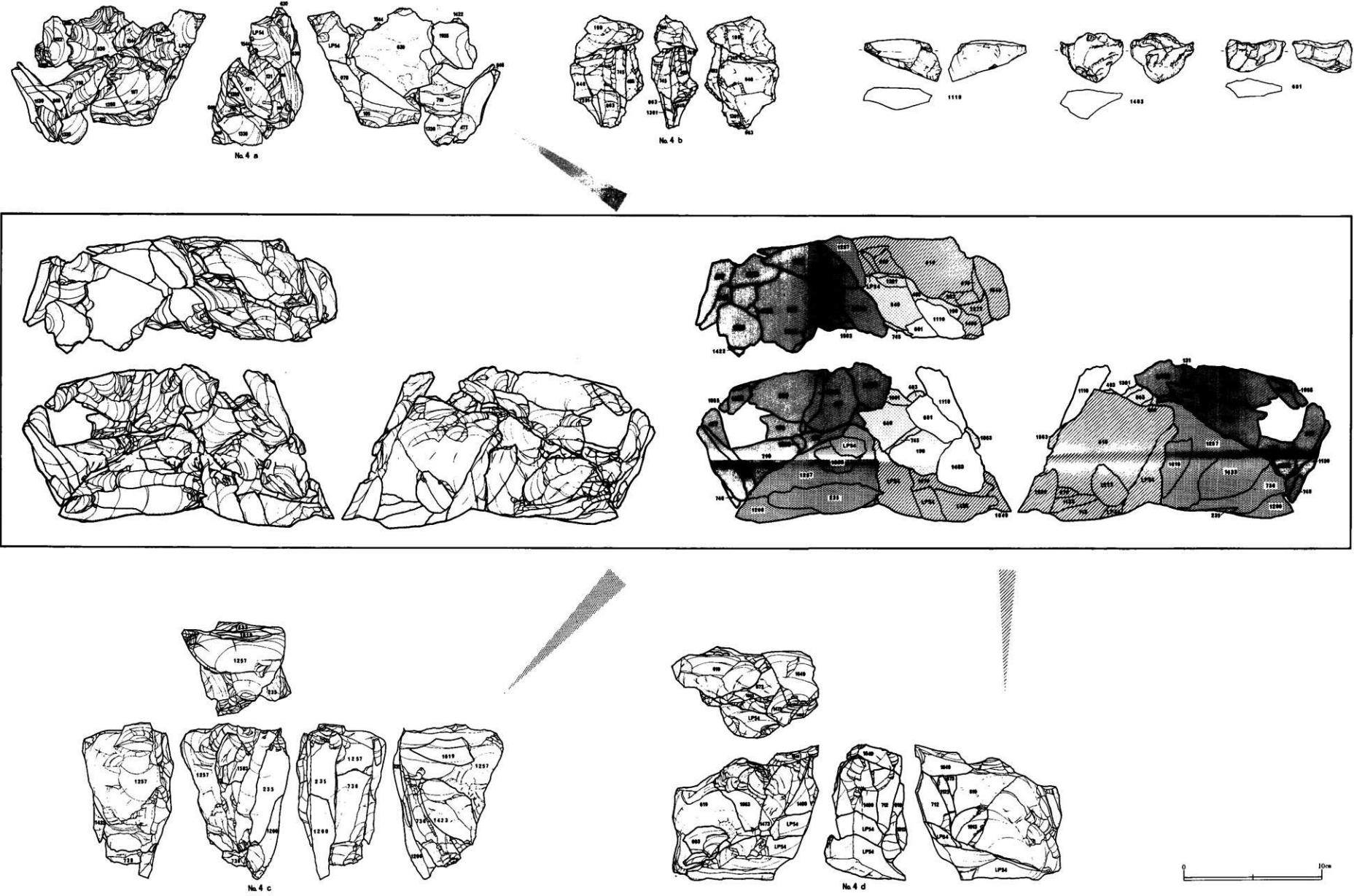


付図3 小出I遺跡A・B区旧石器個体別分布図

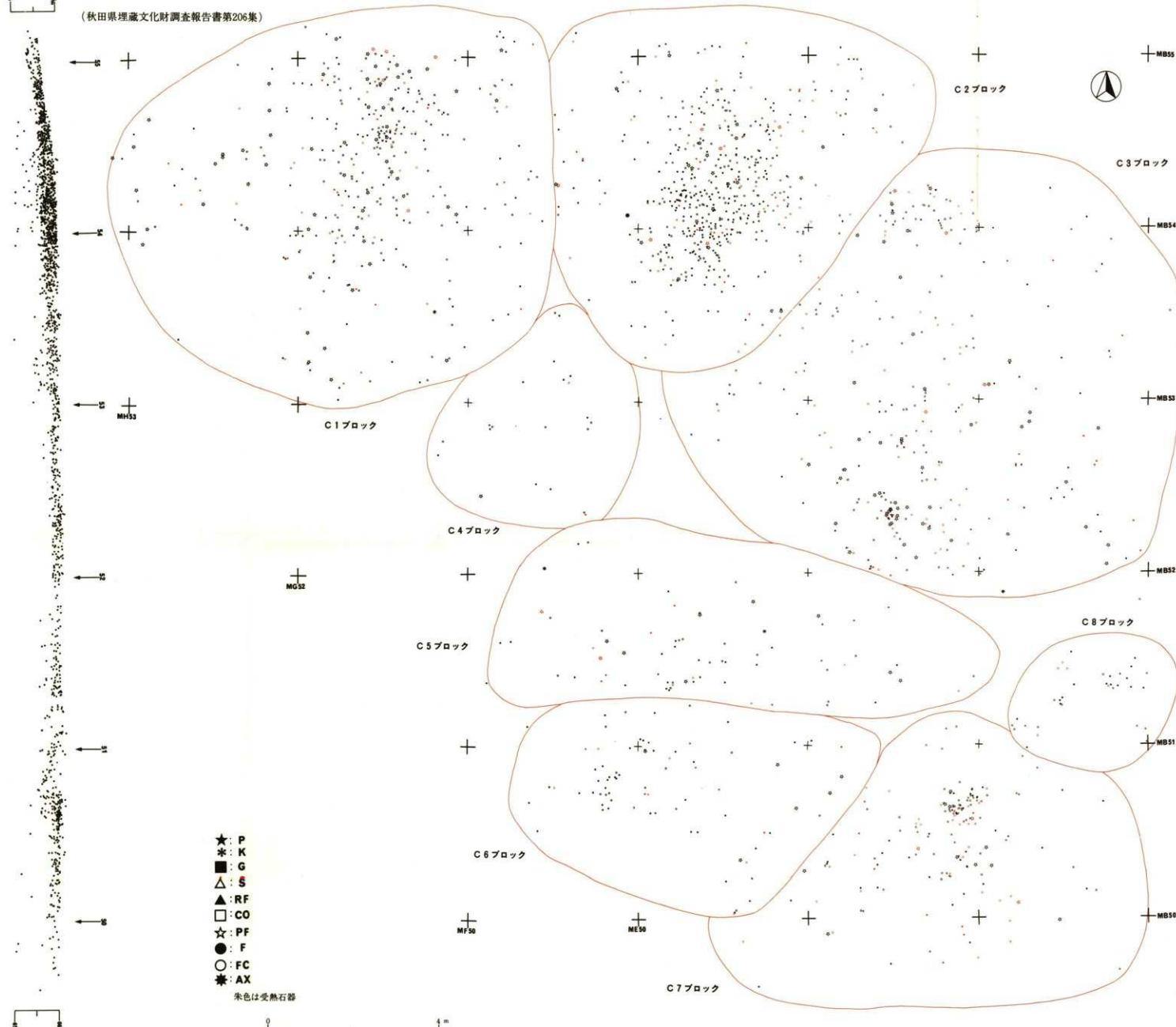


付図4 小出I遺跡A B区旧石器個体No.3 接合図

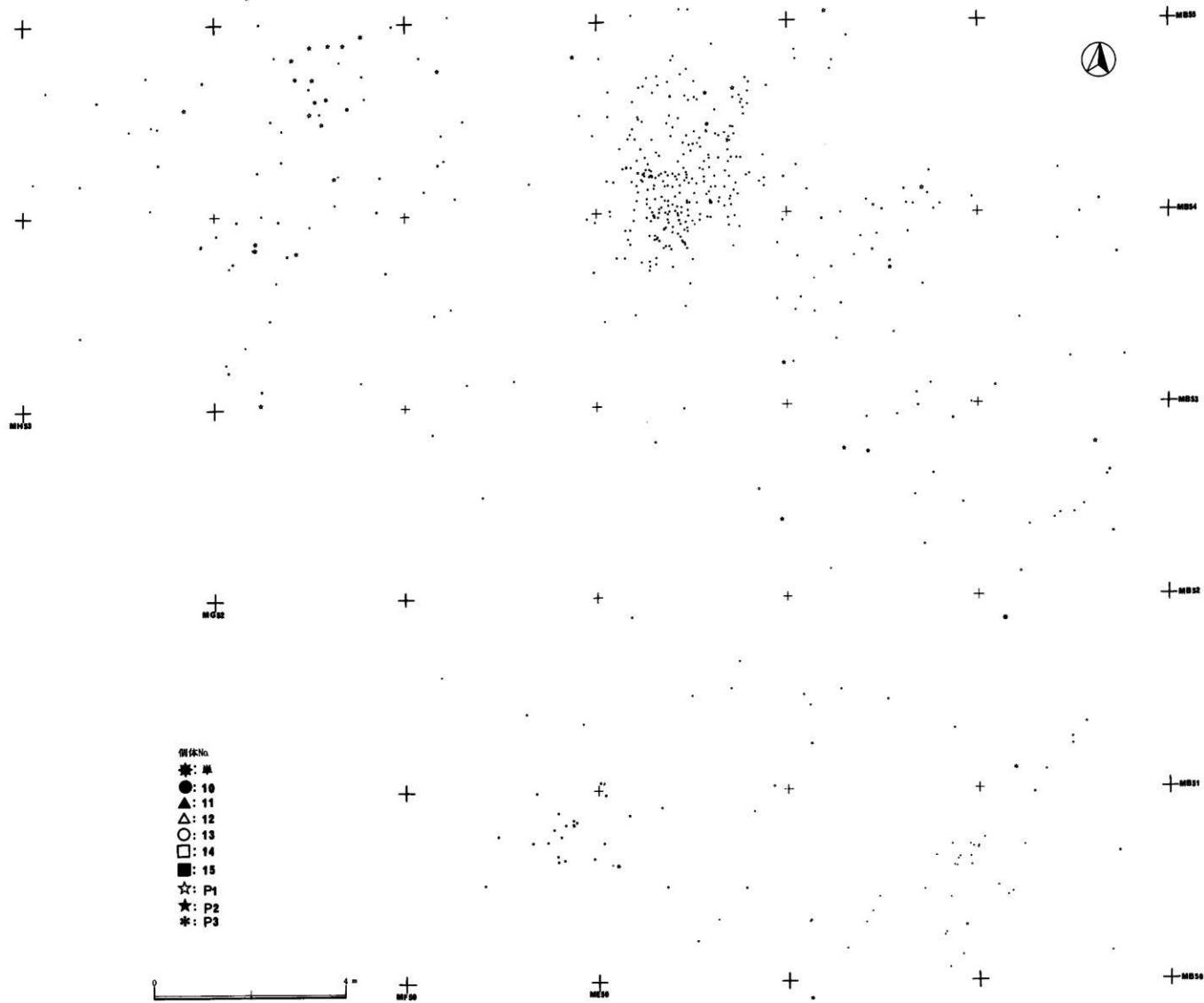
(秋田県埋蔵文化財調査報告書第206集)



付図5 小出I遺跡A区旧石器個体No.4接合図



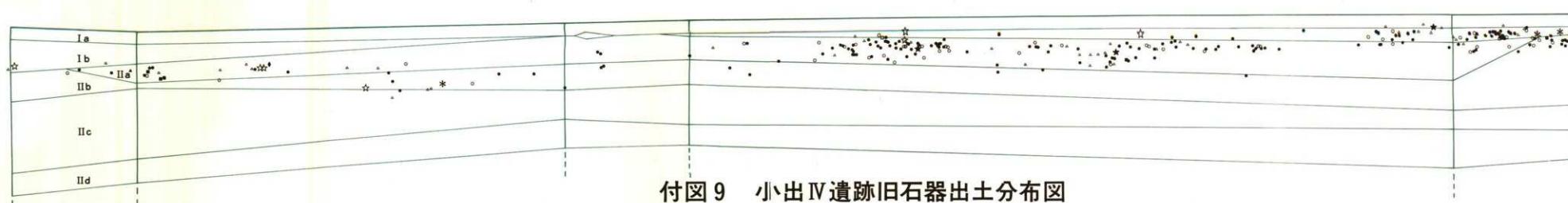
付図6 小出I遺跡C区旧石器器種別分布図



付図7 小出I遺跡C区旧石器個体別分布図



付図8 小出IV遺跡旧石器個体No.1接合図



付図9 小出IV遺跡旧石器出土分布図